

広島大学博士（工学）学位申請論文

前川國男の屋上庭園に関する研究

Study on the Roof Garden by Kunio Mayekawa

学位取得年月 2017年9月

塚野 路哉

目次

序章	3
第1節 前川國男について	
第2節 研究の目的	
第3節 研究方法	
第4節 研究の位置付け	
第1章 日本近代建築史における屋上庭園	8
第1節 第二次世界大戦終戦以前の屋上庭園	
第1項 建築類型	
第2項 素材	
第3項 躯体構造	
第4項 立地	
第2節 第二次世界大戦終戦以降の屋上庭園	
第1項 建築類型	
第2項 素材	
第3項 躯体構造	
第4項 立地	
第3節 前川國男の建築作品における屋上庭園	
第4節 結	
第2章 前川國男における屋上庭園の出自	24
第1節 日本の近代建築における屋上庭園の主題	
第2節 前川國男の言説における屋上庭園の位置付け	
第3節 前川國男による屋上庭園に関する言説	
第4節 結	
第3章 前川國男による屋上庭園の解釈	39
第1節 前川國男が関与したル・コルビュジェの庭園	
第1項 ル・コルビュジェの屋上庭園	
1. 地盤面の設定	
2. 屋根の形状	
3. 屋上庭園	
第2項 前川國男による設計の関与	
第2節 前川國男によるサヴォワ邸の屋上庭園の解釈	
第3節 前川國男によるマルセイユのユニテ・ダビタシ オンの屋上庭園の解釈	
第4節 結	
第4章 前川國男による屋上庭園の実践	59
第1節 前川國男の建築作品における屋上庭園の概要	
第2節 前川國男の屋上庭園におけるル・コルビュジェ からの受容	
第1項 1932-1945（独立前後期）	

第2項	1946-1950 (戦後第一期)	
第3項	1951-1960 (戦後第二期)	
第4項	1961-1986 (戦後第三期)	
第3節	屋上庭園からエスプラナードへの変遷	
第1項	エスプラナードに関する言説	
第2項	カルーゼル広場からの受容	
第3項	前川國男の建築作品におけるエスプラナード	
1.	埼玉会館(1966)	
2.	東京海上ビルディング計画案(1966)	
3.	ポンピドゥー・センター計画案(1971)	
4.	東京都美術館(1975)	
5.	福岡市美術館(1979)	
第4節	結	72
結章		
第1節	各章の概要	
第1項	日本近代建築史における屋上庭園	
第2項	前川國男における屋上庭園の出自	
第3項	前川國男による屋上庭園の解釈	
第4項	前川國男による屋上庭園の実践	
第2節	考察	
第3節	結論	
学術論文一覧		
業績一覧		
参考文献一覧		
補遺		
	ル・コルビュジエの建築作品における屋上庭園の起源	81

序章

第1節 前川國男について

日本近代建築の旗手である前川國男(1905-1986)は、日露戦争最中の1905年に新潟で生まれる。世界的に不況下にあった1925年に東京帝国大学建築学科に入学し、在学中に読んだ *l'Architecture Vivante* (vol.XXIII) に掲載されていたヴォクルソンの別荘(Villa à Vaucresson, Le Corbusier, 1923)によって、西欧近代建築家の1人であるル・コルビュジエ (Le Corbusier, 1887-1965) を知る。加えて、当時東京帝国大学の助教授であった岸田日出刀(1899-1966)に渡された4冊のル・コルビュジエ著書に感銘を受けたことで、ル・コルビュジエ事務所の門戸を叩くことを決意している。そして1928年に大学を卒業したのち、シベリア鉄道経由でフランスへと渡り、ル・コルビュジエに2年間(1928.4.17-1930.4)師事。その後、アントニン・レーモンドの事務所を経て、日中戦争勃発直前の1935年10月1日に前川國男建築設計事務所を設立している。以降、前川國男は半世紀に及ぶ活動を通して、西欧の近代建築語彙を日本の環境へと置換しようと試み続けている。

なお、前川國男の建築作品は、しばしば師であるル・コルビュジエからの影響が指摘されている[1,2]。事実、代表作である東京文化会館(1961)や晴海高層アパート(1958)をはじめ、多くの前川國男作品にル・コルビュジエからの影響が散見できる。また、前川國男が受容した西欧の近代建築手法は、その後弟子である丹下健三(1913-2005)や大高正人(1923-2010)へと継承され、日本において大きな潮流となる。

第2節 研究の目的

前述したように、前川國男の建築作品は、師であるル・コルビュジエからの影響が度々指摘され、また、前川國男自身も、設計活動を通してル・コルビュジエが提唱するドミノ(Dom-ino, 1914) ^{註1)} に影響を受け続けていると述べている[3]。ただし、前川國男は西欧の近代建築語彙を日本の環境へ置換しようと試みる一方で、建築様式と環境との不可分性にも着眼を置き、単なる模倣ではない受容のありかたを模索している。

そのため、ドミノを構成原理とする「新しい建築の5つの要点(Les 5 points d'une architecture nouvelle, 1929)」に関しても、全てをそのまま受容するのではなく、特定の手法に限って使用している。例えば、地震が頻発する日本において、壁面と躯体を離す工法は合理性に欠けると

して、「自由な平面(plan libre)」と「自由なファサード(façade libre)」の手法を否定的に捉え ^{註2)}、また、三沢浩が指摘するように[4]、「水平横長窓(La fenetre en longueur)」と「ピロティ(pilotis)」は技術的な問題から使用が限られている。つまり前川國男は、西欧近代建築語彙を受容することの重要性を唱え続けながらも、日本に受容すべきでないものは明確に示している。しかしながら、「屋上庭園(toit jardin)」に限っては、設計活動を通して断続的に計画し続けていることに着目したい。

以上要するに、前川國男にとって屋上庭園は、戦前・戦中、戦後を通して西欧の近代建築手法を実践することができた数少ない手法の1つであり、屋上庭園の通時的な分析より、前川國男の建築制作論としての新しい知見が得られるものと考えられる。

第3節 研究方法

1. 日本近代建築史における屋上庭園

第1章では、まず近代の日本で作られた屋上庭園を包括的に扱い、通時的な変遷を分析することで、屋上庭園の時代的な背景を考察する。その上で、前川國男の屋上庭園と比較し、日本近代建築における前川國男の屋上庭園の特徴を把握する。

なお、近代日本建築における屋上庭園に関する一次資料として、第二次世界大戦終戦前後を通して国内で長期発行された建築専門誌である『新建築』、『建築雑誌』、『国際建築』の3誌を用いる。『建築雑誌』は日本建築学会員に向けた会誌であり、学術的な指標となり得る。また、『新建築』や『国際建築』は商業的な雑誌媒体であるが、発行当時に話題性のある建築物が網羅的に扱われ、さらに、国際的に評価され得る日本国内の建築作品が掲載されているため、研究対象として用いている ^{註3)}。

これらの一次資料より、屋上庭園が確認出来る建築作品の写真、図面を抽出し、既往の造園研究に依拠した項目を用いて分析を行う ^{註4)}。ただし、既往の造園研究で用いられた「建築類型」「素材」という主題に加え、屋上庭園の基盤となる「躯体構造」と、敷地条件の論点であり屋上庭園を計画する目的に相関する「立地」も用いることで ^{註5)}、建築的視点からの考察を加えている。

なお、第二次世界大戦の終戦を基軸として、1節では屋上庭園の初出が確認できる明治期から第二次世界大戦終戦まで、そして2節では第二次世界大戦終戦以降を分析対象としている。また、1節に関しては、鉄筋コンク

リートが恒常的に使用できるようになる 1920 年(大正 9)前後及び建築資材の統制立法権が政府に委任される 1937 年(昭和 12)を境に顕著な変化が確認できることから、この 2 つの外在的要因を基軸に 3 期に分類し、期毎の主題の内容を比較することで、屋上庭園の経年的な変遷を分析する^{注6)}。また、2 節に関しては、日本経済が朝鮮戦争特需に端を発する高度経済成長期へと突入する 1954 年(昭和 29)末葉を境に顕著な変遷が確認できるため、この外在的要因を基軸に 2 期に分類し、期毎の主題の内容を比較している^{注7)}。

一方、前川國男の屋上庭園に関しては、前川建築設計事務所に保管されている図面資料に加え^{注8)}、前川國男自身の作品集及び、前川國男建築設計事務所・MID 同人・前川建築設計事務所の名で建築専門誌に発表された資料を用いる^{注9)}。これらの一次資料のうち、前川建築設計事務所が主要建築作品としている 126 作品を対象として^{注10)}、竣工図面に屋上庭園が確認できる作品を抽出し^{注11)}、前項と同様の項目を用いて分析した上で、両者を比較する。

2. 前川國男における屋上庭園の出自

第 2 章では、前川國男の建築作品における屋上庭園の出自を明らかにする。まず前提として、日本近代建築の屋上庭園における主題の変遷を分析するとともに、前川國男の論考を整理し、記述内容を使用頻度から分類することで、屋上庭園を位置付ける。その上で、前川國男自身が屋上庭園に関して直接的に言及している言説を抽出し、対象作品を分析することで、前川國男の屋上庭園の起源を明らかにする。

なお、日本近代建築の屋上庭園に関しては、前章第 1、2 節と同様に、第二次世界大戦終戦前後を通して国内で長期発刊された建築専門誌である『新建築』、『建築雑誌』、『国際建築』の 3 誌を用いる。これらの一次資料より、屋上庭園に関する説明記述を抽出し、設計者が意図した屋上庭園の主題を分類する。その上で、前章と同様の基軸を用いて経年的な変遷を考察する。

一方、前川國男の建築作品に関しては、前川建築設計事務所に保管されている 354 の論文や文字起こしされた対談を用いる。

3. 前川國男による屋上庭園の解釈

第 3 章では、前川國男の建築作品における屋上庭園の起源として、前章で明らかにしたル・コルビュジェの屋上庭園に着目し、それらに対する前川國男の解釈を明らかにする^{注12)}。まず、ル・コルビュジェの屋上庭園と深く関わる構成要素として、庭園種別と屋根型に着目し、ル・コルビュジェ自身の言説を用いて類型化する。次に、ル・コルビュジェの屋上庭園を包括的に扱い、ル・コルビュジェ自身の言説を用いて分類した上で、分類毎に主題の通時的な変化を分析する。その上で、前川國男が言及しているル・コルビュジェの屋上庭園を、前川國男自身の

素描や写真、言説をもとに再解釈することで、前川國男がル・コルビュジェの屋上庭園に関して、どのような要素に着目しているのかを論じる。

ル・コルビュジェの制作過程における地盤面の設定に関する分析には、*Le Corbusier & Pierre Jeanneret (Œuvres completes, vols.8 [5] (Œuvres と表記)及び^{注13)}、Le Corbusier Archives vols.32 [6] (Archives と表記)、Le Corbusier Plans vols.15 [7] (Plans と表記)を用いる。Œuvres より、庭園に関する言説、素描、図面、呼称を抽出し、ル・コルビュジェ自身の説明に依拠して庭園形式の類型化を行う^{注14)}。次に、Archives と Plans より、各類型が確認できる図面を抽出し、制作過程における生成過程を分析することで、ル・コルビュジェが半自然的環境である庭園の地盤面を如何に設定しているのかを考察する。*

次に、屋根形状の類型に関する分析には、Archives と Plans を用いる。これらの一次資料より、計画案・実施作品を問わず、屋根形状が判別可能な作品を抽出し、ル・コルビュジェの屋根に関する既往研究に依拠して分類する。さらに、制作過程における屋根形状の経年変化が確認できる作品を再抽出することにより、屋根に関するル・コルビュジェの制作意図を整理する。

そして、ル・コルビュジェの屋上庭園に関する一次資料には、Œuvres を用いる。Œuvres より屋上庭園が計画された建築作品を抽出し、ル・コルビュジェ自身の言説を用いて 2 種類に整理する。さらに、それぞれの作品を説明対象とする説明記述を再抽出したうえで、分類ごとに通時的な変遷を考察する。

一方、前川國男によるル・コルビュジェの解釈に関する分析には、Archives 及び Plans、そして前川事務所に保管されている 354 の論考を一次資料として用いる。Archives と Plans より、前川國男がル・コルビュジェ事務所所在籍中に設計に関与した庭園を抽出し、庭園形式を整理した上で、前川事務所に保管されている資料から、前川國男がル・コルビュジェの屋上庭園に対して言及している作品を、前川國男自身の素描や写真、言説をもとに再解釈することで、前川國男が屋上庭園のどのような要素に着目しているのかを論じる。

4. 前川國男による屋上庭園の実践

第 4 章では、前川國男の建築作品における屋上庭園に着目し、前川國男が如何にル・コルビュジェの屋上庭園を独自の建築手法として応用しているのかを明らかにする。まず、前川國男自身の屋上庭園とル・コルビュジェの屋上庭園との差異や類似性を分析することで、前川國男の屋上庭園におけるル・コルビュジェからの受容を考察する。なお、設計活動後期における前川國男の屋上庭園の一部は、地上階の外部動線と接続されることで、エスplanade(esplanade)と呼称付けられた屋外空間の一部として取り込まれている。そこで第 4 章では、前川國

男の建築作品における屋上庭園の展開として、エスプラナード(esplanade)にも着眼を置き、前川國男自身がエスプラナードの出自としているカルーゼル広場との差異や類似点を分析することで、屋上庭園からエスプラナードへの変遷を明らかにする^{注15)}。

前川國男の建築作品に関しては、第1章第3節と同様に、前川建築設計事務所に保管されている図面資料や言説に加え、前川國男自身の作品集及び、前川國男建築設計事務所・MID 同人・前川建築設計事務所の名で建築専門誌に発表された資料を用いる。これらの一次資料のうち、前川建築設計事務所が主要建築作品としている126作品を対象として、竣工図面から屋上庭園が確認できる作品を抽出し、既往研究に依拠して4期に分類することで^[8]^{注16)}、期毎の形態や空間構成の特徴を把握する。その上で、前章で明らかにしたル・コルビュジェの屋上庭園と、前川國男自身の屋上庭園との差異や類似性を分析することで、前川國男の屋上庭園におけるル・コルビュジェからの受容とその応用の変遷を分析する。

一方、エスプラナードに関する分析にも、前節と同様の一次資料を用いる。一次資料よりエスプラナードに関する既往研究や専門誌の記事を抽出し、エスプラナードの主題や既往研究による定義付けを整理する。次に、前川國男自身がエスプラナードの出自としているカルーゼル広場に関して、前川國男自身の言説から着眼点を明らかにした上で、前川國男の建築作品におけるエスプラナードとの差異や類似点を分析する^{注17)}。加えて、研究対象とした5つのエスプラナードを比較し、屋上庭園との類似性を分析することで、前川國男が屋上庭園を如何に展開したのかを明らかにする。

第4節 研究の位置付け

前川國男に関する既往研究には、建築作品に着目し、建築手法の特徴を分析した研究が数多くある^[9-11]。代表的なものとしては、前川國男の建築作品における伝統と近代の葛藤、調和を問題提起しているものがある^[12,13]。また、原広司が「前川國男は、おそらく誰しもが認めるように、日本近代建築の精神的支柱であった」と記し^[14]、布野修司が「前川國男の軌跡は、日本近代建築史上もっとも華麗な戦いの歴史」と述べるように^[15]、多くの既往研究において、前川國男が近代日本建築にもたらした建築手法の重要性を認めている。しかしながら、前川國男の屋上庭園に関しては、事例数の少なさを要因の1つとして、これまでほとんど研究されていない^{注18)}。ただし、屋上庭園に関する研究がない一方で、屋上庭園の基盤となるRC造陸屋根に関しては、戦前及び戦時体制下における日本趣味建築・東洋趣味建築の問題として度々取り上げられている^[16,17]。つまり、前川國男の近代建築手法は重要視されているにもかかわらず、屋根型が日本建築

様式とインターナショナリズムとの相克として論じられたことで、屋上庭園を始めとする屋根上の空間構成に関しては概ね言及されていない。

そこで本研究は、前川國男が重視していた近代建築手法の1つである屋上庭園に着目し、通時的な変遷を分析することで、前川國男が戦前・戦後を通して探求し続けた近代手法の一端を明らかにする。

一方、ル・コルビュジェの屋上庭園(toit jardin)に関しては、これまでも数多く研究されている^[18,19]。また、ル・コルビュジェが計画した庭園に着目し、植栽の捉え方を庭園史の中で通史的に位置づけたものや^[20-22]、ル・コルビュジェの自然観に関する研究^[23-25]、さらに、ル・コルビュジェの屋上庭園とピロティの関係性に関する研究がある^[26,27]。加えて、ル・コルビュジェの屋根の建築制作に関する既往研究として、初期住宅作品における屋根形態と環境との関連を考察した論文や^[28]、ル・コルビュジェにおける屋根のシンボリズムに言及した論文がある^[29]。ただし、いずれも特定の建築作品に関する事例研究であり、また制作過程における変遷には言及されていない。

これらに対し本研究は、ル・コルビュジェの屋上庭園を包括的に扱うとともに、図面や言説を用いて通時的な変遷を明らかにする^{注19)}。

そして、前川國男の建築作品におけるル・コルビュジェへの影響を指摘した論考として、建築作品の形態的な類似性から、両者の影響関係を明らかにしている既往研究がある^[30-33]。ただし、これらもまた、特定の建築作品を研究対象とした分析であり、屋上庭園については概ね言及されていない。

これらに対し本研究は、両者の屋上庭園を包括的に扱い、図面と言説を比較することで影響関係を明らかにしている。

なお、日本において建築史学の観点から屋上庭園に関して主題的に研究したものは概ねない^{注20)}。事実、第二次世界大戦後に本格的に論争された伝統論争において、近代日本の建築家達が建築物だけではなく庭園にまで言及してモダニズムの論理に「日本的なもの」を吸収しようとしたにもかかわらず、屋上庭園にはほとんど言及されていない。おそらく形態的特徴や概念的特徴の色濃い建築物や庭園に着目が置かれ続けたためと推測でき、建築物と庭園との中間領域ともいえる屋上の庭園は、園芸史の観点から取り上げられるのみであった^[34-37]。また、屋上庭園は、陸屋根の上部を常時歩行可能とする施工が必要であることから、勾配屋根に比べ、技術的懸念や予算的懸念が残り、技術の未熟な戦後復興期以前の日本においては屋上庭園の作品数が非常に少ないことも要因の1つと推測できる。

それらに対し本研究は、前川國男の屋上庭園の起源であ

るル・コルビュジェの屋上庭園との比較考察に加え、屋上庭園の発展的展開であるエスプラナードまでを研究対象とすることで、前川國男の屋上庭園を通時的に分析している。

参考文献

- [1] 松隈洋：『前川國男 現代との対話』，六耀社，2006
- [2] アルフレッド・ロート：「前川國男への追悼」『追悼前川國男』，前川建築設計事務所，1987
- [3] 前川國男：「ル・コルビュジェの言い遺したこと」『一建築家の信條』，晶文社，1981
- [4] 三沢浩：『建築家前川國男の仕事』，美術出版社，p.70，2006
- [5] Le Corbusier: *Le Corbusier&Pierre Jeanneret Œuvres complètes*, vols.8, Willy Boesiger, ed., Zurich, Les Editions d' Architecture Artem, 1964, (Le Corbusier, Willy Boesiger, ed., 吉阪隆正訳：『ル・コルビュジェ全作品集』，全8巻，A.D.A. 1978)
- [6] Foundation Le Corbusier: *Corbusier Archives vols.32*, Garland Publishing and Foundation, New York and Paris, 1981-1982
- [7] Foundation Le Corbusier, Echelle-1: *Le Corbusier Plans*, 丸善出版，2005
- [8] 前川國男，宮内嘉久：『一建築家の信條』，晶文社，1981
- [9] 松隈洋：『前川國男 現代との対話』，六耀社，2006
- [10] 原広司：「戦後日本の近代化と前川國男」，『前川國男作品集 建築の方法』，前川國男作品集刊行会，宮内嘉久編，美術出版社，1990
- [11] ジョナサン・M・レイノルズ：「前川國男と日本のモダニスト美学の抬頭」，『前川國男作品集 建築の方法Ⅱ』，美術出版社，1990
- [12] Ibid., 大谷幸夫：「前川國男における日本的感性」
- [13] 足立光章：『建築』，青銅社，p.92，1966.7
- [14] 原広司：「戦後日本の近代化と前川國男」『前川國男作品集 建築の方法2』美術出版社，1990
- [15] 布野修司：「Mr.建築家 前川國男というラディカリズム」『建築の前夜』而立書房，1996，pp.15-34
- [16] 浜口隆一：「日本国民建築様式の問題」『新建築』新建築社，1944
- [17] 宮内嘉久：『前川國男作品集 建築の方法2』美術出版社，1990
- [18] Stanislaus von Moos: *Le Corbusier-Elemente einer Synthese*, Switzerland, 1968 (Stanislaus von Moos, 住野天平訳：『ル・コルビュジェの生涯 建築とその神話』，彰国社，1981)
- [19] Jacques Lucan éd.,: *Le Corbusier une encyclopédie*, CCI, Paris, 1987, (Jacques Lucan ed., 加藤邦男監訳：『ル・コルビュジェ辞典』，中央公論美術出版，2007)
- [20] Marc Treib ed.,: *Modern landscape Architecture, A Critical Review*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, London, 1993
- [21] Dorothée Imbert: *The Modernist Garden in France*, Yale University Press, New Haven, London, 1993
- [22] Isotta Cortesi: *Parks publics, paysage 1985-2000*, Federico Motta Editore S.p.A., Milan, Actes Sud / Motta, Arles, 2000
- [23] Stanislaus von Moos, et al.: *Le Corbusier et la nature*, Fondation Le Corbusier, Editions de la Villette, Paris, 2004

- [24] Adolf Max Vogt: *Le Corbusier the Noble Savage*, The MIT Press, London, 1998
- [25] Sarah Menin, Flora Samuel: *Nature and Space, Aalto and Le Corbusier*, Routledge, London, 2003
- [26] Jacques Lucan éd.,: *Le Corbusier une encyclopédie*, CCI, Paris, 1987, (Jacques Lucan ed., 加藤邦男監訳：『ル・コルビュジェ辞典』，中央公論美術出版，2007)
- [27] Charles Jencks: *Le Corbusier and the Continual Revolution in Architecture*, The Monacelli Press, New York, 2000
- [28] Tim Benton: *La villas Baizeau et le brise-soleil, Le Corbusier et la Méditerranée*, Parenthèses, Marseille, 1987, pp.124-129
- [29] William J. R. Curtis, 中村研一訳：『ル・コルビュジェ-理念と形態』，鹿島出版会，1992
- [30] 松隈洋：『近代建築を記憶する』，建築資料研究社，2005
- [31] 長谷川堯：『建築の出自』，鹿島出版会，2008
- [32] 宮内嘉久：『前川國男 賊軍の将』，晶文社，2005
- [33] 高階秀爾，三宅理一，鈴木博之，太田泰人：『ル・コルビュジェと日本』，鹿島出版会，1999
- [34] 近藤三雄：「屋上緑化の本来あるべき姿 より質の充実を」，ベース設計資料，No.135 建築編，建設工業調査会，pp.36-40，2007
- [35] 近藤三雄：「わが国における屋上庭園の起源と黎明期における展開にて」，造園技術報告集(5)，pp.200-203，2009
- [36] 山田宏之：『屋上庭園今昔』，インタラクシオン，pp.4-24，2004
- [37] 日置勝人：「我が国の屋上庭園」，造園雑誌 9(1)，pp.7-13，1942

注釈

- 1) ル・コルビュジェは、それまでの西欧における伝統的な組積造の建築に対し、水平スラブと柱、階段による「ドミノ(Dom-ino, 1914)」の架構を提唱する事で、間取りと機能を構造から完全に独立させている。
- 2) 前川國男：文明と建築，建築年鑑，美術出版社，pp.9-14，1964
- 3) 明治・大正期に関しては一次資料に掲載されている作品数が少なく、また写真資料も乏しいため、当時の記念絵葉書やパンフレットを補足的に用いて説明している。これらはいくまでも論の信憑性を高めるために用いたものであり、論旨や結論には影響しない。
- 4) 既往研究では、屋上庭園に用いられた植栽に関して樹種や維持管理方法にも言及しているが、本稿で用いた一次資料からは植栽に関する詳細な読み取りが出来ないため、植栽に関しては有無と庭園形式のみを扱い、樹種と維持管理方法に関する分析は今後の課題とする。
- 5) 用途や立地に関して、屋上庭園が向けられた方角及び眺望先の景觀に関する分析が必要であるが、本稿で用いた一次資料からは詳細に読み取ることが出来ないため今後の課題とする。また併せて、前庭や中庭など地上の庭園との関連も考察する必要がある。そして、屋上庭園を設計したのが個人設計事務所か総合建設業か、もしくは官公庁の営繕課なのかという制作主体に関する問題も今後

- の課題としたい。
- 6) 屋上庭園が確認できる建築作品の総件数は、1920年(大正9)以前が17件、1921年(大正10)から1936年(昭和11)までが131件、1937年(昭和12)以降は67件である。なお、資料より主題の内容を読み取れない作品も含まれるため、各主題の合計数と総件数は一致しない。
 - 7) 用いた一次資料のうち『国際建築』の発刊が1967年(昭和42)中旬に終了することから、本稿では比較可能な1966年(昭和41)までを研究対象として扱っている。
 - 8) 前川建築設計事務所に保管されている370作品の図面資料および354の論文や対談を対象として用いている。図面資料はマイクロフィルムや原図で保管され、各作品ごとに契約図面、実施図面、施工図面、設備図面、竣工図面などが残されている。なお、筆者は2010年9月13日、2014年8月15日、2015年3月26日、2015年10月29日、2016年10月12日の計5回、前川建築設計事務所の橋本功代表へヒアリングを行っている。
 - 9) 前川建築設計事務所に保管されている図面資料に関して、竣工図面のあるものは竣工図面を、竣工図面のないものは実施図面を用いて抽出を行う。
 - 10) Ibid.,『建築家前川國男の仕事』pp.287-292. 森永キャンディーストア一群のように同名称で複数の計画があるもの、もしくは同一敷地内の増改築は1作品として集計している。
 - 11) 様式的な定義は曖昧であるものの、屋上庭園とは、一般的に建築に付随する外部空間である地上の庭園を、建築の最上部の陸屋根に移し替えたものであり、本稿では、原則として前川國男が図面表記において屋上庭園もしくはそれに類する言葉を使用している屋外空間を研究対象とする。
 - 12) 近代建築における屋上庭園の形式は、必ずしもル・コルビュジエ自身が考案した手法という訳ではない。実際、ル・コルビュジエが東方への旅以前に勤めていたオーギュスト・ペレ(Auguste Perret, 1874-1954)の事務所(Franklin apartment building, 1903)には、すでに屋上階に庭園が配され、またフランソワ・アンヌビク(François Hennebique, 1842-1921)が1903年に建設した自邸(Maison Hennebique)にも、鉄筋コンクリート片持ち梁の上部に屋上庭園が施工されている。
 - 13) ル・コルビュジエ自身の手による執筆、編集であるため、一次資料として使用する。
 - 14) ル・コルビュジエの建築作品には、庭園に関する説明されていないものも多いが、その場合は、図面上に示されている庭園の呼称を用いて庭園形式の類型化を行う。
 - 15) 前川建築設計事務所に保管されている竣工図面を用いる。ただし、東京海上ビルディング計画案とポンピドゥーセンターに関しては、竣工図面が無いため、東京海上ビルディング計画案は新建築及び建築文化に発表した際の図面資料を用い、またポンピドゥーセンターはコンペ提出資料の複製を用いて分析を行う。
 - 16) 宮内嘉久は、前川國男に関する包括的な理念や手法の既往研究を多く残した建築史家であり、一建築家の信條(前川國男、宮内嘉久:『一建築家の信條』、晶文社、1981)において、半世紀にわたる前川國男の設計活動を、考え方や建築作品の変化が顕著な時期毎に分類している。そのため、前川國男の建築制作の特徴を把握するためは宮内嘉久の分類が適していると判断し、本稿は一建築家の信條の分類に依拠している。
 - 17) 前川建築設計事務所に保管されている竣工図面を用いる。ただし、東京海上ビルディング計画案とポンピドゥーセンターに関しては、竣工図面が無いため、東京海上ビルディング計画案は新建築及び建築文化に発表した際の図面資料を用い、またポンピドゥーセンターはコンペ提出資料の複製を用いて分析を行う。
 - 18) 唯一、前川國男建築設計事務所の元所員である仲邑孔一が、木村産業研究所の屋上庭園について竣工当時の様子を書き示している(『住宅特集』、新建築、p.56, 2006.1)。
 - 19) 屋上庭園に関する師からの受容という意味では、アントニン・レーモンド(Antonin Raymond, 1888-1976)からの影響も考えられるが、前川國男はレーモンドが計画した屋上庭園(roof garden)に関しては言及していないことから、本研究ではル・コルビュジエからの受容に焦点を当てている。松隈洋によると、むしろレーモンドが前川國男を通してル・コルビュジエの手法を受容しようと試みている(松隈洋:ル・コルビュジエとレーモンドの間で、建築ジャーナル、pp.51-52, 2013.3)。
 - 20) 日本において屋上庭園という言葉は、1896年(明治29)発行の『明治園芸会雑誌』にて初めて用いられる(『明治園芸会雑誌』日本園芸会、1896)。

第1章

日本近代建築史における屋上庭園

第1節 第二次世界大戦終戦以前の屋上庭園

第1項 建築類型(表1)

表1 建築類型の変移
[表内の数字は作品数を示す]

		～1920	1921～1936	1937～
建築類型	住宅	1	38	21
	集合住宅	0	4	1
	百貨店・駅	3	9	2
	宿泊施設	3	4	1
	学校	0	2	3
	小型店舗・事務所	1	15	12
	病院	0	9	2
	その他	0	7	2

1. 住宅

例外的に服部長七郎(設計者不明, ~1896)の屋上に池泉庭園が作られているものの、1920年以前の住宅には屋上庭園が概ね計画されていない。一方、1920年代以降になると数多く計画されるようになり、土浦亀城設計の伊藤邸(1935)に代表されるように(図1)、主に平屋～2階建ての上部に比較的小規模な屋上庭園が計画されている。

また、吉原慎一郎設計の野崎一郎氏邸(1938)や斉藤寅郎設計の北野氏邸(1942)に代表されるように、日中戦争勃発以降も住宅の屋上庭園は数多く計画され続け、私的な庭園を形成している。

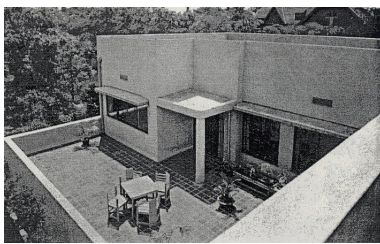


図1 伊藤邸(1935)

2. 集合住宅

1920年前後における鉄筋コンクリート造の普及により高層の建築物が容易に建設できるようになると、3～5階建ての集合住宅が立地を問わず計画されるようになり、それに伴い屋上に居住者専用の庭園が設けられる。これらは、同潤会建設部建築課設計の同潤会アパートメントハウス(1925)に代表されるように(図2)、集合住宅に必要な機械室、貯水槽、機械・電気設備などを屋上に集

中のに配置した際に生じる余剰スペースを庭園として解放したものである。

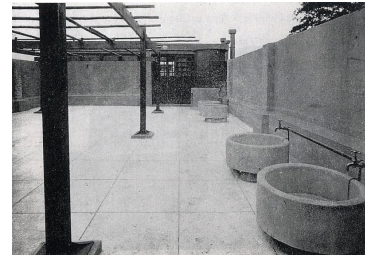


図2 同潤会アパートメントハウス(1925)

一方、日中戦争勃発直後に建設された J. J. Svagr 設計のヘルム・ハウス(1938)を最後として、以降、屋上庭園を持つ集合住宅は計画されていない。

3. 百貨店・駅

日本国内で初めて百貨店に屋上庭園を計画したのは三越呉服店仮営業所(設計者不明, 1907)であり、図面に「空中庭園」と記された4階の屋上庭園には、池泉庭園を中心として周囲に廻転展望台や噴水、三囲稲荷、温室、茶室、奏楽堂が配されている。また、三越札幌支店(1932)に幾何学式の屋上庭園が計画されているように、以降1930年代末葉まで6～8階建ての百貨店に屋上庭園が計画され続け、多様に応用されている。それらは屋上庭園のもつ話題性からさらなる集客を可能とし、また、屋上庭園内での飲食物販売や遊技場の遊戯料によるさらなる増益を生み出している。さらに、三越呉服店を始めとして、伊勢丹百貨店、白木屋呉服店、越前屋百貨店など多数の百貨店が競って試行錯誤することで、百貨店ごとに独自の意匠や工夫が模索されている(図3)。

また、久野節設計の東武鉄道浅草雷門駅(1932)や南海鉄道難波駅(1932)に典型が確認できるように、1900年代初頭から1930年代末葉まで6～8階建ての駅舎の屋上にも百貨店と同じく集客目的の休息広場が計画され、植栽や噴水が配された屋上庭園がモノレールの待ち合いを兼ねている。

日中戦争勃発以降になると駅に屋上庭園は計画されなくなり、また、百貨店に関しても村野藤吾設計の大丸神戸店(1937)や明石信道設計の百貨店ぼうに森屋(1938)に屋上庭園が計画されるものの、嗜好性に富んだそれまで

の屋上庭園に対し、芝やタイルなどの仕上げに小さな池が配された程度の非常に簡素な構成となる。



図3 三越札幌支店(1932)

4. 宿泊施設

屋上庭園が計画された宿泊施設は、ゲオルグ・デ・ラランデ(George de Lalande, 1872-1914)とヤン・レツル (Jan Letzel, 1880-1925)設計の神戸オリエンタルホテル(1907)を始めとし、以降 1937 年まで通年的に計画される。それらは、渡辺仁設計のホテル・ニューグランド(1928)に代表されるように(図4)、主に 5~6 階建ての屋上に設けられ、レストランや宴会場などの居室が付随している。

なお、久米建築事務所設計の軽井沢萬平ホテル(1936)や山下寿郎設計の名古屋観光ホテル(1936)を最後として、1937 年の日中戦争勃発以降は宿泊施設に屋上庭園は計画されていない。

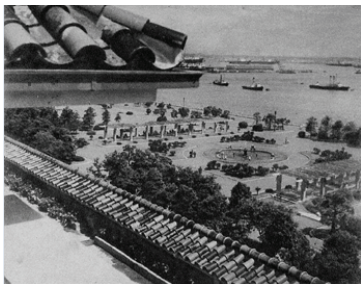


図4 ホテル・ニューグランド(1928)

5. 学校

屋上庭園が設けられた学校は 1920 年代以降に計画されるようになる。それらは東京市建築課設計の東京市忍岡小学校(1933)に代表されるように、主に 4~5 階建ての小学校の屋上に児童公園や運動場が計画され(図5)、屋上の一部に教材として使うための花壇や飼育用の池を併設している。

一方、日中戦争勃発以降も学校の屋上庭園は計画されているが、鈴木忠雄設計の永田町小学校(1937)や東京市建築部設計の東京市根岸尋常小学校(1938)のように、1937 年から始まる資材統制直後の計画のみであり、戦況の悪化とともに計画されなくなる。

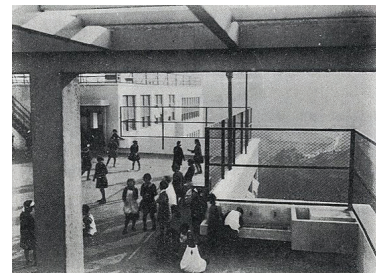


図5 東京市忍岡小学校(1933)

6. 小型店舗・事務所

安井武雄設計の大阪倶楽部(1924)や久野節設計の国光ビルディング(1925)の屋上に従業員用の運動場や休憩場、物干し場が計画されているように、小規模の店舗や事務所に設けられた屋上庭園は 1920 年代から通年的に用いられ、3~4 階建ての上部に計画されている。それらは日中戦争勃発以降も計画され続け、代表例である渡辺仁設計の明治製菓喫茶店(1939)や佐藤茂次設計の日本タイプライター(1937)には(図6)、物干し場や従業員用の休憩場、茶室などが計画されている。

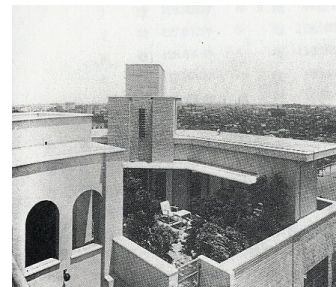


図6 日本タイプライター(1937)

7. 病院

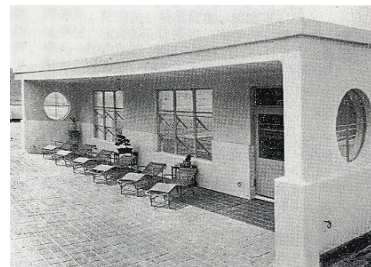


図7 日本赤十字社福井支部病院(1934)

屋上庭園をもつ病院は、1930 年代以降に計画されるようになる。それらは、曾禰中條建築事務所設計の慶応義塾大学医学部附属病院西病舎(1933)や木子七郎設計の日本赤十字社福井支部病院(1934)に代表されるように(図7)、4~5 階建ての上部に設けた屋上庭園を物干し場や休憩場のほか、散歩道としても計画し、従業員の利便性と同時に、入院患者のリハビリテーションの場としても利用している。

一方、通信省経理局営繕課設計の東京通信病院(1938)

や東京市建築部設計の東京市立築地産院(1939)に代表されるように、事例数は少ないものの日中戦争勃発以降も病院の屋上庭園は計画され続けている。

8. その他

屋上庭園が計画されたその他の建築類型として、官公庁舎や新聞社、博物館、図書館などがある。しかし、それぞれ抽出数が少なく、年代的な変遷を断定することができない。

官公庁や博物館、図書館に関しては、比較的大規模の屋上庭園がタイルやモルタルなどの人工素材によって簡素に仕上げられ、休憩場や運動場に用いられている^{注1)}。

また、東京朝日新聞社(設計者不明, 1940)のように、新聞社の屋上には通信連絡に利用されている鳩の為に鳩舎が配され、眺望のよい屋上庭園が鳩舎と関連づけて計画されている^{注2)}。

第2項 素材(表2)

表2 素材の変移 [表内の数字は作品数を示す]

		~1920	1921~1936	1937~
素材	自然素材	7	28	5
	人工素材	0	56	31

横河民輔設計の三越呉服店(1915)や岩谷松平邸(設計者不明, 明治20年代後半から30年代初頭)に代表されるように、1910年代以前の屋上庭園には多種多様な自然素材が施されている。銀座に建てられた岩谷松平邸の屋上庭園は、写真解説に「岩谷商会の屋上には写真のような庭園があり、夏になると滝が落ちるように仕掛けられていた」と記されているように^{注3)}、水や土、砂利、石、草木などの自然素材を多用した池泉庭園であった(図8)。このように、多くは幾何学式庭園や枯山水庭園、池泉庭園などの地上で用いられた庭園形式がそのまま屋上に移植され、建築の耐荷重、耐風性、耐乾性、浅根性などに配慮して樹種や石種が選定されている。

1930年代以降になると、慶応義塾幼稚園(1937)について谷口吉郎が「芝生によって強烈な光線の反射を防ぐ」と記し^{注4)}、また東京市建築部設計の東京市根岸尋常小学校(1938)に関して、緑化した屋上に外気教室を設けて「屋上にある外気教室は虚弱児童のために、特に新鮮な空気と日光とを供給するために設けられた」と記しているように^{注5)}、次第に屋上庭園全体を均質な単一の自然素材で仕上げられるようになる。

一方、1930年代以降にはそれまでの自然素材を多用した屋上庭園に加え、建設費や維持管理への配慮からタイルやモルタルなど人工素材のみで仕上げた簡素な屋上庭園も数多く計画されている。年代を経るに従い、人工素材のみの計画数の割合が増加し、日中戦争勃発以降はより顕著に用いられる。



図8 岩谷松平邸(明治20年代後半から30年代初頭)

第3項 躯体構造(表3)

表3 躯体構造の変移 [表内の数字は作品数を示す]

		~1920	1921~1936	1937~
躯体構造	木造	5	29	23
	鉄筋コンクリート	2	75	17
	その他	0	3	0

1. 木造

日本最古の屋上庭園として近藤三雄は文久年間(1861~1864)に築島の豊川町に建てられた武蔵野楼をあげている[6]。これは木造3階建ての妓楼の2階屋根部分に設けられたテラス形式の屋上庭園であり、非常に緩い勾配の屋根に金属板を葺き、その上にモルタルと植栽用の土を覆うことで屋上庭園を形成している。

そしてこの武蔵野楼以降、各地の市街地で木造陸屋根による屋上庭園が模索されるようになる。明治20年代末葉から30年代初頭に銀座に建てられた岩谷松平邸の事務所兼住宅は、明治政府が建造した銀座煉瓦街の払い下げを岩谷自身が木造で改修したもので^{注6)}、間口46mに及ぶ和洋折衷の2階建ての一部1階の陸屋根に贅を尽くした屋上庭園がつけられている。

また、三越は本館建替えに伴う仮店舗を三越呉服店仮営業所(設計者不明, 1907)として竣工し、木造3階建ての屋上に植栽豊かな庭園を計画している(図9)。なお、この三越呉服店仮営業所は1909年に児童博覧會の会場としても利用されている。

一方、1920年前後に日本国内で鉄筋コンクリート造の建築物が恒常的に用いられるようになると、耐水性や耐久性、対蟻性、対腐性に課題の残る木造屋上庭園は小規模の住宅や店舗のみに用いられるようになり、大型の店舗や公共施設は鉄筋コンクリート造や鉄骨鉄筋コンクリート造へと変化していく。

しかしながら、日中戦争が勃発すると国防目的達成のために資材統制が行われ、鉄筋コンクリートはほぼ使用不可能となってしまふ。そのため、非合理的であるにもかかわらず、屋上庭園は再び木造で作らざるを得なくなる。実際、土浦亀城設計の宮口邸(1938)に関しては、当初予定されていた鉄筋コンクリートが使えなくなったために途中から木造へと計画変更されている^{注7)}。

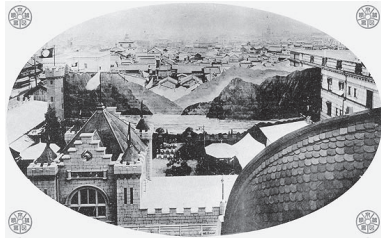


図9 三越呉服店仮営業所(1909)

2. 鉄筋コンクリート造

日本における鉄筋コンクリート構造の建築物は端島(軍艦島)のグラバーハウス/30号棟(設計者不明1916)が最初期であり、このグラバーハウスの屋上はすでに、居住児童用の遊び場として利用されている。当時の端島は世界最高の人口密度を誇り、密集して暮らしていた島民にとって土地の有効活用方法の模索は急務であった。事実、同じ端島内に2年後に作られた日給社宅/16,17,18号棟(設計者不明,1918)の屋上には、「青空農園」と名付けられた田畑が計画されている(図10)。

そして1920年代に恒常的に鉄筋コンクリート造が使用されるようになると、大規模な建築を主に、鉄筋コンクリート造や鉄骨鉄筋コンクリート造の屋上庭園は急増する。



図10 日給社宅16号棟(1918)

しかし一方で、日中戦争が勃発すると建築資材の統制立法権が政府に委任され、鐵鋼工作物築造許可規制が制定される。そのため、1937年以降になると、コンクリート内に用いる鉄筋や鉄骨は軍需優先とし資材統制が行われ、軍事関連施設以外の鉄筋コンクリート造屋上庭園はほとんど計画されなくなる。

第4項 立地(表4)

表4 立地の変移 [表内の数字は作品数を示す]

		~1920	1921~1936	1937~
立地	市街地	7	83	29
	郊外	0	21	17

幕末の計画である武蔵野楼(設計者不明,1861~1864)の屋上庭園は、妓楼が集まる函館の中心地において、集客・宣伝を目的としたものであり、また岩谷松平の自宅兼事務所(設計者不明,明治20年代後半から30年代初頭)に関

しても、銀座煉瓦街にて宣伝目的で計画された屋上庭園である。このように、1910年代以前の屋上庭園の多くは集客・宣伝が主目的とされたため、市街地に計画されている。宣伝効果を狙った屋上庭園は、当時の新聞に「西洋で流行る屋上庭園の設備を作る事は将来、空き地の少ないところでは小公園を作ると等しく大いに必要なことでもある」と記されているように^{注8)}、同時に狭隘な敷地の土地有効活用としても用いられている。

一方、1920年代に鉄筋コンクリート造が容易に用いられるようになると、市街地や郊外を問わず屋上庭園が多様に応用されるようになる。また、市街地の計画である東京市建築部第一工営課設計の東京市根岸尋常小学校(1938)や(図11)、郊外の計画である蔵田周忠が白桂居(1937)に代表されるように、1937年の日中戦争勃発以降も市街地や郊外を問わず屋上庭園が計画されている。

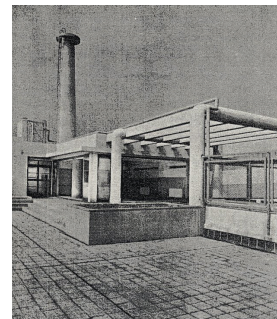


図11 東京市根岸尋常小学校(1938)

第2節 第二次世界大戦終戦以降の屋上庭園

第1項 建築類型(表5)

表5: 建築類型の変移 [表内の数字は作品数を示す]

		1945~1954	1955~1966
建築類型	住宅	9	37
	集合住宅	8	12
	学校	7	19
	店舗・事務所	8	23
	病院	4	5
	宿泊施設	0	16
	庁舎	1	18
	その他	2	38

1. 住宅

松田平田設計事務所設計の丘の上の住宅(1950)を水端とし、住宅に設けられた屋上庭園は通年的に数多く計画されている。多くは平屋もしくは2階の上部に居室前面の庭園として計画されている。また、坂倉準三建築研究所設計の松本幸四郎邸(1958)に関して「アパート的なエレベーションの固さを柔らげる意図と、2階の寝室に属した居間にプライバシーの高い空間をあたえるために、2階に屋根の吹き抜けになった小庭園を持たせて芝生及び砂利敷とした」^{注9)}と記されているように、建築内外や部

屋相互間の緩衝帯としての視覚的効果が住宅の屋上庭園には期待されている(図 12)。



図 12: 松本幸四郎邸(1958)

2. 集合住宅

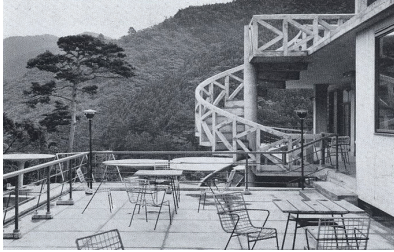


図 13: 八幡製鉄河内寮(1958)

三菱地所建築部設計の東京海上千駄ヶ谷アパート(1951)や八幡製鉄河内寮(1958)に代表されるように(図 13)、集合住宅の屋上庭園は 1950 年代初頭から計画され、以降、通年的に計画され続けている。多くは 3~5 階建ての上部に計画され、集合住宅に必要な機械室、貯水槽、機械・電気設備などを屋上に集中的に配置した際に生じる余剰スペースを住居者専用の庭園として開放している。

3. 学校

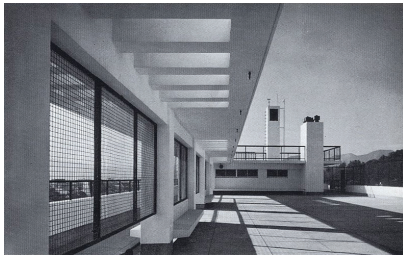


図 14: 静岡雙葉学園(1964)

日建設計工務設計の女子學院(1951)を初めとし、以降、屋上庭園を設けた学校は通年的に計画されている。1954 年以前は戦後復興及び新しい学校教育法の下での六三制に対応した施設整備が急務とされたことで数多くの学校が建設され、その屋上に生徒や教師のための庭園が計画されている。それらは堀口捨己研究室設計の明治大学和泉大教室(1961)や堀口捨己設計の静岡雙葉学園(1964) (図 14)に代表されるように、主に 2~4 階の上部に計画され、時代を経るに従って次第に面積規模が拡大している。

4. 店舗・事務所

三菱地所建築部設計の東京海上ビルディング(1950)の 6 階上部に設けられた屋上庭園や日建設計の神戸銀行協会ビル(1951)の 3 階上部に計画された「遊歩陸屋根」を初めとして、店舗や事務所に用いられた屋上庭園は様々な高さに通年的に計画され続ける。また、日建設計設計のパレスサイドビル(1966)の 9 階上部にフラットデッキ形式の屋上庭園が計画されているように、1955 年以降はより大規模化・高層化している(図 15)。



図 15: パレスサイドビル(1966)

5. 病院

日本電信電話公社建築部設計の関東通信病院(1954)や山田守建築事務所設計の東京厚生年金病院(1954)を典型として、病院に設けられた屋上庭園は 1954 年から計画され、4~5 階上部に配されている。一方、1955 年以降は佐藤武夫設計事務所設計の長崎県立馬原温泉病院(1966)のように(図 16)、事例数が少ないものの高さや形態を多様化させながら断続的に用いられている。

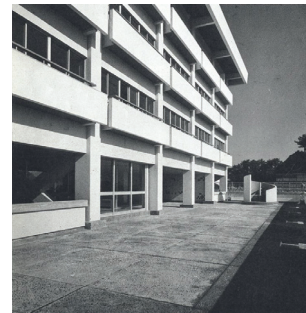


図 16: 長崎県立馬原温泉病院(1966)

6. 宿泊施設

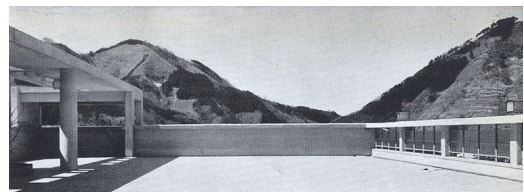


図 17: 万葉閣(1956)

1954 年以前には屋上庭園が設けられた宿泊施設は計画されておらず、明石信道設計の万葉閣(1956)の屋上庭園を

水端として(図17)、1960年代に多く計画される。それらの多くは吉村設計事務所設計の俵屋(1966)に代表されるように、3~5階上部に宿泊客専用の庭園として計画されている。

7. 庁舎

1954年以前には、屋上庭園が設けられた庁舎は計画されていない。一方、1955年以降になると通年的に計画され、久米建築事務所設計の伊丹市庁舎(1955)や岸田日出刀、丹下健三設計の倉吉市庁舎(1957)に代表されるように(図18)、高さ異なる屋上庭園を複合的に計画することで、屋上庭園の公共的利用方法を模索している。

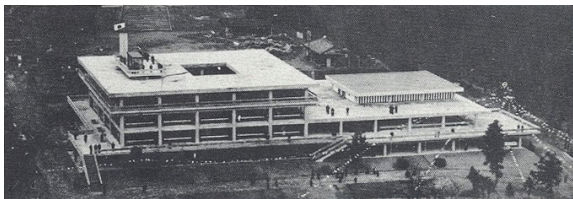


図18: 倉吉市庁舎(1957)

8. その他

上記の建築類型以外にも、会館や百貨店、クラブハウス、図書館、宗教施設などの建築類型に屋上庭園が設けられている。なお、これらはいずれも1954年以前には確認できず、1955年以降に経年的な傾向無く計画されている。

第2項 素材(表6)

表6: 素材の変移[表内の数字は作品数を示す]

		1945~1954	1955~1966
素材	人工素材	37	130
	自然素材	1	37

1. 人工素材

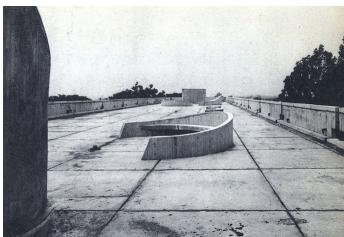


図19: 学習院大学政経学部棟(1960)

人工素材を仕上げ材に用いた屋上庭園は全年代を通して計画され、主に経済的合理性からタイルや目地を入れたモルタル、もしくは押さえコンクリートなど、非常に簡素な構成で計画されている。典型例である前川國男建築設計事務所設計の学習院大学政経学部棟(1960)では、床材やパラペット、ベンチまでもがコンクリート素地で作られている(図19)。

2. 自然素材(植栽)^{注10)}



図20: すまい(1965)

1954年以前には仕上げ材として自然素材が用いられた屋上庭園はほぼ計画されていない。

一方、1955年以降になると海老原建築設計事務所設計のYさんの住い(1955)を初めとして、屋上庭園の片隅に花壇や植え込みを設けて低木を植える事例が散見できるようになり、坂倉準三建築研究所設計のシルクセンター-国際貿易観光会館(1959)やAntonin Raymond設計の桜ヶ丘カントリークラブ(1960)では、屋上全面を土で覆い、石や植栽、水などを多用することで屋上に地上の庭園形式を再現している。さらに、藤木忠善設計のすまい(1965, 昭和40)の屋上庭園では、屋上全体を野生のままに放置した植栽で覆うなど(図20)、自然素材を用いた屋上庭園は時代を経るに従ってより多様性を帯びながら計画され続ける。

第3項 躯体構造(表7)

表7: 躯体構造の変移[表内の数字は作品数を示す]

		1945~1954	1955~1966
躯体構造	RC造・SRC造・S造	33	165
	木造	5	2

1. 鉄筋コンクリート造・鉄骨鉄筋コンクリート造・鉄骨造

空襲の惨禍を身をもって体験した人々が建築の不燃化を切望していたことを要因として、松田平田設計事務所設計の丘の上の住宅(1950)に関して「本格的な鉄筋コンクリート構造として、戦後最初のものである」^{注11)}と記しているように(図21)、鉄筋コンクリート構造の屋上庭園は戦後間もなく計画されるようになり、以降継続的に用いられるようになる。そしてさらに、前川國男建築事務所設計の日本相互銀行本店(1953)に代表されるように、鉄骨鉄筋コンクリート造を採用することで、屋上庭園のさらなる高層化が可能となり、1953年以降にはほぼ全ての屋上庭園が鉄筋コンクリート構造及び鉄骨鉄筋コンクリート造で計画されるようになる。

表 8 日本近代建築における屋上庭園

年	作品名	設計者	建築類型	素材		躯体構造	立地		
				自然素材	人工素材		市街地	郊外	
1915	三越呉服店	横河民輔	百貨店	●	●	SRC	●		
1918	三越呉服店大阪支店	-	百貨店	●	●	SRC	●		
1921	白木屋呉服店大阪支店	清水組設計部 (田中寛)	百貨店	●	●	SRC	●		
1924	大阪倶楽部	安井武雄	事務所		●	RC	●		
1925	国光ビルヂング	久野節	事務所		●	SRC	●		
	東京中央電信局	通信相営繕課	事務所		●	RC	●		
	同潤会アパートメントハウス	同潤会建設部建築課	アパート		●	RC	●		
1926	中田邸	住友建築課	住宅		●	RC			
	平賀敏氏の邸	石本喜久治	住宅		●	RC			
1927	I氏邸	大倉生	住宅		●	RC	●		
	小澤修造邸	増田清	住宅		●	RC		●	
1928	上野泰造邸	-	住宅		●	W		●	
	ホテル・ニューグランド	渡辺仁	ホテル		●	SRC	●		
	華族会館	曾禰達蔵 中條一郎	会館		●	SRC	●		
	資生堂	前田健二郎	事務所		●	RC	●		
	京都ホテル	清水組	ホテル		●	SRC	●		
	白木屋	石本喜久治	百貨店	●	●	RC	●		
1929	京都某邸	上野伊三郎	住宅		●	RC		●	
1930	竹山栖鳳邸	松村次郎	住宅		●	RC		●	
	甲子園ホテル	遠藤新	ホテル	●	●	RC		●	
	小西商店正面	片岡石本	店舗・事務所		●	RC	●		
	Heston Air Park	M. L. Auston, Architect	空港		●	[S]		●	
	交詢社ビルディング	横河工務所	事務所		●	SRC	●		
	電気試験場永田町分室	通信省経理局営繕課	試験場		●	RC		●	
1931	ソヴェート大使館	Antonin Raymond	大使館	●	●	RC			
	深川猿江裏町集合住宅	-	集合住宅		●	RC	●		
	新議院建築	-	議会議場		●	SRC	●		
	ダンスパレス	貞永直義	店舗		●	-		●	
	田中屋林蔵商店	堀越建築事務所	小店舗		●	RC	●		
	ライジングサン支配人住宅	Antonin Raymond	住宅		●	RC		●	
	氷川小学校	-	学校	●	●	RC	●		
	大阪東郵便局	通信省営繕課(吉田鉄郎)	郵便局		●	-	●		
	安井邸	安井武雄	住宅		●	W, S		●	
	東京郊外某住宅	堀口捨己	住宅	●	●	RC(一部 SRC)		●	
	東京慈恵会並同医院	東京慈恵会建築部	病院		●	S + RC	●		
	丸之内会館	三菱合資会社地所部	会館	●	●	RC	●		
	三菱倉庫株式会社江戸橋倉庫	三菱倉庫建築課	倉庫		●	RC(一部 SRC)	●		
	越前屋百貨店	-	百貨店	●	●	SRC	●		
	大阪東郵便局	-	郵便局		●	RC		●	
	1932	東京中央郵便局	通信省経理局営繕課	郵便局		●	SRC	●	
住宅の一貫例1		山田守	住宅	●	●	RC		●	
東京航空港本館		-	空港		●	RC		●	
大阪女子高等医学専門学校付属病院		K.Wakinaga, T.Yokoyama	病院		●	RC		●	
荻窪電話用事務室		通信省営繕課	事務所		●	RC	●		
九州気象臺		堀口捨己	気象台		●	SRC		●	
ソヴェート大使館		Antonin Raymond	大使館		●	[RC]		●	
東武鉄道浅草雷門駅		久野建築事務所 久野節	駅	●	●	SRC	●		
東京市療養所増築		東京市役所建築課	病院		●	RC	●		
三越札幌支店		櫻井小太郎建築事務所	百貨店	●	●	RC	●		
南海鉄道難波駅		久野建築事務所 久野節	駅	●	●	SRC	●		
1933		二階に玄関のある家 塚本邸	堀口捨己	住宅		●	-	●	
		中央気象台品川観測所	堀口捨己	観測所		●	W		●
	フランス大使館	Antonin Raymond	大使館		●	RC+W		●	
	久富邸	白鳳社建築事務所	住宅		●	W		●	

年	作品名	設計者	建築類型	素材		躯体構造	立地	
				自然素材	人工素材		市街地	郊外
1933	S氏の邸	谷口吉郎	住宅		●	W		●
	東京市立忍岡小学校	東京市建築課	学校	●	●	SRC		●
	慶応義塾大学医学部付属病院西病舎	曾禰中條建築事務所	病院		●	RC(一部SRC)	●	
	大阪大丸新館		百貨店	●	●	SRC	●	
	文部省新庁舎	営繕管財局	庁舎		●	SRC	●	
1934	吉本邸	鴻坂光夫	住宅		●	W		●
	中将湯アパート	大倉土木株式会社 H.Omura	店舗 集合住宅		●	RC	●	
	山本医院	石本喜久治	病院		●	W	●	
	伊勢丹	清水組	百貨店	●	●	SRC	●	
	癌研究会付属癌研究所	内田祥三, 土岐達人	研究所		●	RC		●
	日本赤十字社福井支部病院	木子建築事務所 木子七郎	病院		●	RC(一部W)		●
	京都帝国大学医学部付属病院	京都帝国大学営繕部	病院		●	RC		●
	川崎守之助邸	Antonin Raymond	住宅	●	●	RC		●
1935	東京市立高輪台小学校	通信省営繕課	小学校	●	●	RC	●	
	赤星鉄馬邸	Antonin Raymond	住宅	●	●	RC + W		●
	伊藤邸	土浦亀城	住宅	●	●	RC		●
	九州帝国大学医学部付属医院	九州帝国大学建築課	病院	●	●	RC		●
1936	九州帝国大学医学部法医学、衛生学、細菌学教室	九州帝国大学建築課	学校		●	RC		●
	九州帝国大学医学部付属医院看護婦寄宿舎	九州帝国大学建築課	寄宿舎		●	RC	●	
	京成電気軌道上野駅本屋	久野建築事務所 久野節	駅		●	SRC	●	
	関西日仏学館	木子建築事務所 木子七郎	会館	●	●	RC	●	
	名古屋観光ホテル	山下寿郎	宿泊施設		●	SRC	●	
	大丸神戸店	村野藤吾	百貨店	●	●	RC	●	
	大阪市電気科学館	大阪市経理部営繕課	プラネタリウム		●	RC+S	●	
	慶応義塾幼稚園	谷口吉郎	学校	●	●	RC	●	
1937	宇部市民館	村野藤吾	ホール		●	RC	●	
	松竹劇場付食堂	白波瀬工務店	店舗		●	RC	●	
	箱根仙石原「白桂居」	蔵田周忠	住宅		●	W		●
	前田氏邸	池田総一郎	住宅		●	W		●
	永田町小学校	東京市建築課設計 鈴木忠雄	学校	●	●	RC	●	
	ピアホール・ニュートキーヨー	大倉土木	店舗	●	●	RC	●	
	百貨店ぼうに森屋	明石信道	百貨店		●	RC	●	
	不二家洋菓子舗	Antonin Raymond	店舗	●	●	RC	●	
	ヘルム・ハウス	J. J. Svagr	集合住宅		●	RC	●	
	某氏邸	興志田徹郎	住宅		●	RC		●
1938	東京市根岸尋常小学校	東京市建築部第一工営課	学校	●	●	RC	●	
	Y邸増築	薬師寺厚	住宅		●	W	●	
	新邸	松田軍平	住宅		●	RC	●	
	東京通信病院	通信省経理局営繕課	病院		●	RC	●	
	第一高等学校同窓会館	清水幸重	会館	●	●	RC		●
	某別邸	吉田鉄郎	住宅		●	[W]		●
	川崎市新庁舎	川崎市随時建築課	庁舎		●	RC, SRC	●	
	東日会館	大倉生	店舗・事務所		●	SRC	●	
	東京市立築地産院	東京市建築部設計	病院		●	W	●	
	愛知研究所	文部省建築課	研究所		●	RC	●	
1939	中央気象臺大島測候所	-	研究所		●	RC		●
	神港ビルヂング	木下建築事務所	店舗 事務所		●	SRC	●	
	翠泉居	網戸武夫	住宅		●	W		●
	丘の上の住宅	松田平田設計事務所	住宅		●	RC		●
	西戸山小学校	東京都建築局工事課学校建築課, 渋谷区教育課営繕課	学校		●	RC		●
1951	松濤中学校	東京都建築局工事課学校建築課, 渋谷区教育課営繕課	学校		●	RC		●
	東京海上ビルディング別館	三菱地所建築部	事務所		●	S,RC	●	
	女子學院	日建設計工務	学校		●	[RC]	●	
	スタンダード石油会社社宅 1.2.3号住宅	Antonin Raymond	住宅		●	[RC]		●
東京海上千駄ヶ谷アパート	三菱地所建築部	集合住宅		●	RC	●		

年	作品名	設計者	建築類型	素材		躯体構造	立地	
				自然素材	人工素材		市街地	郊外
1951	シャーマン邸	松本嶺建築事務所	住宅		●	W		●
	國鐵田端アパート	東京鉄道管理局施設長付宮緒主幹	集合住宅		●	WRC	●	
	神戸銀行協会ビル	日建設計工務	事務所		●	RC	●	
	成蹊学園新校舎	形成学園建築委員会	学校		●	[RC]	●	
	某銀行社員アパート	中山克己建築事務所	集合住宅		●	RC	●	
	O氏邸	中山克己建築事務所	住宅		●	RC		●
	奥行き深い敷地に建つ住宅	松田平田設計事務所	住宅		●	[W]		●
	バルコニーのある片流れの家	阿部充	住宅		●	W		●
	琉球政庁	松田平田設計事務所	庁舎		●	RC	●	
	M氏邸	久米建築事務所	住宅		●	RC		●
	大学院高額研究科	早稲田大学理工学部建築学科	学校		●	RC	●	
	西戸山小学校	新宿区教育施設課	学校		●	RC	●	
	横浜ビルディング	村田政真建築設計事務所	事務所		●	RC	●	
	山口市庁舎	蔵田周忠	庁舎		●	RC		●
1952	日活国際会館	竹中工務店	会館		●	[RC]	●	
1953	日本相互銀行本店	前川國男建築事務所	店舗		●	SRC	●	
	法政大学・大学院	大江宏設計事務所	学校		●	RC	●	
	穂田郵政宿舎	郵政大臣官房建築部	集合住宅		●	RC	●	
	帝国銀行独身寮	久米建築設計事務所	集合住宅		●	RC	●	
	大和銀行新橋支店	久米建築設計事務所	店舗		●	[RC]	●	
	横浜浦島ヶ丘共同住宅	神奈川県住宅公社建設部	集合住宅		●	RC	●	
	公務員東郷台住宅	建設省営繕部	集合住宅		●	RC		●
	東京鐵道病院看護婦養成所・寄宿舎	国鉄東京工事事務所建築課	集合住宅 学校		●	SRC	●	
	東京都立文教高等学校	東京都建築局工事課	学校		●	RC	●	
	日本橋御木本眞珠店	Antonin Raymond	店舗	●	●	RC	●	
	千駄ヶ谷竹友寮	竹中工務店	宿泊施設		●	RC	●	
1954	関東通信病院	日本電信電話公社建築部	病院		●	RC	●	
	東京厚生年金病院	山田守建築事務所	病院		●	RC	●	
	大阪厚生年金病院	山田守建築事務所	病院		●	RC	●	
	丸栄百貨店	村野藤吾	百貨店	●	●	RC	●	
	事務所＋小工場	渡瀬謙二建築技術研究所	事務所 工場		●	S	●	
	大阪南街会館	竹中工務店	劇場		●	RC	●	
	名古屋第二西電話局	日本電信電話公社建築部	事務所		●	S	●	
	アメリカ大使館員宿舎	Antonin Raymond	宿泊施設		●	RC		●
	美幌郵便局	郵政省大臣官房建築部設計課	郵便局		●	RC	●	
	若津郵便局	郵政省大臣官房建築部設計課	郵便局		●	RC	●	
	下館郵便局	郵政省大臣官房建築部設計課	郵便局		●	RC	●	
	国立科学博物館理工学館	谷口吉郎	博物館		●	RC	●	
	大阪三信館	市浦健	事務所		●	SRC	●	
	1955	清水市庁舎	岸田日出刀(顧問) 丹下健三ほか(設計)	庁舎		●	RC	●
旭ガラス牧山工場中井アパート		柴岡玄佐雄建築事務所	集合住宅		●	RC	●	
法政大学55年館		大江宏研究室	学校		●	RC	●	
明治大学8号館		明大堀口研究室 堀口捨己	学校		●	SRC	●	
下関市庁舎		田中誠, 崎谷小三郎, 進来廉	庁舎		●	RC	●	
国際文化会館		前川國男, 坂倉準三, 吉村順三	文化会館	●		RC		●
川崎にたつ鉄筋コンクリートのアパート		建築総合研究所	集合住宅		●	RC	●	
長崎国際文化会館		佐藤武夫	文化会館		●	[RC]	●	
伊丹市庁舎		久米建築事務所	市庁舎		●	RC	●	
Tさんの住い		福田良一	住宅		●	RC		●
神奈川大学		神奈川大学建設部	大学		●	RC	●	
吉阪自邸		吉阪隆正	住宅	●	●	RC		●
出光興産大森寮		佐藤武夫設計事務所	集合住宅		●	RC	●	
大協石油下落合寮		大橋俊一	集合住宅		●	RC	●	
大正海上火災上馬寮		梓建築事務所	集合住宅		●	RC		●
扶桑相互銀行岡山支店		堀口捨己	事務所		●	RC	●	
城東郵便局		郵政省大臣官房建築部設計課	郵便局		●	RC	●	

年	作品名	設計者	建築類型	素材		躯体構造	立地		
				自然素材	人工素材		市街地	郊外	
1955	アメリカン・クラブ	小椋好四	クラブハウス		●	RC		●	
	協和醱酵工業	岩波建築事務所	事務所		●	RC	●		
	東京国際空港ターミナル	松田平田設計事務所	空港		●	RC		●	
	京都地方貯金局	郵政省建築部設計課	郵便局		●	RC	●		
	国際電信電話社宅	高松求巳建築事務所	宿泊施設		●	RC		●	
	東京郵政局富士見町アパート	東京郵政局建築部	宿泊施設		●	RC		●	
	国際電信電話	清水建設	事務所		●	RC	●		
1956	大雄院事務所	石本建築事務所	事務所		●	RC		●	
	マヤの家	東京工業大学清家研究室	集合住宅		●	RC		●	
	山脇服飾美術学院	柳建築設計事務所	学校		●	RC	●		
	万葉閣	明石信道	宿泊施設		●	RC		●	
	久留米医大基礎学教室	菊竹建築研究所	学校		●	RC	●		
	福島県教育会館	MIDO同人	会館		●	RC	●		
	三鉄接核方式による試作	広瀬謙二建築技術研究所	店舗	●	●	RC	●		
	K会館	市浦健	会館		●	RC	●		
	高松地方簡易保険局	郵政省大臣官房建築部設計課	事務所		●	RC	●		
	Y邸	山下寿郎設計事務所	住宅		●	RC		●	
	雪印乳業工場	山下寿郎設計事務所	工場		●	RC		●	
	明治大学和泉体育館	堀口捨己	学校		●	SRC	●		
	大阪市大付属病院	山田守	病院		●	RC	●		
聖アンセルモ・目黒カトリック教会	Antonin Raymond	協会		●	RC	●			
1957	晴海高層アパート	MIDO同人	集合住宅		●	RC	●		
	七十七銀行独身寮	安藤組	集合住宅		●	RC		●	
	中央公論ビルディング	芦原義信建築設計研究所	事務所		●	RC	●		
	雙葉学園	堀口捨己, 早川正夫, 堀川勉	学校		●	RC	●		
	共立蒲原病院	吉村順三建築設計事務所	病院		●	RC		●	
	秋田県立中央病院	池辺研究室・建設工学研究会	病院		●	SRC	●		
	倉吉市庁舎	岸田日出刀 丹下健三	市庁舎		●	RC	●		
	読売会館=そごう百貨店	村野・森建築事務所 読売会館建築事務所	百貨店	●	●	RC	●		
	日本相互銀行・亀戸支店	前川國男建築設計事務所	店舗		●	RC	●		
	藤友クラブ	村田政真建築設計事務所	事務所		●	[RC]	●		
	クラブ関東	清水建設	事務所		●	RC	●		
	東急文化会館	坂倉準三建築研究所	会館	●	●	SRC	●		
	神戸国際会館	竹中工務店	会館		●	[RC]	●		
	札幌郵政局	郵政省建築部設計課	郵便局	●	●	RC	●		
	厚生省保険局庁舎	山田守	庁舎		●	RC		●	
	クラブ関東	清水建設	事務所		●	RC		●	
	神戸市庁舎	日建設計	庁舎		●	RC	●		
	岩崎学園ビル	芦原義信建築設計研究所	学校		●	RC	●		
	1958	岩波邸	堀口捨己	住宅		●	RC	●	
		名古屋中央郵便局	郵政省大臣官房建築部設計課	事務所		●	[RC]	●	
名古屋空港ビル		日建設計	空港		●	RC		●	
土井邸		土浦亀城	住宅		●	RC		●	
第四大島小学校		早大安藤研究室	学校		●	RC	●		
大妻学院		三座建築事務所	学校		●	RC	●		
大阪市立関目小学校分校		大阪市建築局	学校		●	[RC]	●		
習志野高等学校		東京建築事務所	学校		●	RC	●		
松本幸四郎邸		坂倉準三建築研究所	住宅	●		RC		●	
崖地に建つ家		森京介建築設計事務所	住宅		●	RC		●	
東京都庁舎		丹下健三研究室	庁舎		●	RC	●		
虎の門病院		伊藤喜三郎	病院	●		SRC	●		
草月会館		丹下研究室	会館		●	RC	●		
成城大学		増沢洵	学校		●	RC	●		
明治大学第6,7号館		堀口捨己, 早川正夫, 荒川考善, 堀川勉, 奥村博子	学校		●	RC	●		
風月堂ビル		村野・森建築事務所	事務所	●	●	RC	●		
三木ビル		大江宏	事務所		●	SRC	●		
仙台郵政局		郵政省建築部設計課	郵便局	●		RC	●		

年	作品名	設計者	建築類型	素材		躯体構造	立地		
				自然素材	人工素材		市街地	郊外	
1958	R工業会社共同社宅	小川建築設計事務所	集合住宅		●	RC	●		
	興亜石油武蔵野寮	清水建設	集合住宅		●	RC		●	
	新大阪ビルディング	村野・森建築事務所	事務所	●	●	RC	●		
	セントラルアパート	佐藤茂次建築設計事務所	集合住宅		●	SRC	●		
	法政大学58号館	大江宏建築事務所	学校		●	RC	●		
	S邸	佐藤茂次	住宅		●	RC		●	
1959	神奈川県立川崎図書館	神奈川県建築部営繕課	図書館		●	RC	●		
	音聞ゴルフクラブ	堀口捨己, 荒川考善, 堀川勉, 奥村博子	クラブハウス		●	RC		●	
	神奈川県庁舎	丹下健三研究室	庁舎		●	RC	●		
	日本住宅公団波晴海高層アパート	前川國男建築設計事務所	集合住宅		●	RC	●		
	旭川市庁舎	佐藤武夫設計事務所	庁舎		●	RC	●		
	歯科医師会館	早大明石研究室	会館		●	RC	●		
	小河内貯水池管理事務所	山下寿郎設計事務所	事務所		●	RC		●	
	大磯独身寮	福永建築設計事務所	集合住宅		●	RC		●	
	日本教育テレビスタジオ	久米建築設計事務所	事務所		●	RC	●		
	山下邸	広瀬鎌二建築設計事務所	住宅		●	RC		●	
	シルクセンター-国際貿易観光会館	坂倉準三建築研究所	会館	●		SRC	●		
	青梅ゴルフクラブハウス	佐藤武夫設計事務所	クラブハウス		●	RC		●	
	羽鳥市庁舎	坂倉準三建築研究所	庁舎		●	RC	●		
	日本住宅公団・西長堀高層アパート	日本住宅公団大阪支所	集合住宅		●	RC	●		
	東京都水道長沢浄水場	東京都水道局	浄水場		●	RC		●	
	石原裕次郎邸	網戸武夫建築設計事務所	住宅		●	RC		●	
	相鉄会館(横浜高島屋)	松田平田設計事務所	百貨店		●	SRC	●		
	上野精養軒	清水建設	宿泊施設		●	RC		●	
	1960	関電ビル	竹中工務店	事務所	●	●	RC	●	
		京都會館	前川國男建築設計事務所	会館		●	RC	●	
電通大阪支社		丹下健三計画研究室	事務所		●	RC	●		
外務省庁舎		小坂秀雄	庁舎		●	RC	●		
弁天島ヤマハ荘		坂倉準三建築研究所	宿泊施設	●	●	RC		●	
倉敷市庁舎		丹下健三研究室	庁舎		●	RC	●		
M氏邸		坂倉準三建築研究所	住宅	●		RC	●		
学習院大学		前川國男建築設計事務所	学校		●	RC	●		
横浜市庁舎		村野・森建築事務所	庁舎		●	RC	●		
山梨県民会館		内藤多仲, 明石信道	会館		●	RC	●		
防府市公会堂		佐藤武夫設計事務所	会館		●	RC	●		
宇部カントリークラブハウス		大成建設	クラブハウス		●	RC		●	
Y事務所		安井建築設計事務所	住宅		●	[RC]	●		
国鉄姫路駅		大阪鉄道工務局	公共施設		●	RC	●		
マリア山修道院		熊谷組	修道院		●	RC		●	
ホテル日航		芦原義信建築設計研究所	宿泊施設	●	●	RC	●		
名古屋地方郵便局		郵政省建築部設計課	郵便局		●	RC	●		
熊本郵便局		郵政省建築部設計課	郵便局	●	●	RC	●		
万世箸アパート		日本住宅公団東京支所	集合住宅		●	SRC	●		
五味ビルディング		三田建築設計事務所	事務所		●	RC	●		
日仏会館		佐藤兄弟事務所	会館		●	SRC	●		
慶応義塾三田西		三菱地所	学校		●	RC	●		
明治大学図書館		翁村寿	図書館		●	RC	●		
大阪府立阪南高等学校		坂倉準三建築研究所	学校		●	RC	●		
古河電工目白寮		曾原建築事務所	集合住宅		●	RC		●	
西田辺独身者住区		日本住宅公団大阪支所	集合住宅		●	RC		●	
1961		明治大学和泉大教室	堀口研究室 (堀口捨己)	学校		●	RC	●	
		鐵道技術研究所	国鉄東京工務局建築第2課	事務所		●	RC	●	
		スキップフロアの住宅(G邸)	柴岡玄佐雄, 星野秀	住宅		●	RC	●	
		化学図書館	日建設計	図書館		●	RC	●	
		蟻	菊竹清訓建築設計事務所	店舗		●	RC	●	
		都ホテル新館	村野・森建築事務所	宿泊施設	●		RC		●
	東京文化会館	前川國男建築設計事務所	会館	●		SRC	●		

年	作品名	設計者	建築類型	素材		躯体構造	立地		
				自然素材	人工素材		市街地	郊外	
1961	立教大学図書館	丹下健三研究室	図書館		●	RC	●		
	東京読売ゴルフ場クラブハウス	大成建設	クラブハウス		●	RC		●	
	東海銀行主税町クラブ	日建設計	事務所		●	[RC]		●	
	三井箱根保養所	日建設計	宿泊施設		●	[RC]		●	
	一橋中学校屋内体育館	菊竹清訓建築設計事務所	体育館		●	RC	●		
	終南山善導寺	渡辺建築事務所	寺	●	●	RC		●	
	番町に建つ家	水沢工務店	住宅		●	RC	●		
	日比谷電電ビル	日本電信電話公社建築局	事務所		●	SRC	●		
	日本大学理工学部津田沼公舎本館	小林美夫	学校		●	RC	●		
1962	混構造の家	林雅子	住宅			CB W		●	
	安田生命本社ビル	山下寿郎設計事務所	事務所	●		RC	●		
	東洋経済新報社ビル	日建設計	事務所		●	RC	●		
	熱海ガーデン	丹下健三研究室	宿泊施設		●	RC		●	
	聖フランシスコ子供寮	増沢洵建築設計事務所	集合住宅		●	RC	●		
	東亜燃料工業中央研究所	清水建設	研究所		●	RC	●		
	芝学園	K構造研究所	学校		●	RC	●		
	東京郵政局庁舎	郵政省大臣官房建築部	庁舎		●	RC	●		
	江津市庁舎	吉阪研究室	庁舎		●	RC	●		
	ホテルオークラ	大成観光建設委員会 谷口吉郎, 小坂秀雄, 清水一, 岩間旭, 伊藤喜三郎	宿泊施設	●		RC		●	
	岡山県総合文化センター	前川國男建築設計事務所	文化施設		●	RC	●		
	東京天理教館	竹中工務店	事務所		●	RC	●		
	H旅館	増沢洵建築設計事務所	宿泊施設		●	RC		●	
	雲仙荘	竹中工務店	宿泊施設		●	[RC]		●	
	長崎グランドホテル	清水建設	宿泊施設		●	[RC]	●		
	宮津市役所	設計連合	庁舎		●	RC	●		
	A氏邸	鹿島建設	住宅		●	RC		●	
	東洋レーヨン基礎研究所	坂倉準三建築研究所	研究所	●		RC		●	
	大手町合同庁舎第1号館	関東地方建設局営繕部	庁舎		●	SRC	●		
	東京都落合下水処理場	村田政真建築設計事務所	下水虞裏場		●	RC		●	
	大分県庁舎	建設省九州地方建設局営繕部	庁舎		●	RC	●		
	1963	香川県立図書館	芦原義信建築設計研究所	文化施設		●	RC	●	
		京都市蹴上浄水場	京大増田研究室	その他	●	●	RC		●
		四谷第7小学校	古茂田甲午郎, 大西幸雄	学校		●	RC	●	
		館林市庁舎	菊竹清訓建築設計事務所	庁舎		●	RC	●	
	1964	学習院大学図書館	前川國男建築設計事務所	文化施設	●	●	RC	●	
		倉敷国際ホテル	倉敷建築研究所	宿泊施設	●	●	RC	●	
阪南高等学校		坂倉準三建築研究所	学校	●		RC		●	
奈良郊外のS邸		池亀建築設計事務所	住宅		●	RC		●	
静岡雙葉学園		堀口捨己	学校		●	RC	●		
東京都児童会館		大谷幸夫	文化施設	●	●	RC	●		
全日本海員組合本部会館		大高建築設計事務所	会館		●	RC	●		
枚岡市庁舎		坂倉準三研究所	庁舎	●	●	RC	●		
世田谷区郷土資料館		前川國男建築設計事務所	文化施設		●	RC	●		
1965	すまい	藤木忠善	住宅	●		RC	●		
	五反田のN邸	I.N.A新建築研究所	住宅		●	RC		●	
	O氏邸	坂倉準三建築研究所	住宅	●	●	RC W		●	
	M氏邸	坂倉準三建築研究所	住宅	●	●	RC		●	
	Y氏邸	坂倉準三建築研究所	住宅	●	●	RC		●	
	総社の家	竹中工務店	住宅		●	RC	●		
	大阪明治生命館	竹中工務店	事務所		●	[RC]	●		
	セントラルロッジ	黒川記章建築都市設計事務所	宿泊施設		●	RC		●	
	1966	長崎県立原温泉病院	佐藤武夫設計事務所	病院		●	RC	●	
篠崎さんの家		渡辺建築事務所	住宅		●	RC		●	
赤星邸		U研究室	住宅		●	RC		●	
鶯花荘		坂倉準三建築研究所	宿泊施設	●	●	RC		●	
神言神学院		Antonin Raymond	学校		●	RC		●	
パレスサイドビル		日建設計	事務所	●	●	SRC	●		

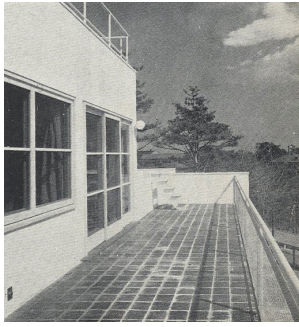


図 21: 丘の上の住宅 (1950)

2. 木造

鉄筋コンクリート構造に比べ耐久性や耐水性が劣ることが瞭然であるにもかかわらず、松本巍建築事務所設計のシャーマン邸(1951)に代表されるように、1954 年以前の屋上庭園は木造で計画される事例が散見できる。これらは主に住宅であり、戦後復興中の資材不足の折に消極的理由から選択されたものと推測される。

なお、1955 年以降になると建築資材が円滑に入手できるようになったことから、木造での屋上庭園はほぼ計画されておらず、林雅子設計の混構造の家(1962)のように、木造とコンクリートブロック造の混交造で計画する場合も屋上庭園はコンクリートブロック部分に限られ、木造部分には計画されていない(図 22)。

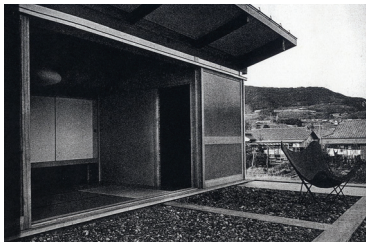


図 22: 混構造の家 (1962)

第 4 項 立地 (表 9)

表 9: 立地の変移 [表内の数字は作品数を示す]

		1945~1954	1955~1966
立地	市街地	29	100
	郊外	10	69

全年代を通して、屋上庭園は市街地・郊外を問わず計画されている。なお、1954 年以前の戦後復興期は優先的に市街地の建造が進められていたため、郊外の屋上庭園は比較的低い数値で示されている。市街地の屋上庭園は主に土地の有効活用として計画され、能動的に新たな庭園を求めたというだけではなく、経済成長に伴う急速な車の普及によって、地上の庭園や広場が駐車場に浸食されたことにも起因していると推測される。一方、郊外に計画された屋上庭園の多くは商業目的の集客効果を期待して計画されている。

第 3 節 前川國男の建築作品における屋上庭園

表 10 前川國男の建築作品における屋上庭園

年	作品名	呼称
1931	明治製菓銀座売店	屋上園
1932	木村産業研究所	(屋上バルコニー)
1949	崖上の改造住宅 (Residence of Mr. A)	ソラリウム 日光浴場
1952	日本相互銀行本店	屋上
1957	岡山県庁舎	屋上庭園
1960	学習院大学	屋上の庭園
1961	東京文化会館	屋上庭園 屋上テラス
1962	岡山県総合文化センター	屋上
1963	学習院大学図書館	屋上 (息抜きの場所)
1971	前川自邸 (新)	-
	弘前市立病院	屋上
1979	藤枝市立図書館	屋上庭園 屋上テラス 屋上広場
1980	長岡ロングライフセンター	屋上庭園
1986	国立国会図書館新館	屋上庭園

前川建築設計事務所の主要建築作品及び竣工時に建築専門誌に発表された全 131 作品中^{注12)}、屋上庭園は 14 作品あり、そのうちの 10 作品に「屋上庭園」もしくはそれに類する呼称が用いられている。なお、屋上庭園の用途が明白であるにも関わらず呼称の示されていない作品が 1 作品ある (表 10)。

前川國男は処女作である 1931 年の明治製菓銀座売店や 1932 年の木村産業研究所からすでに屋上庭園を用いている。1936 年までの間に計画された屋上庭園はこの 2 作品のみであり、いずれも小規模の私的用途に、形態要素の少ない簡素な構成の屋上庭園が計画されている。なお、これらは鉄筋コンクリート構造で作られ、防水が不利となる自然素材を極力排しているものの、竣工直後から凍害を要因とする漏水に悩まされ、度々の補修や改修を余儀なくされている^{注13)}。おそらく、前川國男は技術的には未熟であるにもかかわらず、屋上庭園を決行していると推測できる。

そして、1937 年の材料統制以降、前川國男は屋上庭園を計画していない。この時期の前川國男作品は概ね木造かレンガ造で計画され、雨水処理に懸念の残る工法は避けられていたことが要因と考えられる。

一方、第二次世界大戦終戦後以降になると、屋上庭園は再び計画される。ただし、既存屋根上部への増築や、大規模の事務所ビルの事例に限られている。さらに、自然素材を一切用いていないことから、厳密な雨水処理を必要としない案件か、建築費の多大な案件に限ってのみ、屋上庭園を試みていると推測される。

一方、1955 年以降になると、屋上庭園の事例数は顕著に増加し、躯体構造や素材、立地が多様化している。た

だし、建築類型に限っては、多様化しておらず、公共の用途へと収斂する。

第4節 結(表8, 11)

第1項第二次世界大戦終戦以前の屋上庭園

「**建築類型**」: 1910年代以前は商業的な施設を主に計画されているものの、1920年代になるとコンクリートの普及を要因として、建築類型は多様化している。そして、戦争勃発とともに、住宅もしくは比較的小規模の店舗に制限・収束する。

「**素材**」: 1910年代以前は、多様な自然素材を用いた形式的な屋上庭園が計画されているが、次第にタイルやモルタルをはじめとする人工素材を多用した、簡素で均質な屋上庭園へと変化している。

「**躯体構造**」: 1910年代以前は、すべての事例の躯体を木造で構成しているが、1920年代以降になると、木造に加え、耐久性の面でより屋上庭園に適した鉄筋コンクリート造を多用するようになる。そして、資材統制によって鉄筋コンクリートの使用が困難になると、軍事施設以外は再び木造によって計画される。

「**立地**」: 1910年代以前の屋上庭園は、宣伝効果や集客を期待して市街地を主に計画される。一方、1920年代以降になると、市街地や郊外を問わず計画されている。

無論、各指標は相互に関連している。すなわち、1920年前後における躯体構造の変遷に伴って建築類型が多様化すると、様々な建築類型に適応するように、素材や立地が相互に関連しながら多様化している。一方で、1937年における資材統制によって躯体構造が制限されると、それに伴い建築類型と素材が制限されるものの、立地の多様性が減じることは少ない。

以上のような変遷は、確かに1920年代における鉄筋コンクリート造の普及と1937年から始まる資材統制という2つの外在的要因によるものであり、公共的な屋上庭園から私的庭園へと変化し、実用性を付加しながら多様に応用されている。しかし一方で、高温多湿な日本の気候条件下で屋上庭園を計画することは、耐久性や維持管理の著しい低下に直結するはずである。にもかかわらず、躯体構造や建築類型が制限されてもなお、経年的に計画されたのである。

第2項 第二次世界大戦終戦以降の屋上庭園

「**建築類型**」: 1954年以前は戦後復興が急務とされたため、住宅や集合住宅、学校、店舗が優先的に計画されている。一方、1955年以降になると、加えて娯楽施設、庁舎や文化施設も顕著に増加している。

「**素材**」: 1954年以前は人工素材による簡素な構成で屋上庭園が計画されている。一方、1955年以降になると、人工素材に加え、土を敷設した上で多種の植栽や水、石などの自然素材を用いた屋上庭園も計画されるようになり、

多様に応用される。

「**躯体構造**」: 1954年以前は鉄筋コンクリートの資材が学校や集合住宅などに優先して用いられていたため、個人住宅や小規模事務所の屋上庭園は耐久性や耐水性に懸念の残る木造陸屋根で計画せざるを得ない状況であった。一方、1955年以降になると潤滑に鉄やコンクリートが使用できるようになったことから、ほぼすべての屋上庭園が鉄筋コンクリート造及び鉄骨鉄筋コンクリート造に収斂している。

「**立地**」: 屋上庭園は経年的な変遷無く、敷地条件を問わず計画されている。市街地の屋上庭園は主に土地の有効活用として計画され、地上の広場の代替スペースとして用いられる。一方、郊外に計画された屋上庭園の多くは商業目的の集客効果を期待して計画されている。

1955年以降に屋上庭園の事例数が著増している直接的な要因は、朝鮮戦争特需による高度経済成長期が1954年末葉から始まることに起因する。実際、ゴルフ場開発に伴うクラブハウスや宿泊施設など、富裕層への特権としての屋上庭園が計画されるようになるのもこの時期からであり、地上の庭園には無い建築的効果を屋上庭園に模索している。つまり、建築資材が不足する1954年以前には立地を問わず簡素で合理的な屋上庭園が模索される一方、躯体構造の制約が無くなる1955年以降には、加増する都市部の商業的要求に対応するために、建築類型や素材が多様化している。

以上要するに、第二次世界大戦以前の屋上庭園は、1920年代における鉄筋コンクリート造の普及と1937年から始まる資材統制という2つの外在的要因によって大きく変化している。それらは公共的な屋上庭園から、私的庭園へと変化し、実用性を付加しながら多様に応用される。

一方、第二次世界大戦終戦以降の屋上庭園は、朝鮮戦争特需による高度経済成長期が1954年末葉から始まることに起因して、1955年以降に事例数が著増している。実際、ゴルフ場開発に伴うクラブハウスや宿泊施設など、富裕層への特権としての屋上庭園が計画されるようになるのもこの時期からであり、地上の庭園には無い建築的効果を屋上庭園に模索している。つまり、建築資材が不足する第二次世界大戦前後には立地を問わず簡素で合理的な屋上庭園が模索される一方、躯体構造の制約が無くなる1955年以降には、加増する商業的要求に対応するために、建築類型や素材を多様化している。

一方、前川國男は処女作である明治製菓銀座売店(1931)や木村産業研究所(1932)から屋上庭園を用い、以降、設計活動を通して断続的に屋上庭園を計画し続けている。なお、近代日本建築における他の屋上庭園との差異は、高度経済成長期に現れる。他の建築家が計画した屋上庭園が、高度経済成長に伴って商業的な施設を主に多様化し

ているのに対し、前川國男の屋上庭園は、建築類型に限ると多様化しておらず、公共建築へと収斂している。つまり、前川國男は設計活動後期になるほどに、公共建築における屋上庭園に優位性を感じ、いくつもの作品を計画しているのだと推測できる。

表 11 屋上庭園の変遷

		～1920	1921～1936	1937～1945	1946～1954	1955～
日本近代の建築家	建築類型	百貨店、宿泊施設	住宅、集合住宅、百貨店・駅、宿泊施設、学校、小型店舗・事務所、病院	住宅、(学校)、小型店舗	住宅、集合住宅、学校、店舗・事務所	住宅、集合住宅、宿泊施設、庁舎、学校、店舗・事務所、病院
	素材	自然素材	自然素材 人工素材	(自然素材) 人工素材	人工素材	自然素材 人工素材
	躯体構造	木造	木造 RC造	木造 (RC造)	木造、RC造、SRC造、S造	RC造、SRC造、S造
	立地	市街地	市街地 郊外	市街地 郊外	市街地 郊外	市街地 郊外
前川國男	建築類型		小型店舗・事務所		住宅、店舗・事務所	(住宅)、庁舎、学校、図書館、文化施設
	素材		人工素材		人工素材	自然素材 人工素材
	躯体構造		RC造		木造、RC造、SRC造	RC造、SRC造、S造
	立地		市街地		市街地 郊外	市街地 郊外

図版出典

- 表 1: 筆者作成
- 表 2: 筆者作成
- 表 3: 筆者作成
- 表 4: 筆者作成
- 表 5: 筆者作成
- 表 6: 筆者作成
- 表 7: 筆者作成
- 表 8: 筆者作成
- 表 9: 筆者作成
- 表 10: 筆者作成
- 表 11: 筆者作成

- 図 1: 『新建築』 新建築社, vol.8, p.199, 1935
- 図 2: 『建築雑誌』 日本建築学会 vol.7, pp.1001-1002, 1925
- 図 3: *op.cit.*, 『建築雑誌』 vol.8, 1932
- 図 4: 『ホテル・ニューグランド絵葉書』 1928
- 図 5: *op.cit.*, 『新建築』 vol.1, 1933
- 図 6: *op.cit.*, 『建築雑誌』 vol.8, p.919, 1936
- 図 7: *op.cit.*, 『建築雑誌』 vol.7, p.827, 1934
- 図 8: 『広告の親玉 赤天狗参上! -明治のたばこ王 岩谷松平』 p.74, 2006

- 図 9: 『大三越歴史写真帖』 1932 (写真は 1909 年撮影)
- 図 10: 『軍艦島住み方の記憶』NPO 軍艦島を世界遺産にする会, p.67, 2008
- 図 11: 『新建築』 新建築社, vol.10, pp.437-445, 1938
- 図 12: *op.cit.*, 『新建築』 vol.5, p.52, 1958
- 図 13: *op.cit.*, 『新建築』 vol.11, p.15, 1958
- 図 14: *op.cit.*, 『新建築』 vol.3, p.149, 1964
- 図 15: *op.cit.*, 『新建築』 vol.12, p.154, 1966
- 図 16: *op.cit.*, 『新建築』 vol.2, p.198, 1966
- 図 17: *op.cit.*, 『新建築』 vol.8, p.51, 1956
- 図 18: *op.cit.*, 『新建築』 vol.7, p.11, 1957
- 図 19: *op.cit.*, 『新建築』 vol.10, p.103, 1960
- 図 20: *op.cit.*, 『新建築』 vol.1, p.213, 1965
- 図 21: *op.cit.*, 『新建築』 vol.4, p.100, 1950
- 図 22: *op.cit.*, 『建築雑誌』 vol.7, p.127, 1962

注釈

- 1) 近藤三雄は官公庁舎の屋上庭園に関して、「休養と厚生との目的を以て一部植栽が行はれ大部分は廣場として残され、適当な空地が他にないような場合には此處で休憩時間を利用して體操が行われて居る」(近藤三雄:「わが国における屋上庭園の起源と黎明期における展開について」造園技術報告集(5), p.11, 2009)と記している。
- 2) 日置勝人は新聞社の屋上庭園に関し、「新聞社は其の社員の休養以外に見學の為に來社するかなり多數の人々が屋上に出てみる関係上、此等の見學者を考へに入れて設計せられて居り、かなり完備した純庭園的な施設があり其の利用がはかられて居る」(日置勝人:「我が國の屋上庭園」造園雑誌 9(1), p.13, 1942)と記している。また、震災や空爆の際には屋上庭園から周辺を撮影した写真が紙面に多く使用されている。
- 3) 小森考之編:『写真集 明治・大正・昭和 銀座』, 国書刊行会, p.24, 1983
- 4) *op.cit.*, 『新建築』 vol.5, pp.165-175, 1937
- 5) *op.cit.*, 『新建築』 vol.10, pp.437-445, 1938
- 6) 近藤三雄:「屋上緑化の本来あるべき姿 より質の充実を」 ベース設計資料, No.135 建築編, 建設工業調査会, pp.36-40, 2007
- 7) 1939 年(昭和 14)に竣工した東京市立築地産院に関して東京市建築部設計が「予算及び時局の関係により木造建築となっていることはやむを得ない」(『新建築』 新建築社, vol.3, pp.181-183, 1939)と記しているように、戦時中の建築計画は消極的理由によって躯体の構造が決定されている。
- 8) 『読売新聞』 1910.8.27
- 9) *op.cit.*, 『新建築』 vol.5, p.51, 1958
- 10) 既往研究である 日置勝人:「我が國の屋上庭園」造園雑誌 9(1), pp.7-13, 1942 においては、屋上庭園に用いられた植栽に関して樹種や維持管理にも言及している。しかし、本稿で用いた建築

専門誌からは植栽に関する詳細な読み取りが不可能であるため、植栽に関しては有無と庭園形式のみを扱い、樹種と維持管理に関しては今後の課題とする。

11) op.cit., 『新建築』 vol.4, p.99, 1950

12) 『建築家前川國男の仕事』(美術出版社, pp.287-292, 2006) のリストに依拠する。ただし、同名称で複数の計画があるもの、もしくは同一敷地内の増改築は1作品として集計している。なお、国際文化会館(1955)に関しては、屋上庭園が前川國男の意向とは言い難く、リストから除外している(内田祥士:『再読/日本のモダンアーキテクチャー』, 彰国社, pp.86-94, 1997)。

13) 松隈洋:「木村産業研究所の挫折から」, 建築ジャーナル, pp.50-53, 2013.3

第2章

前川國男における屋上庭園の出自

第1節 日本近代建築における屋上庭園の主題（表1）

1. 休息

鴻坂光夫設計の吉本邸(1934)に関する次の言説を典型として、休息を目的とした屋上庭園は1900年代初頭から計画され、戦前戦後を通して数多く計画され続けている。

「陸屋根は屋上庭園として夕涼みに快適の場所とならう」^{注1)}

また、休息のための屋上庭園は、椅子やパーゴラ、花壇、噴水、飲食物販売所などを配すことで、また、屋上庭園の一部に木造の茶室や東屋を設けることで、短時間・長時間両方の休息に対応している。ただし、久野節設計の南海鉄道難波駅(1932)に代表されるように(図1)、1920年代・1930年代には次第に植栽の少ない簡素な休息場へと変化している。

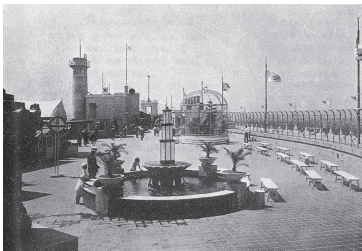


図1 南海鉄道難波駅(1932)

さらに1955年以降になると、森京介建築設計研究所設計がE氏邸(1959)に関して「夏の夕方など2階テラスでビールをやる快適さは格別である」^{注2)}と述べているように、休息に飲食行為を伴う事例が顕著に増加し、規模も拡大する。また、1960年以降には海老原建築設計事務所設計のアサモーターロッジ(1964)に代表されるように、天蓋やパーゴラなどを用いて快適性を加増させ、より長時間の休息にも対応させている。

2. 眺望

屋上庭園に関する言説は眺望を主題としているものが最も多く、また通時的に確認できる。

1910年代には、三越呉服店(1915)に関する横河民輔の次の記述を典型として、展望台からの視点位置や視点方向を限定した眺望が主題とされている。

「南は品川沖から北は上野浅草の方を眺望する事が出来る眺望臺になって居りまして」^{注3)}

一方、武田五一が小川邸(1926)に関して述べた次の記述のように、1920年代には視点位置が明確には設定されなくなり、対象場は広域に渡るようになる。

「階上からの眺望は元良君の叙景によっても想像が附くでせうが、折柄の秋色、紅葉が夕陽に映へて一段の美を添えて居りました」^{注4)}

さらに、九州帝国大学建築課設計の九州帝国大学医学部付属医院(1936)に関して「背面塔屋より北方への眺め、博多湾前面に見えるは皆島であって、左りの大きな島には今尚野生の鹿が住む。島に分かれ目は玄界灘への出口である」と記されているように^{注5)}、1930年代以降の戦時期においては、土地固有の景観が演出されている(図2)。



図2 九州帝国大学医学部付属医院(1936)

そして、第二次世界大戦後になると、丘の上の住宅(1950)に関して松田平田設計事務所設計が示した「こゝからの眺めは全く素晴らしい」^{注6)}や、山田守が東京厚生年金病院(1954)の屋上庭園に関して述べた「屋上の望楼も局面建築への試案である」^{注7)}を典型として、より多彩な眺望が模索されている。ただし、いずれも自然豊かな風景を視対象とした郊外の事例に限られ、都市部における眺望の主題は概ね消失してしまう。

4. 遊戯・運動

堀口捨己、早川正夫、荒川考善、堀川勉、奥村博子設計の明治大学第6,7号館(1958,昭和33)では、屋上庭園に関して次のように記されている。

表 1 日本近代建築における屋上庭園に関する言説

年	作品名	著者	内容	出典	月	頁
1915	三越呉服店	横河民輔	温室、東屋、茶室などの木造住宅が出来て居ります。ここで南は品川沖から北は上野浅草の方を眺望する事が出来る眺望臺になって居りまして、パーゴラの下には腰掛けなどを置きました。	『建築雑誌』	-	199-214
1925	山邑邸	フランク・ロイド・ライト 文章・南信	デザインの基調となった形は夏帽の如き形の屋根である。其のつばが庇となり其の頭が陸屋根の手摺となる	『新建築』	9	4-13
1927	I氏邸	大倉生	子供の遊び場	『新建築』	3	
1930	Heston Air Park	M. L. Auston, Architect	眺望の良い事が必要で陸屋根にすれば晴天の際はそこを使える。	『建築雑誌』	1	15
1932	東京ゴルフクラブ	Antonin Raymond	涯しく繋がるリンクの彼方にまで連続しているのであるが、大空の下、戸外スポーツの朗さを慕ふゴルファーの群は尚一階の食堂より二階、二階の食堂より屋上へと空気と日光を憧憬して集まるようである。	『新建築』	11	329-340
1933	S氏の邸	谷口吉郎	最初鉄筋コンクリート構造によって設計を試みたのであったが、事情によって木造に変更 坂下の風景を展望するため一部を突出せしめる。	『新建築』	11	205-209
1934	内藤邸	内藤逐	美しい多摩川の望遠が望める。	『新建築』	4	57-60
	吉本邸	鴻坂友夫	薄く突出した庇と線の空にくっきりと浮び出す屋上の構成、そうしたものに關西のしんけんちらしい柔みを感じさす。陸屋根は屋上庭園として夕涼みに快適の場所とならう。	『新建築』	5	84-86
	竹内邸	土浦龜城	二階は子供室がとられていて、その階から南側に出来る様になっている。	『新建築』	7	129-132
1935	川崎守之助邸	Antonin Raymond	美しく植込まれたその中庭は言わば居間の一部とも考えられて、この場合成功している様である。	『新建築』	1	1-9
	武蔵平地の住宅	T.Kurata I.Sugimoto	階上を長くしたことは、西側のテニスコートとの連結を考えたことでもある。なおテニスコートとの関連を言えば、借下西側に焼過煉瓦で縁をつけたテレスも付けられた。 屋上から広い芝生とテニスコート、それから畑、雑木材、そして遠く富士山が見える。	『新建築』	6	143-147
1936	九州帝国大学医学部法医学、衛生学、細菌学教室	九州帝国大学建築課	背面塔屋より北方への眺め、博多湾前面に見えるは皆島であって、左りの大きな島には今尚野生の鹿が住む。島の分かれ目は玄界灘への出口である	『建築雑誌』	1	11-18
1937	慶応義塾幼稚園	谷口吉郎	芝生によって強烈な光線の反射を防ぐ	『新建築』	5	165-175
	箱根仙石原「白桂居」	蔵田周忠	既に大きな自然の風景の中にある一区画であるから、塀など廻らせる必要は勿論ないし、細かい築地など考えるのは寧ろ間違っているのではなからずと思われる。こんな場所の庭は手入れをした野生の広さを保たせて、そのまま大自然につづかせる方が効果的であるし、自然でもあるように考えられる。	『新建築』	9	346-352
	大丸神戸店	村野建築事務所	屋上庭園 新旧館の接合及び使用上より陸屋根が三段となり之を利用して屋上庭園を計画す	『建築雑誌』	7	144-147
1938	東京市根岸尋常小学校	東京市建築部第一工務課	屋上にある外気教室は虚弱児童のために、特に新鮮な空気と日光とを供給するために設けられ	『新建築』	10	437-445
	東京通信病院	通信省経理局営繕課	屋上休憩室上の防空表示赤色タイルにて赤十字通信省マークを表示す	『建築雑誌』	4	30-43
	第一高等学校同窓会館	清水幸重	談話室外部には庭園に臨む	『建築雑誌』	5	53-55
1941	Y邸増築	薬師寺厚	狭少な土地を出来るだけ利用するため陸屋根を採用する	『新建築』	10	458-459
1950	丘の上の住宅	松田平田設計事務所	多摩川を眼下に見わたる素晴らしい高臺に建ったこの住宅は、本格的な鉄筋コンクリート構造として、戦後最初のものである。 こゝからの眺めは全く素晴らしい。	『新建築』	4	99-106
1951	東京海上ビルディング別館	三菱地所建築部	建築界の回復を物語っている。 屋上はバレーコート	『新建築』	1	1-5
	東京都本所保健所	東京都建築局工務課	道路境界の低い大谷石積を越し吹抜の渡廊下の間に散見出来、楽しい雰囲気醸成する様計画された。	『新建築』	3	25-27
	神戸銀行協会ビル	日建設計工務	現在屋根となっている第4階は将来集会室が増築されることになっている。	『新建築』	5	18-21
	M氏邸	久米建築事務所	楽しい遊び場にもなる。	『新建築』	10	22-25
1953	日本相互銀行本店	前川國男建築事務所	全溶接鉄骨造の高層建築物は勿論我国では初めてであり	『新建築』	1	3-13
	横浜浦島ヶ丘共同住宅	神奈川県住宅公社建設部	物干場を外から見る あみ入りの乾燥室の反対側は階段室に通じ、そこにはルーバーがあって風通しがよく、盗難を防ぐと同時に外観をそこなうおしめの満艦飾を防いでいる。	『新建築』	9	33-37
1954	東京都立文教高等学校	東京都建築局工務課	図画室は屋外写生便に3階屋上を使用出来る如く4階に設けた。	『新建築』	12	30-33
	東京厚生年金病院	山田守建築事務所	屋上の望楼も局面建築への試案である。	『新建築』	2	12-17
	アメリカ大使館員宿舎	Antonin Raymond	屋上には洗濯場と物干しが付いている。	『国際建築』	1	38-41
1955	丸栄百貨店	村野藤吾	今回の計画の特長は昇降機、階段シャフト其の他主要縦走路又は系統を1ヶ所に集中したので屋上ペントハウスが1団の建物として表現され、全建築の規模を大きく見せたばかりでなく、屋上遊技場がまとまって広くとれたと言う点である。屋上には将来野外劇場を造る予定である。	『新建築』	4	10-15
		村野・森建築事務所	屋上はテント張り野外劇場を計画 縦の交通系統および機械・電気関連の貫通部分を一カ所にまとめたため、屋上ペントハウスもひとつにまとまり建築表現を大きくしたばかりでなく、屋上を広くとることができたので、将来これを活かして屋上に野外劇場をつくる予定である。	『国際建築』	4	19-25
1956	伊丹市庁舎	久米建築事務所	屋上には消防署が使用する塔があり、これは市の中心としての建物の性格を、外観の上で強調しているのではないかと思います。	『新建築』	10	31-34
	明治大学和泉体育館	堀口捨己	敷地の利用を考え、平たい屋根にしてバレーボールコートとゴルフ練習場を作った。P.24	『国際建築』	5	20-24
1957	万葉閣	明石信道	眺望をほしいままにするコンクリート構造の陸屋根という注文であった。P.49 屋上(西方をみる)	『新建築』	8	49-51
	中央公論ビルディング	芦原義信建築設計研究所	彫刻ガーデンの壁面コンポジション 意匠:松村勝男・渡辺優	『新建築』	3	62-66
	雙葉学園	堀口捨己、早川正夫、堀川勉	講堂の上を陸屋根にして、生徒の遊び場として考えた。とくに陸屋根上から富士をのぞむ眺めは、宗教的な雰囲気をつたえるこの学校には応じたいの所であって、その眺めの方に腰掛けを作り、パーゴラを設けた。	『新建築』	4	9-16
	秋田県立中央病院	池辺研究室・建設工学研究会	屋上展望室 屋上は敷地の条件と、積雪期の問題、病院にバルコニーのないこと、などの条件から、展望室として活用することとした	『新建築』	5	9-17
	読売会館-そごう百貨店	村野・森建築事務所 読売会館建築事務所	このビルの全体像は、三角の敷地から生まれた形と屋上のペントハウスが交錯して、視点の移動につれてその趣きを変えていく。とにかく、この建築の外に向かっている表現は豊かであり、視覚上の統一はずばらしい。 お客は上層の人たちで、デパートとそこへ製品をおさめるものとの関係はいまでもあまり変わらないのではないだろうか。ひとびとはデパートの屋上ではなしに浅草に遊びにいったのではなかったらうか。 その上が食堂と展示会場、屋上子供の遊園地。屋上にはいまにヘリコプターが発着するそうだ。(神代雄一郎)	『新建築』	8	2-5

年	作品名	著者	内容	出典	月	頁
1957	岩波邸	堀口捨己	眺めを主とする所は、陸屋根の上の屋上庭園と、南側の芝庭にした。 陸屋根を作り、公園を見る屋上庭園を作るとは全くやさしい事であった。都会に建つ住宅には屋上を使う事が、必然的な要求であって、それに答えるような姿を日ごろ頭に画いていた。 屋上庭園 六義園の森が正面にくり広げられる。この森は江戸時代中期柳沢氏により造られ、都内でも最も古い木立の見られる数少ない名園の一つである。屋上は主に子供の遊び場にあてられる。	『新建築』	1	2-6
	中央公論社ビル	芦原義信建築設計研究所	ジョイス・スラブの一部スラブをぬいて光線をとり入れる。ある時刻に、壁面から突出している彫刻に太陽光線があたる。	『国際建築』	11	24-27
1958	名古屋中央郵便局	郵政省大臣官房建築部設計課	屋上は、将来の航空便に必要なヘリポートに予定されている。	『新建築』	3	20-21
	松本幸四郎邸	坂倉準三建築研究所	個室が南面して並ぶために起るアパート的なエレベーションの固さを柔らげる意図と、2階の寝室に属した居間にプライバシーの高い空間をあたえるために、2階に屋根の吹き抜けになった小庭園を持たせて芝生及び砂利敷としたことは効果的であった。	『新建築』	5	45-53
	崖地に建つ家	森京介建築設計事務所	この屋上は南面への展望を持っているので、涼風に当たりながらビールでも飲むには快適でしょう。また子供たちにもよい遊び場を提供しています。	『新建築』	5	59-63
	明治大学	堀口捨己, 早川正夫, 荒川考善, 堀川勉, 奥村博子	都市の中心部に営まれる学校建築として、まず望み難い運動場や学生の休憩室の代わりをなす場所を、この建物では屋上、露台に求めたこと 屋上は学生の休み場でもあるが、夜には体操場とするために、煙突上に投光器8個を備えて、60ルックス位の明るさにしている。 都心に営まれる学校建築として、敷地にゆとりがなく、運動場もないものであるが、それにかえるものとして屋上と露台を当てるように考えたのと相俟って、この建築の性格を作り上げている。	『新建築』	10	24-29
	八幡製鉄河内寮	Antonin Raymond	屋階は四方に見晴らしのきく露台になっており、夏の夕刻はビヤガーデンに利用され、1階のダイニングテラスから、コンクリートの廻り階段によって直截上がってくることもできる。	『国際建築』	11	15-23
	神奈川県立川崎図書館	神奈川県建築部営繕課	右側欄内は閲覧者休憩広場となっている。	『新建築』	1	2-13
	音間ゴルフクラブ	堀口捨己, 荒川考善, 堀川勉, 奥村博子	屋上 ここは夏ビアガーデンになる。松の向うはゴルフ練習場	『新建築』	1	14-23
1959	神奈川県庁舎	丹下健三研究室	屋上は塔屋を中心に、その周囲を廻廊ふうの軒によって囲まれたスペースで、廻廊の軒下には黒御影のテーブル、厚板の木製ベンチが相当数用意されている。日差しの強い時、屋上全面を集会場として使用する場合は、塔屋と廻廊の軒との間にテントを張りわたす用意がされている。これはテピロンの約7m角の一枚物をHPシェル型に張り、それらを次々に連続させながらつづり合わせてゆくもので、取り付け取り外しは比較的容易にすることができる。	『新建築』	1	83-101
	日本住宅公団波崎海高層アパート	前川國男建築設計事務所	晴海アパートの屋上に立ってみると、北方には、消費文化都市の中心、銀座・有楽町街のビルが建ち並んでいるのが間近に見え、マス・コミの花形東京タワーがそびえ立つ。	『新建築』	2	16-27
	E氏邸	森京介建築設計研究所	西方に延びる展望はまことに美しく、夏の夕方など2階テラスでビールをやる快適さは格別である。	『新建築』	2	
	電通大阪支社	丹下健三計画研究室	屋階にある広告塔は、単にアドバタイジングのためにあるのではなく、屋階がいろいろに機能する-屋休みの憩いの場、あるいは野外パーティなど-場合を考慮して、その核になるように考えた。だから、塔にみられる凹凸じゃベンチになっていたり、窓になっている。夏の暑くなる頃までには、色あざやかなテントがこの塔を掛りにして設けられるだろう。	『新建築』	7	61-72
	シルクセンター国際貿易観光会館	坂倉準三建築研究所	ホテル屋上展望台より横浜港を望む。	『国際建築』	5	19-28
	弁天島ヤマハ荘	坂倉準三建築研究所	400人が一度に休憩できるテーブルとベンチを置いて休憩場所とした。	『新建築』	9	28-32
	M氏邸	坂倉準三建築研究所	屋根全体を一つの住空間として開放しようというのがこの設計のプリンシプルである。	『新建築』	10	65-70
宇部カントリークラブハウス	大成建設	コースの全望や松越しに見る周囲の美しい景色を十分に楽しめるように工夫したわけです。	『新建築』	12	24-29	
立教大学図書館	丹下健三研究室	大階段を広場の1隅にまで押し、学生生活の戸外の焦点となっている広場と図書館を、事務室の屋上庭園を介して結びつけた。	『新建築』	8	13-18	
1961	一橋中学校屋体内体育館	菊竹清訓建築設計事務所	屋上のデザインについて この体育館で重要な空間となった屋上は、われわれの設計でもそれなりに苦心したところといえよう。プールを屋上においたのは、ほかに場所がなかったことも理由の一つではあるが、それよりもむしろ水がもたらす空間の質を高める要素を、空間の素材として考えたからである。 “水辺に人が集まる”ということが、この空間の意義をより強調する。また都市にあり、ただでさえ少ない太陽をうけとめるには、大きなオレンジ色の半透明の天幕が効果的であり、屋上にある数々のオブジェはこうした水と日陰とともに生徒を楽しませるものになるだろう(内井)	『新建築』	12	25-34
	終南山善導寺	渡辺建築事務所	屋上は野外ステージ 映写室より客席と舞台をみる。手摺の周囲には土が盛られペンペン草がはえている。	『新建築』	12	43-48
	聖フランシスコ子供寮	増沢洵建築設計事務所	2階には屋上やバルコニーがあって、本や衣類が事務室や裁縫室に収納される前後の虫干などにも使われ、屋外階段によって庭の子供たちとも連絡できる。	『新建築』	4	85-91
1962	東京天理教館	竹中工務店	屋上庭園「眠の庭」流政之作	『新建築』	7	129-134
	学習院大学図書館	前川國男建築設計事務所	いくつかの段違いを持つ屋上は、気晴らしのスペースで、階段を上がったところが休憩室になっている。	『新建築』	1	135-147
	静岡雙葉学園	堀口捨己	屋上の運動場	『新建築』	3	145-152
1964	白川邸	堀口捨己	4階の露台には4本のツゲを植えることができた。	『新建築』	8	181-185
	館山国民休暇村宿舎	天野太郎研究室	ラウンジ、食堂のバルコニーより房総半島の先端をみる。	『新建築』	8	192-195
	すまい	藤木忠善	屋上 雑草の庭になっている。 屋上の雑草の庭、そして地上の庭、そこは道路の広がりとして開放され、緑が植えられた。入口、仕事場、と小さなキューティリティがあり、その他の私のものは地上に浮かび独立性を保つ。 地上の庭はみんなのものと私のものとが混ざりあう。	『新建築』	1	203-213
	Y氏邸	坂倉準三建築研究所	屋上庭園はコンクリート押えの上芝生貼り	『新建築』	7	139-149
1965	堂ヶ島温泉ホテル	柳建築設計事務所	7階よりの眺望 三四郎島がみえる	『新建築』	7	133-138
	セントラルロッジ	黒川記章建築都市設計事務所	屋上階から東方をみる	『新建築』	10	175-179
	長崎県立原温泉病院	佐藤武夫設計事務所	心もとなない歩みは院内の病室、廊下、訓練施設、屋上庭園としたいに尺度を広め、周囲の散策路、池、広陵の林、海岸、ゴルフ場へと限りなく伸び広がって行くことであろう。 屋上庭園(肢体不自由児に与える環境構成の場として冬のコーナー、夏のコーナーを設け、それぞれ建築的要素と楽しい公園的要素を組み入れ、さらに山から海に移行する空間の流れがこの場を通して連体感をキャッチする)	『新建築』	2	197-201
	赤星邸	U研究室	前庭、母屋、遠くの松林が見えます。さらに階段を上がると、次第に北の山々があらわれます。屋上からは、下のテラスで見えていた松林の上に江の島の塔があらわれます。北の方にさらにちょっと上がると、夏だったらビールを飲みたくなるでしょう。富士山や藤沢の町が見えます。居間の屋根の上は危険ですが、これに登ると、お山の大将です。登って来た道、庭、下のテラス、上のテラスが段々に見おろされ、気分爽快です。夜ともなれば星空に吸い込まれてしまうでしょう。	『新建築』	5	144-147

「望み難い運動場や学生の休憩室の代わりにをなす場所を、この建物では屋上・露台に求めた」^{注8)}

このように、遊戯や運動を主題とする屋上庭園は 1900 年代から計画され、少数ながらも断続的に用いられている。例えば、ゲオルグ・デ・ラランデ(George de Lalande, 1872-1914)とヤン・レツル (Jan Letzel, 1880-1925)が神戸外国人居留地 6 番地に設計した神戸オリエンタルホテル(1907)には、屋上に植栽豊かな庭園が計画され、その一部が宿泊客用のゴルフ練習場に当てられている(図3)。以降、遊戯や運動を目的とした屋上庭園は土地の有効活用を主な理由として、市街地に数多く計画されるようになる。また、1920年代は田中寛設計の白木屋呉服店(1921)に代表されるように、百貨店の屋上庭園に経済的効果を期待した児童遊戯場が次々と計画され、さらに 1930 年代になると、堀口捨己設計の東京郊外某住宅(1931)に代表されるように、遊戯や運動を目的とした屋上庭園は住宅にまで敷衍し、多様に応用されている。

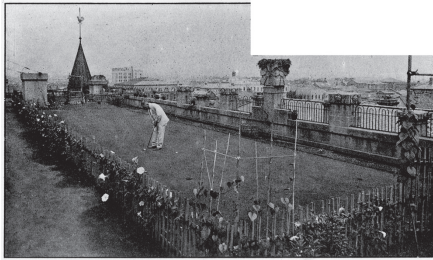


図3 神戸オリエンタルホテル(1907, 明治40)

一方、日中戦争勃発以降になると、例外的に守屋哲之介設計のクリュッツペルハイム東星学園(1940)の屋上に児童の運動場があるものの、空襲時の攻撃目標となってしまうことを避けるため、屋上の遊戯場や運動場は懸念されるようになる。

そして、1950年代初頭になると、遊戯や運動を目的とした屋上庭園は再び計画されはじめ、事例数が増加している。久米建築事務所は M 氏邸(1952)の屋上庭園に関して次のように述べ、最上階の子供室と繋がる屋上庭園を子供用の遊び場として計画している。

「2階の寝室は明るく、静かだ。バルコニーに広々と広がり、楽しい遊び場にもなる」^{注9)}

つまり、屋上庭園が都市における地上の運動場の代替場所として用いられていたことを示している。

6. 物干

日本放送協会施設局建築課設計の日本放送協会池ノ上家族寮(1952)に関して、「屋上物干の為共同洗濯槽をペン

トハウス内に6ヶ所設けた」^{注10)}と記されているように、物干しを主題とする屋上の庭園は、少数ながらも戦前戦後を通して利用されている。

なお、生活基盤である洗濯・物干の用途を庭園の主題として取り上げるのは不適切かもしれないが、特定のコミュニティのみが習慣的に使用することから、物干場は主婦や労働者にとって新たな交流の場を形成し、ある種の非日常空間を創出していると推論される^{注11)}。

なお、横浜浦島ヶ丘共同住宅(1953)に関して神奈川県住宅公社建設部が示した「あみ入りの乾燥室の反対側は階段室に通じ、そこにはルーバーがあって風通しがよく、盗難を防ぐと同時に外観をそこなうおしめの満艦飾を防いでいる」の記述や、松田平田設計事務所設計の東銀不燃集合住宅(1952)に代表されるように(図4)、屋上に設けられた物干場の多くは集合住宅に計画され、屋上の防水モルタル層の上に洗濯台、洗濯水槽、物干を配すことで、住居者専用の物干場を獲得している。

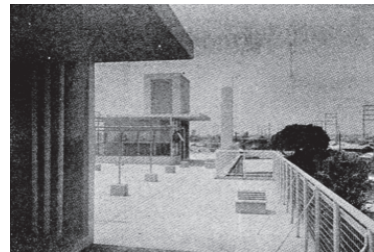


図4:東銀不燃集合住宅(1952)

5. 劇場

1954年以前には劇場の用途を内包した屋上庭園は計画されていない。唯一、村野藤吾設計の丸栄百貨店(1954)では、「屋上には将来野外劇場を造る予定である」^{注12)}と記されているように、野外劇場に転用可能な遊技場が計画されている。

一方、1955年以降においては、渡辺建築事務所設計の終南山善導寺(1961)に関して「屋上は野外ステージ」^{注13)}と記され、また、丹下健三研究室設計の倉敷市庁舎(1960)に段状の客席と舞台背景のかきわりが屋上に設けられているように(図5)、劇場を主題とした屋上庭園は断続的に計画されている。



図5:倉敷市庁舎(1960)

7. 防空

1937年の日中戦争（支那事変）勃発に伴い国内が非常時体制から準戦時体制へと移行すると、新たに防空対策を目的とした屋上庭園が計画されるようになる。信省経理局営繕課が設計した東京通信病院(1938)では、屋上庭園を次のように説明している。

「屋上休憩室上の防空表示赤色タイルにて赤十字通信省マークを表示す」^{注14)}

また同様に、逋信省経理局営繕課設計の東京通信病院(1938)では、休息用の屋上庭園に赤色タイルにて赤十字マークを敷設表示することで空爆を忌避している(図6)。そして、太平洋戦争突入(1941)によって完全な戦時体制へ移行すると、屋上庭園に警報装置を付けることで監視所を兼ねるようになり、さらなる迷彩的效果を期待して屋上緑化が施されている。

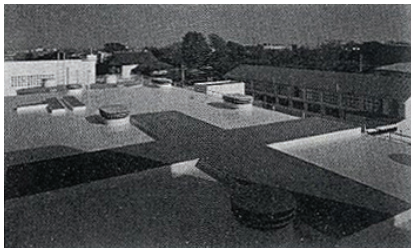


図6 東京通信病院 (1938)

8. 転用

1954年以前の屋上庭園は上記の用途のいずれかを目的として計画されているが、1955年以降になると、一過性の用途を目的とした屋上庭園も複数計画される。代表的な事例として、大林組設計の久恒邸(1958)において「2部屋簡単に増築できることになっている」^{注15)}と記しているように、将来の増築を見越して躯体のみを施工し、増築までの期間を庭園として利用する計画が用いられている。

第2節 前川國男の言説における屋上庭園の位置付け (表2)

1. 日本的建築意匠に対する批判

420万戸という膨大な数の住宅が不足する戦前・戦後の状況下において、前川國男は封建的な家制度を解体し、住宅を近代化することで、新しい時代の生活像を提示しようと試みている^{注16)}。前川國男によると、近代建築運動の起こりはヨーロッパにおける第一次世界大戦後の住宅不足への対応であり、第二次世界大戦前後の実践の中でその優位性を自ら確かめようとしている。

一方で、前川國男は「日本的建築意匠」に対する批判的な論文を数多く残している。前川國男によると、「日本

的建築意匠」とは日本の様式を模したRC造の建築を指し、19世紀末葉に建築技術と様式との質全的な関係を説いた新建築の反動として生み出されたものである^{注17)}。また、前川國男は、今日の日本建築が文化や政治によって誤解されているとも記し^{注18)}、「日本的建築意匠」の問題を次のように示している。

「過去の大時代の様式の創作は決していわゆる<趣味>がその母胎ではなく、その時代の材料技術の正直なる駆使によってなされたごとく、今日の様式は今日の技術構造の赤裸々なる精神の流露に出発せねば永遠に確立される秋はあり得ない」^{注19)}

「新建築精神の目指した彼岸は飽くまで今日の建築の機能と生産手段と形態との必然性」^{注20)}

つまり、前川國男は建築様式と時代や材料、環境との不可分性を欠いた日本の建築を批判的に捉えている。さらに、「日本的建築意匠」への批判は、その最たる例である帝冠様式に及び、「似而非日本建築」として批判される。

「<天地根源之宮造>の発祥せるその同じ必然の理由によりて、紀元二千五百九十一年に鉄骨鉄筋コンクリートによって唐破風を作り千鳥破風を模すことは、光輝ある過去二千数百年の日本芸術史に対する一大冒瀆であると言わねばならぬ」^{注21)}

加えて、前川國男は皇室博物館設計競技落選設計競技に関する憤りと決意を綴った「負ければ賊軍」の中で、「重要なことは素晴らしき展望を許す水平線への努力である」や「素晴らしき展望を許す水平線」と述べ^{注22)}、これまでの日本建築に用いられてきた屋根型の美しさを認めながらも、近代の日本における新たな屋根型として、陸屋根の必要性を示している^{注23)}。

2. 近代合理主義に対する批判

前川國男は前項で述べた「日本的建築意匠」を批判する一方で、近代の日本における行過ぎた合理主義に対しても、次のように批判している。

「現代社会の最大の不幸は、宗教的信仰の喪失と自然よりの離反であると言われる。まことに都会の子供たちはもはや「鳥の歌声も聞き分けず、野を走る獣の習性も知らず、嵐と雷の響きも聞き分けず、空行く雲の意味すらも弁えない」のである。恐らく「鳥の歌声」をとどむるにすら由なきコルビュジェ描くところの「空中園」のささやかな夢さえも一片の反古となり終わる今日、われらは一体何に希望をつなぎ、どこに明日の国土の意匠を

表2 前川國男自身による論考（網掛太文字は、前川國男の主な出来事を示す）

歳	年	文献名称、掲載情報	様	合	技	美	コ
0	1905	新潟県新潟市生まれ					
15	1920	「日光便り」『学友会雑誌』第83号、東京府立第一中学校学友会、1920年12月22日					
16	1921	「人生と趣味」『学友会雑誌』第84号、東京府立第一中学校学友会、1921年7月18日					
20	1925	東京帝国大学工学部建築学科入学					
23	1928	東京帝国大学工学部建築学科卒業、ル・コルビュジェのアトリエで学ぶ					
23	1928	「大戦後の近代建築」（卒業論文：ル・コルビュジェ論）1928年					
23	1928	「巴里より」『木葉(Koppa)』（東京帝国大学建築学科機関誌）No. 7、1928年					
24	1929	「ル・コルビュジェ自叙伝」（翻訳）『国際建築』1929年5月号					
25	1930	帰国後、レーモンド建築設計事務所に入所 新興建築家運連盟の結成、即崩壊 RC.Sの構造基準及び共通仕様書が整備される					
25	1930	「3 + 3 + 3 = 3 × 3」（第2回新建築思潮講演会・講演）『国際建築』1930年12月号	●	●			
26	1931	「東京帝室博物館計画説明書抜粋」『国際建築』1931年6月号	●				
26	1931	「負ければ賊軍」『国際建築』1931年6月号	●				
26	1931	「無題(続)」『木葉』No. 13、1931年3月25日					
26	1931	「計画説明書」『明治製菓銀座売店競技設計図集』洪洋社、1931年9月13日					
27	1932	「日本鋼材株式会社事務所」『新建築』1932年3月号	●				
28	1933	「感想」『新建築』1933年1月号	●				●
28	1933	「新建築様式の積極的建設」（第一生命保険相互会社本館懸賞設計応募説明書）『国際建築』1933年2月号	●				●
28	1933	「商店建築懸賞設計応募函面意匠に就いて」『建築博覧会商店設計図案集』（建築資料協会・編）、1933年	●				
28	1933	エリー・フオール「建築の創生」（翻訳）『アントニン・レイモンド作品集』城南書院、1933年6月1日					
28	1933	アントニン・レイモンド、ノエミ・レイモンド「日本建築に就いて」（翻訳）『アントニン・レイモンド作品集』城南書院、1933年6月1日					
29	1934	「東京市庁舎設計説明書」『新建築』1934年6月号	●				
30	1935	レーモンド建築設計事務所退社、前川國男建築設計事務所設立（銀座会館ビル5階）					
30	1935	「水辺のサンマーハウス」『建築知識』1935年7月号	●				
30	1935	「主張」『建築知識』1935年11月号	●				
31	1936	「商店建築の改造」『建築知識』1936年5月号					
31	1936	「森永キャンデーストアー銀座売店」『国際建築』1936年1月号					
31	1936	「ポルドー市立水泳場」（文献抄録・訳）『建築雑誌』1936年6月号					
31	1936	「飛行場建築例」（文献抄録）『建築雑誌』1936年7月号					
31	1936	「1937年巴里万国博覧会日本館計画所感」『国際建築』1936年9月号	●				
31	1936	「第26回巧芸美術博覧会」（文献抄録）『建築雑誌』1936年11月号					
32	1937	「不可分の問題」（ル・コルビュジェ『輝ける町』批判）『建築雑誌』1937年1月号					●
32	1937	「無題」『建築』再刊2号、1937年2月号					
32	1937	「某通信機製造工場計画」『新建築』1937年3月号	●				
32	1937	「パリー室内意匠展覧会」『建築雑誌』1937年4月号					
32	1937	「冬季スポーツの中心地ポールシルバン」（文献抄録）『建築雑誌』1937年5月号					
32	1937	「巴里スキー倶楽部山小屋」（文献抄録）『建築雑誌』1937年5月号					
32	1937	「今日の日本建築」（建国記念館応募案説明書の一部）『建築知識』1937年12月号	●				
32	1937	「建国記念館設計競技応募所感」『国際建築』1937年12月号					
32	1937	「無題」『木葉会雑誌』3号、1937年12月					
33	1938	「座談会・転換する日本建築」（石原憲治、市浦健、山口蚊象、遠藤新、佐藤武夫、戸坂潤、黒田朋心、柳亮）『建築知識』1938年1月号					
33	1938	「大連公会堂計画説明書」『建築知識』1938年12月号					
34	1939	上海分室を開設（～1943年）					
34	1939	「興亜の大業を指導・・・」（巻頭文）『建築知識』1939年1月号					
34	1939	「上海」『現代建築』1939年9月号					
34	1939	「新しき従弟宿舎の問題——秋田日満技術工養成所——」『都市公論』1939年11月号					
35	1940	「大陸建築座談会」（市浦健、板垣鷹徳、堀口捨己、吉村辰夫、高山英華、土浦亀城、村田政真、内田祥文、山田守、板倉準三、佐藤武夫、岸田日出刀、森田茂介）『現代建築』1940年1月号					
35	1940	「忠霊塔設計説明書」『現代建築』1940年4月号					
36	1941	「埋もれた伽藍」『新建築』1941年4月号		●			
36	1941	「岸記念体育会館の建築について」（岸田日出刀と共同執筆）『建築雑誌』1941年5月号					
36	1941	「カペラ シスチナと報道建築」『報道技術研究』第3輯、1941年					
37	1942	奉天分室を開設（～1945年）					
37	1942	「建築と壁画」（座談会：市浦健、安田清、小林源太郎、尾川多計、安田豊、布施信太郎、池澤賢、河邊稔、山崎穰）『新建築』1942年4月号		●			
37	1942	「建築の前夜」『新建築』1942年5月号	●		●		
37	1942	「一羽の燕 大東亜共栄圏に於ける建築的建設に対する会員の要望」（アンケート）『建築雑誌』1942年9月号	●				
37	1942	「覚え書——建築の伝統と創造について」『建築雑誌』1942年12月号	●				
37	1942	「第16回建築学会展覧会・大東亜建築競技設計審査評」『建築雑誌』1942年12月号					
37	1942	「七洋の首都」（審査員参考作品）『建築雑誌』1942年12月号					
38	1943	「小野薫学兄」『小野先生の横顔』1943年12月					

歳	年	文献名称、掲載情報	様	合	技	美	コ
39	1944	鳥取分室を開設(～1947年)					
39	1944	「日泰文化会館競技設計総説及び計画説明要旨」『新建築』1944年1月号					
40	1945	空襲にて銀座事務所・本郷自邸焼失					
41	1946	「敗戦後の住宅」『生活と住居』誠文堂新光社、1946年2月号(創刊号)		●	●		●
		「百米道路の愚」『朝日新聞』東京本社発行分・読者投稿欄2面1946年4月2日 「戦後復興の反論「百米道路の愚へ」『朝日新聞』東京本社発行分・読者投稿欄1946年4月21日					
42	1947	浜口隆一が『ヒューマニズムの建築』、西山卯三が『これからのすまい』を書き、戦後建築の方向性を示す					
		「座談会 新生活運動はなにをする」(江木武彦、浦辺史、帯刀貞代、前川國男、浜口隆一、関重広)『婦人公論』1947年9月	●				
		「明日の住宅」『婦人公論』1947年10月	●	●	●		●
		「紀伊国屋書店建築について」(MIDグループ)『建築雑誌』1947年11月号					
42	1947	「まえがき」(1947年6月1日)『前川國男建築事務所作品集 第一輯商店建築』工学図書出版社、1947年11月	●				●
		「『プレモス』に就いて」『前川國男建築事務所作品集 第一輯商店建築』工学図書出版社、1947年11月			●		
		「いゝ住宅とは何か?」『前川國男建築事務所作品集 第一輯商店建築』工学図書出版社、1947年11月	●				
		「緑の都市へ」『前川國男建築事務所作品集 第一輯商店建築』工学図書出版社、1947年11月					
42	1947	不敬罪、皇族令廃止、新憲法設立					
		「空に浮ぶ万能の家」(コラム昭和百年の夢③ 生活編)『朝日新聞』1948年1月4日		●			
		「刊行のことば」『PLAN 1 建築・工芸・都市』前川設計研究所・編 雄鶏社、1948年2月					
		「進化する住居：開放された窓からの世界を眺めて」『住居=SUMAI』No. 2, 1948-06, pp. 2-3	●				
43	1948	「100万人の住宅プレモス」『明日の住宅』主婦之友社、1948年7月25日	●		●		
		「広島カトリック聖堂競技設計説明書」『建築雑誌』1948年8月号					
		「生活文化と工芸 美術工芸と生産工芸」『工芸ニュース』1948.9			●		
		「編輯後記」『PLAN 2 建築・工芸・都市』前川設計研究所・編 雄鶏社、1948年11月					
		「婦人の解放と住宅問題——家事労働を中心として——」(浜口隆一、池辺陽と共同執筆)『婦人公論』1948年12月号	●	●			●
44	1949	新製作派協会建築部に参加					
44	1949	「これからの農村住宅：明るい農家の設計」(浜口隆一)『農業技術』第4巻第1号, 1949-01, pp. 15-21					
47	1951	CIAM日本代表で出席、ル・コルビュジェに再会					
		「感想——下関市庁舎競技設計に関連して」『建築雑誌』1951年5月号			●		●
		前川國男、浅田孝、大谷幸夫、光吉健次、丹下健三、太田実、大林順一郎：「49. 稚内都市計画について」『日本建築學會研究報告』12, 1951-06, pp. 193-195					
46	1951	前川國男、浅田孝、大林順一郎、丹下健三、太田実、光吉健次、大谷幸夫：「47. 北海道都市開発に於ける基本問題」『日本建築學會研究報告』12, 1951-06, pp. 185-187					
		前川國男、浅田孝、大林順一郎、太田実、丹下健三、大谷幸夫、光吉健次：「48. 北海道：漁港都市の分析」『日本建築學會研究報告』12, 1951-06, pp. 189-192					
		「欧米社会と近代建築の潮流」(座談会：丹下健三、生田勉)『国際建築』1951年12月号	●		●		
47	1952	「設計者の言葉」『日本相互銀行本店竣工パンフレット』1952年8月1日					
		「日本新建築の課題」『国際建築』1953年1月号	●		●		
48	1953	「国際性・風土性・国民性(現代建築の造型をめぐって)」(座談会：吉田五十八、丹下健三、坂倉準三、生田勉、浜口隆一、田辺員人)『国際建築』1953年3月号	●		●		
		「日本相互銀行本店」『建築雑誌』1953年6月号					
		「建築家の課題としての住宅問題」(座談会：市浦健、森田茂介、高山英華、宮内嘉久、田辺員人)『国際建築』1954年1月号					
49	1954	「設計者の言葉」『西原衛生工業所新築落成記念パンフレット』1954年2月24日					
		「感想(岡山県庁実施設計完了にあたり)」『岡山県政情報』1954年8月					
		「設計者の言葉」『神奈川県立図書館・音楽堂竣工パンフレット』1954年11月4日					
50	1955	日本にてル・コルビュジェに再会(西洋美術館)					
		「音楽堂の音響設計」(小川正、島茂雄、中島健蔵)『放送技術』86, 1955年5月, pp. 1-5					
		「座談会 国際文化会館の共同設計について」(座談会：坂倉準三、吉村順三 司会=村田政真)『設計と監理』1955年4月号					
		「神奈川県立図書館及び音楽堂」『建築雑誌』1955年7月号					
50	1955	「白書」『新建築』1955年7月号					
		「十年ひとむかし」(早川文夫、堀井啓治、鳥井捨藏、中島博、諫早信夫、山口登、阿部美樹志、前川芳広、加藤陽三)『住宅』1955年9月号, pp. 5-10					
		「建築家は自由な職業でなければならない」(「例の会」第一回建築公開討論会・講演9月30日)『建築文化』1955年11月号					
		「前川國男と語る」『音楽を語る 第3』音楽之友社, 1956					
		「蓄積」『新建築』1957年1月号					
		「象徴と能率に力点(岡山県庁竣工にあたり)」『岡山県政情報』1957年3月[所蔵館無]					
		『建築計画』(平山嵩と共著)オーム社、1957年4月					
52	1957	「高層建築の将来性 特に構造上の問題点について」(対談：大築志夫、小堀鐸二、仲威雄、大江宏、芦原義信、秋野金次、小島重次、久田俊彦)『建築雑誌』1957.06, pp. 23-36					
		「まえがき」『伽藍が白かったとき』(生田勉、樋口清訳)岩波書店、1957年10月					
		「佐野先生と私」『佐野利器』1957年11月					
		「座談会『建築設計競技規準』をめぐって」(小川正隆、川合貞夫、蔵田周忠、小泉嘉四郎、谷口吉郎、内藤亮一、浜口隆一、伊藤滋、市浦健、前川國男)『日本建築家協会ニュース』1、1957年					
		「ブラッセル万国博覧会」『藝術新潮』1958年7月号					
53	1958	「日本人の手と機械——ブラッセル万国博覧会日本館出品をめぐって」(座談会：木村俊彦、浜口隆一)『国際建築』1958年8月号					
		「2段階競技をかえりみて」(尾崎記念館競技設計審査評)『国際建築』1958年9月号					
		「ブラッセルの万国博覧会について——前川國男氏のテーブルスピーチ」『日本建築家協会ニュース』20、1958年					

歳	年	文献名称、掲載情報	様	合	技	美	コ
54	1959	「前川國男建築設計事務所戦後作品集」『日刊建設通信』1959年4月5日〔所蔵館無：1959年4月4日が第2471号で、同年4月6日が第2472号のため、4月5日については発行されていない〕					
		「警匂一東(弘前市庁舎竣工によせて)『東奥日報』1959年4月5日					
		「協会の経済的確立を」ぶろふいーる『日刊建設工業新聞』1959年6月16日					
		「一人一言：銀座の『おにぎり』屋」『週刊建材』1959年6月19日〔週刊建材新聞は1971創刊のため、特定不可〕					
		「協会の経済的基礎を強固に——前川会長のテーブル・スピーチ」『日本建築家協会ニュース』43、1959年					
		「ヨーロッパ各地を廻って——UIAについて感じたことなど——前川会長のテーブルスピーチ」『日本建築家協会ニュース』53、1959年					
		「戦前の設計競技——私の体験から——」『建築雑誌』1959年7月号					
55	1960	「建築生産の合理化」(座談会：伊藤滋、内山尚三、下河辺淳、益田重華、三浦忠夫、村岡喜久夫)『建築雑誌』1959年10月号			●		
		「対談 七問八答『現代建築の条件』を語る」(丹下健三)『科学読売』1960年6月号	●	●	●	●	
		「序文」『建築のディテール コンクリート造・1』彰国社、1960年9月10日					
		「あとがき」『今日の装飾芸術』翻訳・復刻版SD選書10 鹿島出版会、1960年10月					●
		「ロンシャンの教会」『建築と社会』1960年10月号					●
		「UIA、リスボンの実行委員会及び総会の報告」『日本建築家協会ニュース』55、1960年					
		「UIA、リスボンの実行委員会及び総会の報告(つづき)」『日本建築家協会ニュース』57、1960年					
56	1961	「コルビュジェ東京展によせて『めざした人間の建築』」『朝日新聞 夕刊』1961年1月28日		●			●
		「設計者のことば」『東京文化会館落成記念パンフレット』1961年4月7日〔所蔵館無〕					
		「設計者のことば(東京文化会館)『日刊建設工業新聞』1961年4月11日					
		「設計者のことば(東京文化会館)『日刊建設通信』1961年4月11日					
		「東京文化会館をつくる」『朝日ジャーナル』1961年5月14日号					
		「私の言葉」『週刊新潮』1961年5月、p.11					
		「自分の考えを持って 建築に試作はない」『日刊建設工業新聞』1961年6月1日					
		「対談：建築と都市を語る」(大谷幸夫)『建築』1961年6月号			●		●
		「東京文化会館の完成に思う」『近代建築』1961年6月号					
		「〈東京文化会館の仕事〉共通のイメージをつくる」『みづゑ』1961年6(4?)月号(674)					
		「対談・公共建築の設計を語る」(前川國男、川添登)『公共建築』1961年6月号			●		
		「株式会社建築家会館の株式募集について」(パンフレット『会館小史』1988年に収録)1961年6月		●			
		「京都会館」(表彰作品)『建築雑誌』1961年7月号					
		「東京文化会館を設計して」『フィルハーモニー』33、1961年8月					
		「古い伝統と新しい技術」(大成建設88周年記念によせて)『日刊建設工業新聞』1961年10月25日					
		「2つの世界の谷間から」『世界の現代建築』彰国社、1961年10月					
		57	1962	「レーモンドさんのこと」『建築』1961年10月号			
「『日本建築家協会ニュース』100号を記念して」『日本建築家協会ニュース』100、1961年							
「〈対談〉ル・コルビュジェ展を語る=前川國男/宮内嘉久」『建築/建材ジャーナル』117、1961年〔特定不可能〕							●
「柔道バりに死して想う」『建築士』1962年1月号							
「谷口吉郎君の横顔」『建築雑誌』1962年4月号							
「現代建築の課題」『朝日新聞 東京本社発行分・文化欄 9面』1962年2月3日				●	●		
「私の好きな一枚のレコード『パッサカリア・ハ短調』・ノートルダムの内陣で」『朝日新聞』1962年6月28日							
58	1963	「東京文化会館」(表彰論文)『建築雑誌』1962年7月号					
		「日ソ建築家交流とはじめ」(座談会ニコライ・P・ヴァリキン、エミリアン・E・ホームトフ、丹下健三 司会=中村登一)『建築文化』1962年8月号					
		「芸術家の歩む道」(対談 曾野綾子)『建築夜話』日刊建設通信社出版部、1962年9月		●			●
		「現代の教会建築をめぐる」『世紀』152、1963.1					
		「現代文明と日本の建築家」『建築文化』1963年2月号		●			●
		「国際会館スタート」(座談会：河野一郎、伊藤忠兵衛、丹下健三、高山義三、松田軍平 司会=京都新聞)『近代建築』1963年2月号					
		「設計者のことば(龍名館竣工によせて)」1963年5月					
		「今日のヨーロッパ建築界あれこれ——オーギュスト・ペレー賞をうけて」(聞き手=浜口隆一)『近代建築』1963年6月号					
		「立派な建築とは」1963年7月					
		「文化会館について」『東京文化会館月報：がいど』No.15、1963年7月					
59	1964	「設計者のことば(蛇の目ビルについて)」『Echo』(蛇の目社内報)1963年8月号〔特定不可能〕					
		「国際会館コンペを終って」(座談会：伊藤滋、大原総一郎、松田軍平、角田栄、大谷幸夫、沖種郎、芦原義信、大高正人、菊竹清訓、浜口隆一)『新建築』1963年9月号					
		「バックボーンの通った当選作」(国立国際会館コンペに関して)『建築文化』1963年9月号					
		「交遊抄・三蔵法師と孫悟空」『日本経済新聞』1963年9月3日					
		「サンモリッツUIA実行委員会について」『日本建築家協会ニュース』134、1963年					
		「メキシコUIA総会及び実行委員会について」『日本建築家協会ニュース』146、1963年					
		「八年間構想を練る」(紀伊国屋ビル竣工によせて)『日刊建設工業新聞』1964年3月23日					
60	1965	「び・い・ぶ・る」『藝術新潮』1964年9月号p.30-31					
		「文明と建築」『建築年鑑』1964年度版、美術出版社、1964年11月		●	●		●
		「文明について」『国際建築』1964年9月号		●			
60	1965	「真の日本館を望む」『国際建築』1965年2月号					
		「Thoughts on Civilization and Architecture」『Architectural Design』1965年5月号	●	●	●	●	
		「『太古の海』が『生命』を創った」『現代建築事典』鹿島出版会、1965年5月〔該当文献に記事無し〕					
		「建物と生活の断層」(対談：前川國男、大高正人)『朝日ジャーナル』1965年7月4日号					

歳	年	文献名称、掲載情報	様	合	技	美	コ
60	1965	「ル・コルビュジェ追悼」『国際建築』1965年10月号					●
		「ビルの成果は今後待つ」『Echo』(蛇の目社内報)1965年10月号[特定不可能]					
		「ル・コルビュジェのこと」『うえの』No. 78、1965年10月号		●			●
		「大阪万国博への期待」1965年10月10日[特定不可能]					
		「出鋼一億トン達成記念碑について」『鉄鋼と金属』1965年10月					
		「京都会館」『京都会館のあゆみ』1965年12月					
		「UIA実行委員会に出席して」『日本建築家協会ニュース』174、1965年					
		「私の場合(第1回パネル・ディスカッション)「建築事務所経営の諸問題」『日本建築家協会ニュース』190、1965年	●				
61	1966	「コンペ審査感想」1966年1月					
		「序文」「あとがき」ル・コルビュジェ『今日の装飾芸術』構成社書房、1930年10月					●
		「丸の内景観論」1966年1月				●	
		「東西文明論」1966年2月					
		「丸の内所感」1966年3月(『建築士』のために書くが不掲載)					
		「超高層と都市美」『建築士』1966年4月号				●	
		「コルドバの住宅地」『建築東京』(東京建築士会)1966年6月号[1964年春の旅の話]					
		「設計者のことば」『日刊建設通信』1966年5月27日					
		「書店建築と私(紀伊国屋40年記念によせて)」1966年6月					
		「蛇の目ビル所感(日本建築学会賞受賞によせて)」『建築雑誌』1966年7月号					
		「緑化」『毎日新聞 夕刊』[茶の間]欄、1966年7月29日				●	
		「岸田先生追悼」『建築雑誌』1966年8月号					
		「処方せん」(談)『朝日新聞 夕刊』[直言・曲言]欄、1966年9月22日	●				
		「富士霊園万霊宝塔競技設計審査委員長」1966年9月					
		「都市美観の問題」タイプ版パンフレット、1966年10月				●	
		「丸の内景観問題」タイプ版パンフレット、1966年10月				●	
		「都市美雑感」1966年10月					
		「コンペの現状と問題点(聞き手:池辺陽、近江栄)『建築雑誌』1966年11月号	●		●		
		「皇居周辺の構想建築について」『毎日新聞』1966年11月[特定不可能]				●	
		「都市美とは何か?東京都美観地区条例への疑問」タイプ版パンフレット、1966年11月					
		「再び都市美について」タイプ版パンフレット、1966年12月				●	
		「明日の都市環境をめざして 都市美観の歴史(奥平耕造と共同執筆)『建築文化』1966年12月号				●	●
		「都市美」『新建築』1966年12月号				●	
		「前川國男氏のアピール」(SD) [SD NEWS] 1966年12月号				●	
		「本年UIA実行委員会の報告」『日本建築家協会ニュース』201、1966年					
		「対談:建築批評(近藤日出造・連載)『日刊建設』1966年12月9日-1967年1月18日(10回)					
		【第一夜の上】1966年12月9日4面					
		【第一夜の下】1966年12月14日4面					
		【第二夜の上】1966年12月16日4面	●				
		【第二夜の下】1966年12月21日4面	●				
【第三夜の上】1966年12月23日2面			●				
【第三夜の下】1966年12月26日4面							
【第四夜の上】1967年1月11日4面							
【第四夜の下】1967年1月13日6面			●				
【第五夜の上】1967年1月16日4面	●						
【第五夜の下】1967年1月18日4面	●						
『復刻 建築夜話 日本近代建築の記憶』日建建設通信新聞社、2010							
「人間のための都市美(波頭をとらえる1967)『新建築』1967年1月号					●		
「都市像の変遷(上・中・下)『朝日新聞 夕刊』1967年1月11日-13日	●			●			
「私の幸福論」1967年1月							
「緒言」『武藤清先生著作集』シリーズ、1967年3月							
「建築家とディレタント」『連子』(日大理工学部校内誌)1967年4月号							
「帝国ホテル—近代建築の命運:建築家としての自責」『国際建築』1967年5月号							
「宿命に耐えた男(コルビュジェ)」『文事春秋』1967年5月号					●		
「大高君への手紙」『新建築』1967年5月号	●						
「美観条例は不毛である——都市美は条例が生むものではない」タイプ版パンフレット、1967年7月19日							
「美観と規制(都市美を守る——6月22日朝日新聞を読んで)『新建築』1967年7月号							
「都市美をどう守る」『朝日新聞』1967年6月22日							
「開場記念杯(Aクラス)を頂戴して」1967年9月							
「『美観条例』は不毛である」『新建築』1967年9月号					●		
「帝国ホテル旧館の保存について」(座談会:池辺陽、稲垣栄三、関野克、高山英華 司会=山本学治)『建築雑誌』1967年11月号	●			●			
「超高層ビルの意味——それはアメリカコンプレックスではない——」『朝日新聞 夕刊』1967年12月20日	●	●		●	●		
「形態と機能 形態と機能によせるアンケート」『建築』1967年12月号	●	●					
「超高層ビルと都市再開発」『建設産業新聞』1967年1月1日新年特集号	●			●			
「中川軌太郎君追悼」『日本建築家協会ニュース』235、1967年							

歳	年	文献名称、掲載情報	様	合	技	美	コ
63	1968	「都市美」『新建築』1968年1月号 [特定不可能]				●	
		「都市美」『Steel in Modern Structure』(川崎製鉄) 1968年3月号				●	
		「自動車工業法案の思い出」『自動車工業』1968年4月号					
		「自由の精神こそ大切——建築学会大賞受賞の談話」『建設産業新聞』1968年5月30日 [建設産業新聞社に保管無し]					
		「EXPO '70と鉄鋼館」(座談会: 外島健吉、宮野利夫、阿部公房、武満徹 司会=山口潔)『鉄鋼界』1968年7月号					
		「東京文化会館庭園の石彫」『建築東京』1968年8月号					
		「座談会: 日本建築の将来——日本近代建築展開のなかで——」(市浦健、白井晟一、堀口捨己 司会=山本学治)『建築雑誌』1968年8月号		●	●		
		「もうだまってられない——日本建築学会大賞によせて——」『建築雑誌』1968年10月号		●	●		
		「私の建築観について」(談)『建築家』1968年秋号					
		「座談会: 建築家のプロフェッションとは何か」(池辺陽、市浦健、圓堂政嘉、橋本邦雄、松村貞次郎 司会=沖種郎)『建築家』1968年秋号					
		「建築家会館落成によせて」(パンフレット『会館小史』に収録)1968年12月					
		「UIA実行委員会の報告」『日本建築家協会ニュース』243、1968年					
		「UIAの現状と国際的立場における日本建築家協会の立場(第7回パネル・ディスカッション「日本建築家協会はどこへゆく」)『日本建築家協会ニュース』244、1968年					
「建築家と公害」『建築家』1968年秋号							
64	1969	「管理社会との戦い」『新建築』1969年1月号					
		「対談 建築家の思想」(藤井正一郎)『建築』1969年1月号 (設計活動初期からの後期まで、時期毎の考えや手法についての対談)	●	●	●	●	●
		「打放しコンクリートと打込みタイル」『月刊タイル』1969年2月号			●		
		「『建築界に訴える』——箱根国際観光センターの競技設計に関して——」タイプ版パンフレット、1969年7月					
		「コルドバの家」1969年8月28日					
		「法と建築家の主体性」『建築雑誌』1969年9月号		●			●
		「箱根国際観光センターコンペの施工分離についての私の考え」(記者会見原稿) 1969年9月					
		「板倉準三君を悼む」『朝日新聞夕刊』1969年9月4日		●			
		「板倉準三君を悼む」『新建築』1969年10月号					
		「箱根コンペ応募規定まえがき」1969年10月					
		「La Formation des Architectes Architecture Formes Fonctions」, No. 15, 1969					
		「ビルの建設・都市計画——建築家——」『生産にたずさわる仕事』(松田道雄・編) 1969年11月		●			●
		「ヨーロッパ文明と建築家——1988年における建築家——」を讀んで『建築家』1969年秋号		●	●		
「私の考え——設計施工の分離と箱根国際観光センター競技設計に関連して——」『新建築』10月号、1969年							
「第10回UIA大会に出席して」『日本建築家協会ニュース』284、1969年							
65	1970	「鉄鋼館(スペースシアター)の企画について」1970年1月27日					
		「鉄鋼館について」『びいど』1970年1月号					
		「箱根国際観光センター企画設計競技経過報告並びに審査評」1970年6月1日 [新建築1971年5月号]					
		「泥足の達人——ほんとうの教育者はと問われて——」『朝日新聞』1970年8月18日		●			
		「建築家の姿勢」(講演・新建築技術者集団主催)1970年8月					
		「信条」『前川國男建築設計事務所経歴書』1970年9月					
		「福島教育会館の思い出」『建築学大系39』1970年11月15日					
		「叔父の家」『国際時評』1970年11月号					
		「建築レポートI <現代建築の在り方>についての考察・討論再構成」『プラン'70』1970年11月 [『現代建築の在り方』についての考察: Plan' 70 『建築論レポート』南洋堂、1970]					
		「東京海上ビル・大幅な設計変更」(インタビュー前川國男)『新建築』1970年11月号					
		「敗軍の辞(東京海上によせて)」1970年12月					
		「岸田先生について」1970年12月					
		「鉄鋼館の思い出」1970年12月					
66	1971	「何故建築家を志したか」『高三コース』1971年1月号					
		「職能確立の強力な梃」『日刊建設通信』1971年2月23日					
		「課題としての地中海建築」(座談会: 大江宏、堀内清治、飯田喜四郎、石井昭、平良敬一 司会=宮内嘉久)『SD』1971年3月臨時増刊号					●
		「建築論レポート2——建築におけるヨーロッパ近代と日本との比較思想的考察」(座談会: 藤井正一郎、稲葉武司、鬼頭梓、宮内嘉久、武者英二、大江宏、大谷幸夫、白井晟一、吉阪隆正)『プラン'70』1971年3月					
		「弘前市立病院竣工に際して」竣工パンフレット、1971年4月					
		「文化会館建築の感想」『全国公立文化施設調査書』1971年4月					
		「東京文化会館の10年」『がいで』(東京文化会館月報)No. 109、1971年5月					
		「意見書: 安易な設計競技に対する意見」1971年5月					
		「監理及び現場監督役について」(東京都文化課に提出した文書)1971年11月26日					
		「設計者のことば(埼玉県立博物館後工によせて)」竣工パンフレット、1971年11月					
		「設計事務所の社会的責任——松田平田坂本設計事務所創立40周年によせて——」『日刊建設工業新聞』1971年11月29日 [所蔵館無し]					
		「埼玉の未来と県立博物館」(対談: 浜口隆一)『埼玉新聞』1971年11月30日12面					
		「箱根コンペ審査に関する回答書」1971年12月					
67	1972	「中絶の建築に反省——新しい『モノ』の手ごたえを取戻せ」『毎日新聞 夕刊』1972年1月10日		●			●
		「動物の顔と人間の顔」『岸田日出刀』岸田日出刀先生記念出版事業会、1972年3月					
		「緞帳」(現代演劇協会) 1972年5月22日					
		「対談: シリーズ 建築はどうなる」(横文彦)『建築家』1972年夏号		●			

歳	年	文献名称、掲載情報	様	合	技	美	コ
67	1972	「美術館建築雑感」『熊本日日新聞』1972年9月25日3面					
		「伊藤喜三郎建築研究所創立20周年寄稿」『日刊建設通信』1972年10月19日					
		「『原子爆弾』と伊藤さん」『伊藤さんを偲ぶ』伊藤滋氏追悼録刊行会、1972年12月					
68	1973	「座談会：自然と人間」『コミュニティ30』1972年					
		「対談：ル・コルビュジェのアトリエで」（松原秀一）『ふらんす』1973年1月号				●	
		「歴史的体験者からみた設計者のための制度」『建築雑誌』1973年10月号	●				
69	1974	「パネルディスカッション：建築・心・手」（小川行夫、大江宏 司会=鈴木正治、太田和道）『建築家』1973年秋号					●
		「座談会：ヨーロッパ史における建築と建築家の識能」（岩井要、大江宏、大谷幸夫、斎藤孝彦、吉阪隆正、藤井正一郎）『建築家』1973年冬号	●				
		「1928年パリ・セーヴル街35番地」（談）『a+u』1974年2月号					
		「対談：東京海上ビルについて（敗北の記念碑としての東京海上ビル）」（宮内嘉久）『建築』1974年6月号					
		「超高層ビルの社会的意義への確信」（聞き手=伊藤ていじ）『新建築』1974年6月号, pp. 211-216					
		「加藤シズエさんのこと」（加藤氏参院選のために）1974年6月25日					
		「東京海上ビル本館完成にあたって」『海上ビルと丸の内の変遷 東京海上ビル本館完成記念』東京海上火災保険株式会社、1974年6月					
		「運営の成果に期待」（横浜教育文化センター竣工によせて）『日刊建設工業新聞』1974年7月5日					
		「弘前市庁舎増築及び改修工事完成にあたって」1974年7月19日					
		「スリーレックスカントリークラブの設計について」1974年7月20日					
70	1975	「教育文化センターを語る」（座談会：青木茂、田村明、中居直勝、平島進 司会=宮内治夫）『教育よこはま』No. 158、1974年9月					
		「合理主義の幻滅——近代建築への反省と批判——」『C&D』1974年10月号	●			●	
		「設計家、煉瓦を語る 現代建築のなかにあたって」（聞き手=編集部）『月刊タイトル』1974年12月号	●	●			
		株式会社 前川建築設計事務所設立					
70	1975	「対談：人生は常に正しく、建築家は常に間違える」（村松貞次郎）『新建築』1975年1月号	●	●		●	
		「対談：加藤唐九郎・前川國男」『C&D』1975年2月号	●			●	
		「野口真造さんと私」（『大彦』創業100年記念）1975年2月					
		「設計者のことば 新美術館の完成にあたって」『日刊建設工業新聞』1975年5月30日					
		「適切な維持監理を（東京都新美術館の完成に当たって）」『首都圏』1975年5月号					
		「新しい都美術館を完成して」『読売新聞 夕刊』1975年6月13日5面					
		「『独占禁止法』に対する建築家の立場」1975年6月					
		「公共建築の維持管理」『美術館ニュース』No. 295、1975年8月					
		「新東京都美術館完成に際して」『うえの』（上野のれん会・編）1975年9月					
		「インタビュー 作家と風景」（浅田孝、庄司達、吉村元男、佐々木幹郎 司会=山崎泰寿）『Space Modulator』1975年9月号	●	●			
71	1976	「板倉準三への手紙」『大きな声——建築家坂倉準三の生涯』大きな声刊行会編、仮倉百合/鹿島出版会、1975年9月	●			●	
		「吉村順三君の第三十一回芸術院賞受賞」『建築雑誌』1975年9月号					
		「弘前市立博物館の完成にあたって」1975年9月1日					
		「随想」『科学朝日』1975年12月号[該当文献に記事無し]					
		「設計者のことば（都美術館の完成にあたって）」月刊『大林』1975年12月号					
		「行ってみれば幻滅だけ」『科学朝日』1976年2月号					
		「インタビュー：『本質』を考え直すべき時期」『設計監理』No. 9、1976年					
		「講演会 ある建築家の生きざま」（前川國男+浦辺鎮太郎+高橋航一）『建築家』（日本建築家協会機関誌）1976年春号				●	
		「弔辞」（レーモンド氏の告別式にて）1976年10月11日					
		「A. レーモンド氏のご冥福を祈る」『日刊建設通信』1976年10月27日					
72	1977	「私の視点 レーモンドのこと」『日経アーキテクチュア』1976年11月29日号					
		「佐々木宏氏との対談」『近代建築の目撃者』新建築社、1976年11月	●			●	
		「笠間邸、前川邸」『新建築』1976年11月号, pp. 114-117					
		「インタビュー：資本の論理へ必死に抵抗 滅びるなら抵抗しながら・・・」『日経アーキテクチュア』1977年1月10日号	●				
		「対談：壁と建築」（神代雄一郎）『INA Report』No. 8、1977年1月3日					
		「狼狽化した人間環境の浄化に『持続の精神』を」（『日経アーキテクチュア』PR）1977年					
73	1978	「紀伊園屋書店創業50年を祝う」1977年3月10日					
		「三浦忠夫君の労作二巻を推す」1977年3月10日					
		「三浦忠夫君追悼文」1977年11月10日					
		「建築とインテリアを担当して四半世紀」『株式会社紀伊園屋書店創業五十年記念誌』紀伊園屋書店、1977年					
		「一中の想出」（府立一中・都立日比谷高校100年誌によせて）1978年1月3日					
		「ケルン東亜美術館竣工に際して」（対談：Krueger, 前川・Krueger対談に関して浜口隆一氏を囲んで）MID同人、1978年2月1日					
		「今なお未完の近代建築（有名建築その後——神奈川県立近代美術館）」『日経アーキテクチュア』1978年8月7日号					
74	1979	「現代フィンランド美術・5人の作家展によせて」『神奈川県立近代美術館パンフレット』、1978年8月12日					
		「UIAと私」『建築家』1978年秋号					
		「建築を志す者へ」（講演）『名古屋工業大学建築祭パンフレット』、1978年10月19日					
		「建築家としての展望はあるか」『続・現代建築の再構築』（朝日ゼミナール第29回宮内嘉久と共著）彰国社、1978年12月				● ●	
74	1979	「解説鼎談：藤井正一郎・井田安弘」『建築十字軍』ル・コルビュジェ著（東海大学文化選書）東海大学出版局、1978年	●	●		●	
		「『ル・コルビュジェ全作品集』第1巻によせて」（『ル・コルビュジェ全作品集第1巻』ジャケット）A. D. A. EOLTA Tokyo、1979年1月				●	
		「大工さんと建築家」『生きることと学ぶこと』雄鶏社、1979年1月					
74	1979	「前川國男のディテール 熊本県立美術館をとおして」彰国社、1979年4月		●			
		「受賞者からみたBCS賞の意義」（談）『日刊建設通信』1979年5月17日					

歳	年	文献名称、掲載情報	様	合	技	美	コ
74	1979	「中島健蔵氏の御逝去を悼む」『がいど』（東京文化会館月報）NO. 207、1979年6月					
		「随想 私とオペラ」『フィルハーモニー』1979年7・8月合併号					
		「花に秘す」（対談：白井晟一）『風声』第7号、1979年7月			●		
		「長岡ロングライフセンターについて」1979年7月17日					
		「私と建築」（講演日本建築家協会東海支部主催）『健康セミナー'79』1979年9月17日					
		「G氏への手紙（公取に関連した書簡）」『新建築』1979年11月号					
		「私にとってのタイルとは」季刊『あなたのタイル』冬号（3号）1979年11月					
		「建築を志す者」『駿建』（日大理工学部校内誌）Vol. 7、1979年11月					
75	1980	「スポンターニティが息づく生活空間を求めて」『Commercial Photo Series 建築写真・表現と技法』玄光社、1980年					
		「対談：打込みタイルと美術館」（シリーズ設計を聞く1：南条一秀、大沢三郎、橋本功 聞き手=内井昭蔵）『新建築』1980年1月号			●		
		「美術館建築と私」1980年1月7日					
		「宮城県美術館を設計して」（インタビュー）『河北新報』1980年2月6日[該当文献に記事無し]					
		「建築は進歩しているか」『建築士と実務』ぱーす、1980年4月号					
		「設計科の入札制度」パンフレット、1980年5月20日					
76	1981	「東京文化会館竣工20周年」『がいど』（東京文化会館月報）NO. 225、1981年1月					
		「座談会 オペラのための施設」（近江栄、吉井澄雄、鈴木敬介、加藤潤 司会=高野隆）『公共建築』Vol. 22、1981年2月号					
		「この道ひとすじ“原点を見つめる建築家”」（談）『れんが』1981年春号					
		「巴里の『エンチアン』」『追憶』（関沢弘子追悼文集）1981年6月			●		
		「オペラとそれを上演する劇場」オペラ『ニュールンベルクのマイスター・ジンガー』プログラム、1981年7月					
		「美術に親しむ」『宮城生涯教育』1981年10月26日					
		『一建築家の信条』（宮内嘉久との共著）晶文社、1981年12月					
77	1982	「張り切っていた山口文象君」『建築家山口文象・人と作品』相模書房、1982年4月					
		「インタビュー 建築への誘い」『建築への誘い：先駆者10人の歩んだ道』（近江栄、宇野英隆・編）朝倉書店、1982年12月15日			●		●
78	1983	「新館長遠山一行氏を迎えて」『がいど』（東京文化会館月報）NO. 252、1983年4月					
		「インタビュー——回想のディプロマ——」（聞き手=若木滋）『建築ノート』（建築知識別冊）1983年6月					
79	1984	「建築における『真実・フィクション・永遠性・様式・方法論』をめぐって」（対談：藤井正一郎）『新建築』1984年1月号			●	●	●
		「追悼 白井さんと枝垂桜」『風声 京洛便り』17号、1984年2月					
		「第二国立劇場は再考を『異分野芸術同居』に疑問」『読売新聞』1984年4月1日					
		「竣工式の言葉（学習院図書館）」（談）『新建築』1984年7月号					
		「執行部をかえるにあたって」（所員にむけて）タイプ印刷、1984年7月16日					
		「思わぬ贈り物が期待できる気心を察してくれる職人さん」（談）『日経アーキテクチュア』1984年8月27日号					
80	1985	「建築——私との出会い 60」（談）『建築文化』1985年1月号					
		「建築家の世界／前川國男」『ひろば』近畿建築士会協議会 1985年6月号					
		「対談 建築家はいかに生きるべきか」（前川國男、大谷幸夫）『日刊建設工業新聞』1985年10月1日					
		「てい談 音楽とホール建築」（前川國男、海老沢敏、伊藤京子）『日刊建設通信』1985年10月1日					
		『前川國男=コスモスと方法』前川國男建築設計事務所、1985年10月1日					
		「近代建築」『Bauen + Wohnen』（年代不明）					
81	1986	逝去					
様：日本的建築意匠に対する批判			●				
合：近代合理主義に対する批判				●			
技：テクノロジカル・アプローチ					●		
美：都市美						●	
コ：ル・コルビュジェ							●

試みんとするのであるか。待望されるは新しき秩序であり、新しき精神である」^{注24)}

つまり、前川國男はル・コルビュジェの屋上庭園を典型として西欧建築の優位性を示すとともに、日本では合理主義によって経済的な効率が過度に優先され、建築が自然と乖離されていると憤りを感じている。なお、ここで示されている「精神」という言葉は、ポール・ヴァレリーが CIAM で発言した「人間を今日の状況に追い込んだのは、ほかならぬ人間の精神だ。その同じ品滅の精神がとうしたらいまの状況からわれわれを救い出してくれる力になり得るだろうか」という問題提起に影響を受けたものであり^{注25)}、自然のとの乖離は建築における「精

神」に対する無関心が問題であると記している。

なお、前川國男が「近代建築は当然、社会性と普遍妥当性ともっていたはず。それが日本に移されたとたんに、すつとばされた」^{注26)}と述べているように、「精神」の問題は西欧の近代建築の問題ではなく、日本における西洋文化のとりいれ方の問題としている^{注27)}。

3. テクノロジカル・アプローチ

前川國男は、西欧の近代建築を次の3つの時期に分類している。

「ヨーロッパ・アメリカにおいてはおよそ三つの段階があったように思われる。第1の段階は、1895～1915年

頃であって、19世紀の折衷主義的様式建築に対する反抗の時代である。第2の段階は1915～1935年頃であって、グロピウスやコルビュジェが登場して<機械化>ということを中心として技術が重要視され、造形的には禁欲的とさえいえるほど潔癖に、と同時に技術のうみ出す可能性に対してはやや楽観的に信頼していた時代である。第3の段階は、1935年頃から今日にいたるもので、前段階によって技術を自己のものとした上になつて、この技術を駆使して、近代建築に人間的な暖かみ、芸術的感銘、新しい意味で記念的な感覚を生み出そうと努力している時代である」^{注28)}

前川國男は、西欧建築に対する上の記述に対し、日本の未熟な技術ではまだ第3段階が来ていないと加筆し、「テクノロジカル・アプローチ」によって第3段階を一度通過しないことには、日本の建築はファッションのままになってしまうと嘆いている^{注29)}。

ここで用いられている「テクノロジカル・アプローチ」とは、前川國男がCIAM8(1951)に出席した際、フランスにおける技術の捉え方をそう呼んでいたことに着目したもので^{注30)}、前川國男は技術的な裏付けという意味においてこの言葉を用いている^{注31)}。加えて、「<木材>の如き自然材に依存する限り、本来的な意味に於ける近代的工業生産は当然成立し難い」とも記し^{注32)}、特にRC造の技術確立を求めている。

なお、ル・コルビュジェに関しては、「<プルニコゼ>(実験済み)のエレメントを集めて作られるべきとよく言っている」^{注33)}としながらも、ル・コルビュジェは現場に興味を持っていなかったとして、レーモンド事務所で技術を身につけたと述べている^{注34)}。

4. 都市美

東京海上ビルディング(1966)に端を発する美観論争により、前川國男は都市美に関する言説を多く残すことになる。都市美における論点は、近代合理主義の批判と同じく、自然との乖離であり、前川國男は次のように記して、超高層技術を通して自然と人間の引き裂かれた関係の再調整を模索している。

「人間は自然から反逆することで文明を築いてきた。そうした自然の変容は進歩として受け入れるべきだが、自動車の侵入は容認すべきではない。また、自然から離脱する際には、<生きている人間>を重視すべき」^{注35)}

「20世紀初頭以来<自然制服>の意味を、人間を含めた自然より深い理解こそが真の意味における<自然制服>であるという意識に深めつつある<中略>この建物の裾野にひろがる都民広場は必ずや明日の丸の内人間の回復の

黎明をつげるに相違ないことを確信している」^{注36)}

さらに、前川國男は「アメリカの高層都市と日本のそれとを区別するものは何か。私はそれこそ<自然と人間との関係>であると答える。しばしば論じられるようにキリスト教二千年の伝統を支えた西欧の<自然>は常に人間の外部に在る客観的な自然として神によって人間に奉仕するために創られたものであった。化学も技術も都市も、こうした彼らの自然観を基盤として築かれた。しかし、われわれの<自然>は深くその汎神論的基盤に支えられて、人間は<自然>に対する他物ではなく、最初から包摂して考えられてきた。ほつておいたら西欧伝来の現代都市は建築物の推積に埋もれて行く」と記し^{注37)}、西欧と日本との自然感の異同を示すことで、日本においては独自の手法としてエスプラナードの必要性を示している。

第3節 前川國男による屋上庭園に関する言説

表3 屋上庭園に関する前川國男の言説

掲載年	言説	対象作品
1931	屋上園:ペビーゴルフ又は喫茶室。ノーマルな形は如何なる途にも融通自在たらん (前川國男:計画説明書, 明治製菓銀座売店競技設計図集, 洪洋社, p.1, 1931)	明治製菓銀座売店, 1931
1941	恐らく「鳥の歌声」とどむるにすら由なきコルビュジェ描くところの“空中園”のささやかな夢さえも一片の反古となり終わる今日、われらは一体何に希望をつなぎ、どこに明日の国土の意匠を試みんとするのであるか (前川國男:埋もれた伽藍, 新建築, 新建築社, p.134, 1941.4)	ル・コルビュジェの作品全般
1947	[サヴォワ邸における空中庭園と屋上庭園に関して、]“住むための機械”はあなた方の心情と肉體とを、すこやかにはぐくみ育てるに相違ない。それは結局人間性の半封建的な性格から、真に近代的な性格へ劃期的な飛躍のための強力な梃子である (前川國男:明日の住宅, 婦人公論, 中央公論新社, p.8, 1947.10)	Villa Savoye, 1932
1957	わが国の現状は避難通路以外にはあまり利用されていないが、高層になると、屋上は地面に代わるものとして積極的に共同施設の場所として利用されるべきである (前川國男:新制建築計画, オーム社, pp.117-118, 1957)	Unité d'Habitation de Marseille, 1952

前川國男自身が屋上庭園に関して直接的に言及した言説は4つであり、多いとは言いがたい(表3)。ただし、誌面での発表を目的としていない明治製菓銀座売店競技設計図集(1931)の説明文を除くと、いずれもル・コルビュジェの作品に関する記述であり、特に、第二次世界大戦以降には、サヴォワ邸(Villa Savoye, 1932)とマルセイユのユニテ・ダビタシオン(Unité d'Habitation de Marseille, 1952)という特定の作品について、その建築的效果を肯定的に捉えている^{注38)}。そのため、前川國男の屋上庭園にはル・コルビュジェからの影響が多にあると推測出来る。

なお、近代建築における屋上庭園の形式は、必ずしもル・コルビュジェ自身が考案した手法という訳ではない。実際、ル・コルビュジェが事務所設立以前に勤めていたオーギュスト・ペレ(Auguste Perret, 1874-1954)の事務所(Franklin apartment building, 1903)には、すでに屋上階に庭園が配され、またフランソワ・アンヌビク(François Hennebique, 1842-1921)が1903年に建設した自邸(Maison Hennebique)にも、鉄筋コンクリート片持ち梁の上部に屋

上庭園が施工されている。

また、屋上庭園に関する師からの受容という意味では、アントニン・レーモンド(Antonin Raymond, 1888-1976)からの影響も考えられるが、前川國男はレーモンドが計画した屋上庭園(roof garden)に関しては言及しておらず、むしろレーモンドが前川國男を通してル・コルビュジェの手法を受容しようと試みている^{注39)}。

第4節 結

日本近代建築における屋上庭園の主題は、眺望に関するものが顕著に多く、身体的保養の用途を付随して計画されている。それは日常とは異化された眺望であり、地上の庭園で用いられてきた伝統的手法の屋上庭園への移植である。ただし、高度経済成長期における屋上庭園の多様化の中で、眺望の主題は事例数が増加しておらず、事例は郊外に限られている(表4)。

一方、前川國男に関しては、高度経済成長期においても眺望が主題とされ続け、周辺環境への眼差しが模索されている。

表4 屋上庭園の主題の変遷

	～1920	1921～1936	1937～1945	1946～1954	1955～
日本近代の建築家	休息、眺望、奉祀、遊戯・運動、(物干)	休息、眺望、(奉祀)遊戯・運動、物干	休息、眺望、(遊戯・運動)防空、物干	休息、眺望、遊戯・運動、物干	休息、(眺望)、遊戯・運動、物干、劇場、芸術展示
前川國男		休息、眺望		休息、眺望、避難	休息、眺望、散策、避難、芸術展示

なお、前川國男が直接的に屋上庭園に関して述べている論考はさほど多くない。ただし、「日本的建築意匠」を批判する中で、その対案であるRC造陸屋根の必要性を説くとともに、テクノロジカル・アプローチとしてその技術確立を求めている。また、行き過ぎた合理主義や都市計画によって消失した自然性を再度建築に取り戻すことが急務であると述べている。つまり、屋上庭園のみを主題とした記述は少ないものの、使用頻度の高い論説の主題は、いずれも屋上庭園と直接的に結びつくものである。

要するに、前川國男にとって屋上庭園を用いることは、自身が戦前・戦中・戦後を通して提起し続けてきた近代日本の諸問題を解決する一助となり、設計活動を通して重要性を持つ。事実、前川國男は少数ながらも、設計活動初期から晩年まで、断続的に屋上庭園を用いている。

なお、前川國男が屋上庭園に関して直接的に言及した論考は、概ねル・コルビュジェ作品の屋上庭園を肯定的に捉えた批評である。そのため、前川國男の建築作品における屋上庭園の出自は、ル・コルビュジェの屋上庭園であることが推測できる。

図版出典

表1: 筆者作成

表2: 筆者作成

表3: 筆者作成 ([]内は筆者注)

表4: 筆者作成

図1: 『建築雑誌』日本建築学会, vol.10, 1932

図2: op.cit., 『建築雑誌』 vol.4, p.11, 1936

図3: 『オリエンタルホテルパンフレット』, 1907

図4: 『新建築』新建築社 vol.1, p.35, 1952

図5: op.cit., 『新建築』 vol.9, p.74, 1960

図6: op.cit., 『建築雑誌』 vol.4, p.31, 1938

注釈

- 『新建築』新建築社, vol.6, pp.84-86, 1934.6
- op.cit., 『新建築』 vol.2, p.65, 1959
- 『建築雑誌』日本建築学会, 340号, p.202, 1915
- op.cit., 新建築社, vol.1, p.15, 1926
- op.cit., 『建築雑誌』 vol.4, p.16, 1936
- op.cit., 『新建築』 vol.4, p.101, 1950
- op.cit., 『新建築』 vol.2, p.12, 1954
- op.cit., 『新建築』 vol.10, pp.27-28, 1958
- op.cit., 『新建築』 vol.10, p.24, 1952
- 『建築雑誌』日本建築学会, vol.1, p.36, 1952
- 物干は建築の主たる用途ではないため、写真資料は多いものの、言説で説明されているものが数少ない。そのため、集合住宅や公共建築における物干場が実際に交流の場としてどのように使用されていたかの分析は、今後の課題である。
- op.cit., 『新建築』 vol.4, p.14, 1954
- op.cit., 『新建築』 vol.12, p.48, 1961
- op.cit., 『建築雑誌』 vol.4, p.31, 1938
- op.cit., 『新建築』 vol.11, p.57, 1958
- 前川國男: 「明日の住宅」『婦人公論』1947年10月
- 前川國男: 「今日の日本建築」(建国記念館応募案説明書の一部)『建築知識』1937年12月号
- 前川國男: 「建築の前夜」『新建築』1942年5月号
- 前川國男: 「新建築様式の積極的建設」『国際建築』1933年2月号
- 前川國男: 「水辺のサンマーハウス」『建築知識』1935年7月号
- 前川國男: 「東京帝室博物館計画説明書抜粋」『国際建築』1931年6月号
- 前川國男: 「負ければ賊軍」『国際建築』1931年6月号
- 前川國男: 「感想」『新建築』1933年1月号
- 前川國男: 「埋もれた伽藍」『新建築』1941年4月号
- 前川國男: 「対談: 人生は常に正しく、建築家は常に間違える」『新建築』1975年1月号
- 前川國男: 「ビルの建段・都市計画 建築家」『生産にたずさわる

仕事』(松田道雄・編)1969年11月

- 27) 事実、前川國男の師ル・コルビュジェの手法に関して、「<自由な平面>と<自由なファサード>とは西欧近代建築のいわば一枚看板であり、二千年にわたる組積構造の伝統に立ち向かう戦いの旗印であった」と賞賛しながらも、スラブに梁が出てくる日本の技術では、壁と柱の位置をずらすべきではなく、「自由な平面(plan libre)」と「自由なファサード(façade libre)」は用いるべきでないとしている。
- 28) 前川國男：「感想 下関市庁舎競技設計に関連して」『建築雑誌』1951年5月号
- 29) 前川國男：「座談会：吉田五十八、丹下健三、坂倉準三、生田勉、浜口隆一、田辺員人」『国際建築』1953年3月号
- 30) 前川國男：「欧米社会と近代建築の潮流」(座談会：丹下健三、生田勉)『国際建築』1951年12月号
- 31) ただし、前川國男の「テクノロジカル・アプローチ」は技術至上主義として度々誤解される(前川國男、村松貞次郎：「対談：人生は常に正しく、建築家は常に間違える」『新建築』1975年1月号)
- 32) 前川國男：「建築の前夜」『新建築』1942年5月号
- 33) 前川國男：「解説鼎談：藤井正一郎・井田安弘」『建築十字軍』東海大学出版局、1978年
- 34) 前川國男、藤井正一郎：「対談 建築家の思想」『建築』1969年1月号
- 35) 前川國男：「超高層と都市美」『建築士』1966年4月号
- 36) 前川國男：「前川國男氏のアピール」SD [SD NEWS] 1966年12月号
- 37) 前川國男：「感想 下関市庁舎競技設計に関連して」『建築雑誌』1951年5月号
- 38) 前川國男は屋上庭園のあるガルシユのヴィラ(Villa Stein / de Monzie, 1927)にも訪れているが、中庭から外観を見た際の印象に関する記述しか残しておらず、建築内部及び屋上庭園に入っているかは不明である。
- 39) 松隈洋によると、むしろレーモンドが前川國男を通してル・コルビュジェの手法を受容しようとしている(松隈洋：「ル・コルビュジェとレーモンドの間で」、建築ジャーナル、pp.51-52, 2013.3)。

第3章

前川國男による屋上庭園の解釈

第1節 前川國男が関与したル・コルビュジェの庭園

第1項 ル・コルビュジェの屋上庭園

1. 地盤面の設定

(1) 庭園の種類 (表1, 2)

ル・コルビュジェは、自身の著書『プレシジョン (Précisions, 1930)』[1]や『人間の家 (La maison des homes, 1942)』[2]の中で、地上の庭園を「解放された土地(le sol libéré)」、地上の上部に設定された庭園を「獲得された土地(le sol conquis)」として説明し、庭園を大地との鉛直距離により2種類に定義づけている(図1)。そして、「解放された土地」では通低して健康や景観、通風が主題とされ、また「獲得された土地」では健康や景観、環境負荷低減が一貫して主題とされている。

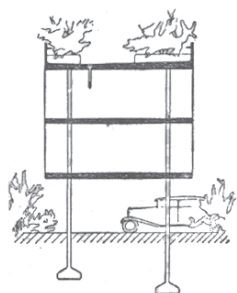


図1 非地上の「獲得された土地(le sol conquis)」と地上面の「解放された土地(le sol libéré)」

この分類に依拠し、ル・コルビュジェの *Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres complètes, vols.8 (Œuvres と表記)* に表記されている庭園の用語を整理すると、地上の庭園である「解放された土地」は建築的ヴォリューム前面の前庭(parvi, jardin)、建築的ヴォリュームや壁で囲われた中庭(cour)、そして柱で持ち上げられた建築的ヴォリューム下面のピロティ(pilotis)に分類できる。一方、非地上の庭園である「獲得された土地」は必ずしも最上階だけではない。上階の居室前面に設けられたテラス(terrasse)、建築的ヴォリュームの一部を抜き取った空中庭園(jardin suspendu)、建築的ヴォリュームを前面に押し出したロジア(loggia)、そして建築的ヴォリューム最上面の屋上庭園(toit jardin)に類型化できる(図2)。

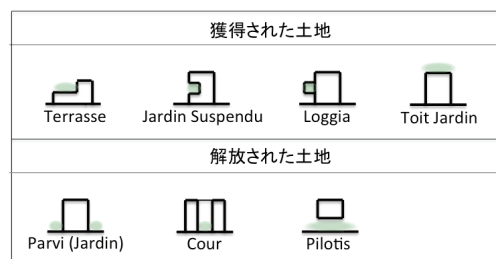


図2 庭園の形式

表1 建築作品における庭園の種類

(表中の数字は作品数を表す)

	～1920年代	1930年代	1940年代	1950年代～
「前庭(parvi, jardin)」	51	21	8	26
「中庭(cour)」	2	2	2	5
「ピロティ(pilotis)」	16	14	7	18
「テラス(terrasse)」	12	12	2	4
「空中庭園(jardin suspendu)」	12	2	0	2
「ロジア(loggia)」	0	2	4	6
「屋上庭園(toit jardin)」	28	24	7	27

なお、『プレシジョン』や『人間の家』の素描をはじめ、「新しい建築の5つの要点(Les 5 points d'une architecture nouvelle, 1926)」においても、ル・コルビュジェは庭園の素描に植栽を描き、また植栽に関する説明を添えている。つまり、ル・コルビュジェの建築制作における庭園は、言明しないものの植栽が前提とされていると推測される。

ア. 「解放された土地」

(ア) 前庭

1920年代以前の建築制作における前庭(parvi, jardin)は、都市部や郊外を主として数多く計画されている。パリのメイエル邸(Villa Meyer, 1925)に関する次の記述を典型として、ル・コルビュジェは野生のままに繁殖した植栽によって構成される「野生の小さな森(bocage sauvage)」に着眼し、また同時に、前庭からの景観を主題としている(図3)。

「この庭は少しもフランス式にしてありません。そうではなくて、自然にまかせた林にし、サンジャム公園の大木と相俟って、パリから遠く離れた感じにさせます」^{注1)}

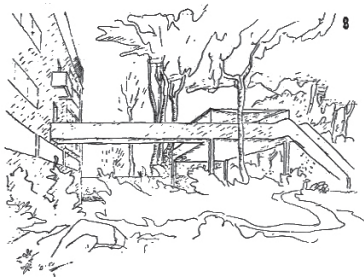


図3 メイエル邸の前庭

一方、1930年代以降の建築作品では、都市部や郊外に加え農村部でも前庭が多く計画されるものの、直接的な説明は非常に少なくなる。また、パリ郊外の週末住宅(Une maison de week-end, 1935)に関して、「庭の亭と住宅とは正確な関係で結ばれている」^{註2)}と説明しているように、景観に関する説明が確認できなくなり、前庭によってもたらされる建築相互の関係性に焦点をあてるようになる。

(イ) 中庭

中庭(cour)は、少数であるものの建築制作活動を通して計画され続けている。ただし、1930年代以降になると直接的な説明は減少する。典型的な記述として、ル・コルビュジエは<民衆の宮殿>の宿泊室(Dortoir du <Palais du Peuple>, 1926)に関して次のように述べている。

「この放置されていた敷地を利用して、新しい宿泊棟の前と、旧来の民衆の宮殿の前とを空地として日当りの良い庭とし、ゴブラン工房側の広がりに向けたことだ」^{註3)}

この記述に典型が確認できるように、1920年代以前のル・コルビュジエは、都市部や郊外に多種の植栽を用いた中庭を計画し、建築との関係性や、中庭からの景観に着眼を置いている。一方、1930年代以降になると、都市部や郊外に加え、農村部の敷地にも中庭を計画するようになる。また、ペイリサック邸(Résidence, domaine agricole Peyrissac - Chercell, 1942)を説明対象として「建物の配置と2つの<見晴し部屋>がアラブ風に小庭と居住の場とを決めていく」^{註4)}と示しているように、ル・コルビュジエは中庭と建築との位置関係にも着目している(図4)。

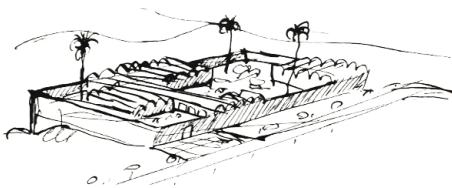


図4 ペイリサック邸の中庭

(ウ) ピロティ

ル・コルビュジエは「新しい建築の5つの要点(Les 5 points d'une architecture nouvelle, 1926)」の1つとしてピロティ(piloti)を提唱し、都市部や農村部など敷地条件を問わず建築制作活動を通してピロティ下に創出される空間の一部を庭園として多く計画している。また、クック邸(Maison Cook, 1926)のピロティに関して次のように記しているように、ピロティ下を雨天時用の庭園として捉えている(図5)。

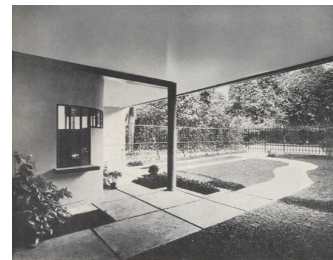


図5 クック邸のピロティ

「被護された所、重要な建築的要素、家族の生活のために新しい要素が、住宅に組み込まれる(車庫、太陽や雨を避ける駐車場、子供の遊び場)」^{註5)}

さらに、『プレジジョン』の中で「光と空気は住宅の下を通り抜けます。何たる勝利!前庭と中庭は1つになります。何たるスペースの得。なんとすばらしい幸福感。そして住宅は大気の中に出来上がるのです」^{註6)}と説明しているように、ピロティ下の庭園と中庭や前庭を視覚的・動線的に結びつけている。

イ. 「獲得された土地」

(ア) テラス^{註7)}

1930年代以前の建築制作におけるテラス(terrace)は、都市郊外や農村部に多く計画され、アルジェのウエド・ウシャイアの宅地割(Lotissement de l'Oued-ouchaia, 1933)に関する次の記述を典型として、視点場を操作することで、意図的な内部視点景観を造り上げている(図6)。

「各住戸の前には小灌木の植え込みのあるテラスがあり、下の庭を見えないようにしている。完全に独立した(遮音された)住戸は隣人たちの視線から全く保護されている。しかし、2000もの家族が住んでいる区画にありながら、目は遠い地平線、つまり海、平原、山々の連なりしか見ない」^{註8)}

表2 ル・コルビュジェの建築作品における庭園類型

年	作品名	庭園類型							年	作品名	庭園類型						
		「解放された土地」			「獲得された土地」						「解放された土地」			「獲得された土地」			
		前庭	中庭	ピロティ	テラス	空中庭園	ロジア	屋上庭園			前庭	中庭	ピロティ	テラス	空中庭園	ロジア	屋上庭園
1912	Villa Jeanneret-Perret	●							1935	Immeuble au Bastion Kellermann - Paris	●						●
	Villa Georges Favre-Jacot	●								Immeuble à Montmartre			●				●
1914	Maison Dom-Ino	●						●	1935	Maison de week-end	●						●
	Villa au bord de la mer	●								Musées de la ville et de l'état - Paris			●				●
1916	Villa Schwob	●						●		Villa aux Mathes sur l'Océan Atlantique	●						●
	Maison ouvrières	●							1936	Ilot insalubre No. 6	●						●
1917	Cité ouvrière	●								Ministère de la Santé	●		●				●
	Maisons Monol	●								R.A.M., habitation d'un médecin	●		●				
	Cité ouvrière du Vouldy à Troyes	●								Pavillon des Temps Nouveaux	●						
1919	Cite ouvriere, Manufacture de Saint-Gobain	●								Exposition internationale Paris 1937	●		●				
	Le Pont-Vert	●								Maison de week-end Jaoul	●		●				
	Villa Berque, Villa Montmorency	●							1937	Immeuble Félix, rue Richer				●			
	Maison ouvrières en série	●						●		Pavillon de France à l'Exposition de l'Eau							●
	Maison d'artiste	●								Vélodrome d'hiver, étude d'appartements	●						●
1922	Maison Citrohan	●		●						Gratte-ciel Cartésien	●						
	Immeubles-villas	●	●	●		●		●		G.M.M.A.S.	●						
	Villa Besnus	●							1938	Maisons M.A.S	●		●				
	Maison de week-end à Rambouillet	●						●		Gratte-ciel, quartier de la Marine, cité des affaires				●			●
	Villas La Roche-Jeanneret	●		●				●		Réorganisation agricole, ferme et village radieux	●						●
1923	Type hôtel	●								Ideal Home, Arundell Clarke							●
	Villa Le Lac	●							1939	S.P.A., maisons pour ingénieurs et contre-maîtres	●		●				●
	Maison Canale	●			●			●		Place de la Mairie	●						●
	Villa Lipchitz	●								Station biologique	●					●	
1924	Villa Lipchitz - Miestchaninoff	●						●		Ecoles volantes	●		●				
	Villa Miestchaninoff	●						●	1940	Pavillon pour 40 hommes	●						
	Pavillon de l'Esprit Nouveau	●						●		L'Usine verte	●		●				●
	Villa Le Lac	●						●	1944	Recherche sur les unités d'habitation						●	●
1925	Variante, Pavillon de l'Esprit Nouveau	●						●		Unités d'habitation transitoires			●			●	●
	Cité Frugès	●						●	1946	Marseille-Michelet, unité d'habitation	●		●			●	●
	Villa Meyer	●						●		Usine Claude et Duval	●		●			●	
	Armée du Salut, Palais du Peuple	●		●					1947	Palais des Nations Unies - New York	●	●		●			
	Garage Raspail	●				●			1948	Basilique, La Sainte-Baume	●						●
	Galerie Pellegrini	●				●	●	●		Projet Roq et Rob	●						●
	Maison Guiette	●						●	1949	Villa Curutchet	●		●	●			●
1926	Manufacture Frugès	●		●		●		●	1950	Maison du professeur Fueter,	●						●
	Maison Cumenge	●				●		●	1950	Maison des Péons, 110 m ²				●			●
	Maison minimum	●		●		●				Logis à bas prix 110m ² pour "Village 750 habitants"							●
	Maison Ternisien	●				●			1951	Ronchamp, Chapelle	●						●
	Villa Cook	●		●				●		Maison des pèlerins							●
	Villa Joseph et Hanau	●	●					●		Maisons Jaoul	●	●					●
	Weissenhof-Siedlung	●				●		●	1952	Unité d'habitation			●			●	●
1927	Palais de la Société des Nations - Genève	●				●				Grille climatique			●				
	Villa les Terrasses	●		●		●		●		City center			●				
	Villa Planeix	●				●			1953	Capitole							●
	Centrosoyus	●		●						Secrétariat	●						●
	Immeubles-villas	●				●	●	●		Haute Cour et tapisseries	●						●
1928	Projet Wanner	●				●	●	●		Villa Chimambhai	●		●			●	●
	Villa Baizeau	●		●				●		Villa Hutheesing	●				●		●
	Villa Ocampo	●				●				H.E.M., étude d'habitation							●
	Ville Church	●		●				●		Maisons type La Rochelle	●	●					●
	Armée du Salut, Cité de Refuge	●				●			1954	Palais du Gouverneur	●		●				●
	Imprimerie Draeger	●				●		●		Village du gouverneur							●
1929	Maison Caneel	●		●				●	1955	Mill Owners Association				●			
	Maison Jacquin	●				●				Villa Sarabhai	●						●
	Maison Loucheur	●		●						Musée	●						●
	Villa Harris	●		●				●	1956	Villa Shodan	●		●				
	Villa Savoye	●		●		●		●		Etude 2,26 x 2,26 / Logis à deux niveaux							●
	Aménagement carrefour Raspail		●			●				Maisons de vacances 3,66 x 3,66	●	●					●
1930	Apartement de Beistegui					●		●		Cité universitaire, Maison de Brésil	●		●				
	Cité Universitaire, Pavillon Suisse	●		●		●		●		Couvent de la Tourette	●	●	●				
	La Ville Radieuse et Plan de Moscou	●						●	1957	Unité d'habitation de Briey en Forêt	●		●				
	Palais des Soviets	●		●						Unité d'habitation de Berlin - Charlottenburg	●		●				
	Villa Goldenberg	●								Musée d'Art Occidental	●		●				
1931	Lotissement							●	1959	Maison des jeunes	●						
1932	Immeuble Invalides, rue Fabert							●	1960	Etudes d'unités							●
	Immeuble locatif S.Z.C.H.					●	●	●		Hôtel et palais des congrès à la gare d'Orsay	●		●				●
	Immeuble G.B.							●	1961	Carpenter Visual Arts Center	●		●				
	Immeuble, 24, rue Nungesser-et-Coli							●		Musée							●
1933	Schweiz. Rentanstalt, RA			●				●	1962	Ecole maternelle sur le toit de l'unité							●
	Petite maison, projet C.M.A.					●				Unité d'habitation de Firminy	●		●			●	●
	Lotissement Oued Ouchai, Projet Durand					●	●			Pavillon d'Exposition, Palais Ahrenberg				●			
	Maison locative, projet Ponsik			●		●		●	1963	Piscine	●		●				
	Urbanisme, Plan Macia							●		R.H.O., Centre de calculs électroniques Olivetti							●
	D.L. Dubois, étude							●	1964	Ambassade de France - Brassilia	●		●	●			
1934	Etude T CIAM							●		Hôpital - Venise	●		●				●
	Immeuble pour ouvriers, ZCHA							●		Palais de congrès	●		●				
	Villa Heng-Verlaine		●			●											

一方、1940年代以降になると作品数が少なくなり、また直接的な説明は確認出来なくなる。しかし、1949年のロクとロボ(Roq et Rob)では、地中海を臨む段状のテラスを屋上庭園(toit jardin, toit terrasse)と図示し、次のように記している。

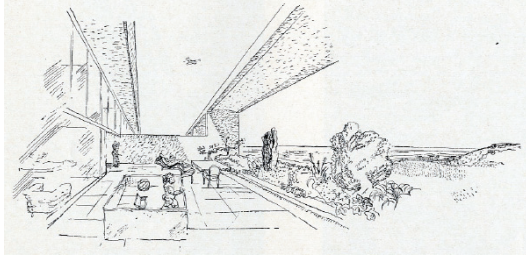


図6 ウエド・ウシャイアの宅地割のテラス

「この地の気候のよさと素晴らしい眺めの恵みを受けるためだ。それなら第一に視野を確保することだ——眺望だ——これはという風景を大切に。建築群にある家々は互いに相接して建ちながら、目は無限に広がる地平に向かって開かれている。そこに隣接する風景はあけていて、あるいは農耕が行われたり、あるいは自然のまま保たれたりしている。傾斜がむりなくこの解決をしてくれる。断面的に眺めの確保が可能だし、住宅開発としての住居の形式にも適している」^{注9)}

このように、明らかなテラスの形式が用いられているにも関わらず、ル・コルビュジエは屋上庭園の呼称に読み替えて説明し、テラスを屋上庭園に収斂させている(図7)。

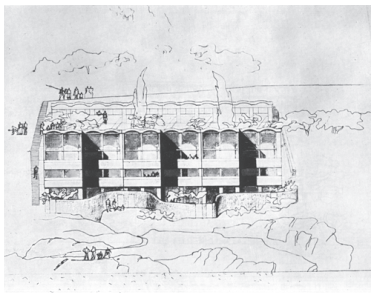


図7 ロクとロボの屋上庭園

(イ) 空中庭園

ル・コルビュジエは、ヴィラ型共同住宅(Immeubles-villas, 1922)に関して次のように説明している。

「空中庭園付き。各住戸は、実際には庭付きの小住宅で、ただ道路から、いろいろの高さにあるだけだ」^{注10)}

この記述を典型として、1920年代以前の空中庭園(jardin

suspendu)は都市部の邸宅を主として計画され、中層部に用いられている。また、ガルシュのヴィラ(Villa Stein/de Monzie, 1926)では、「庭園は陸屋根への論理的な補助要素である。空中庭園(屋根つき)から本当の庭に下りる」^{注11)}と説明しているように、中庭との関係性を示すことで、空中庭園の重要性を示唆している(図8)。

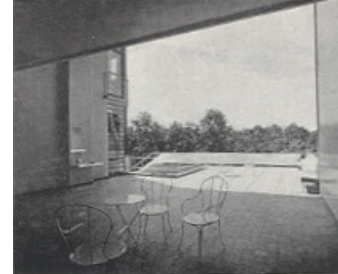


図8 ガルシュのヴィラの空中庭園

一方、1930年代以降になると、中層階に設けられた空中庭園の使用は確認できなくなる。しかし、チマンバイ邸(Villa Chimanbhai, 1953)に典型が確認出来るように、ル・コルビュジエは屋上庭園の上部に独立したパラソルを設け、このパラソル下の空間を“jardin suspendu”と説明している。つまり、空中庭園の形式を屋上庭園の付加的な応用へと変遷させることで、インドなどの厳しい気候条件下で設計する際の対応策として用いられている。

(ウ) ロジア

ル・コルビュジエはアルジェのビル計画(Un immeuble à Alger, 1933)に関して、次のように記している。

「私たちのブリーズ・ソレイユでは効果が出ず、これを垂直の版に改めねばならなかった。そして直角に、または斜めに立面を突出させ、その方向性に合わせたのだった。こうした版によって、建築的に意味ある構成ができて、一種のバルコニーまたはロジアを形成した」^{注12)}

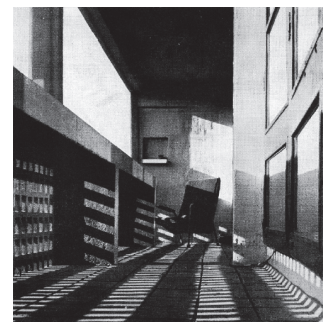


図9 住居単位のロジア

たしかに、ロジア(loggia)においては、ル・コルビュジエが庭園の前提としていた植栽の有無に関しては説明し

ておらず、図面にもほとんど示されていない。しかしながら、ル・コルビュジエは1920年代以前に都市部で用いていた空中庭園を、より環境負荷低減のための装置として変換し、ロジアとして応用しているのである^{注13)}。そして1930年代以降になると、ブリエ・アン・フォレの住居単位(Unité d'Habitation de Briey en Forêt, 1956)に関して「ロジアははじめから用いられ、住居と自然との屋内屋外の結びつきをつくって来た。方位は定められていて、ガラス面は東と西に向いているのがロジア付きである」^{注14)}と説明しているように、都市部や郊外を問わず、ロジアを多く計画し、屋内外の繋がりやの創出を試みている(図9)。

(エ) 屋上庭園

ル・コルビュジエは「新しい建の5つの要点(Les 5 points d'une architecture nouvelle, 1926)」の1つとして屋上庭園(toit jardin)を提唱している(図10)。

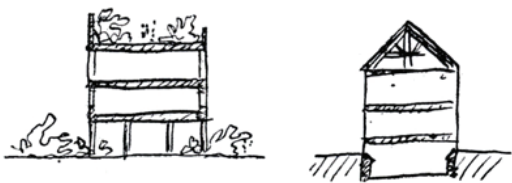


図10 「新しい建築の5つの要点」における屋上庭園(左)と在来屋根(右)

ル・コルビュジエは1945年、屋上庭園に対して次のように記述している。

「鉄筋コンクリートの屋根の保蔵に一番いいのは、庭をつくることだと経験から教えられたと述べた。それは膨張収縮による被害を中和する役目を果してくれる」^{注15)}

このように、建築制作活動を通して躯体被覆の必要性を示し、都市部や農村部などに数多く屋上庭園を用いている。典型的な記述として、ル・コルビュジエはラ・トゥーレットの修道院(Couvent Sainte Marie de la Tourette, 1953)の屋上庭園を、次のように説明している(図11)。

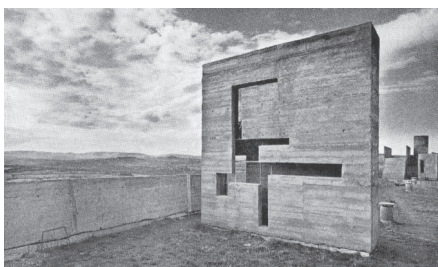


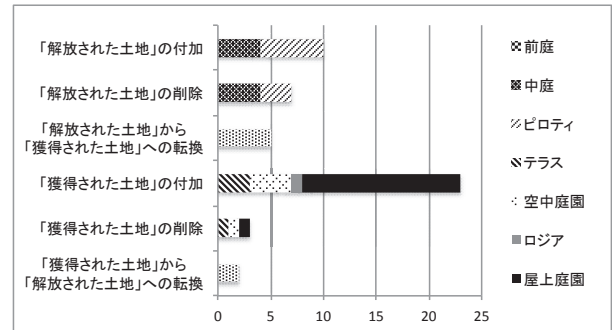
図11 ラ・トゥーレットの修道院の屋上庭園

「修道院の屋根も教会堂のそれも、うすい土の層で蔽い放しで、風や、小鳥や、その他種子運びの手段の偶然

にまかして、防水と保温の役目を保証する。鐘楼へは屋根から行ける。その屋根は、草を生やして熱膨張(寒暑)に対しコンクリートを保護している」^{注16)注17)}。

(2) 制作過程における庭園類型の変化(表3, 4)

表3 制作過程における庭園の類型



ア. 「解放された土地」の付加

地上の庭園である「解放された土地(Le sol libéré)」のうち、前庭に関しては敷地条件や設計条件に起因するところが大きく、制作過程における変化は概ね確認できない。一方、初期案で確認できない中庭とピロティが後期案で付加されるという変化が、建築制作活動を通して確認出来る。

中庭に関する典型として、ジョセフ・アノー邸(Villa Joseph et Hanau, 1926)では、初期案で矩形に計画されていた住居棟が後期案になると分棟化され、中庭を構成するようになる。

一方、ピロティに関しては、海岸沿いに計画されたロスコフの生物学研究所(Station biologique, 1939)に典型が確認出来る。初期案で庭園を分断していた建築全体が、建築制作活動後期にピロティとして迫り上げられ、庭園相互が視覚的にも物理的にも一体化している^{注18)}(図12,13)。

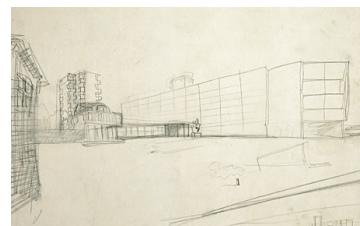


図12 ロスコフの生物学研究所の庭園(初期案)



図13 ロスコフの生物学研究所の庭園(後期案)

イ. 「解放された土地」の削除

制作過程における「解放された土地」の削除は、変化数こそ多くないものの、都市部や郊外を主に、建築制作活動を通して確認出来る。

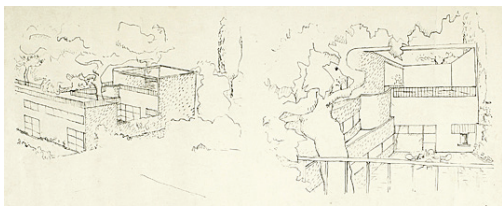


図 14 ラ・ロッシュ=ジャンヌレ邸の中庭（初期案）



図 15 ラ・ロッシュ=ジャンヌレ邸（後期案）

典型であるラ・ロッシュ=ジャンヌレ邸(Maison La Roche-Jeanneret, 1923)に関しては、2つの住戸に囲まれるように中庭が配され、西側にピロティが計画されている初期案に対し、後期案では住戸を並列に計画することで中庭を削除し、ピロティの位置も東側へと変更されている。この計画変更は、ひとつの塊をなす2つの住居を計画する際の施主の要望と、建築区域制限や古い樹木の尊重などの制約を満たすためである^{注19)}(図 14,15)。

また、レマン湖畔の小住宅(Petite Villa au Bord du Lac Léman, 1925)では、住居部分をピロティで持ち上げることで庭園を計画している初期案に対し、後期案ではピロティが確認できなくなり、地盤面に接した住居を計画している(図 16,17)。

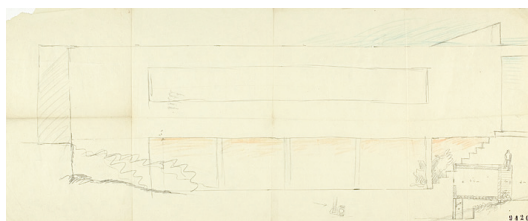


図 16 レマン湖畔の小住宅のピロティ（初期案）

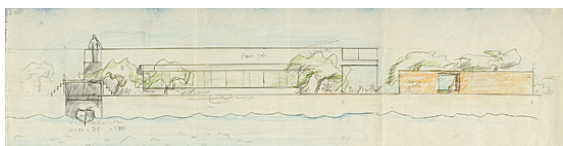


図 17 レマン湖畔の小住宅（後期案）

ウ. 「解放された土地」から「獲得された土地」への転換

「解放された土地」から「獲得された土地」への転換は、少数ではあるが1940年代までの建築計画に確認出来る。メイエル邸(Villa Meyer, 1925)では、初期案で「解放された土地」である中庭を計画し、植栽を設けることで建築に自然環境を取り入れているものの、後期案では「自由な平面(Le Plan Libre)」を検討する過程で中庭を建築内に組み込み^{注20)}、「獲得された土地」である空中庭園と屋上庭園へと変化させている(図 18,19)。

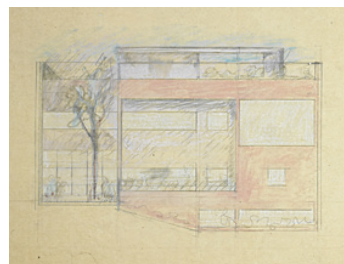


図 18 メイエル邸（初期案）

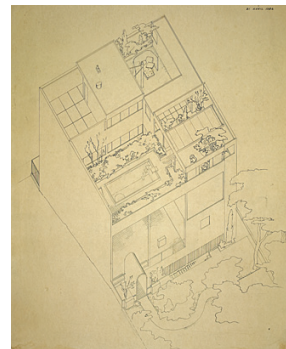


図 19 メイエル邸（後期案）

これは、周囲からの視線という外在的な要因に対応するための計画変更であり、庭園を非地上へと変更することで、私的な庭園を創出している^{注21)}。

エ. 「獲得された土地」の付加

非地上の庭園である「獲得された土地(le sol conquis)」のうち、ロジアに関しては、制作過程における有無の変化は概ね確認できない^{注22)}。

一方、1930年代以前の都市部の作品において、空中庭園が制作過程で付加されている。典型であるヴィラ型共同住宅(Immeubles-villas, 1925)に関しては、初期案で計画されていた矩形の共同住宅が、後期案では各住戸の庭園として空中庭園が付加され、都市居住における自然の捉え方に1つの解を示している^{注23)}(図 20,21)。

表 4 経年変化の確認出来る作品(付加を○、削除を×で示す)

年	作品名	庭園形式													
		初期案							後期案						
		前庭	中庭	ピロティ	テラス	空中庭園	ロジア	屋上庭園	前庭	中庭	ピロティ	テラス	空中庭園	ロジア	屋上庭園
1922	Maison Citrohan / type FLC20716	●				●			●		○		×		
1922	Immeubles-villas	●						●	●	○	○		○		●
1923	Villas La Roche-Jeanneret	●	●					●	●	×	○				●
1925	Villa Meyer	●	●						●	×			○		
1925	Petite Villa au Bord du Lac Léman	●		●				●	●		×				●
1926	Armée du Salut, Palais du Peuple	●		●	●			●		●	×				
1926	Villa Cook	●		●				●		●					○
1926	Maison minimum	●						●	●		○				×
1926	Villa Joseph et Hanau	●			●			●	○		●				
1927	Palais de la Société des Nations	●	●					●	●	×					●
1927	Villa Planeix	●						●							○
1928	Ville Church	●		●				●		●					○
1928	Villa Baizeau	●		●				●	●		●		○		●
1929	Armée du Salut, Cité de Refuge											●			
1933	Immeuble, 24, rue Nungesser-et-Coli				●							●			○
1934	D.L.Dubois														○
1935	Musées de la ville et de l'état - Paris			●						●					○
1936	R.A.M., habitation d'un médecin	●						●		○					
1937	Immeuble Félix											○			
1937	Vélodrome d'hiver, étude d'appartements	●		●				●		×					○
1938	Réorganisation agricole, ferme et village radieux	●		●				●		×					○
1939	S.P.A., maisons pour ingénieurs et contre-maitres	●						●	●		○				●
1939	Place de la Mairie	●		●				●		×					○
1939	Station biologique	●						●		●					
1944	Unités d'habitation			●						●			○		○
1944	Recherche sur les unités d'habitation			●						●					○
1947	Palais des Nations Unies	●	●					●	●		○				
1948	Basilique	●	●					●	×						○
1951	Maison des pèlerins														○
1951	Logis à bas prix 110m ² pour "Village 750 habitants"														○
1952	Maisons Jaoul	●						●	●	○					●
1953	Villa Chimantbai	●		●				●	●		●		○		●
1954	Mill Owners Association											○			
1955	Villa Sarabhai	●						●							○
1956	Musée	●						●							○
1956	Maisons de vacances 3,66 x 3,66	●						●	●	○					●

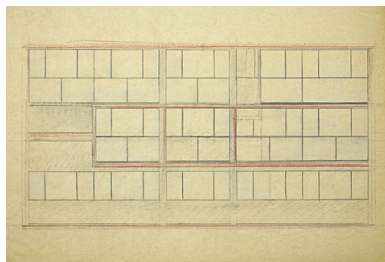


図 20 ヴィラ型共同住宅 (初期案)

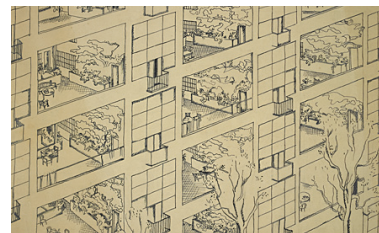


図 21 ヴィラ型共同住宅 (後期案)

また、制作過程における屋上庭園やテラスの付加は、敷地条件を問わず、建築制作活動を通して数多く確認出来る。ベゾー邸(Villa Baizeau, 1928)やサラバイ邸(Villa Sarabhai, 1955)では、環境負荷の対策と景観への配慮を理由として^{注24)}、屋根から屋上庭園へと変化している(図22,23)。



図22 サラバイ邸(初期案)

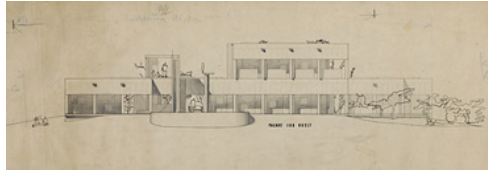


図23 サラバイ邸(後期案)

オ. 「獲得された土地」の削除

制作過程における「獲得された土地」の削除は数少ない。救世軍,民衆の宮殿(Amée du Salut, Palais du Peuple, 1926)の計画では、パラソル付きの屋上庭園が計画された初期案を、宿泊室増加のために後期案では削除し、居室へと変更している(図24,25)。

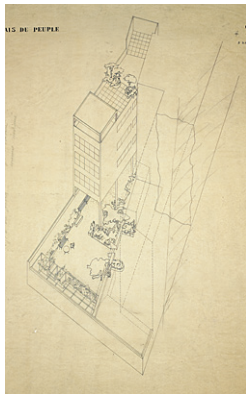


図24 救世軍,民衆の宮殿の屋上庭園(初期案)

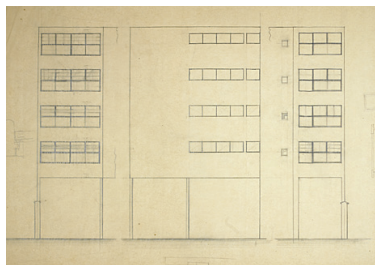


図25 救世軍,民衆の宮殿(後期案)

カ. 「獲得された土地」から「解放された土地」への転換

制作過程において、「獲得された土地」から「解放された土地」への変遷は概ね確認できない。ただし例外として、最小限住宅(Maison minimum, 1926)では、変更理由は定かではないものの、初期案の1つとして計画されたテラスの案が後期では廃止され、一方で、ピロティ下に庭園が付加された案が提案されている(図26,27)。

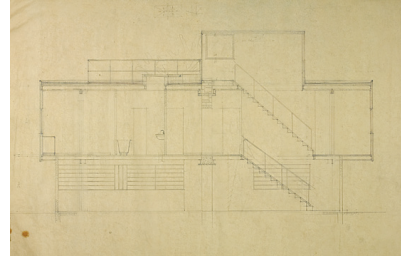


図26 最小限住宅の屋上庭園(初期案)

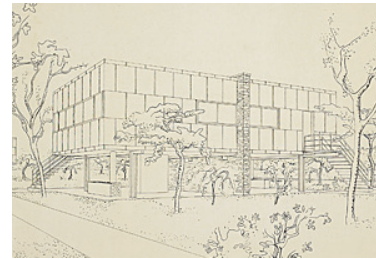


図27 最小限住宅のピロティ(後期案)

2. 屋根の形状

(1). 屋根形状の種類

前述したように、ル・コルビュジェは「新しい建築の5つの要点(Les 5 points d'une architecture nouvelle, 1926)」の一つに屋上庭園(toit jardin)を掲げ、伝統的な屋根の建築語彙を否定することで近代建築言語を確立している^{注25)}。「新しい建築の5つの要点」は、量産住宅を理念とする型の探求であった。そして、この模索は建設方法の提案であるドミノ住宅(Maison Dom-Ino, 1914)の建設システムとも直結する。ドミノは水平スラブと柱による建設方法であり、用いられた挿絵の屋根はシトロアン住宅(Maison Citorohan, 1920)以降に展開される水平スラブの屋根で描かれている(図28)。

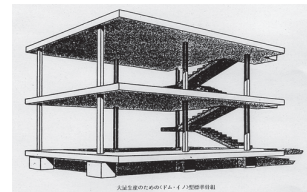


図28 ドミノ住宅(Maison Dom-Ino, 1914)

然し乍ら、ドミノの応用は、水平スラブを形態的特徴とするシトロアン住宅より前に、ヴォールト屋根によって構成されるモノル住宅 (Maison Monol, 1919) として用いられ、周辺環境との関係性が模索されている。つまり、ル・コルビュジェの屋根には大枠として2種類の型が用いられ、純粹なる幾何学形態では表現できない主題も含まれていると推測できる。

ア. 「モノル型」

モノル住宅 (Maison Monol, 1919) で初出された屋根型であり、建築作品への適応事例は多くないものの、設計活動を通して断続的に用いられている (図 29)。モノル型屋根はドミノ・システムの量産住宅の原理を水平方向へ応用したものであり、連続するヴォールトによって生み出される自然豊かな景観との視覚的・動線的な連続性が主題とされている。

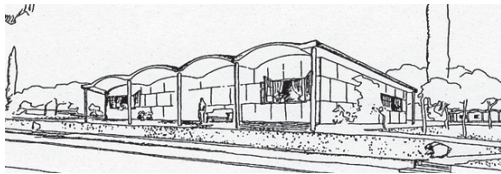


図 29 モノル住宅 (Maison Monol, 1919)

「木立の奥に建つこの住宅に求められたことは、なるべく見えないものにする事だった」^{注26)}

イ. 「シトロアン型」

シトロアン住宅 (Maison Citorohan, 1922) で提唱された陸屋根の型であり、設計活動を通して数多くの建築作品に用いられている (図 30)。シトロアン型はドミノの原理を鉛直方向に応用したものであり、従来の建築様式である「尖った屋根 toit pointu」を水平スラブによって否定することで、純粹なる幾何学形態を生み出している。さらに、正規模の住居単位 (L'Unité d'Habitation à Marseille, 1945) に関する次の記述のように、対比による景観との調和が模索されている。

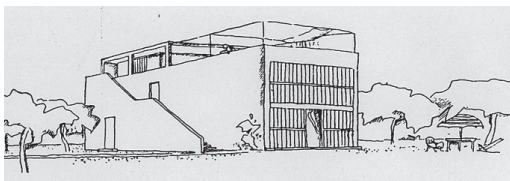


図 30 シトロアン住宅 (Maison Citorohan, 1922)

「対比によって美しさを、その対極をつくって、粗さときめ細やかさとの、鈍いものと輝くものとの、精密さと偶然との間の対話をつくらう」^{注27)}

(2) . 制作過程における屋根形状の経年変化 (表 5)

1910年代から1920年代初頭は、概ね全ての作品が水平スラブもしくはヴォールト屋根のいずれかで計画され、制作過程における屋根型の変更は概ね確認できない。一方、ベジー邸 (Villa Baizeau, 1928) の制作過程でシトロアン型の水平スラブをパラソル屋根へと変化させたことを皮切りに、1920年代末葉以降に屋根形状の変化数は増加している。

ア. 「モノル型」のバリエーション

「モノル型」のバリエーションは、設計活動を通して確認出来る。週末住宅 (Maison de week-end, 1935) では、制作過程で屋上緑化と地盤面の距離を変化させ、「モノル型」の屋根と大地との融合を試みている。また、サラバイ邸 (Villa Sarabhai, 1955) では、ヴォールト屋根の端部を一方向だけ閉じることで、外部空間への視線や意識の方向性を生み出し、さらに、パリ郊外の週末住宅 (Une maison de week-end en banlieue de Paris, 1935) においては、北側ほど収束していくフレシネ型ヴォールトの初期案を、並進するヴォールト屋根へと変更することで、水平の方向性の強調や施工性の向上を試みている (図 31,32)。

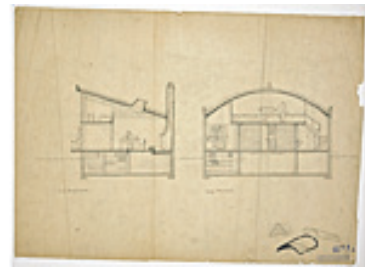


図 31 パリ郊外の週末住宅 (初期案)



図 32 パリ郊外の週末住宅 (後期案)

また、ナンジェセール・エ・コリ街 24 番 (Immeuble, 24, rue Nungesser-et-Coli, 1933) を典型として、「モノル型」の連続するヴォールト屋根の一部を、制作過程で「モノル型」の派生である傾斜屋根や湾曲屋根へと変化させる事例が確認できる。それらは、採光や通風をはじめとする熱負荷の操作が目的であり、環境負荷の低減が意図されている。

さらに、新時代館 (Le Pavillon des Temps Nouveaux, 1937) をはじめとするパビリオン建築において、ル・コルビュジェは輸送の問題に配慮した屋根型の変化を行なってい

表 5 経年変化の確認出来る作品

年	作品名	a	b	c	d	e
1925	Immeubles-villas		●			
1926	Armée du Salut, Palais du Peuple			●		
1926	Garage Raspail	●				
1926	Stade Cardinet		●			
1926	Villa Cook				●	
1928	Projet Wanner		●			
1928	Villa Baizeau			●		
1928	Ville Church				●	
1929	Armée du Salut, Cité de Refuge				●	
1929	Imprimerie Draeger	●				
1929	Maison Jacquin			●		
1929	Maison Loucheur / Type RJ 2H			●		
1929	Maison Loucheur / Type 3 CH M			●		
1929	Maison Loucheur / Type 45 MS			●		
1929	Maison Loucheur / Tpe 2CH F			●		
1930	Apartement de Beistegui			●		
1933	Immeuble G.B.		●			
1933	Immeuble, 24, rue Nungesser-et-Coli	●				
1933	Schweiz. Rentanstalt, RA		●			
1934	D.L.Dubois, étude / Batiment B				●	
1935	Immeuble à Montmartre				●	
1935	Maison de week-end	●				
1935	Musées de la ville et de l'état - Paris			●		
1936	R.A.M., habitation d'un médecin			●		
1937	Pavillon des Temps Nouveaux	●				
1937	Pavillon des Temps Nouveaux / Garderie d'enfants	●				
1937	Maison de week-end Jaoul	●				
1938	Réorganisation agraire, ferme et village radieux / Silo		●			
1938	Réorganisation agraire, ferme et village radieux / Immeuble		●			
1938	Réorganisation agraire, ferme et village radieux / cooperative		●			
1947	Palais des Nations Unies - New York			●		
1948	Basilique, La Sainte-Baume / Le bergerie restaurée en chapelle musée	●				
1951	Ronchamp, Maison des pèlerins	●				
1952	Maisons Jaoul		●			
1952	Haute Cour et tapisseries	●				
1952	Urbanisme / Logis à bas prix 110m ² pour "Village 750 habitants"					●
1952	Bureau Thapar	●				
1953	Villa Chimambhai		●			●
1953	H.E.M., étude d'habitation / Type 44m					●
1954	Mill Owners Association			●		
1955	Villa Sarabhai	●				
1956	Musée			●		
1956	V2 station market				●	
1956	Villa Shodan				●	
1956	Etude petites maison / Lagny F4	●				
1957	Couvent de la Tourette				●	
1959	Maison des jeunes		●			

a	「モジュール」のバリエーション
b	「シトロアン型」から「モジュール」への転換
c	「シトロアン型」のバリエーション
d	「モジュール」から「シトロアン型」への転換
e	「モジュール」と「シトロアン型」の融合

る。それらは、「モノル型」が柱間を広くすることに優位性を持つことが要因であり、断面形状の変化や部材の軽量化によって、大スパン化を模索している。

イ. 「シトロアン型」から「モノル型」への転換

市街地の限られた敷地において、高さ規制や建蔽率などの法規制は屋根の形状と直結する。共同住宅 G.B. (Immeuble G.B., 1933) やガレージ・ラスパーユ (Garage Raspail, 1926) は、計画段階で建築規模が増大した際、敷地の高さ規定に準拠しつつ容積を確保するため、初期案の「シトロアン型」屋根をヴォールト屋根へと変更している。

そして、ジャウル邸(Maisons Jaoul,1952)をはじめとする郊外の計画において、「シトロアン型」から「モノル型」への屋根型の経年変化が確認できる (図 33,34)。これらは、現地産材料・現地施工による「モノル型」屋根が容易となったことが要因の一端であり、建築群としての景観や秩序を屋根型によって創出している。典型例である農業組合村 / 農業の再編 (Ferme et village radieux / reorganisation agraire, 1934) では「構造体の要素の統一は美の保証だ」^{注28)}と記し、住宅や納屋などの低層施設のみならず、高層階にもヴォールト屋根を用いることで、施設相互の視線を「モノル型」の屋根形状によって操作し、建築内部からの眺望までもを作り出している。



図 33 ジャウル邸 (初期案)



図 34 ジャウル邸 (後期案)

ウ. 「シトロアン型」のバリエーション

ジャカンの住宅 (Maison Jacquin, 1928) は、初期案の水平スラブを上部へと拡張し、建築の最上部に日陰の外部空間を作り出している。このような経年変化は、インドなど熱帯の地域に多く確認することができる。つまり、ル・コルビュジエは日陰を作る環境装置として屋根を付

加し、同時に屋根下を庭園化することで、厳しい気候へ適応させている (図 35,36)。

また、製糸業者協会会館 (Mill Owners Association, 1954) に見られるように、「シトロアン型」屋根の一部に他の屋根型を付加することで、内部空間に採光や通風などの新たな機能を付加させている。



図 35 ジャカンの住宅 (初期案)



図 36 ジャカンの住宅 (後期案)

エ. 「モノル型」から「シトロアン型」への転換

「シトロアン型」から「モノル型」への変更と同様、法規制を要因とする経年変化は、少なからず確認できる。典型である市と国の美術館 (Musees de la ville et de l'etat-Paris, 1935) では、高さ制限に沿う屋根形状が用いられた初期案に対し、建築規模が縮小された最終案では、建築の主題をより明確にする「シトロアン型」へと変化させている。

また、クック邸(Villa Cook,1926) や R.A.M.,ある医師の住居(R.A.M., habitation d'un medecin, 1936)を典型として、低層の建築においても、ヴォールト屋根や勾配屋根から陸屋根への変更が散見できる (図 37,38)。これらは、ル・コルビュジエが「庭園は陸屋根への論理的な補助要素である」^{注29)}と述べているように、屋上緑化による躯体保護や雨水処理が意図されている。



図 37 クック邸 (初期案)



図 38 クック邸（後期案）

オ. 「モノル型」と「シトロアン型」の融合

1950年代に気候条件の厳しい計画が増えると、ル・コルビュジエは制作過程で「シトロアン型」と「モノル型」を融合する。

典型である人口 750 の村の安価な 110 m² の住宅 (Urbanisme Logis à bas prix 110 m² pour "Village 750 habitants", 1951)では、初期案のヴォールト屋根が、後期案では上部に水平のパラソル屋根が付加されている (図 39,40)。なお、この変化と同時に通風や日射、雨水処理、日除等といった環境に対する検討が数多く行われていることから、ル・コルビュジエは2つの屋根をダブルスキンとして用いていると推測できる。



図 39 人口 750 の村の安価な 110 m² の住宅（初期案）

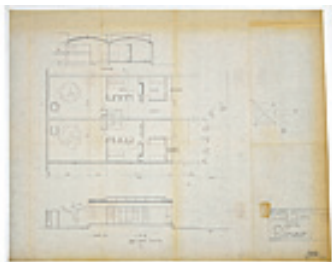


図 40 人口 750 の村の安価な 110 m² の住宅（後期案）

3. 屋上庭園 (表 6)

(1) 植栽の扱いによる屋上庭園の類型

ル・コルビュジエの屋上庭園(toit jardin)は、「新しい建築の5つの要点 (Les 5 points d'une architecture nouvelle, 1929)」の中で、次のように説明されている。

「技術的、経済的、快適性、そして情緒的な理由によって、屋上テラスが採用される」^{注30)}

ここでは、最上階の床スラブを植栽によって被覆することで、躯体構造の長寿命化が企てられる。加えて、ル・コルビュジエは、屋上緑化による景観的な潤い、あるいは健康増進などの主題を、個々の建築作品における屋上庭園の理念として断片的に述べている。

また、屋上庭園は第二次世界大戦後に、次のようにも説明されている。

「診断は可能である。1.屋上庭園は屋根の保護の形式である。鉄筋コンクリートの膨張伸縮を守る。2.市街地の屋根はそれで詩情豊かな場所となり得る（散水管を適切に配置）。3.村や農村の現代型として、これらは陸屋根または半円ヴォールト屋根の上を土で（20ないし30cm）覆うことが考え得る。風が、小鳥や昆虫が必要な仕事をしてくれる。自然はいつも環境に応じて必要な役割を見つけ出す」^{注31)}

ポルト・モリトールの共同住宅(Immeuble Nungesser et Coli - Appartement L.C., 1931)の屋上庭園に関するこの言説は、前述した1929年の主題に加え、「自然」のはたらき、すなわち人工的に築き上げた屋上庭園における自然的なものにまで着眼が置かれている。

すなわち、ル・コルビュジエは屋上庭園の概念として、植栽の取り扱いを主題としている。事実、ル・コルビュジエはこの言説の中で、屋上庭園を「手入れされた屋上庭園(toit jardin surveillés)」と「野生のままの屋上庭園(toit jardin laissé à l'état sauvage)」の2種類に分類している。

ア. 「手入れされた屋上庭園」

「手入れされた屋上庭園(toit jardin surveillé)」は設計活動を通して計画され、敷地条件や建築類型を問わず多用されている。

設計活動初期においては、シャルル・ド・ベステギ邸(Appartement de Beistégui, 1929)に関する次の記述のように、人為的な空間の構成に着眼が置かれている(図 41)。

「最上部は(動かすことのできない厳しい寸法の制約によって決められたが)小建造物でできていて感動的な造形ともなし得るのだ」^{注32)}

また、「日光浴場。立ったままでは、芝生と、4つの壁と、空にある雲のたわむれ以外は何も見えない」^{注33)}とも記され、屋上庭園によって都市部の雑多な環境との断絶を計っている。

さらに、1920年代後期以降になると、マルセイユのユニテ・ダビタシオン居単位(Unité d'Habitation de Marseille, 1945)に関する次の記述のように、配置構成だけでなく、彫塑的な形態にも着目するようになる(図 42)。

表 6 屋上庭園に関する記述

年	作品名	言説 (吉阪隆正訳)
1914	Maison Dom-Ino	
1922	Villa d'Auteuil	
1923	Maison de week-end	
	Villas La Roche-Jeanneret	D'ailleurs, le toit-jardin poursuit un but précis; c'est l'isolant assuré contre la dilation des terrasses de béton armé. (vol.1, p.65) そもそも屋上庭園ははっきりした目的に従っている。鉄筋コンクリートのテラスの膨張収縮を保護することである。
	Villa "Le Lac"	Nous sommes fin septembre. La flore d'automne s'est réveillée; le toit a verdi à nouveau: une toison épaisse de géraniums sauvages a tout recouvert. Le Jardin de toiture vit de lui-même, au gré du soleil, des pluies, des vents et des oiseaux porteurs de g
1924	Quartiers Modernes Frugés	Le charme de ces jardins suspendus apparaît nettement (vol.1, p.82) 屋上庭園の魅力ははっきりと目に見える。
1925	Villa Meyer	Ce jardin n'est point à la française mais est un bocage sauvage où l'on peut grâce aux futaies du Parc St-James se croire loin de Paris.... (vol.1, p.89) この庭は少しもフランス式にしてありません。そうではなくて、野生の林にし、サン＝ジャム公園の大木と相俟って、パリから遠く離れているように思われます。
1926	Armée du Salut, Palais du Peuple	
	Villa Cook	
	Maison Guiette	
	Maison minimum	
	Villa Stein/de Monzie	En établissant un jardin sur le toit, on met à l'abri de la dilation, en été, la dalle de béton. En hiver, le jardin isole du froid. Le jardin est un complément logique du toit plat. (vol.1, p.145) 屋上庭園をつくることで、夏はコンクリートの床版を膨張から守る。冬は寒さを防いでくれる。庭園は陸屋根への論理的な補
1927	Villas Weissenhof-Siedlung	ce toit-jardin est un authentique événement architectural nouveau porteur de charme et de poésie, un magnifique luxe gratuit. (vol.1, p.150) この屋上庭園は実質的な新しい建築的事象として、新しいよさと詩情をもち込み、無償の素晴らしい豊穡を与えてくれる。
	Ville d'Avray / Villa Church	
	Palais de la Société des Nations	Ici, tout en haut, sur l'immense Toit-Jardin, les haine peuvent cesser. (Une Maison - Un Palais, 1928, p.155) この広大な屋上庭園の高みにあって、憎悪は消え失せる。
1928	Villa Baizeau	la maison porte un parasol qui projette de l'ombre sur les chambres. (vol.1, p.176) 建物の上に傘があって全体に蔭をつくっている。
	Villa Savoye	L'étage d'habitation, avec son jardin suspendu, se trouvera élevé au-dessus de pilotis de façon à permettre des vues lointaines sur l'horizon. (vol.1, p.186) 居住階には空中庭園があり、ピロティによって押し上げられ、地平の彼方の眺めを得られる。
	Immeuble Wanner	
1929	Appartement de Beistégui	Le solarium. Si l'on reste planté sur ses pieds, on ne voit absolument rien que le gazon, les quatre murs et le ciel, avec tout le jeu des nuages (vol.2, p.54) 日光浴場。立ったままでは、芝生と、4つの壁と、空にある雲の戯れ以外は何も見えない。
	Maison J. Canneel	
1930	Immeuble Clart	La couverture des bâtiments devrait constituer le terrain par excellence de délasserment et d'hygiène de toute maison. (vol.2, p.67) 建物の覆いは、すべての家に於いて、気晴らしと健康のためのこの上ない場所としなければならない。
1931	Immeuble Nungesser et Coli - Appartement L.C.	Les vents feront le nécessaire, les oiseaux, les insectes; la nature y trouvera toujours son compte, elle a ce qu'il faut pour chaque circonstance. (vol.4, p.140) 風が、小鳥や昆虫が必要な仕事をしてくれる。自然はいつも環境に応じて必要な役割を見つけ出す。
1933	Lotissement Durand Oued	
	Petite maison, CMA	
1934	Immeuble pour ouvriers ZCHA	
1935	Résidence du président d'un collège	
1936	Ministère de l'éducation nationale (avec O. Niemeyer et L. Costa)	
1939	Ideal home, Arundell Clarke et Entwistle	
1944	Unités d'habitation, recherches	
1945	Unité d'Habitation de Marseille	Le toit-jardin est consacré: à la maternelle et garderie reliées à la crèche du 17e étage, à la culture physique, salle fermée et esplanade de plein air, piste de 300 m. (vol.4, p.179) 屋上庭園には、保育所と幼稚園と17層の託児所はつながっている。体育場としては屋内室、屋外広場と300mのコースがある。 Toit-terra
1946	Usine Duval	
1949	Villa du Docteur Curutchet	On a donc, tout d'abord, assuré par le dispositif général de la maison, la vue sur ce parc et l'on a créé une terrasse formant jardin suspendu, permettant précisément de goûter les bienfaits du ciel, de la lumière, du soleil et de l'ombre au-devant de la ma
	Roq et Rob	la toiture voûtée étant recouverte de béton, de terre et de plantes grasses. (vol.5, p.60) 屋根はヴォールトとしてコンクリートで葺き、その上に土と草木を生やす。
1950	Palais du gouverneur	La toiture du Palais: jardins et kiosques pour les réceptions nocturnes (vol.6, p.106) 公邸の屋上。夜間の接客のための庭園と亭。
1951	Palais des Filateurs	Le toit est utilisé avec le bar pour les fêtes de nuit. (vol.6, p.144) 屋上はバーを設け、夜の祝宴に用いられる。
	Villa Sarabhai	Les demi-cylindres des voûtes, une fois l'étanchéité assurée, sont recouverts de terre et le dessus de la maison devient un magnifique jardin de gazons parfaits et de fleurs... séduisantes que l'architecte auteur des plans aimerait plutôt rares qu'abusives
	Villa Shodan	Au-dessus, les locaux disposés dans l'espace d'un « jardin suspendu », à plusieurs niveaux, constituent trois appartements indépendants et cependant en contact. (vol.6, p.134) 上には「屋上庭園」があり、数層に、3つの部屋が独立してつながった形で配されている。
	Urbanisation quartier Rotterdam	
1952	Unité d'habitation de Rezé	
1953	Couvent Sainte Marie de la Tourette	La toiture du couvent lui-même, comme celle de l'église, sera recouverte d'une mince couche de terre laissée à l'initiative du vent, des oiseaux, et autres transporteurs de graines assurant une protection étanche et isotherme. (vol.6, p.42) 修道院の屋根も教会堂の屋根
1957	Unité d'habitation de Berlin - Charlottenburg	
1960	Unité d'habitation de Firminy	
1961	Carpenter Visual Arts Center	



図 41 シャルル・ド・ベイスティギ邸の屋上庭園

「私は<対比によって美しさを、その対極をつくって、粗さときめ細かさとの、鈍いものと輝くものとの、精密さと偶然との間の対話をつくらう>と自らにいい聞かせました」^{注34)}

また、「手入れされた屋上庭園」に関する記述は、鉄筋コンクリート(Béton armé)をはじめとする新建材にも着目している。ル・コルビュジェは、シトロアン型住宅(Maison Citrohan, 1920)において「床だけが鉄筋コンクリートのはっきりした形で、標準化された構造として断面に見られる。この最初の<屋上庭園>つきの小住宅は量産構造として、それからの年月の研究の要となったものだ」^{注35)}と記し、露出したコンクリートを用いることで、地域性のない均質な質感を実現している。ただし、1930年代以降になると、新建材に関する記述に加え、新素材を被覆する自然素材にも少なからず着眼が置かれている^{注36)}。

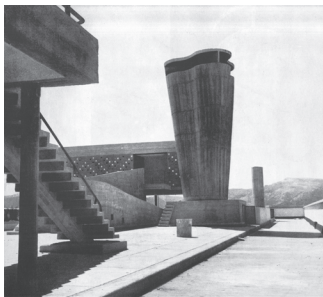


図 42 マルセイユの住居単位の屋上庭園

イ. 「野生のままの屋上庭園」

1920年代には「野生のままの屋上庭園(toit jardin laissé à l'état sauvage)」に関する記述は確認できず、1930年代以降の住宅を主に用いられる。

典型的な記述としては、ポルト・モリトールの共同住宅(Immeuble Nungesser et Coil - Appartement L.C., 1933)に関して記述された「放置された庭は反応し、死を待ってはいない。風、小鳥、昆虫が種を運んで来る。中にはここを適地とするものもある。庭の薔薇は造反を起こして大きな野薔薇となった。芝生は雑草やまむぎとなった。えにしだが生え、梅壇も。2本のラヴェンダの若木は灌木になった。太腸が支配し、風が(高い所では)支配する。

樹木も灌木も、己の要求に従い、具合のいいように地につき枝をはる。大自然が再び権利を回復した。この時から、この庭そのなるがままにまかされた。手を入れないのだ。苔が土を蔽ったり、土が痩せたりするが、植物はそれぞれに応じて・・・」^{注37)}があり、地上の大地を模した屋上庭園をつくることで、地上の生態系を介入させよう試みている(図43)。

当然、地上の大地との視覚的な連関は、屋上庭園からの眺望とも密接に関わる。ル・コルビュジェは、クック邸(Villa cook, 1926)の屋上庭園に関して「応接は家の一番上である。直接屋上庭園にでて、ブローニュの森の大木群が見下ろせる。もうパリには居らず、田舎にいるみたいだ」^{注38)}と記し、屋上庭園から土地固有の風景へ向けた眺望を用いて、屋上庭園と周辺環境との融合を試みている(図44)。

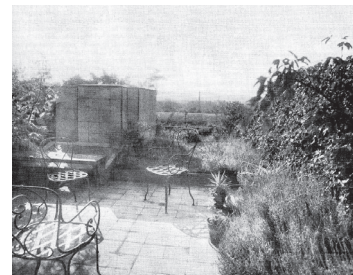


図 43 ポルト・モリトールの共同住宅の屋上庭園

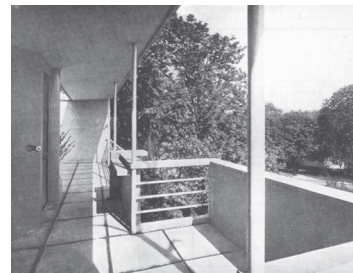


図 44 クック邸の屋上庭園

また、ロクとロブ(Roq et Rob, 1949)では、「この地の気候のよさと素晴らしい眺めの恵みを受けるためだ。それなら第一に視野を確保することだ——眺望だ——これはという風景を大切に。建築群にある家々は互いに相接して建ちながら、目は無限に広がる地平に向かって開かれている。そこに隣接する風景はあけていて、あるいは農耕が行われたり、あるいは自然のまま保たれたりしている。傾斜がむりなくこの解決をしてくれる。断面的に眺めの確保が可能だし、住宅開発としての住居の形式にも適している」^{注39)}と記すると同時に、「統一は美のもとだ」^{注40)}や「風景との融合」^{注41)}とも述べ、屋上庭園からの眺望に加え、外部から建築を見た際の建築と周辺環境との景観の調和にも着眼が置かれている(図45)。

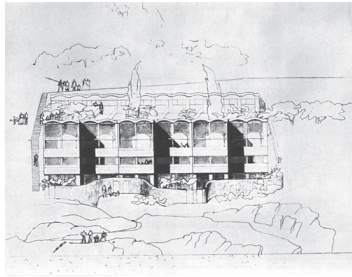


図 45 ロクとロブ

一方、「野生のままの屋上庭園」に配された植栽や土は、しばしば環境設備的な装置としても説明される。ル・コルビュジェは 1923 年のオートゥイユの独立住宅 (Villa d'Auteuil) に関して次のように記している。

「そもそも屋上庭園ははっきりした目的に従っているのだ。鉄筋コンクリートのテラスの膨張収縮を保護することだ。もし漏水のないきれいな天井が欲しいなら、屋上に庭をつくりなさい！ただし雨水を家の内部に排水することを忘れないように！」^{注42)}

また、ラ・トゥレットの修道院(Couvent Sainte Marie de la Tourette, 1953)に関して、「修道院の屋根も教会堂のそれも、うすい土の層で蔽い放しで、風や、小鳥や、その他種子運びの手段の偶然にまかして、防水と保温の役目を保証する。鐘楼へは屋根から行ける。その屋根は、草を生やして熱膨張(寒暑)に対しコンクリートを保護している」^{注43)}と記しているように、環境負荷低減の主題は設計活動後期においてより顕著となる。典型的な記述としては、アーメダバードの美術館(Musée, 1951)に関して書かれた「屋上に出て 45 余りの水盤の花園、それぞれ 50 m²に深さ 40cm の水をたたえたものを、楽しむことができるだろう。この水をはげしい太陽から守るために、密生する植物を水いっぱい植え、葉や花で青、緑、白、黄等の碁盤縞をつくる。これらの水には特別な粉末を与えて自然の循環を外れて過剰発育を促すようにする」^{注44)}があり、環境機能的な効果をより確実なものとするため、水盤までもが用いられる。

第 2 項 前川國男による設計の関与 (表 7)

前川國男は、帝国大学在籍中に読んだ *l'Architecture Vivante* (vol.XXIII)に掲載されていたヴォクリソンの別荘 (Villa à Vaucresson, Le Corbusier, 1923)によってル・コルビュジェを知り、さらに、当時助教授であった岸田日出刀 (1899-1966)に渡された 4 冊のル・コルビュジェ著書に共感したことで^{注45)}、ル・コルビュジェ事務所の門戸を叩くことを決意する。つまり、前川國男はル・コルビュジェの近代的な意匠に限らず、建築思想にも感嘆し、渡仏を決意している。

以降、ル・コルビュジェ事務所を離籍するまでの間 (1928.4.17-1930.4)に関与した建築作品として、ル・コルビュジェ財団アーカイブには、前川國男の名前が明記された図面が 50 枚確認できる^{注46)}。また、その他にも前川國男は自身の著書の中でヴァネール集合住宅 (Immeuble Wanner, 1928) の設計に携わったことを示している^{注47)}。

さらに、前川國男は独立後においても、ル・コルビュジェが東京の上野恩賜公園内に東京国立西洋美術館 (Musée d'Art Occidental, 1957)を計画する際には、坂倉準三や吉阪隆正とともに、実施設計や現場監理を担当している。

表 7 前川國男が設計に関与したル・コルビュジェ作品

竣工年	作品名	実現	庭園	
			地上	非地上
1928	Immeuble Wanner	計画案	○	○
1928	Centrosoyus	実現	○	-
1928	Villa Baizeau	実現	○	-
1929	Maisons Loucheur	計画案	○	-
1929	Maison J. Canneel	計画案	○	○
1929	Armée du Salut, Asile Flottant	実現	-	○
1929	Appartement de Beistégui	実現	-	○
1929	Aménagement de la Porte Maillot	計画案	○	-
1933	Maison minimum	計画案	○	-
1930	Villa Goldenberg	計画案	○	○
1929	Villa de Mandrot	実現	○	○
1957	Musée d'Art Occidental	実現	○	-

これら 12 作品の内、地上に庭園が計画されたものは 10 作品あり、建築の周囲に計画された前庭(jardin, cour)や建物下部に設けられたピロティ(pilotis)が計画されている。一方、非地上に庭園が計画されたものは 6 作品あり、テラス(terrasse)と屋上庭園(toit jardin)が用いられている。なお、屋上庭園(toit jardin)に関しては、ベイステギ邸 (Appartement de Beistégui, 1929)に代表されるように、すべからく陸屋根上部に「手入れされた屋上庭園(toit jardin surveillés)」として構成されている。

ただし、前川國男はこれらの作品における庭園に関しては、全く言及しておらず、素描も残していない。

第 2 節 前川國男によるサヴォワ邸の屋上庭園の解釈

420 万戸もの住宅が不足する敗戦後の切迫した状況下において¹⁴⁾、前川國男は封建的な家制度を解体し、住宅を近代化することこそが、新しい時代の生活像を提示できると考え、ル・コルビュジェが提唱する「住むための機械(machines à habiter)」に着目している^{注48)}。

「あなた方の心情と肉體とを、すこやかにはぐくみ育てるに相違ない。それは結局人間性の半封建的な性格から、眞に近代的な性格へ劃期的な飛躍のための強力な槌子である」^{注49)}

そして、その典型例としてサヴォワ邸(Villa Savoye, 1932)を挙げ、屋上庭園(jardin suspendu, solarium)を含む半屋外空間の素描を添えたうえで、ル・コルビュジェが度々言及している衛生機能の主題を日本に取り入れるべきと記している^{注50)}。

この言説において、前川國男はピクチャーウィンドウを始めとする形態要素に関しては一切記述しておらず、一見、形態的な特徴にはさほど関心を寄せていない様にも読み取れる。一方、掲載している素描からは(図46)、屋上庭園単体に着目しているというよりむしろ、空中庭園と屋上庭園が段状に連続する半屋外空間全体に着眼し、併せて、屋内居室との視覚的な連続性や、周辺環境への眺望にも関心を寄せていることがわかる。

以上のような傾向は、前川國男自身が撮影した写真に端的に現れている^{注51)}。前川國男が工事中のサヴォワ邸を訪れた際に撮影した写真は、ピクチャーウィンドウなどの形態的特徴のある構成要素を写すことなく、上下階がシームレスに繋がる段状の空間構成や、室内居室との視覚的な連続性が一望できる視点位置から撮影されている(図47)。

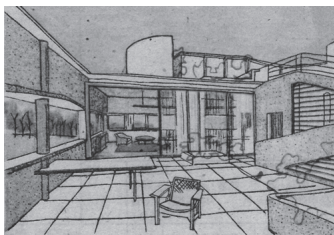


図46 前川國男によるサヴォワ邸の素描(1947) ^{注52)}

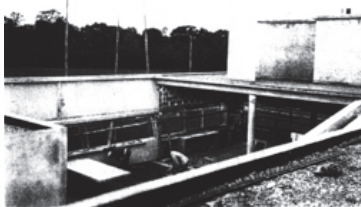


図47 前川國男が撮影したサヴォワ邸の写真(1930)

第3節 前川國男によるマルセイユのユニテ・ダビタシオンの屋上庭園の解釈

朝鮮戦争を特需とする高度経済成長期に入ると、前川國男は新制建築計画にマルセイユのユニテ・ダビタシオン(Unité d'Habitation de Marseille, 1952)の屋上庭園に関する概略図と言説を掲載し^{注53)}、高層建築における新たな手法の1つとして、多様な共同施設を包含する屋上庭園(toit jardin)を日本に普遍化させようと試みている(図48)。

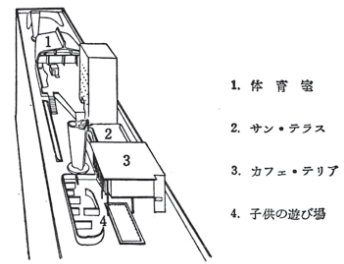


図48 前川國男によるユニテ・ダビタシオンの概略図(1957)

「わが国の現状は避難通路以外にはあまり利用されていないが、高層になると、屋上は地面に代わるものとして積極的に共同施設の場所として利用されるべきである」^{注54)}

なお、概略図には構成要素の彫塑的な形態がくまなく示されているのに加え、多数の共同施設の内、「体育館」、「サン・テラス」、「カフェ・テリア」「子供の遊び場」の4施設が凡例で示されている。ただし、本来は「託児所(Garderie d'enfants)」である施設を「カフェ・テリア」と誤記していることから、前川國男は *Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres complète, vol.4* [3]や *L'unité d'habitation de Marseille* [4]に掲載された図面資料を参照しつつ、不明箇所を推測しながらこの概略図を素描していると推測出来る^{注55)}。

つまり、前川國男はマルセイユのユニテ・ダビタシオンを訪れながらも^{注56)}、屋上庭園に配された各公共施設の用途に関しては把握しておらず、むしろ、単一平面上に配された構成要素の彫塑的な形態や共同施設の多様性に関心を示している。

第4節 結

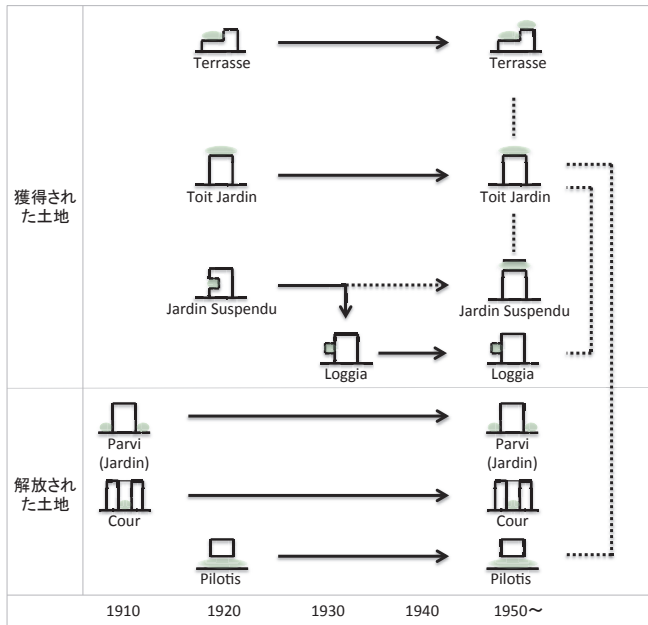
1. ル・コルビュジェの屋上庭園

(1) 地盤面の設定(表8)

ル・コルビュジェは庭園を、「解放された土地(le sol libéré)」と「獲得された土地(le sol conquis)」に大別し、「獲得された土地」の1つとして屋上庭園を提唱している。「解放された土地(le sol libéré)」は地上に設けられた庭園であり、ル・コルビュジェは建築制作活動を通して前庭(parvi, jardin)、中庭(cour)、ピロティ(pilotis)の3類型を一貫して用いている。なお、これらは1930年代以降の積極的な応用や展開が確認できず、庭園相互の関連性も希薄である。一方、非地上の庭園である「獲得された土地(le sol conquis)」に関しては、敷地の環境条件に応じてテラス(terrace)、空中庭園(jardin suspendu)、屋上庭園(toit jardin)、ロジア(loggia)の4類型を提唱し、設計活動後期になるほどに、類型相互を関係付けながら多様に応用している^{注57)}。また、屋上庭園は休息や余暇という点で「獲得された土

地」のピロティと意味的にも類同している^{注58)}。つまり、設計活動初期においては比較的独立した建築的要素であった庭園類型が、設計活動後期になるにつれて次第に融合的になっていくことが分かる。そして、他の庭園類型との連関が最も顕著な類型が屋上庭園であった。

表 8 Œuvres から見る庭園の変移



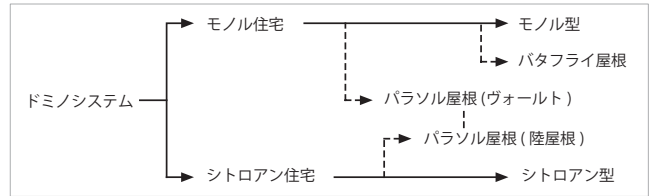
なお、当然のことながら、ル・コルビュジェの建築制作過程における「解放された土地」の計画は、敷地条件や建築プログラムの修正変更など外的諸条件に左右されることが多い。そのため、「解放された土地」の付加と削除はいずれも一定数あるものの、ル・コルビュジェが地上の庭園への眼差しを持ち続けているとは言い難い。その一方で、建設費の制限される計画案が多いにもかかわらず、一貫して「獲得された土地」に関する削除は数少なく、その付加が著しい。なかでも屋上庭園の付加は敷地条件を問わず一貫して多いことから、屋上庭園が設計活動を通して重要性を持っていることがわかる。

(2) . 屋根の形状 (表 9)

ル・コルビュジェは屋上庭園の基盤である屋根型を「モノル型」と「シトロアン型」という2種類に定義付けている。これらは、「新しい建築の5つの要点(Les 5 points d'une architecture nouvelle, 1929)」の出自であるドミノ住宅 (Maison Dom-Ino, 1914) の建設システムに直結したものであった^{注59)}。量産住宅を理念とする型の探求であるドミノは、水平スラブと柱による建設方法であり、用いられた挿絵の屋根はシトロアン住宅 (Maison Citorohan, 1920) 以降に展開される水平スラブの屋根で描かれている。しかしながら、ドミノの応用は、水平スラブを形態的特徴とするシトロアン住宅より前に、ヴォールト屋根によって構成されるモノル住宅 (Maison Monol, 1919)

として用いられ、周辺環境との関係性が模索されている。つまり、ル・コルビュジェの屋上庭園には大枠として2種類の屋根型が用いられ、純粋なる幾何学形態では表現できない主題も含まれていると推測できる。

表 9 Œuvres から見る屋根型の変移



「モノル型」はドミノの原理を水平方向へと応用したものであり、周辺環境との同化が主題とされ、派生的にパラソル屋根やバタフライ屋根へと展開する。一方、「シトロアン型」はドミノの原理を鉛直方向へと応用し、伝統的な屋根を否定することで、対比的な景観との調和を生み出している。つまり、ル・コルビュジェは量産や機能を主題とするドミノを基軸としながらも、屋根型の操作によって景観の主題を包含させ、気候条件が厳しくなるほどに、屋根型相互を多様に連関させている。当然、ル・コルビュジェは、いずれの屋根型においても屋上庭園を計画し続け、2つの屋根型相互を設計過程で多様に行き来することで、新たな屋上庭園の空間構成を見出している。

(3) . 屋上庭園

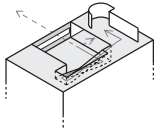
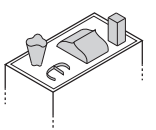
上記のような庭園と屋根型の操作によって創出される屋上庭園は、植栽の取り扱いに関する違いによって「手入れされた屋上庭園(toit jardin surveillé)」と「野生のままの屋上庭園(toit jardin laissé à l'état sauvage)」という2種類に大別される^{注60)}。「手入れされた屋上庭園」が庭園の水平面を人為的に押し上げた人工的環境の探求であるのに対し、「野生のままの屋上庭園」は、自然的環境と人工的環境を交差する建築的手法の一端を示すものであった。

なお、1920年代は「手入れされた屋上庭園」のみが用いられ、人為的な空間の構成によって、都市部の雑多な環境との断絶が計られている。また、造作に用いたコンクリートに関する記述も多く、地域性の少ない均質な質感が探求されている。

一方、1930年代以降になると、「手入れされた屋上庭園」に加えて「野生のままの屋上庭園」も用いられる。それらは、地上の大地を模することで、地上の大地と屋上庭園を視覚的に連続させ、同時に環境負荷低減の装置として、屋上庭園下の居室環境の向上を実現している。

2. 前川國男によるル・コルビュジェの屋上庭園の解釈 (表 10)

表 10 ル・コルビュジェの屋上庭園に対する前川國男の解釈

作品名	Villa Savoye, 1932	Unité d'Habitation de Marseille, 1952
前川國男が訪れた年	1930	1951
前川國男の解釈		
着眼点	眺望、室内から連続する段状の構成	屋上階の形態、共同施設の多様性

ル・コルビュジェの屋上庭園に対し、前川國男はサヴォワ邸(Villa Savoye, 1932)とマルセイユのユニテ・ダビタシオン(Unité d'Habitation de Marseille, 1952)の2作品のみに着目している。つまり、前川國男はル・コルビュジェの屋上庭園のうち、「手入れされた屋上庭園(toit jardin surveillés)」という一面のみに着眼を置いていると推測できる。これは、前川國男がル・コルビュジェ事務所に在籍していた当時、まだ「野生のままの屋上庭園」が提唱されていなかったことが要因と推測でき、前川國男はル・コルビュジェから直接享受した屋上庭園に限って言及している。

なお、サヴォワ邸(Villa Savoye, 1932)に関しては、形態的な特徴にさほど関心を寄せず、空中庭園と屋上庭園が段状に連続する半屋外空間全体に着目し、同時に屋内居室との視覚的な連続性や周辺環境への眺望にも着眼を置いている。一方、マルセイユのユニテ・ダビタシオン(Unité d'Habitation de Marseille, 1952)に関しては、構成要素の彫塑的形態や共同施設の多様性に関心を示しており、作品毎に異なる主題を捉えている。

図版出典

- 表 1: 筆者作成
表 2: 筆者作成
表 3: 筆者作成
表 4: 筆者作成
表 5: 筆者作成
表 6: 筆者作成
表 7: 筆者作成
表 8: 筆者作成
表 9: 筆者作成
表 10: 筆者作成

図 1: Le Corbusier: *La maison des homes*, librairie plon, Paris, 1942, p.107

図 2: 筆者作成

図 3: Le Corbusier: *Le Corbusie & Pierre Jeanneret Œuvres complète*, vol.1, Willy Boesiger et O.Stonorov, éd., Switzerland, P. 88

図 4: Ibid., vol.4, p.117

図 5: Ibid., vol.1, p.134

図 6: Ibid., vol.2, p.165

図 7: Ibid., vol.5, p.60

図 8: Ibid., vol.1, p.145

図 9: Ibid., vol.5, p.213

図 10: Ibid., vol.1, p.129

図 11: Ibid., vol.7, p.52

図 12: Foundation Le Corbusier: *Corbusier Archives vol.14*, Garland Publishing and Foundation, New York and Paris, 1981-1982, p.676, FLC24483

図 13: Ibid., vol.14, p.646, FLC24422

図 14: Ibid., vol.1, p.485, FLC15113

図 15: Ibid., vol.1, p.483, FLC15111

図 16: Ibid., vol.1, FLC9420

図 17: Ibid., FLC9419

図 18: Ibid., vol.2, p.404, FLC10378

図 19: Ibid., vol.2, p.420, FLC31538

図 20: Ibid., vol.1, FLC19087

図 21: Ibid., vol.1, FLC19069

図 22: Ibid., vol.10, FLC06675

図 23: Ibid., FLC06695

図 24: Ibid., vol.2, FLC12080

図 25: Ibid., FLC12090

図 26: Ibid., vol.3, FLC18333

図 27: Ibid., FLC18252

図 28: Le Corbusier, Willy Boesiger éd., *Le Corbusier&Pierre Jeanneret Œuvres complète*, Les Editions d'Architecture Artemis Zurich, Zurich, 1937, vol.1, p.23

図 29: Ibid., vol.1, 1937, p.30

図 30: Ibid., vol.1, 1937, p.31

図 31: Foundation Le Corbusier, Echelle-1: *Le Corbusier Plans*, 丸善出版, 2005, FLC 9277

図 32: Ibid., FLC 9242

図 33: Ibid., FLC 10044

図 34: Ibid., FLC 9920

図 35: Ibid., FLC 18395

図 36: Ibid., FLC 18396

図 37: Ibid., FLC 08330

図 38: Ibid., FLC 08302

図 39: Ibid., FLC 5989

図 40: Ibid., FLC 5615

図 41: op.cit., *Le Corbusie & Pierre Jeanneret Œuvres complète*, vol.2, p.53

図 42: Ibid., vol.5, p.215s

図 43: Ibid., vol.4, p.140

図 44: Ibid., vol.1, p.131.

図 45: Ibid., vol.5, p.60

図 46: 前川國男: 明日の住宅, 婦人公論, 中央公論新社, p.8, 1947.10

図 47: 松隈洋:ル・コルビュジェのアトリエで, 建築ジャーナル, p.51, 2012.10

図 48: 前川國男: 新制建築計画, p.118, 1957

参考文献

- [1] Le Corbusier: *Précisions*, Les editions G, 1930, (Le Corbusier: 『プレジション』, 鹿島出版会, 1984)
- [2] François de Pierrefeu, Le Corbusier: *La maison des homes*, Librairie Plon, Paris, 1942, (François de Pierrefeu, Le Corbusier, 西澤信彌訳: 『人間の家』, 鹿島出版会, 1977)
- [3] Le Corbusier, Willy Boesiger, ed.: *Le Corbusier Œuvres complètes, vol.4*, Les Editions d'Architecture Artem, Zurich, 1977
- [4] Le Corbusier: *L'unité d'habitations de Marseille*, Le Point, 1950

注釈

- 1) Le Corbusier: *Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres complètes, vols.8*, Willy Boesiger, ed., Zurich, Les Editions d'Architecture Artem, 1964, vol.1, p.89 (Le Corbusier, Willy Boesiger, ed., 吉阪隆正訳: 『ル・コルビュジェ全作品集』, 全8巻, A.D.A. 1978, p.82)
- 2) Ibid., vol.3, p.126, (吉阪隆正訳: p.108)
- 3) Ibid., vol.1, p.124, (吉阪隆正訳: p.110)
- 4) Ibid., vol.2, p.116, (吉阪隆正訳: p.114)
- 5) Ibid., vol.1, p.132, (吉阪隆正訳: p.118)
- 6) Le Corbusier: *Précisions*, Les editions G, 1930, p.44 (Le Corbusier 井田安弘, 芝優子訳: 『プレジション』, 鹿島出版会, 1984, p.77)
- 7) 例外として、サラバイ邸(Villa Sarabhai, 1951)では1階居室の前に設けられた半屋外空間を“terrace”と説明している。このように、「解放された土地(le sol libéré)」の1つとして「テラス」を扱っている作品も認められる。
- 8) op.cit., vol.2, p.165, (吉阪隆正訳: p.145)
- 9) Ibid., vol.5, p.54, (吉阪隆正訳: p.52)
- 10) Ibid., vol.1, p.41, (吉阪隆正訳: p.34)
- 11) Ibid., vol.1, pp.145-146, (吉阪隆正訳: pp.131-132)
- 12) Ibid., vol.4, p.105, (吉阪隆正訳: p.103)
- 13) Ibid., vol.4, p.108, (吉阪隆正訳: pp.106-107)
- 14) Ibid., vol.7, p.216, (吉阪隆正訳: p.216)
- 15) Ibid., vol.4, p.140, (吉阪隆正訳: p.138)
- 16) Ibid., vol.6, p.42, (吉阪隆正訳: p.42)
- 17) 1930年代以降になるとアーメダバードの美術館(Musée, 1951)に関して「屋上に出て45余りの水盤の花園、それぞれ50㎡に深さ40cmの水をたたえたものを、楽しむことができるだろう。この水をはげしい太陽から守るために、密生する植物を水いっばいに植え、葉や花で青、緑、白、黄等の基盤縞をつくる。これらの水には特別の粉末を与えて自然の循環を外れて過剰発育を促すようにする」(Ibid., vol.5, p.158, (吉阪隆正訳: p.154))と説明しているよう

に、インドなどの設計条件の厳しい敷地において屋上庭園に水盤を用いることで、躯体保護や環境機能的な効果をより顕著なものとしている。

- 18) Ibid., vol.4, p.23, (吉阪隆正訳: p.23)
- 19) Ibid., vol.1, p.64, (吉阪隆正訳: p.56)
- 20) Ibid., vol.1, p.87, (吉阪隆正訳: p.79)
- 21) Ibid., vol.1, p.89, (吉阪隆正訳: p.81)
- 22) 唯一、ユニテ・ダビタシオン (Unité d'habitation, 1944)の制作過程にロジアの付加が認められる。
- 23) Ibid., vol.1, pp.92-103, (吉阪隆正訳: pp.84-95)
- 24) Ibid., vol.1, p.145, (吉阪隆正訳: p.131)
- 25) Ibid., vol.1, pp.128-129
- 26) Ibid., vol.3, p.107
- 27) Ibid., vol.5, p.150
- 28) Ibid., vol.1, p.30
- 29) Ibid., vol.1, p.145
- 30) Ibid., vol.1, p.128
- 31) Ibid., vol.4, p.140
- 32) Ibid., vol.2, p.57, (吉阪隆正訳: p.47)
- 33) Ibid., vol.2, p.57, (吉阪隆正訳: p.47)
- 34) Ibid., vol.5, pp.190-194, (吉阪隆正訳: pp.182-184)
- 35) Ibid., vol.1, p.45, (吉阪隆正訳: p.37)
- 36) 屋上庭園のルポルターージュ(Reportage sur un toit-jardin, 1945)に関して「鉄筋コンクリートの屋根の保穫に一番いいのは、庭をつくることだと経験から教えられたと述べた。それは膨張収縮による被害を中和する役目を果してくれる」(Ibid., vol.4, p.140, (吉阪隆正訳: p.138))と記述しているように、自然素材による被覆の必要性を述べている。
- 37) op.cit., *Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres complètes*, vol.4, p.140, (吉阪隆正訳: p.138)
- 38) Ibid., vol.1, p.130, (吉阪隆正訳: p.116)
- 39) Ibid., vol.5, p.54, (吉阪隆正訳: p.52)
- 40) Ibid., vol.5, p.61, (吉阪隆正訳: p.59)
- 41) Ibid., vol.5, p.59, (吉阪隆正訳: p.57)
- 42) Ibid., vol.1, p.65, (吉阪隆正訳: p.57)
- 43) Ibid., vol.6, p.42, (吉阪隆正訳: p.42)
- 44) Ibid., vol.5, p.158, (吉阪隆正訳: p.154)
- 45) 岸田日出刀(1899-1966)から渡されたのは、*L'art décofatif d'aujourd'hui* (Le Corbusier: G. Grès et Cie, 1925)、*Vers une Architecture* (Le Corbusier: G. Grès et Cie, 1923)、*Urbanism* (Le Corbusier: G. Grès et Cie, 1925)、*Almanach d'architecture moderne* (Le Corbusier: G. Grès et Cie, 1925)の4冊である。(宮内嘉久: 『前川國男 賊軍の将』 晶文社, 2005, pp.24-26)
- 46) 50枚の内訳は、ベゾー邸(Villa Baizeau, 1928)4枚、ルシエール

の住宅(Maisons Loucheur,1929)3 枚、セントロソユース(Centrosoyus,1928)24 枚、カネールの住宅(Maison J. Canneel,1929)8 枚、救世軍の水上収容所(Armée du Salut, Asile Flottant,1929)3 枚、ド・ベステギのアパート(Appartement de Beistégui,1929)1 枚、ド・マンドロ夫人の別荘(Villa de Mandrot,1929)3 枚、ゴールドンベルク邸(Villa Goldenberg,1930)2 枚、ポルト・マイヨの整備計画(Aménagement de la Porte Maillot,1929)2 枚である。なお、佐々木宏によると、ル・コルビュジェ事務所内でサインをする習慣ができたのは 1929 年 5 月以降であるため、前川國男の入所直後の仕事に関しては、サインは記されていない(佐々木宏:『巨匠への憧憬』相模書房, 2000)。

47) 前川國男、宮内嘉久編:『一建築家の信條』, 晶文社, 1981, p.50

48) この素描と言説は、主婦向けに発行されている一般誌に掲載されたものであるが、ここで主張されている「近代化された住宅の必要性」の主題は、以降、前川國男によって度々言及され、弟子の浜ロミホにも受け継がれている(浜ロミホ: 日本住宅の封建性, 相模書房, 1949)。

49) 前川國男:「明日の住宅」, 『婦人公論』1947.10, p.8

50) サヴォワ邸(Villa Savoye, 1932)は前川國男がル・コルビュジェの事務所に在籍している期間(1928.4.17-1930.4)に着手された計画であり、前川國男は担当ではないものの、設計が進められていく過程を事務所内でつぶさに見ている(佐々木宏: 巨匠へ憧憬, 相模書房, pp.181-182, 2000)。

51) 前川國男が工事中のサヴォワ邸を撮影した写真のうち、前川建築設計事務所に保管されている写真は図 2 の写真に限られる。そのため、本稿ではこの写真のみから判断している。

52) 前川國男が婦人公論に掲載している屋上庭園の素描は、*Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres complètes, vol.2*に掲載された屋上庭園(solarium, jardin suspendu)の写真と構図が近似し、また植栽の形態や家具配置が類似している。そのため、前川國男は掲載された 16 枚の写真の中からあえてこの写真を選択し、模写を作成したものと推測出来る。



(写真: Le Corbusier, Willy Boesiger, ed.,: *Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres complètes, vol.2*, Les Editions d'Architecture Artem, Zurich, p.23, 1935)

53) この文献は技術者や建築の学生に向けて作られた技術指南書であり、アパートにおける共有部分の項目の 1 つとして屋上庭園が

示されている。

54) 前川國男:『新制建築計画』1957, pp.117-118

55) ル・コルビュジェが監修した当時の書籍には、屋上庭園に設けられた公共施設の種類が示されているものの、それぞれの公共施設の位置までは記されていない[3,4]。



(写真: Le Corbusier, Willy Boesiger, ed.,: *Le Corbusier Œuvres complètes, vol.4*, Les Editions d'Architecture Artem, Zurich, p.185, 1946)

56) 日本代表として CIAM8(1951)に出席した前川國男は、その前後にル・コルビュジェと共にヨーロッパ各地を周遊している。この旅は記録には残されていないため、旅行の詳細な行程は不明であるが、前川建築設計事務所の橋本功氏によると、その間にマルセイユのユニテ・ダビタシオンを訪れている可能性が高い。

57) たとえば、1949 年のロクとロブ(Roq et Rob)では、地中海を臨む段状のテラス形式が用いられているにも関わらず、ル・コルビュジェは「眺望」という関連から屋上庭園の呼称に読み替えている(Ibid., vol.5, p.54, (吉阪隆正訳: p.52))。また、1930 年代以降になると、中層階に設けられた空中庭園は計画されなくなるが、チマンバイ邸(Villa Chimanbhai, 1953)では、屋上庭園の上部に独立したパラソルを設け、このパラソル下の空間を空中庭園(jardin suspendu)として再解釈している(Ibid., vol.5, p.163, (吉阪隆正訳: p.155 は「屋上」としている))。さらにハッスイング邸(Villa Hutheesing, 1953)ではロジア部分をテラス=庭園(terrasse-jardin)としている(Ibid., vol.5, p.164, (吉阪隆正訳: p.156 は屋上庭園としている))。

58) たとえば、第二次世界大戦後のマルセイユの住居単位(L' Unité d' habitation à Marseille)では、ピロティにおいて本来の自動車交通よりも休息や余暇活動に重点が置かれ、屋上庭園の機能と類似している(Ibid., vol.5, p.194)

59) Le Corbusier, Willy Boesiger éd., *Le Corbusier&Pierre Jeanneret Œuvres complète*, Les Editions d'Architecture Artemis Zurich, Zurich, 1937, vol.1, pp.128-129

60) *Ibid.*, vol.4, p.140, (吉阪隆正訳: p.138)

第4章

前川國男による屋上庭園の実践

第1節 前川國男の建築作品における屋上庭園の概要

前川建築設計事務所の主要建築作品及び竣工時に建築専門誌に発表した全131作品中^{注1)}(表1)、屋上庭園は14作品あり、そのうちの10作品に「屋上庭園」もしくはそれに類する呼称が用いられている。また、屋上庭園の用途が明白であるにも関わらず呼称の示されていない作品が1作品ある(表2)。

独立前後期(1932-1945)に計画された屋上庭園は、小規模の私的用途に限られ、形態要素の少ない簡素な構成で計画されている。戦後第一期(1946-1950)になると、次第に造形的な形態要素が配されるようになり、長時間の利用が想定される。そして、戦後第二期(1951-1960)には、次第に大規模の建築に設けられた公共の用途へと変化し、単一平面に配された形態要素は、より彫塑的となる。さらに、戦後第三期(1961-1986)になると、用途や躯体構造の多様化とともに形態要素は減少し、植栽や自然素材を多用した段状の構成が用いられている(表3)。

表3 前川國男の建築作品における屋上庭園の概要

期	建築類型	用途	躯体構造	植栽	平面・立面構成
独立前後期	事務所 店舗	眺望 休息	RC	×	
戦後第一期	住宅	眺望 休息	W	×	
戦後第二期	公共建築 事務所	避難 眺望 休息	RC SRC	△	
戦後第三期	公共建築 住宅	観賞 眺望 休息 散策 など	S RC SRC	○	

表2 屋上庭園が設けられた前川國男とル・コルビュジェの実施作品

年	前川國男		Le Corbusier		
	作品名	呼称	作品名	呼称	
1917			Villa Schwob	-	
1924			Villas La Roche-Jeaneret	toit jardin	
			Villas Lipchitz - Miestchaninoff	terrasse	
1925			Villa "Le Lac"	toit jardin	
1926			Quartiers Modernes Frugés	toit jardin jardin suspendu terrasse	
			Villa Cook	toit jardin	
			Maison Guiette	toit jardin terrasse	
1927			Villa Stein / de Monzie	toit jardin terrasse-jardin	
			Villas Weissenhof-Siedlung	toit jardin sonnenbad	
1928			Villa Church	toit jardin	
1929			Villa Balzeau	terrasse	
1931	明治製菓銀座売店	屋上園	Armée du Salut, Asile Flottant	solarium jardin de toiture	
			Appartement de Beistegui	solarium jardin de toiture	
			Villa de Mandrot	-	
1932	木村産業研究所	(屋上バルコニー)	Villa Savoye	jardin terrasse jardin supérieur jardin suspendu bain desclieil solarium	
			Pavillon Suisse, Cité Universitaire	solarium terrasse	
1933			Immeuble Nungesser et Coli - Appartement L.C.	toit jardin solarium	
1935			Maison de week-end (Henfel)	-	
1949	戦後第一期	屋上の改造住宅 (Residence of Mr. A)	ソラリウム 日光浴場	Villa du Docteur Curutchet	toit jardin barsati
1952		日本相互銀行本店	屋上	Unité d'Habitation de Marseille	toit terrasse
1955				Unité d'habitation de Rezé	toit terrasse
1956				Villa Sarabhai	jardin terrasse couverte terrasse ouverte
				Haute Cour	terrasse
1957		岡山県庁舎	屋上庭園	Unité d'Habitation de Briey en Forêt	-
1958				Secrétariat	toit terrasse
				Unité d'Habitation de Berlin - Charlottenburg	toit terrasse
1960		学習院大学	屋上の庭園		
1961		東京文化会館	屋上庭園 屋上テラス		
1962		岡山県総合文化センター	屋上		
1963		学習院大学図書館	屋上 (息抜きの場所)		
1967				Unité d'Habitation de Firminy	terrasse sur le toit
1971	戦後第三期	前川自邸(新)	-		
		弘前市立病院	屋上		
1979		藤枝市立図書館	屋上庭園 屋上テラス 屋上広場		
1980		長岡ロングライフセンター	屋上庭園		
1986		国立国会図書館新館	屋上庭園		

凡例:	前川國男がル・コルビュジェ事務所で図面を書いた建築作品(注2)
★	前川國男が屋上庭園に関して言及している建築作品
	前川國男が訪れた建築作品

表 1 前川國男の主要建築作品及び竣工時に建築専門誌に発表した作品

作品番号/作品集頁	年	名称	敷地場所	規模	躯体	掲載誌	屋上庭園
no.2/pp.70-72	1932	木村産業研究所	青森県弘前市	地上2階	RC	文00-1	○
no.3/pp.77-78	1935	森永キャンディーストアー売店群	東京都中央区等	地上2階	RC		
	1936	千葉邸	東京都		W		
	1936	守屋邸(M邸)	東京都	地上2階	W	国37-6	
	1938	立命館高等工業学校	京都府京都市	地上2階	W	建築年鑑S15	
no.19/p.93	1938	笠間邸	東京都目黒区	地上2階	W	建64-11	
no.18/pp.89-90	1939	上海華興商業銀行総社宅	上海	地上3階	レンガ		
	1940	秋田日満技術工養成所	秋田県秋田市	地上1階	W	現代vol.14, 建61-6	
	1940	社会事業会館	東京都港区	地上2階	W	新41-5, 世41-4	
no.20/p.94	1940	岸記念体育会館	東京都千代田区	地上2階	W	新41-5, 雑41-5, 世41-6	
	1940	有峰発電所	富山県		-		
	1940	和田川発電所	富山県		-		
	1942	酒田日満技術工養成所	山形県酒田市	地上2階	W		
	1942	九州日満鉱業技術工養成所	福岡県直方市	地上2階	W		
no.21/pp.95-98	1942	前川國男自邸	東京都品川区	地上2階	W	建64-11, 72-1	
	1944	満州飛行機工員宿舍育成工寮	奉天		レンガ		
	1944	工員宿舍独身寮	奉天		レンガ		
	1944	職員宿舍集合住宅	奉天	地上2階	-		
	1945	満州飛行機発動機工場	奉天	-	RC/レンガ		
no.23/pp.107-109	1947	紀伊国屋書店	東京都新宿区	地上2階	W	建61-6	
	1947	古垣邸(某氏邸)	東京都品川区	地上2階	W	新48-10	
	1948	コロソバ教会	東京都豊島区	地上2階	W		
	1948	甲府市立病院	山梨県甲府市	地上2階	W		
no.24/pp.110-112	1948	慶応病院	東京都新宿区	地上2階	W		
no.25/pp.113-115	1949	NHK支局・分局	岡山県岡山市等	地上2階	W		
	1949	崖上の改造住宅(Residence of Mr.A) オーレル邸		地下1階 地上2階	(W)	新49-10	○
	1950	日本動物愛護協会家畜病院	東京都渋谷区	地上1階	RC		
no.27.51/pp.126-127,191	1950	日本相互銀行支店群	東京都豊島区		RC, SRC	国53-1, 新57-8, 知83-7, 知83-7	
no.22/pp.103-105	1950	ブレモス/チェーリー・コールマン両氏邸	-	地上1階	W	新50-3	
	1950	ブレモス/鮎川邸	東京都新宿区	地上1階	W	新50-3	
	1950	ブレモス/北村・西園寺邸	東京都新宿区	地上1階	W	新50-3	
	1951	ブレモス/ジェームス・オーレル邸	東京都港区	地上1階	W	新51-8	
no.28/p.128	1952	青森県立弘前中央高等学校講堂	青森県弘前市	地上2階	RC		
no.26/pp.123-125	1952	日本相互銀行本店	東京都中央区	地下2階 地上10階	SRC	文53-1, 新53-1, 国53-1, Design58-4, 雑53-9	○
	1953	東京国立近代美術館改修	東京都中央区	地下1階 地上4階	RC	文53-3	
	1953	NHK日光寮	栃木県日光	地上2階	W		
	1953	原爆傷害研究所(ABCC)職員宿舍	広島県広島市	地上2階	RC	国54-3	
	1953	AFP支局長邸 (フランス通信社東京支社社宅)	東京都港区	地上1階	W	新53-10	
no.29/pp.129-131	1954	神奈川県立図書館・音楽堂	神奈川県横浜市	地下1階 地上3階	RC/一部S	文55-1, 新53-3.55-1, 近55-1, Design56-12, 雑55-2	
	1954	西原衛生工業所本社ビル	東京都港区	地上3階	RC	文55-4.5, Design58-4	
no.30/pp.132-133	1954	MIDビル	東京都新宿区	地下1階 地上3階	RC	Design58-4	
no.31/pp.135-136	1954	NHK富士見ヶ丘クラブハウス	東京都杉並区	地上2階	W	新57-9	
	1954	NHK第二池ノ上寮	東京都世田谷区	地上2階	RC		
no.32/pp.137-139	1955	国際文化会館	東京都港区	地下1階 地上3階	RC	新54-9.55-7, 国55-1.8, 雑56-6, This is Japan '57	
no.33/pp.140-141	1956	福島(県)教育会館	福島県福島市	地上2階	RC	文56-10 新56-2.10	
	1956	カナダ大使館	東京都港区	地下1階 地上2階	RC		
no.34/pp.142-143	1957	岡山県庁舎	岡山県岡山市	地下1階 地上9階	SRC	新53-9	○
	1957	高知酒造会館	高知県高知市	地上2階	RC		
	1957	日本石油化学川崎工場事務所	神奈川県川崎市	地上2階	RC	文58-3	
	1957	三栄商事本社ビル	愛知県名古屋	地下1階 地上6階	RC	新58-8	
	1957	NHK職員住宅羽沢アパート	東京都渋谷区	地上7階	RC	Design58-4	
	1957	成田邸	東京都目黒区	地上2階	W		
	1957	阪田邸	東京都港区	地上2階	W		
no.75/p.262	1958	弘前市庁舎	青森県弘前市	地上4階	RC		
no.44/pp.171-174	1958	ブリュッセル万博博覧会日本館	ブリュッセル	地上1階	S	文58-10, 国57-1.58-8, Domus'58 No.345 Werk'58-10	
no.39/pp.158-160	1958	晴海高層アパート	東京都中央区	地上10階	SRC	文59-2, 新57-1.59-2, 国59-2.3, Design58-4	
no.40/pp.161-162	1958	阿佐ヶ谷テラスハウス	東京都		-		
	1958	加藤邸	東京都渋谷区	地上1階	W	モ50	
	1959	スウェーデン大使館	東京都港区	地下1階 地上2階	RC		
	1959	日本放電加工研究所溝ノ口工場	神奈川県川崎市	地上2階	S		
no.35/pp.144-145	1960	世田谷区民会館	東京都世田谷区	地下1階 地上2階	RC	文59-7, 新59-7, 近59-7	

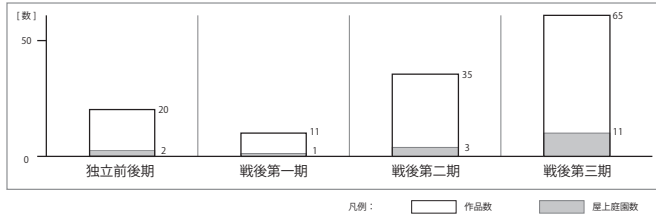
no.37/pp.147-150	1960	京都公会館	京都市京都市	地下1階 地上3階	RC/一部S	文60-7, 新60-7, 近60-7, 現77-6,	
no.36/p.146	1960	学習院大学	東京都豊島区	地上4階	RC	文60-10, 新60-3,10, 近60-10	○
	1960	世田谷区役所第一庁舎	東京都世田谷区	地下1階 地上5階	RC	新60-1	
	1960	林邸	東京都杉並区	地上2階	W		
no.38/pp.151-154	1961	東京文化会館	東京都台東区	地下2階 地上5階	SRC/一部S	文61-6, 新61-6, 近60-7, 国61-7, 建61-6	○
	1961	国立国会図書館	東京都千代田区	地下1階 地上6階	SRC	文54-8, 新54-9, 近54-8, 国54-8	
	1961	有本芳水記念碑	岡山県岡山市		-		
no.53/p.196	1962	神奈川青少年センター・ホール	神奈川県横浜市	地下1階 地上5階	RC/一部S	現77-6, 建築63-1	
no.52/pp.192-193	1962	岡山県総合文化センター	岡山県岡山市	地下1階 地上3階	RC	建62-8	○
	1962	ベニヤ商会本社ビル	東京都港区	地下1階 地上7階	RC		
	1962	ねむり塚	岡山県岡山市		-		
no.55/pp.199-200	1963	学習院大学図書館	東京都豊島区	地上4階	RC	建64-1, 文64-1, 新64-1	○
no.54/pp.197-198	1963	岡山美術館	岡山県岡山市	地下1階 地上2階	RC	文64-12, 新64-12, 近70-12	
	1963	日本相互銀行呉服橋ビル別館	東京都中央区	地上2階 地上10階	SRC	SD68-4	
no.56/pp.201-203	1964	弘前市民会館	青森県弘前市	地下1階 地上3階	SRC	文64-10, SD65-3	
no.57/p.204	1964	世田谷区郷土資料館	東京都世田谷区	地下1階 地上2階	-	文64-2, 新64-12	
no.58/pp.205-206	1964	紀伊国屋ビルディング	東京都新宿区	地下2階 地上4階	SRC	文64-5, 新64-5, 近64-5, 建界66-1, 建64-5, SD76-6, 現77-6, 商店建76-10	
no.47/pp.178-179	1964	ニューヨーク世界博覧会日本館	ニューヨーク	地上2階	S	建63-4	
	1964	佐藤邸	東京都目黒区	地上2階	RC		
	1964	加藤邸	東京都目黒区	地上2階	RC		
	1965	神奈川婦人会館	神奈川県横浜市	地下1階 地上3階	RC		
no.59/pp.207-208	1965	蛇の目シンビル	東京都中央区	地下3階 地上9階	SRC	文64-7	
	1965	紀伊国屋書店支店群	東京都新宿区等	-	-		
	1965	日本郵便送葛飾車庫宿舎	東京都葛飾区	地上6階	RC		
	1965	石井十次記念碑	岡山県岡山市		-		
	1965	八幡製鉄出鋼記念碑	福岡県北九州市		-		
	1965	阪田邸	東京都港区	地下1階 地上4階	RC		
no.60/pp.209-212	1966	埼玉会館	埼玉県	地下3階 地上7階	SRC	文66-7, 新66-7, 近66-7, SD66-7, 建66-7	
	1966	神奈川県立青少年会館	神奈川県横浜市	地下1階 地上2階	RC		
	1967	葵会館	東京都港区	地下3階 地上2階	SRC	新67-10	
	1969	世田谷区役所第二庁舎	東京都世田谷区	地下1階 地上5階	RC/一部S	新69-6, SD70-11	
	1969	林邸	静岡県御殿場市	地上2階	W		
	1970	真駒内スピードスケート競技場	北海道札幌市	地上2階	RC	新70-4, 建社72-1	
	1970	富士ビクターセンター	山梨県	地上2階	RC		
no.50/pp.184-186	1970	日本万博博覧会鉄鋼館	大阪府	-	RC/一部S	文70-5, 新70-5, 近70-5	
no.49/pp.181-183	1970	日本万博博覧会自動車館	大阪府	-	S	文70-4, 新70-5, 近70-5	
	1970	北村邸	東京都新宿区	地上3階	RC		
	1970	阪田家墓碑			-		
	1971	前川自邸(新)	東京都台東区上大崎三丁目	地下1階 地上2階	RC	『住宅建築』06-1	○
no.62/p.223-226	1971	埼玉県立博物館	埼玉県	地下1階 地上3階	RC	文72-1 新72-1 近72-1 SD72-9,76-5 建72-1 現77-6	
no.76/p.263	1971	弘前市立病院	青森県弘前市	地下1階 地上6階	RC		○
	1971	岡山県西庁舎	岡山県岡山市	地下1階 地上5階	RC		
	1972	岡山県南庁舎	岡山県岡山市	地下1階 地上5階	RC		
	1973	紀伊国屋書店淡路島保養所	兵庫県淡路島	地上2階	1FRC/2FW		
	1974	横浜市教育文化センター	神奈川県横浜市	地下2階 地上11階	SRC	新74-9, 現77-6	
no.77/p.262	1974	弘前市庁舎増築・改修	青森県弘前市	地下1階 地上6階	RC		
no.61/pp.213-217	1974	東京海上ビルディング	東京都千代田区	地下4階 地上25階	S/SRC	国66-12, 文74-6, 新74-6, 近74-6, SD74-6, 75-8 建74-6, 現77-6, 建界74-6, 77-1, 日経ア86-3-24	
no.63/pp.227-229	1975	東京都美術館	東京都台東区	地下3階 地上2階	S/SRC/S	文77-1, 新77-1, 近77-4, 現77-6, 画78-3	

	1975	国際文化会館増築	東京都港区	地下2階 地上4階	RC	新76-4	
no.64/p.230	1976	弘前市立博物館	青森県弘前市	地上2階	RC	文81-8, Pa No.28	
	1976	東芝電機南夢科保養所	長野県茅野市	地上1階	W		
no.66/pp.234-237	1977	熊本県立美術館	熊本県熊本市	地下1階 地上3階	RC	文78-1, 新78-1, 近78-1, 画78-3	
no.65/pp.231-233	1977	ケルン市立東洋美術館	ケルン	地上2階	RC	文79-1, 日経ア78-9-18	
	1977	白河市文化センター	福島県白河市	地上2階	RC		
	1977	スリー・レークス・カントリー・クラブ	三重県員弁町	地下1階 地上1階	RC	文78-3, 新78-3	
	1978	山梨県立美術館	山梨県甲府市	地上2階	RC	文79-1, 近79-1, 画80-7	
	1979	藤枝市立図書館	静岡県藤枝市	地上2階	RC	文79-7, 新79-7, 近79-7, 画79-11,80-2	○
no.67/pp.238-239	1979	福岡市美術館	福岡県福岡市	地上2階	RC	文80-1, 新80-1, 画80-7,83-10	
no.68/pp.240-241	1979	国立西洋美術館新館	東京都台東区	地下2階 地上2階	RC	建80-7, 画80-7, 建界80-3, 知80-8	
	1979	白河市歴史民族資料館	福島県白河市	地上2階	RC	PA No.28	
	1979	SRL八王子ラボ	東京都八王子市	地上3階	RC		
no.73/p.260	1980	長岡ロングライフセンター	新潟県長岡市	地上3階	RC/一部SRC	文81-3, 近81-3	○
	1980	岡山県議会棟別館	岡山県岡山市	地下1階 地上3階	RC/SRC		
no.78/p.263	1980	弘前市緑の相談所	青森県弘前市	地上2階	RC	文81-1	
	1981	宮城県美術館	宮城県仙台市	地上3階	RC/一部SRC	文82-1, 新82-1, 日経ア81-12-21	
	1981	埼玉県立自然史博物館	埼玉県秩父市	地上2階	RC/一部SRC	日経ア82-8-16	
	1982	熊本県立劇場	熊本県熊本市	地下2階 地上3階	SRC/一部S	新83-5	
	1982	学習院大学戸山図書館	東京都新宿区	地下1階 地上3階	RC	新84-7	
	1982	国際基督教大学博物館 (湯浅八郎記念館)	東京都三鷹市	地上2階	RC	日経ア82-8-16	
	1982	SRL第2八王子ラボ	東京都八王子	地上2階	SRC		
	1982	第一生命大井本社相互の碑	神奈川県大井松田町	-	-		
	1983	国立音楽大学講堂	東京都武蔵村山市	地下1階 地上4階	RC/一部SRC	文化83-9, 新83-9, 日経ア83-8-1	
	1983	国立音楽大学銀杏寮	東京都立川市	地下1階 地上7階	RC	新83-9	
	1983	国立音楽大学付属幼稚園	東京都国立市	地下1階 地上3階	RC		
	1983	学習院大学南5号館	東京都豊島区	地上3階	RC		
	1983	弘前市立病院増築	青森県弘前市	地上6階	RC		
	1983	横浜市中区役所	神奈川県横浜市	地下2階 地上8階	SRC		
no.69/pp.242-243	1983	弘前市斎場	青森県弘前市	地上2階	RC	文84-7, 新84-7	
	1983	呉羽化学那須保養所	栃木県那須町	地上3階	RC		
	1984	東京文化会館新リハーサル室	東京都台東区上野公園	地下2階 地上1階	SRC	新85-2	
	1984	国立音楽大学付属小学校	東京都国立市	地下1階 地上1階	RC/一部S	日経ア85-5-20	
no.74/p.260	1984	長岡市北部体育館	新潟県長岡市	地上2階	RC/一部S		
no.70/pp.244-246	1985	新潟市美術館	新潟県新潟市	地上2階	RC	日経ア85-12-2	
	1985	東京大学山上会館	東京都文京区	地下1階 地上2階	RC	画88-5	
	1985	国立音楽大学通学生用練習館	東京都立川市	地下1階 地上1階	RC		
	1985	学習院男子高等科部室	東京都豊島区	地上2階	RC		
	1986	石垣市民会館	沖縄県石垣市	地上2階	RC/一部S	文86-7, 新86-7, 日経ア85-9-23	
	1986	国立国会図書館新館	東京都千代田区	地下8階 地上4階	RC/SRC/S	文86-11, 新86-11, 近86-11, 日経ア86-10-20	○
	1986	世田谷区立郷土資料館増改築	東京都世田谷区	地下2階 地上2階	RC		
	1986	学習院女子短期大学厚生施設	東京都新宿区	地下1階 地上3階	RC		

文:『建築文化』
 新:『新建築』
 近:『近代建築』
 国:『国際建築』
 建:『建築』
 現:『現代建築』
 画:『建築画報』
 界:『建築界』
 知:『建築知識』
 芸:『芸術新潮』
 社:『建築と社会』
 イ:『インテリア』

なお、作品数に対する屋上庭園の割合は、戦後第二期(1951-1960)以前はさほど変わらないものの、戦後第三期(1961-1986)以降に顕著に増加している。つまり前川國男は、設計活動を通して屋上庭園に着眼を置き、技術的に陸屋根や屋上の土壌利用が容易になる設計活動後期において、より積極的に屋上庭園を計画していることがわかる(表4)。

表4 前川國男の建築作品数及び屋上庭園数^{注2)}



第2節 前川國男の屋上庭園におけるル・コルビュジェからの受容(表5)

第1項 1932 - 1945 (独立前後期)

この時期に屋上庭園が計画されたのは、木村産業研究所(1932)と明治製菓銀座売店(1931)の2作品のみであり^{注3)}、いずれも立面構成に関してガルシュのヴィラ(Le Corbusier: Villa Stein-de Monzie, 1926) やラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸(Le Corbusier: Villas La Roche- Jeanneret, 1923)からの多大な形態的影響が指摘されている^{注4)}。しかしながら、屋上庭園に限ると直接的な類似性は認められず、参照元は特定できない(図1)。

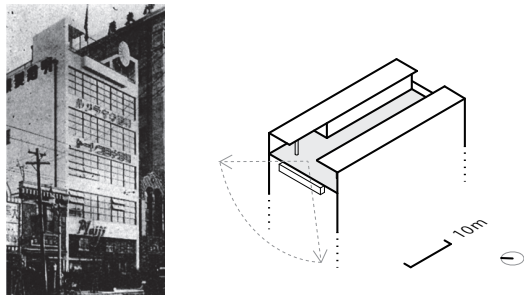


図1 明治製菓銀座売店(1931)の屋上庭園

木村産業研究所と明治製菓銀座売店の屋上庭園は、いずれも形態要素や屋内居室との関係性を極力排した簡素な構成で計画されている^{注5)}。そのため、サヴォワ邸に設けられた屋上庭園との類似性は眺望の有無に限られ、参照元がサヴォワ邸であるとも言いきれない。つまり、前川國男はル・コルビュジェの立面構成を自らの実作において試みたことで、副次的に屋上庭園を設けているにすぎない。

第2項 1946 - 1950 (戦後第一期)

資材不足のために木造を選択せざるを得ない敗戦後の

状況下において、前川國男はほぼ全ての作品を木造の勾配屋根で計画し、屋上庭園を概ね用いていない。ただし、崖上の改造住宅(Residence of Mr.A, 1949)には唯一、木造であるにもかかわらず休息や眺望のための屋上庭園(ソラリウム)を計画し、様々な形態要素を配している。なお、崖上の改造住宅に限って木造の屋上庭園が計画された要因は、この計画のみが新築ではなく改修であるためと推測出来る。前川國男は既存の勾配屋根を補修する代わりに、勾配屋根の上部に歩行可能なデッキを敷き、それを屋上庭園として構成している。つまり、厳密な雨水処理を必要としない案件に限ってのみ、屋上庭園を試みている(図2)。

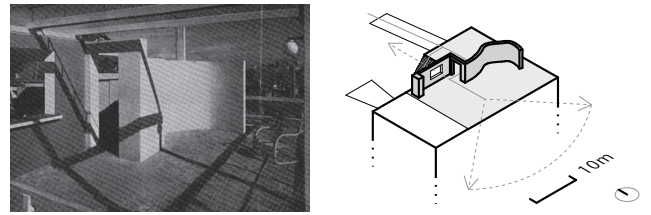


図2 崖上の改造住宅(1949)の屋上庭園

前章で示した前川國男のサヴォワ邸に関する記述では、ピクチャーウィンドウをはじめとする形態要素の記述はなされていないにもかかわらず、崖上の改造住宅の屋上庭園には、曲面の壁体やピクチャーウィンドウなど、サヴォワ邸の屋上庭園と類似する形態的特徴が散見でき、「ソラリウム」の呼称もまた、前川國男がサヴォワ邸の参考資料としていた *Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres complète, vol.2* の記述と同様に用いられている。ただし、崖上の改造住宅の屋上庭園に設けられた曲面の壁体やピクチャーウィンドウは、眼下に豊かな景観が広がる南側ではなく、住宅が密集する北側に向けて配されている。そのため、近隣住民からの視線を調整するための装置として設けられていると推測でき、景観豊かな敷地に建つサヴォワ邸の手法とは大きく異なる。

また、前川國男はサヴォワ邸の屋上庭園において、形態的な特徴よりむしろ、上下階がシームレスに繋がる段状の空間構成や、室内外の視覚的な連続性に着眼しているのにも関わらず、崖上の改造住宅は隣地とつながる陸橋が設けられるのみで、屋上庭園そのものは高低差のない平坦な構成で計画されている。そのため、崖上の改造住宅の屋上庭園は下層居室との関係性が希薄であり、視覚的にも断絶されている。

つまり、前川國男はサヴォワ邸の屋上庭園を日本に置換しようと試みるものの、漏水の危険性や技術的な懸念を要因として、自身が着眼していた空間構成を参照することは叶わなかったと推測できる。一方、ピクチャーウィンドウを始めとする構成要素の形態的特徴に関しては、

近隣住民に対する視線調整という新たな効果を見出したことで、少なからず用いている。

第3項 1951 - 1960（戦後第二期）

この時期に屋上庭園が計画された作品は、日本相互銀行本店(1952)及び岡山県庁(1957)、学習院大学(1960)の3作品のみであり、公共建築や大規模な事務所ビルに用いられている。

なお、この時期の計画は、既往研究にてチャンディガール州議事堂(Le Corbusier: Assemblée, 1955)やスイス学生会館(Le Corbusier: Pavillon Suisse, 1930)、マルセイユのユニテ・ダビタシオンからの形態的な影響が指摘されているもの^{注6)}、屋上庭園に限ると、この中で唯一前川國男自身が屋上庭園を訪れたことのあるユニテ・ダビタシオンからの影響が色濃く現れている。事実、この時期に

計画された屋上庭園はいずれも、矩形の平面構成に逆錐型の給水塔や塔屋、円弧型の据え置きベンチなどが配され、前川國男がユニテ・ダビタシオンの屋上庭園において着目していた彫塑的な形態と部分的に類似している(図3)。

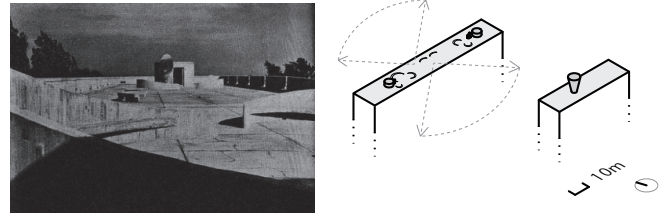


図3 学習院大学(1960)の屋上庭園

表5 前川國男の建築作品における屋上庭園

型	×	Villa Savoye		Unité d'Habitation de Marseille	
独立前後期	<p>明治製菓銀座売店(1931) 木村産業研究所(1932)</p>	<p>屋上の改造住宅(1949)</p>			
戦後第一期				<p>日本相互銀行本店(1952) 岡山県庁舎(1957)</p>	
戦後第二期				<p>学習院大学(1960)</p>	
戦後第三期	<p>岡山県総合文化センター(1962)</p>	<p>前川自邸(新)(1971)</p>	<p>学習院大学図書館(1963) 東京文化会館(1961)</p>		
			<p>弘前市立病院(1971) 藤枝市立図書館(1979)</p>		
			<p>長岡ロングライフセンター(1980) 国会図書館新館(1986)</p>		
参照	×	曲面の壁体 ピクチャーウィンドウ	段状の空間構成 室内外の視覚的な連続性		彫塑的な形態
応用	×	×	植栽、自然素材 公共性		形態の幾何学化・抽象化

ただし、前川國男はユニテ・ダビタシオンで着眼した形態要素をそのまま用いるのではなく、ル・コルビュジェが用いた自由曲線を、単純化・抽象化することで幾分か変形して用いている。

第4項 1961 - 1986 (戦後第三期)

一方、前川國男はユニテ・ダビタシオンの屋上庭園における共同施設の多様性にも着眼しているものの、日本の公共施設が従来には無い機能や用途の提案を受け入れ難いことや^{注7)}、前川國男が避難の用途に重点を置いていることを要因として、休息・避難以外の用途や施設を概ね計画していない。

この時期に計画された屋上庭園は8作品あり、長岡ロングライフセンター(1980)や国立国会図書館新館(1986)を典型として(図4)、公共建築に多く用いられている。なお、この時期の屋上庭園の多くは、複数の庭園が水平・鉛直方向に雁行しながら連続する構成で計画され、前川國男がサヴォワ邸の屋上庭園で着眼していた段状の空間構成による、屋内居室との視覚的な連続性や周辺環境への眺望が模索されている(図5)。

なお、前川國男がこの時期の屋上庭園に配している形態要素は、概ね花壇や植栽、可動のベンチに限られている。そのため、前川國男がサヴォワ邸やマルセイユのユニテ・ダビタシオンの屋上庭園における主要な形態的特徴を、自身の屋上庭園に参照しているとは言い難い^{注8)}。

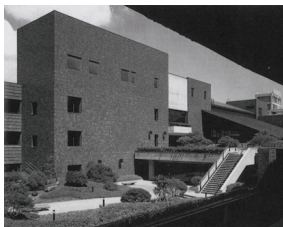


図4 国立国会図書館新館(1986)の屋上庭園

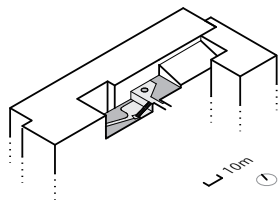


図5 長岡ロングライフセンター(1980)の屋内から見た屋上庭園

一方、前川國男自身がル・コルビュジェと日本の自然観に差異があると記しているように^{注9)}、曲線や起伏を多用した築山や植栽、また、自然素材を多用した曲線のペーパメントなど、ル・コルビュジェとは一線を画した表

現を試みている。

つまり、前川國男はサヴォワ邸の屋上庭園で着眼した空間構成を、規模の大きな公共建築において適用し、サヴォワ邸の形態的な特徴を極力参照することなく、また、自然素材や植栽を加味することで、独自の手法として応用していると考えられる。

第3節 屋上庭園からエスプラナードへの変遷

前述したように、設計活動後期の前川國男は、公共建築の屋上にサヴォワ邸で受容した屋上庭園の空間構成を適用することで、独自の手法として応用している。一方で、戦後第三期における段状の構成は、さらに下階にまで延長され、地上・非地上をつなぐ一続きの散策路としても計画されている(図6)。それらは概ね、公開空地として公共性が主題とされ、屋上庭園は次第にエスプラナード(esplanade)と呼称付けられた屋外空間の一部として取り込まれる。

なお、前川國男の建築作品は、埼玉会館(1966)にエスプラナードを設けたことを契機として、外部空間の重要性が高まっていることから^{注10)}、エスプラナードもまた、設計活動後期における重要な設計手法の1つであると推測できる。

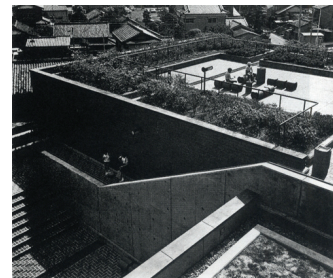


図6 藤枝市立図書館(1979)の屋上庭園

なお、前川國男はエスプラナードに関して、ル・コルビュジェを介して受容したカールゼル広場の空間構成が出自であると記しているものの、西欧の esplanade をそのまま日本の環境へと置換するのではなく、屋上庭園の空間構成を付加することで応用している。そこで、前川國男の建築作品におけるエスプラナード(esplanade)と、カールゼル広場との異同を分析した上で、前川國男の屋上庭園と比較考察することで、前川國男が屋上庭園の手法を、如何に展開しているのかを明らかにする。

第1項 エスプラナードに関する言説(表6,7)

エスプラナードに関しては、実現されたエスプラナードが3作品と少ないことから、通時的に分析した既往研究はなく、エスプラナードに関する分析も概ね埼玉会館(1966)のみが研究対象とされている^{注11)}。

前川國男の建築作品に設けられたエスプラナードに関する記述は21ある。そのうち、前川國男自身による記述

は6つあり、埼玉会館(1966)もしくは東京海上ビルディング計画案(1966)に関して記されている。前川國男は、埼玉会館にその初出を認めるとともに[1]、自らの師であるル・コルビュジエ(Le Corbusier, 1887-1965)とともに訪れたカールゼル広場(Place du Carrousel)の包み込まれるような広場が、自身のエスプラナードの出自であると記している[2,3]。

表7 前川國男以外による言説

年	筆者	記述	対象	出典
1966	平良敬一	コルビュジエはやくら提案していた屋上庭園という概念、それを都市の道路と直接に連続させるという手法	埼玉会館 (1966)	『SD』鹿島出版会、1966.7, p.53
	足立光章	プロムナードよりも、人が集まるという概念の比重が大きいと考えても良いだろう		『建築』青銅社、1966.7, p.92
	中田準一	エスプラナードを単に建物へのアクセスという単一機能としてではなく、その地域住民にとって親しみやすい建物とするための「結び目」としてとらえるべきである。		『建築』青銅社、1966.7, pp.99-100
	沢田隆夫	このエスプラナードの最大の特徴は、ローマの階段を思わせる立体的構成であろう。視点の数段階におよぶ大きな変化はそこにくる人を楽ませてくれている。ところが、すぐ脇にある喫茶室に入って少なからず失望した。喫茶室からはせつ々のエスプラナードは見えず、見えるのは階から眺めた商店街の景観だからである。		『ふたつの疑問とひとつの教訓』、『新建築』新建築社、1966.7, p.136
	足立光章	エスプラナード(esplanade)とはプロムナードと殆ど同義語であって、遊歩道、散策場を意味しているが、(その他見晴台を意味する事もある)プロムナードという言葉が、現在の消費的都市の中にあって単に人々が通過するという機能だけを持って、止り語り、散策するといふ事に無縁な場所に使われているという、ムードの意味あいでは理解されているという面があり、ここでは特にエスプラナードという言葉が外国の雑誌にも見られるものであって、プロムナードよりも、人が集まるという概念の比重が大きいと考えても良いだろう。		『建築』青銅社、1966.7, p.92
	(田中誠)	建物自体の採光・通風・眺望・防災・避難等に有効であるばかりでなく、周辺地域に同様の貢献をして住民の渴望にこたえるという精神的ならびに社会的な効果がある		『国際建築』国際建築協会、1966.12, p.36
	大沢三郎	館内交通を分かり易くするためと、外部環境を除外せず、しかも公園とのつながりを求めるよう、意図された		『新建築』新建築社、1977.1, p.202
	角田憲一	エスプラナードから広場に導かれる外部空間の構成によって、この上野の森の持つ特異な公園の質を体内化し環境化している		『近代建築』近代建築社、1977.4, p.28
	南條一秀	四つの展示棟に囲まれたエスプラナードは予想どおり大澤を望む絶好の場所となった		『建築文化』彰国社、1980.1, p.48
	1981	宮内嘉久		市民が自由に入出でき、空間的には周囲に配された建物の壁面によって限定されながらも視線が開かれていて、中庭的な感じをもつ広場であり、また流動性をそなえた遊歩道でもあるような、そういう外部空間の一種である。
2005	宮内嘉久	エスプラナードと前川國男が呼ぶ、建物の外壁に囲われた、しかし開かれている中庭の広場、あるいは遊歩道をも兼ねる憩いの空間を生み出すことで、前川は一つの大きな方向転換を遂げた	『敵軍の将』、晶文社、2005, p.103	
2006	加藤周一	前川は、人がそこで休息し、出会い、立ち話をしたりする都市の広場のような機能を持つ、中庭や沈床式の広場をしばしば設けた。中庭からは建築の側面を眺めることができ、建築の内部から中庭を見ることが出来る。	東京都美術館 (1975)	『東京・変わりゆく都市』、『日本 その心とたち』、スタジオジブリ、2005, p.284
2006	富永謙	周囲が限定されていて、視線はどちらかに開かれていながら、中庭的な広場と流れるような遊歩道が設定されている。この場所は、地形的にも上下があるところ、上がっていくと他の道路に出ます。そういうルートをもつ建築のプロムナードが、空間の骨格を形づくっています	埼玉会館 (1966)	『ル・コルビュジエの建築的プロムナードを超えて』、『前川國男 現代との対話』、六曜社、2006, p.22
2014	井上章一	埼玉会館の屋上庭園、中庭を、前川はエスプラナードと名づけていた。これは、フランス語の「空間(エスバース)」と「散策(プロムナード)」をくっつけた言葉である。20世紀のフランスでできた、「散策空間」をさす新造語にはかならない	『現代の建築家9 前川國男-コルビュジエからスキャン』、『GA Japan』A.D.A.エディターキョー、2014.11, p.123	

凡例: 前川建築設計事務所 所員、元所員
 研究者、建築専門誌の編集者、建築史家など

一方、前川建築設計事務所の所員による記述は7つあり、いずれも建築専門誌に発表する際の説明文として示されている。足立光章はル・コルビュジエや西欧からの影響を指摘し[4]、中田準一や大沢三郎、角田憲一は、周辺環境とエスプラナードとの関係性に着目している[5-7]。いずれも、エスプラナードの建築的な効果を強調することで、従来の日本における広場との差異を明確にしている。

その他、建築史家や評論家などによる記述が7つあり、いずれも特定のエスプラナードに関して、一義的に定義付けしている。宮内嘉久や富永謙はエスプラナードを閉ざされていない中庭的な広場であると定義し[2,8]、同時に、流動的な散策動線を兼ね備えていると記している。また、富永謙や加藤周一は、ル・コルビュジエが提唱する建築的プロムナードよりも、人々が留まって休息することに重きが置かれていると指摘している[8,9]。

表6 前川國男による言説

年	筆者	記述	対象	出典
1966	前川國男	明日に向かって東京の業務中心地区にあるべき事務所建築の姿を具現しようとしたものである	東京海上ビルディング (1966)	『明日の都市環境をめざして 都市美観の歴史』、『建築文化』彰国社、1966.12, p.121
		必ずや明日の丸の内の人間回復の黎明を告げるに相違ないことを確信している		『前川國男氏のアップール』、『SD』1966.12, p.7
1978	前川國男	物があるんだけどその物を感じさせない。しかもなにか包みこまれているような感じがここにはあるだろう	埼玉会館 (1966)	『建築家としての展望はあるか』、『続・現代建築の再構築』彰国社、1978.12, p.65
1980	図書館を隠さないで仲間に入れて、そのエスプラナードの空間を構成したといふわけだ	『スポンターニティが息づく生活空間を求めて』、『Commercial Photo Series 建築写真・表現と技法』玄光社、1980, p.74		
1981	何となく囲まれていて、自分がこうプロテクトされている感じをもつだろう、それがおれにはいいんだ、ってね	『一建築家の信條』、晶文社、1981, p.195		
1985	エスプラナードというのは要するにああいう風なテラスのつくりをそう稱んでいるんですが、京都會館より埼玉会館の方に原型が残っています。	『建築家の世界／前川國男』、『ひろば』近畿建築士会協議会、1985.6, p.15		

第2項 カールゼル広場(Place du Carrousel)からの受容

前川國男は、宮内嘉久との対談の中でエスプラナードの出自を尋ねられ、下記のようにカールゼル広場(Place du Carrousel)であると答えている。

「ル・ヴルの庭 - チュイルリ公園につながって[いる]庭がね、ウイングがずっと出てる」^[注12]



図7 カールゼル広場 Place du Carrousel

カールゼル広場は、建築密集地であるパリ1区にある公共の庭園であり、チュイルリー庭園(Jardin des

Tuileries)とルーヴル美術館(Musée du Louvre)との間に位置している。なお、前川國男が「ウイング」と述べたのは、ルーヴル美術館のリシュリュー翼(Richelieu)やドゥノン翼(Denon)、シュリー翼(Sully)であり、カルーゼル広場の3方を囲んでいる(図7)。

前川國男は、ル・コルビュジェがこのカルーゼル広場に関して繰り返し述べた「何となく囲まれていて、自分がこうプロテクトされている感じをもつ」という言葉に感銘を受け、複数の建築棟によって囲われた中庭的空間に着眼を置くようになる。加えて、宮内嘉久の「建物の内側の中庭的な概念でもない?」という問いかけに対し、「ない。外に面してもいい」とも記しているように、ウイングの無い北西側に広がるテュイルリー庭園との連続性や、ウイングによって断絶することのない周辺の都市環境との関係性にも着目し、同時に、多方向からの人々の流入に関心を寄せている^{注13)}。

さらに、前川國男は「物があるんだけどその物を感じさせない」とも記している。記述の中では、「物」が何を意味しているのかまでは明確にしていけないが、おそらく、庭園の中心にあるカルーゼル凱旋門(Arc de Triomphe du Carrousel)や、周りを囲むルーブル宮殿、もしくはウイングの外側に密集する周囲の建物などを示していると推測できる。つまり、前川國男は庭園に配された事物の形態要素には着目しておらず、あくまでも庭園と都市の関連性に着目している。

第3項 前川國男の建築作品におけるエスプラナード

前川國男の建築作品にエスプラナード(esplanade)の呼称が用いられた屋外空間が確認出来るのは、埼玉会館(1966)、東京海上ビルディング計画案(1966)、ポンピドゥー・センター計画案(1971)、東京都美術館(1975)、福岡市美術館(1979)の5作品であり、いずれも設計活動後期の建築作品に限られる。ただし、東京海上ビルディングのエスプラナードは、1974年の実施計画では用いられておらず、また、ポンピドゥー・センター計画案の計画はコンペティションに落選したため、この2作品に関しては、計画案にのみエスプラナード(esplanade)の呼称が確認できる。

1. 埼玉会館(1966) (図8,9)

埼玉会館(1966)はカルーゼル広場と同様に都市部の計画であり、浦和駅と埼玉県庁を結ぶ市の中心街に位置している。また、東側に駅前商店街遊歩道が近接していることで、周囲には大小様々な建築が密集している。このような敷地において、前川國男は計画建物と隣地の既存図書館によってエスプラナードを囲む配置計画とし^{注14)}、ベンチや植栽を多数配すことで、市民の自由な利用を促している。

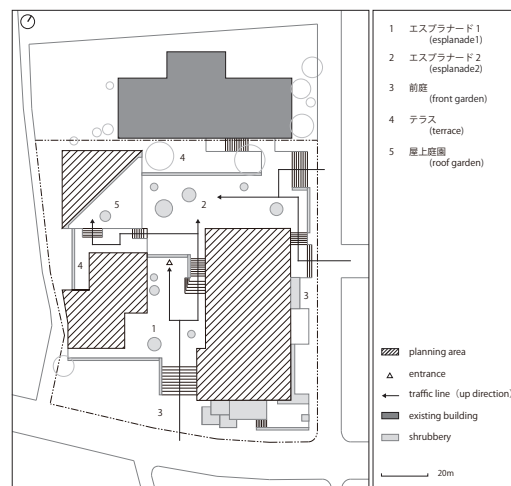


図8 埼玉会館(1966)の敷地配置図



図9 埼玉会館(1966)のエスプラナード

また、カルーゼル広場と同様に、多方向からの人々の流入を可能とするべく、主要通りである南側の県庁通りと東側のさくら草通りに向けてアプローチを配し、加えて、自動車動線と歩行動線を明確に分離することで、エスプラナードを都市における結び目としている^{注15)}。

一方、カルーゼル広場と大きく異なる点として、埼玉会館のエスプラナードには、敷地の土地形状に併せて高低差のある構成が用いられている^{注16)}。複数の屋外空間は緩やかな階段で繋がり、階段を介すごとに屈曲する動線によって、どの位置からもエスプラナードの全体像を俯瞰することのできない配置計画とされている。流動的な動線は、エスプラナードを周辺都市の延長とし、両者を視覚的に結びつけている。ただし、沢田隆夫が指摘しているように^{注17)}、エスプラナードと室内居室との視覚的な連続性は主題とされておらず^{注18)}、エスプラナードを屋外で完結する散策路として用いている。

2. 東京海上ビルディング計画案(1966) (図10,11)

東京海上ビルディングの計画は、美観論争を経たことで、設計から竣工までの期間が10年と例外的に長い^{注19)}。そのため、前川國男は1974年の竣工に先立って、1966年にエスプラナードを含む計画案を建築専門誌に発表している^{注20)}。

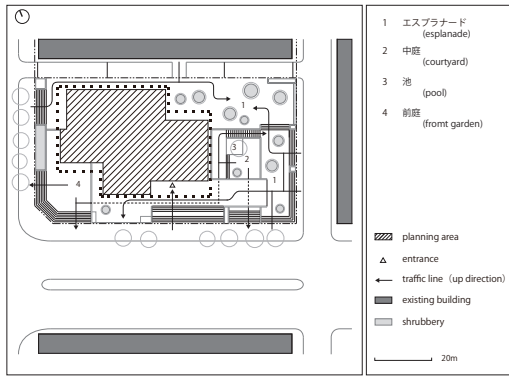


図 10 東京海上ビルディング(1966)の敷地配置図

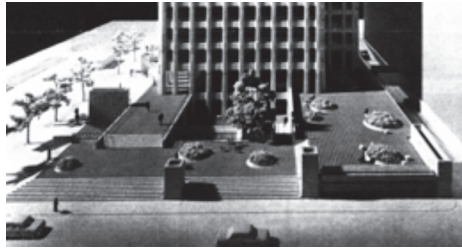


図 11 東京海上ビルディング(1966)のエスプラナード

東京海上ビルディング計画案(1966)の敷地は皇居外苑に近接し、道路を挟んだ敷地の3方を高層建築が囲っている。カルーゼル広場と同様の建築密集地において、前川國男は計画建築を皇居側に寄せ、隣地の既存建築とともにエスプラナードを囲むことで、エスプラナードを私的な中庭としてではなく、都民が自由に利用できる公共の中庭として計画している。これは、採光・通風・眺望・防災・避難といったエスプラナードの建築的効果を、東京海上ビルディングだけではなく、周囲の建築にも提供するためであり^{注21)}、同時に、交通の変化に対応し得る配置計画として用いられている。

なお、東京海上ビルディングのエスプラナードは、カルーゼル広場とは異なり、鉛直移動を伴う立体的な散策庭園として計画されている。それは、地上の接道からのアプローチだけではなく、将来敷設されるJRの地下路や地下鉄の駅からの接続が求められたためであり、前川國男は地盤面から登段する動線と降段する動線を両方設け、それぞれを屈曲させることで、多方向からの多様なアプローチを可能としている^{注22)}。

3. ポンピドゥー・センター計画案(1971) (図 12,13)

ポンピドゥー・センター計画案(1971)は、1971年にパリで行われたThe Beaubourg Centre 国際競技設計に提出した際の応募案であり、前川建築設計事務所には、提出資料を複製した2枚の図面が保管されている。なお、選考の結果、レンゾ・ピアノ(Renzo Piano, 1937-)及びリチャード・ロジャース(Richard George Rogers, 1933-)の案が選出されたため、前川國男の案は実現していない。

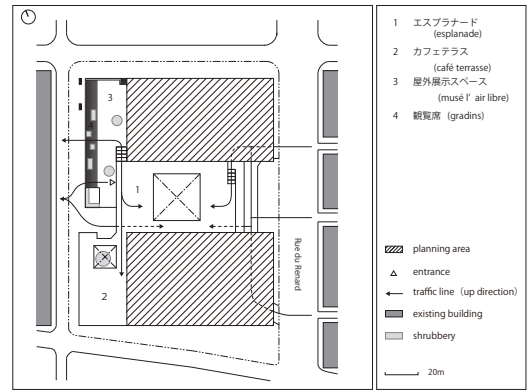


図 12 ポンピドゥー・センター(1971)の敷地配置図

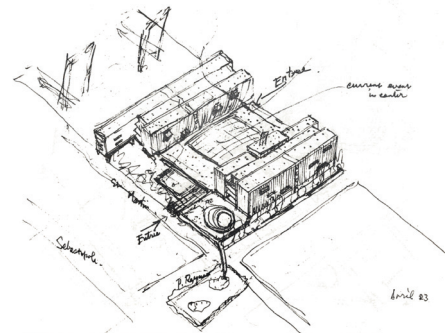


図 13 ポンピドゥー・センター(1971)のエスプラナード

ポンピドゥー・センターはカルーゼル広場と同様に建築が密集する都市部の計画であり、ボブール地区(Beaubourg)の東端に位置している。この敷地において、前川國男は、美術館棟と図書館棟を南北に並列配置し、東西の既存建築とともにエスプラナード(esplanade)を囲むことで、東西の地区からの人々流れを結びつけている^{注23)}。一方、前川國男は分棟配置と要求された容積確保を同時に満たすため、エスプラナードを地上階の上部に設け、カルーゼル広場よりも、より立体的な散策動線としている。加えて、階段を南北方向に配すことで、あえて散策動線を屈曲させ、眺望を変化させることで、エスプラナードから周辺都市へ向けた視覚的な連続性を創出している。

4. 東京都美術館(1975) (図 14,15)

東京都美術館(1975)は、旧東京都美術館(1926)の老朽化及び展示面積不足を要因とした建替計画であり、都市公園である上野恩賜公園内の敷地に計画されている。このような敷地において、前川國男は分棟配置の美術館によってエスプラナードを囲み、エスプラナードを建築の中心に位置付けている。

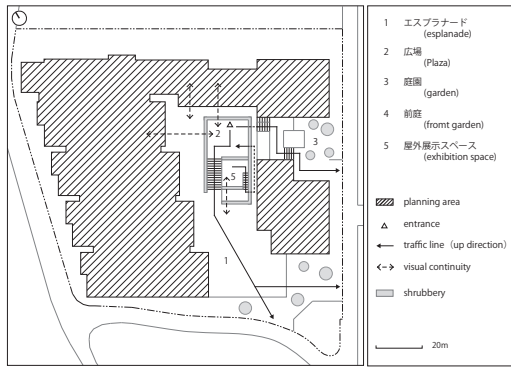


図 14 東京都美術館(1975)の敷地配置図



図 15 東京都美術館(1975)のエスプラナード

なお、建築密集地に位置するカーゼル広場とは周辺の都市環境が大きく異なるものの、前川國男がカーゼル広場においてテュイルリー庭園との連続性に着眼していたのと同様、東京都美術館に設けられたエスプラナードは、隣接する上野恩賜公園内との連続性が主題とされている^{注24)}。前川國男は、エスプラナードのアプローチ動線を上野恩賜公園内の複数の歩行動線に向けて配すとともに、敷地内の既存樹木を極力残すことで、公園内の環境を敷地内に引き込み、公園とエスプラナードとを流動的に繋げようと試みている^{注25)}。ただし、厳しい設計条件のためにエントランスは地下階に設けられ^{注26)}、カーゼル広場には見られない鉛直移動が付加されている。

さらに、カーゼル広場とは異なる主題として、屋内外の視覚的な連続性にも着眼が置かれている^{注27)}。前川國男は、内部展示場とエスプラナードを隔てる壁面を全面ガラスとすることで、相互の様子がかがえる計画とし、またホールとエスプラナードの仕上げを統一することで、内外の視覚的な分断の少ない、一体的な空間を作り出している。

5. 福岡市美術館(1979) (図 16,17)

福岡市美術館(1979)の敷地は都市公園である大濠公園の一角に位置している。前川國男は、高さの異なる複数の建築棟によってエスプラナードを囲み、また、北側と南側の双方に来館者のアプローチを配すことで、エスプラナードを大濠公園内から繋がる1つの散策路として計画している。

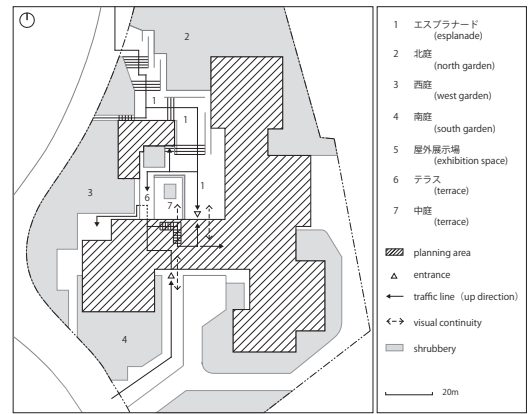


図 16 福岡市美術館(1979)の敷地配置図

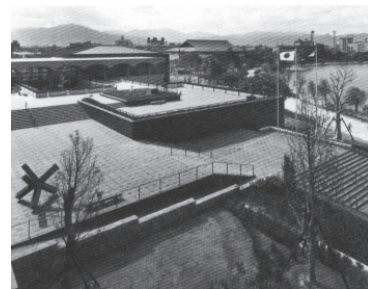


図 17 福岡市美術館(1979)のエスプラナード

福岡市美術館のエスプラナードは、前述した東京都美術館やカーゼル広場と同様、隣接する都市公園との繋がりに着眼が置かれ、大濠公園へ向けた視覚的な連続性が主題とされている^{注28)}。ただし、地盤面下60cm~1mという高い地下水位にもかかわらず^{注29)}、甚大な床面積が求められたために^{注30)}、エスプラナードは屈曲しながら緩やかに登段する構成で計画され、同時に、南側の庭園とエントランスホールを介して視覚的・動線的に結びつけることで、屋内外を問わず多様につながる散策動線を作り上げている。

第4項 結

前川國男は、設計活動を通してル・コルビュジエが計画する屋上庭園(toit jardin)に着目し続け、時代毎の社会的な課題に対する解決策として、日本の環境への置換を模索している。

前川國男の屋上庭園におけるル・コルビュジエからの受容は、第二次世界大戦後に顕著に現れる。戦後第一期(1946 - 1950)は、サヴォワ邸の屋上庭園に設けられた構成要素の形態的な特徴を直接的に参照し、また、戦後第二期(1951 - 1960)には、ユニテ・ダビタシオンの屋上庭園に配された有機的な形態を、抽象化・幾何学化することで、応用している。さらに、戦後第三期(1961 - 1986)には、サヴォワ邸で用いられた段状の空間構成を自身の屋上庭園へと応用することで、公共建築の屋上庭園に、

屋内外の視覚的な連続性や多様な散策動線を付加している。

加えて、段状の構成は次第に地上とも接続され、次第にエスプラナードと呼称付けられた屋外空間の一部としても取り込まれている。

なお、前川國男のエスプラナードと出自であるカールゼル広場との相違点が多い。前川國男のエスプラナードは、いずれもカールゼル広場と同様に、囲われながらも周囲の環境と関連する空間構成が用いられている一方で^{注31)}、カールゼル広場には無い鉛直方向への連続性が付加され、高低差のある屋外空間相互が断続的に展開されている。また、段状の空間構成は、屋内居室との視覚的な連続性をも生み出し、建築内外の境界を曖昧にしている。

加えて、5作品のエスプラナード相互の差異も少なからず認められる。埼玉会館(1966)や東京海上ビルディング計画案(1966)、ポンピドゥー・センター計画案(1971)のエスプラナードは、都市部における建築の密集化に対する解決策として設けられ、不特定多数の市民が自由に利用可能な公開空地として用いられている。そのため、計画建物と近隣建物によって取り囲まれたエスプラナードが用いられ、主に都市と建築を結ぶ散策路として計画されている。一方、東京都美術館(1975)と福岡市美術館(1979)のエスプラナードは、主に来館者のために設けられ、敷地内に緑豊かな周辺環境を取り込むことが主題とされている。そのため、分棟配置の計画建物によって取り囲まれたエスプラナードが用いられ、またエスプラナードと内部居室を動線的にも連続させることで、周辺環境から建築内部までをシームレスに結びつけている。

なお、上記に示した2種類の手法は、ポンピドゥー・センター計画案(1971)を境に変化しているものの、事例数が少ないことから、手法の発展であるとは断定し難い。ただ少なくとも、前川國男は敷地条件に起因して、エスプラナードを使い分けていることが明らかである。

図版出典

表 1: 筆者作成

表 2: 筆者作成

表 3: 筆者作成

表 4: 筆者作成

表 5: 筆者作成

表 6: 筆者作成

表 7: 筆者作成

図 1: 生誕 100 年前川國男建築展実行委員会:『建築家前川國男の仕事』, 美術出版社, p.80, 2006

図 2: 『新建築』, 新建築社, p.324, 1949.10

図 3: 『近代建築』, 近代建築社, p.68, 1960.10

図 4: 『日経アーキテクチュア』, 日経 BP 社, p.190, 1986.10.20

図 5: 『近代建築』, 近代建築社, p.33, 1981.3

図 6: 『建築文化』, 彰国社, 1979.7, p.59

図 7: *Paris et ses environs, manuel du voyageur*, Karl Bædeker, Paris, 1931 に筆者加筆

図 8: 筆者作成

図 9: 生誕 100 年前川國男建築展実行委員会:『建築家前川國男の仕事』 美術出版社, 2006, p.209

図 10: 筆者作成

図 11: 『建築文化』 彰国社, 1966.12, p.122

図 12: 筆者作成

図 13: 前川建築設計事務所収蔵資料

図 14: 筆者作成

図 15: op.cit., 『建築家前川國男の仕事』 p.227

図 16: 筆者作成

図 17: op.cit., 『建築家前川國男の仕事』 p.239

参考文献

[1] 前川國男:「建築家の世界／前川國男」『ひろば』, 近畿建築士会協議会, p.15, 1985.6

[2] 宮内嘉久:「建築家前川國男の仕事」『一建築家の信条』, 晶文社, 1981

[3] 前川國男:「建築家としての展望はあるか」『続・現代建築の再構築』, 朝日ゼミナール第 29 回宮内嘉久と共著, 彰国社, p.65, 1978.12

[4] 足立光章:『新建築』 新建築社, p.92, 1966.7

[5] 中田準一:『建築』 青銅社, pp.99-100, 1966.7

[6] 大沢三郎:『新建築』 新建築社, p.202, 1977.1

[7] 角田憲一:『近代建築』 近代建築社, p.28, 1977.4

[8] 富永謙:「ル・コルビュジェの建築的プロムナードを超えて」『前川國男 現代との対話』 六曜社, 2006

[9] 加藤周一:「東京・変わりゆく都市」『日本 その心とかたち』 スタジオジブリ, p.284, 2005

注釈

1) 建築家前川國男の仕事(美術出版社, pp.287-292, 2006) のリストに依拠する。ただし、同名称で複数の計画があるもの、もしくは同一敷地内の増改築は 1 作品として集計している。なお、国際文化会館(1955)に関しては、屋上庭園が前川國男の意向とは言い難く、リストから除外している(内田祥士:『再読／日本のモダンアーキテクチャー』, 彰国社, pp.86-94, 1997)。

2) *PLANS*(Fondation Le Corbusier: *PLANS*, Echelle-1, 2005)の署名に依拠する。なお、図面には複数の署名が併記されているため、前川國男がどの程度設計に関わっているかは不明である。

3) 明治製菓銀座売店は、1931 年の設計競技において前川國男が選出された後、森山松之助建築事務所が前川國男の計画案を踏襲して実施設計を行うことで、1933 年に施工している。

4) 三沢浩と松隈洋は、木村産業研究所(1932)がガルシュのヴィラ

- (Villa Stein / de Monzie, 1927)やラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸 (Maisons La Roche-Jeanneret, 1929)を参照しているとしている(三沢浩：『建築家前川國男の仕事』美術出版社, p.70, 2006, 及び 松隈洋：「木村産業研究所」『建築文化』pp.186-191, 2000.1)。また、松隈洋は明治製菓銀座売店(1931)がル・コルビュジェのデザインを試みたものとしている(松隈洋：『建築家前川國男の仕事』美術出版社, p.80, 2006)。
- 5) 明治製菓銀座売店競技設計(1931)の一般計画要旨には、「<単純>は<貧弱>に非ず。純な<平面>は建築家最大の若闇を秘む」と示されている(前川國男：「計画説明書」『明治製菓銀座売店競技設計図集』, 洪洋社, p.1, 1931)。
 - 6) 佐々木宏：『巨匠へ憧憬』相模書房, p.194, 2000 及び、Roger Sherwood: Harumi Apartment, *a+u* 臨時増刊号, p.60, 1975.3
 - 7) 前川國男, 浜口隆一, 池辺陽：「婦人の解放と住宅問題 家事労働を中心として」『婦人公論』pp.42-48, 1948.12
 - 8) ル・コルビュジェの他の屋上庭園の形式が参照されていた可能性も否定できないが、少なくとも明示的な参照はサヴォア邸とユニテ・ダピタシオンであることは本論での分析の通りである。また、新・前川自邸(1971)の屋上庭園は、例外的にサヴォア邸に設けられた構成要素との形態的な類似性が認められる。その要因は、前川國男自身の住宅であり、専門誌への作品発表を予定していなかったためと推測できる。つまり、前川國男は人知れず自身の嗜好で屋上庭園を計画する際に限って、ル・コルビュジェが用いた形態への抗えきれない憧憬を残存させている。
 - 9) 前川國男：「解説鼎談」『建築十字軍』東海大学出版会, p.204, 1978
 - 10) 「このように外部空間を重視する発想は、埼玉会館以来の一つの傾向となりまして」(前川國男：「スポンターニティが息づく生活空間を求めて」『Commercial Photo Series 建築写真・表現と技法』玄光社, p.74, 1980)
 - 11) 例外として、加藤周一が東京都美術館(1975)のエスプラナードに関して、「イタリアの都市の広場のような機能を持つ、中庭や沈床式の広場」と記している(加藤周一：「東京・変わりゆく都市」『日本 その心とカタチ』スタジオジブリ, p.284, 2005)。
 - 12) 前川國男：『続・現代建築の再構築』, 彰国社, p.65, 1978.12 []内は筆者による加筆
 - 13) 前川國男から発した言葉ではないものの、宮内嘉久の「人が自由に歩きまわれる、遊歩道的な要素もある」という問いかけに対して肯定している。
 - 14) 前川國男：『続・現代建築の再構築』, 彰国社, p.65, 1978
 - 15) 中田準一：『建築』, 青銅社, pp.99-100, 1966-7
 - 16) 藤井正一郎：「空間の発掘」『新建築』, 新建築社, p.134, 1966.7
 - 17) 沢田隆夫：「ふたつの疑問とひとつの教訓」『新建築』, 新建築社, p.136, 1966.7
 - 18) 室内外の視覚的な断絶は仕上げ材にも顕著に表れる。前川國男は2色炔器質タイルをあじろ張りで仕上げたエスプラナードに対し、内部は単色炔器質タイルを乱張りで仕上げることで、室内外の差異を明確に付けている。
 - 19) ケルン市立東洋美術館も設計から竣工まで 10 年程かかっているが、企画者側の都合による遅延である。
 - 20) 『国際建築』国際建築協会, 1966.12, pp.28-36 及び、『建築文化』彰国社, 1966.12, pp.122-124
 - 21) 「防災上はもちろん、都市全体の採光・通風に役立つのは当然で、<中略>建築基準法を容積制限性に切替え、さらに特定街区という形で、都市空間や防災に有効な計画に対して一定のボーナスを供与する。<中略>建物自体の採光・通風・眺望・防災・避難等に有効であるばかりでなく、周辺地域に同様の貢献をして住民の渴望にこたえるという精神的ならびに社会的効果がある」(建築設計概要書, 『建築文化』, 1966-12 p.124)
 - 22) 美観論争後の実施計画(1974)は、計画案(1966)よりも階数を5層分抑えた計画であり、道路面との高低差がさほど無い屋外空間が用いられている。また、それに伴いエスプラナードの呼称は消失し、広場へと変更されている。
 - 23) 前川國男はエスプラナードに関して、素描に「Esplanade comme un nœud des regions l'est et l'ouest Parisien [パリの東西を結ぶ結節点のようなエスプラナード]」と記している。前川國男：『前川國男=コスモスと方法』, 前川國男建築設計事務所, p.118, 1971.4.15 []内は筆者訳
 - 24) 『東京都新美術館基本設計説明書』, 1972
 - 25) 大沢三郎：『新建築』, p.202, 1977.1
 - 26) 東京都美術館の敷地は、風致地区のために 15m の高さ制限が設けられているにも関わらず、旧館の約2倍の床面積が要求されている。そのため、延面積の60%近い部分を地盤面より下に配す必要があり、地下への採光、通風のための広場とともに、エントランスも地下階に計画されている。(角田憲一：「0」『近代建築』, p.28, 1977.4)
 - 27) 『東京都新美術館基本設計説明書』, 1972
 - 28) 「四つの展示棟に囲まれたエスプラナードは予想どおり大濠を望む絶好の場所となった」(南條一秀：『建築文化』, 彰国社, p.48, 1980.1)
 - 29) 「高い水位に対して地盤面を 1m 上げ、四つの展示棟を L 型に配置し、これらを 5m の高さで人工地盤的なエスプラナードで繋ぐ。北から来館する歩行者は大濠を右に見、高低二つの展示棟の狭間の、広く緩い階段を上がってエスプラナードから2階ロビーへ入る」(南條一秀：『建築文化』, 彰国社, p.48, 1980.1)
 - 30) 福岡市美術館(1979)の建設当時、美術館の建築規模は東京都美術館が国内で最も大きく、福岡市美術館がそれに次いでいた。
 - 31) 戦前にカルーゼル広場で受容した空間構成が設計活動後期になって現れるのは、公共建築の計画の増加が要因と推測できる。

結章

第1節 各章の概要

1. 日本近代建築史における屋上庭園

第1章では、まず近代の日本で作られた屋上庭園を包括的に扱い、通時的な変遷を分析することで、屋上庭園の時代的な背景を考察する。その上で、前川國男の屋上庭園と比較し、日本近代建築における前川國男の屋上庭園の特徴を把握している。

結果、第二次世界大戦以前の屋上庭園は、1920年代における鉄筋コンクリート造の普及と1937年から始まる資材統制という2つの外在的要因によって大きく変化している。それらは経済的要求を満たすための商業的な庭園から、戦時体制下の私的庭園へと変化し、実用性を付加しながら多様に応用される。一方、第二次世界大戦終戦以降の屋上庭園は、朝鮮戦争特需による高度経済成長期が1954年末葉から始まることに起因して、1955年以降に事例数が顕著に増加している。実際、ゴルフ場開発に伴うクラブハウスや宿泊施設など、富裕層への特権としての屋上庭園が計画されるようになるのもこの時期からであり、地上の庭園には無い建築的効果を屋上庭園に模索している。つまり、建築資材が不足する第二次世界大戦前後には立地を問わず簡素で合理的な屋上庭園が模索される一方、躯体構造の制約が無くなる1955年以降には、加増する商業的要求に対応するために、合理性を超越してまで屋上に多様性を求めている。

一方、前川國男は処女作である明治製菓銀座売店(1931)や木村産業研究所(1932)から屋上庭園を用い、以降、設計活動を通して断続的に屋上庭園を計画し続けている。なお、近代日本建築における他の屋上庭園との差異は、高度経済成長期に現れる。他の建築家が計画した屋上庭園が、高度経済成長に伴って商業的な施設を主に多様化しているのに対し、前川國男の屋上庭園は、建築類型に限ると多様化しておらず、公共建築へと収斂している。つまり、前川國男は設計活動後期になるほどに、公共建築における屋上庭園に優位性を感じ、いくつもの作品を計画しているのだと推測できる。

2. 前川國男における屋上庭園の出自

第2章では、前川國男の建築作品における屋上庭園の出自を明らかにする。まず前提として、日本近代建築の屋上庭園における主題の変遷を分析するとともに、前川國男の論考を整理し、記述内容を使用頻度から分類することで、屋上庭園を位置付ける。その上で、前川國男自身が屋上庭園に関して直接的に言及している言説を抽出

し、対象作品を分析することで、前川國男の屋上庭園の起源を明らかにしている。

結果、日本近代建築における屋上庭園の主題は、眺望に関するものが顕著に多く、身体的保養の用途を付随して計画されている。それは日常とは異化された眺望であり、地上の庭園で用いられてきた伝統的手法の屋上庭園への移植である。ただし、高度経済成長期における屋上庭園の多様化の中で、眺望の主題は事例数が増加しておらず、事例は郊外に限られている。一方、前川國男に関しては、高度経済成長期においても眺望が主題とされ続け、周辺環境への眼差しが模索されている。

なお、前川國男が直接的に屋上庭園に関して述べている論考はさほど多くない。ただし、「日本の建築意匠」を批判する中で、その対案であるRC造陸屋根の必要性を説くとともに、テクノロジカル・アプローチとしてその技術確立を求めている。また、行き過ぎた合理主義や都市計画によって消失した自然性を再度建築に取り戻すことが急務であると述べている。つまり、屋上庭園のみを主題とした記述は少ないものの、使用頻度の高い論説の主題は、いずれも屋上庭園と直接的に結びつくものである。

要するに、前川國男にとって屋上庭園を用いることは、自身が戦前・戦中・戦後を通して提起し続けてきた近代日本の諸問題を解決する一助となり、設計活動を通して重要性を持つ。事実、前川國男は少数ながらも、設計活動初期から晩年まで、断続的に屋上庭園を用いている。

なお、前川國男が屋上庭園に関して直接的に言及した論考は、概ねル・コルビュジェ作品の屋上庭園を肯定的に捉えた批評である。そのため、前川國男の建築作品における屋上庭園の出自は、ル・コルビュジェの屋上庭園であることが推測できる。

3. 前川國男による屋上庭園の解釈

第3章では、前川國男の建築作品における屋上庭園の起源として、前章で明らかにしたル・コルビュジェの屋上庭園に着目し、それらに対する前川國男の解釈を明らかにする^{註1)}。まず、ル・コルビュジェの屋上庭園と深く関わる構成要素として、庭園種別と屋根型に着目し、ル・コルビュジェ自身の言説を用いて類型化する。次に、ル・コルビュジェの屋上庭園を包括的に扱い、ル・コルビュジェ自身の言説を用いて分類した上で、分類毎に主題の通時的な変化を分析する。その上で、前川國男が言及しているル・コルビュジェの屋上庭園を、前川國男自身の素描や写真、言説をもとに再解釈することで、前川國男

がル・コルビュジェの屋上庭園に関して、どのような要素に着目しているのかを論じている。

結果、ル・コルビュジェは庭園を、「解放された土地(*le sol libéré*)」と「獲得された土地(*le sol conquis*)」に大別し、「獲得された土地」の1つとして屋上庭園を提唱している。「解放された土地(*le sol libéré*)」は地上に設けられた庭園であり、ル・コルビュジェは建築制作活動を通して前庭(*parvi, jardin*)、中庭(*cour*)、ピロティ(*pilotis*)の3類型を一貫して用いている。なお、これらは1930年代以降の積極的な応用や展開が確認できず、庭園相互の関連性も希薄である。一方、非地上の庭園である「獲得された土地(*le sol conquis*)」に関しては、敷地の環境条件に応じてテラス(*terrasse*)、空中庭園(*jardin suspendu*)、屋上庭園(*toit jardin*)、ロジア(*loggia*)の4類型を提唱し、設計活動後期になるほどに、類型相互を関係付けながら多様に応用している^{注2)}。また、屋上庭園は休息や余暇という点で「獲得された土地」のピロティと意味的にも類同している^{注3)}。つまり、設計活動初期においては比較的独立した建築的要素であった庭園類型が、設計活動後期になるにつれて次第に融合的になっていくことが分かる。そして、他の庭園類型との連関が最も顕著な類型が屋上庭園であった。

なお、当然のことながら、ル・コルビュジェの建築制作過程における「解放された土地」の計画は、敷地条件や建築プログラムの修正変更など外的諸条件に左右されることが多い。そのため、「解放された土地」の付加と削除はいずれも一定数あるものの、ル・コルビュジェが地上の庭園への眼差しを持ち続けているとは言い難い。その一方で、建設費の制限される計画案が多いにもかかわらず、一貫して「獲得された土地」に関する削除は数少なく、その付加が著しい。なかでも屋上庭園の付加は敷地条件を問わず一貫して多いことから、屋上庭園が設計活動を通して重要性を持っていることがわかる。

一方、ル・コルビュジェは屋上庭園の基盤である屋根型を「モノル型」と「シトロアン型」という2種類に定義付けている。そしてこれらは、「新しい建築の5つの要点(*Les 5 points d'une architecture nouvelle*, 1929)」の出自であるドミノ住宅(*Maison Dom-ino*, 1914)の建設システムに直結している^{注4)}。量産住宅を理念とする型の探求であるドミノは、水平スラブと柱による建設方法であり、用いられた挿絵の屋根はシトロアン住宅(*Maison Citorohan*, 1920)以降に展開される水平スラブの屋根で描かれている。然し乍ら、ドミノの応用は、水平スラブを形態的特徴とするシトロアン住宅より前に、ヴォールト屋根によって構成されるモノル住宅(*Maison Mono1*, 1919)として用いられ、周辺環境との関係性が模索されている。つまり、ル・コルビュジェの屋上庭園には大枠として2種類の屋根型が用いられ、純粹なる幾何学形態では表現できない主題も含まれていると推測できる。

「モノル型」はドミノの原理を水平方向へと応用したものであり、周辺環境との同化が主題とされ、派生的にパラソル屋根やバタフライ屋根へと展開する。一方、「シトロアン型」はドミノの原理を鉛直方向へと応用し、伝統的な屋根を否定することで、対比的な景観との調和を生み出している。つまり、ル・コルビュジェは量産や機能を主題とするドミノを基軸としながらも、屋根型の操作によって景観の主題を包含させ、気候条件が厳しくなるほどに、屋根型相互を多様に連関させている。当然、ル・コルビュジェは、いずれの屋根型においても屋上庭園を計画し続け、2つの屋根型相互を設計過程で多様に行き来することで、新たな屋上庭園の空間構成を見出している。

そして、上記のような庭園と屋根型の操作によって創出される屋上庭園は、1929年に植栽の取り扱いに関する違いによって「手入れされた屋上庭園(*toit jardin surveillé*)」と「野生のままの屋上庭園(*toit jardin laissé à l'état sauvage*)」という2種類に大別される^{注5)}。「手入れされた屋上庭園」が庭園の水平面を人為的に押し上げた人工的環境の探求であるのに対し、「野生のままの屋上庭園」は、土着的な野生への回帰という主題をも同時に内包した、自然的環境と人工的環境を交差する建築的手法の一端を示すものである。

1920年代は「手入れされた屋上庭園」のみが用いられ、人為的な空間の構成によって、都市部の雑多な環境との断絶が計られている。また、造作に用いたコンクリートに関する記述も多く、地域性の少ない均質な質感が探求されている。一方、1930年代以降になると、「手入れされた屋上庭園」に加えて「野生のままの屋上庭園」も用いられる。それらは、地上の大地を模することで、地上の生態系を介入させようと試み、また同時に、環境負荷低減の装置として、屋上庭園下の居室環境の向上を実現している。さらに、ル・コルビュジェは屋上庭園と土地固有の風景との融合を試みるとともに、外部から建築を見た際の周辺環境との景観の調和にも着眼を置いている。

そして、これらの屋上庭園に対し、前川國男はサヴォワ邸(*Villa Savoye*, 1932)とマルセイユのユニテ・ダビタシオン(*Unité d'Habitation de Marseille*, 1952)の2作品のみに着目する。つまり、前川國男はル・コルビュジェの屋上庭園のうち、「手入れされた屋上庭園(*toit jardin surveillés*)」という一面のみに着眼を置いていると推測できる。これは、前川國男がル・コルビュジェ事務所に在籍していた当時、まだ「野生のままの屋上庭園」が提唱されていなかったことが要因であり、前川國男はル・コルビュジェから直接享受した屋上庭園に限って言及している。

なお、サヴォワ邸(*Villa Savoye*, 1932)に関しては、形態的な特徴にさほど関心を寄せず、空中庭園と屋上庭園が段状に連続する半屋外空間全体に着目し、同時に屋内居

室との視覚的な連続性や周辺環境への眺望にも着眼を置いている。一方、マルセイユのユニテ・ダビタシオン(Unité d'Habitation de Marseille, 1952)に関しては、構成要素の彫塑的形態や共同施設の多様性に関心を示しており、作品毎に異なる主題を捉えている。

4. 前川國男による屋上庭園の実践

第4章では、前川國男の建築作品における屋上庭園に着目し、前川國男が如何にル・コルビュジェの屋上庭園を独自の建築手法として応用しているのかを明らかにする。まず、前川國男自身の屋上庭園とル・コルビュジェの屋上庭園との差異や類似性を分析することで、前川國男の屋上庭園におけるル・コルビュジェからの受容を考察する。

なお、設計活動後期における前川國男の屋上庭園の一部は、地上階の外部動線と接続されることで、エスプラナード(esplanade)と呼称付けられた屋外空間の一部として取り込まれている。そこで第4章では、前川國男の建築作品における屋上庭園の展開として、エスプラナード(esplanade)にも着眼を置き、前川國男自身がエスプラナードの出自としているカルーゼル広場との差異や類似点を分析することで、屋上庭園からエスプラナードへの変遷を明らかにする^{註6)}。加えて、研究対象とした5つのエスプラナードを比較し、屋上庭園との類似性を分析することで、前川國男が屋上庭園を如何に展開したのかを明らかにしている。

結果、前川國男の屋上庭園におけるル・コルビュジェからの受容は、第二次世界大戦後に顕著に現れる。戦後第一期(1946-1950)は、サヴォワ邸の屋上庭園に設けられた構成要素の形態的な特徴を直接的に参照し、また、戦後第二期(1951-1960)には、ユニテ・ダビタシオンの屋上庭園に配された有機的な形態を、抽象化・幾何学化することで、応用している。さらに、戦後第三期(1961-1986)には、サヴォワ邸で用いられた段状の空間構成を自身の屋上庭園へと応用することで、公共建築の屋上庭園に、屋内外の視覚的な連続性や多様な散策動線を付加している。

加えて、段状の構成は次第に地上とも接続され、次第にエスプラナードと呼称付けられた屋外空間の一部としても取り込まれている。

なお、前川國男のエスプラナードとカルーゼル広場の相違点が多い。前川國男のエスプラナードは、いずれもカルーゼル広場と同様に、囲われながらも周囲の環境と関連する空間構成が用いられている一方で^{註7)}、カルーゼル広場には無い鉛直方向への連続性が付加され、高低差のある屋外空間相互が断続的に展開されている。また、段状の空間構成は、屋内居室との視覚的な連続性をも生み出し、建築内外の境界を曖昧にしている。

加えて、5作品のエスプラナード相互の差異も少な

く認められる。埼玉会館(1966)や東京海上ビルディング計画案(1966)、ポンピドゥー・センター計画案(1971)のエスプラナードは、都市部における建築の密集化に対する解決策として設けられ、不特定多数の市民が自由に利用可能な公開空地として用いられている。そのため、計画建物と近隣建物によって取り囲まれたエスプラナードが用いられ、主に都市と建築を結ぶ散策路として計画されている。一方、東京都美術館(1975)と福岡市美術館(1979)のエスプラナードは、主に来館者のために設けられ、敷地内に緑豊かな周辺環境を取り込むことが主題とされている。そのため、分棟配置の計画建物によって取り囲まれたエスプラナードが用いられ、またエスプラナードと内部居室を動線的にも連続させることで、周辺環境から建築内部までをシームレスに結びつけている。

なお、上記に示した2種類の手法は、ポンピドゥー・センター計画案(1971)を境に変化しているものの、事例数が少ないことから、手法の発展であるとは断定し難い。ただ少なくとも、前川國男は敷地条件に起因して、エスプラナードを使い分けていることが明らかである。

第2節 考察

日本近代建築における屋上庭園は、外在的な要因を経ることで通時的に変化している。それらは、経済的要求を満たすための商業的な庭園から、戦時体制下の私的庭園へと変化し、さらには、戦後には合理性を超越してまで屋上に多様性を求めている。ただし、屋上庭園の主題に関しては、黎明期から重視され続けた眺望が、高度経済成長期にいと簡単に消失する。おそらく、高度経済成長は屋上庭園の多様化をもたらすと同時に、市街地に画一的な建築物を乱立させ、市街地における見るべき眺望の対象を消失させたのだと推測できる。

一方、前川國男の屋上庭園は断続的に計画され続け、設計活動後期になるほどに、実利性や眺望を重視した公共建築へと収斂している。ただし、前川國男の全作品数に対する屋上庭園の作品数は必ずしも多いとは言い難い。高温多湿な日本の気候条件下で屋上庭園を計画することは、耐久性や維持管理の著しい低下に直結したのであろう。事実、前川國男の屋上庭園において、環境負荷低減や衛生という西洋近代における屋上庭園の主題は、どの時期に関しても希薄である。つまり、前川國男はある程度の施工費用が見込め、また精度の高い施工が可能な公共建築に限って屋上庭園を設けている。

なお、前川國男が設計活動後期に計画した公共建築には、弘前市立博物館(1976)や新潟市美術館(1985)をはじめ、屋上庭園が設けられていない作品があるのも事実である。ただし、それらは概ね容積率がさほど高くないことから、前川國男は狭隘な敷地や甚大な容積を求められた場合など、公共の屋外空間を地上に設けることができない公共

建築の事例に限って屋上庭園を用いているとも推測できる。

また、前川國男が屋上庭園に関して言及しているのは、ル・コルビュジェ (Le Corbusier, 1887-1965) が設計したサヴォワ邸(Villa Savoye, 1932)とマルセイユのユニテ・ダビタシオン(Unité d'Habitation de Marseille, 1952)の2作品であり、いずれも前川國男が直接訪れたことのある屋上庭園である。さらに、前川國男が自身の屋上庭園を計画する際に参照したのもまた、サヴォワ邸とマルセイユのユニテ・ダビタシオンの2作品であった。つまり前川國男は、自身の体験の中で享受した屋上庭園を、自身の作品へと置換していると推測できる。

なお、ル・コルビュジェが屋上庭園に野生性を付与することで、地上と非地上の庭園を視覚的に結びつけているのに対し、前川國男はエスプラナードによって地上と非地上を動線的にも結びつけ、市民が多方向から自由に流入可能な散策動線を形成している。言い換えるのであれば、前川國男は日本において、ル・コルビュジェの屋上庭園を再び大地と接続させることで、屋外空間に新たな公共性を付加している^{注8)}。

第3節 結論(図1)

前川國男は屋上庭園の制作において、一貫して自身が体験したル・コルビュジェ作品に着眼し続け、設計活動後期になるほどに、形態が主張することのない空間構成そのものとして応用している。

前川國男は周辺環境への眺望が消失する高度経済成長期において、屋上庭園にル・コルビュジェから受容した「段状の空間構成」や「屋内居室との視覚的な連続性」を付加し、また登降の行為を通じて新たな眺望を生み出すことで、それまでの日本にはない公共性を付加させよ

うと試みている。また一方で、段状の構成を地上にまで延長させ、カーゼル広場の持つ周辺環境との連続性を付加することで、エスプラナードという新たな公共空間をも創出している。

それらは、いずれも時代毎の社会的な課題に対する前川國男の解決策であり、前川國男はル・コルビュジェの私的な屋上庭園の空間構成を、日本の公共建築へと置換することで、独自の手法として読み替えている。

要するに、普遍性や合理性を造形理念とするモダニズムの潮流の中において、前川國男はル・コルビュジェの屋上庭園に独自の公共性を加味し、再び大地と接続させることで、周辺環境と建築とを流動的に調和させている。前川國男が屋上庭園やエスプラナードで探求し続けたこの公共性は、敷地が狭隘な日本において、また、建築の密集化が進む現代においても、建築と周辺環境を連関させる手法として再評価できるであろう。

図版出典

図1: 筆者作成

注釈

1) 近代建築における屋上庭園の形式は、必ずしもル・コルビュジェ自身が考案した手法という訳ではない。実際、ル・コルビュジェが東方への旅以前に勤めていたオーギュスト・ペレ(Auguste Perret, 1874-1954)の事務所(Franklin apartment building, 1903)には、すでに屋上階に庭園が配され、またフランソワ・アンヌビク(François Hennebique, 1842-1921)が1903年に建設した自邸(Maison Hennebique)にも、鉄筋コンクリート片持ち梁の上部に屋上庭園が施工されている。

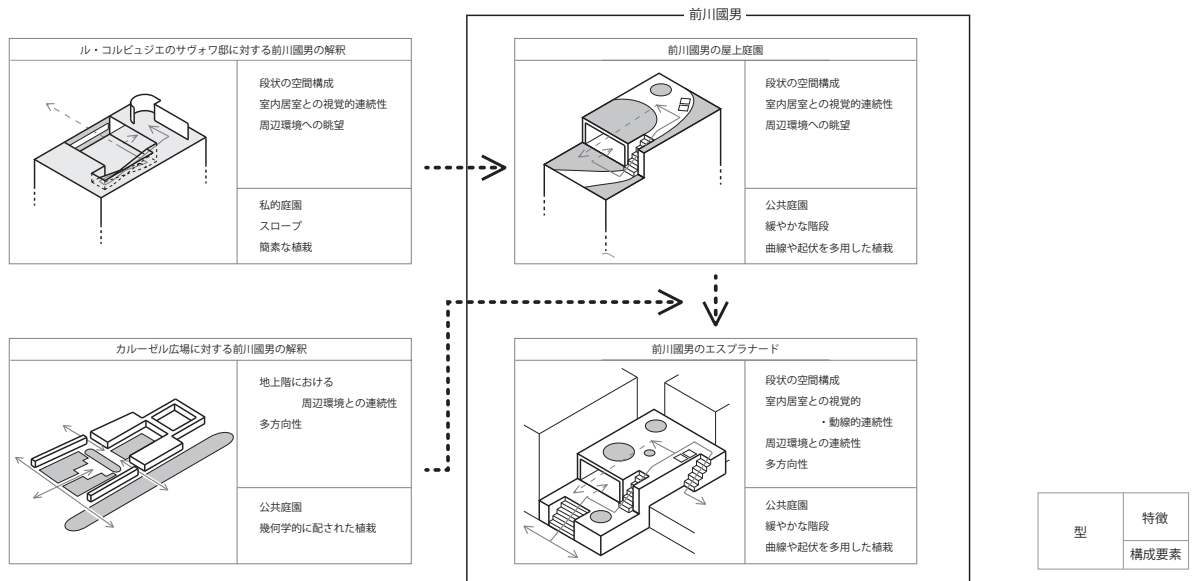


図1 高度経済成長期における前川國男の屋上庭園の変遷

- 2) たとえば、1949年のロクとロブ(Roq et Rob)では、地中海を臨む段状のテラス形式が用いられているにも関わらず、ル・コルビュジェは「眺望」という関連から屋上庭園の呼称に読み替えている (Ibid., vol.5, p.54, (吉阪隆正訳: p.52))。また、1930年代以降になると、中層階に設けられた空中庭園は計画されなくなるが、チマンバイ邸(Villa Chimambhai, 1953)では屋上庭園の上部に独立したパラソルを設け、このパラソル下の空間を空中庭園(jardin suspendu)として再解釈している (Ibid., vol.5, p.163, (吉阪隆正訳: p.155は「屋上」としている))。さらにハッスイシング邸(Villa Hutheusing, 1953)ではロジア部分をテラス=庭園(terrasse-jardin)としている (Ibid., vol.5, p.164, (吉阪隆正訳: p.156は屋上庭園としている))。
- 3) たとえば、第二次世界大戦後のマルセイユの住居単位(L'Unité d'habitation à Marseille)では、ピロティにおいて本来の自動車交通よりも休息や余暇活動に重点が置かれ、屋上庭園の機能と類似している (Ibid., vol.5, p.194)
- 4) Le Corbusier, Willy Boesiger éd., *Le Corbusier&Pierre Jeanneret Œuvres complète*, Les Editions d'Architecture Artemis Zurich, Zurich, 1937, vol.1, pp.128-129
- 5) *Ibid.*, vol.4, p.140, (吉阪隆正訳: p.138)
- 6) 前川建築設計事務所に保管されている竣工図面を用いる。ただし、東京海上ビルディング計画案とポンピドゥーセンターに関しては、竣工図面が無いため、東京海上ビルディング計画案は新建築及び建築文化に発表した際の図面資料を用い、またポンピドゥーセンターはコンペ提出資料の複製を用いて分析を行う。
- 7) 戦前にカルーゼル広場で受容した空間構成が設計活動後期になって現れるのは、公共建築の計画の増加が要因と推測できる。
- 8) ただし、前川國男とル・コルビュジェはいずれも、「手入れされた屋上庭園」もまた、設計活動を通して計画し続けている。つまり、周辺環境とは異化された屋上庭園への抗えきれない憧憬を残らせている。

学術論文一覧

第1章

- ・ Michiya Tsukano, Shoichiro Sendai, : “The Roof Garden in Japanese Modern Architecture From the End of World War II until 1966” , Proceedings of the International Conference on Kansei Engineering and Emotion Research, KEER 2014, June 11-13, 2014, Linköping University, Sweden, 2C
- ・ Shoichiro SENDAI, Michiya TSUKANO: “Importation of Le Corbusier’s ‘Roof Garden’ to Japanese Modern Architecture” The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA), B-1-3, KDJ Convention Center, Gwang-Ju, Korea, October, 2012

第2章

- ・塚野路哉、千代章一郎:「日本近代建築における屋上庭園 -明治期から第二次世界大戦終戦まで-」日本感性工学会論文誌, 第13巻, 1号, 2014.2, pp.127-135

第3章

- ・千代章一郎、塚野路哉:「建築家ル・コルビュジエの建築制作における「庭園」への感性」日本感性工学会論文誌, 第12巻, 1号, 2013.4, pp.25-34
- ・千代章一郎、塚野路哉:「ル・コルビュジエの「屋根」への感性 -近代建築家の旅が建築構想へ与えた影響-」日本感性工学会論文誌, 第10巻, 2号, 3月, 2011年 pp.177-183
- ・Shoichiro SENDAI, Michiya TSUKANO: “Le Corbusier’s Kansei of ‘Roof Garden’ -The Influence of the Journey on the Architectural Concept by the Modern Architect-” International Journal of Affective Engineering Vol.12, No.2, 2012, pp.95-102

第4章

- ・塚野路哉、千代章一郎:「前川國男の屋上庭園におけるル・コルビュジエからの受容」日本建築学会計画系論文集, 第82巻, 第735号, 2017.5, pp.1239-1246

補遺

- ・千代章一郎、塚野路哉:「ル・コルビュジエの東方への旅における「屋根」への感性 -『手帖』と『旅』の記述の比較-」日本感性工学会論文誌, 第10巻, 2号, 3月, 2011年 pp.169-176

業績一覧

[審査論文 筆頭]

- ・塚野路哉、千代章一郎:「前川國男の屋上庭園におけるル・コルビュジエからの受容」日本建築学会計画系論文集, 第 82 卷, 第 735 号, 2017.5, pp.1239-1246
- ・塚野路哉、千代章一郎:「日本近代建築における屋上庭園 -明治期から第二次世界大戦終戦まで-」日本感性工学会論文誌, 第 13 卷, 1 号, 2014.2, pp.127-135

[審査論文 共著]

- ・千代章一郎、塚野路哉:「建築家ル・コルビュジエの建築制作における「庭園」への感性」日本感性工学会論文誌, 第 12 卷, 1 号, 2013.4, pp.25-34
- ・Shoichiro SENDAI, Michiya TSUKANO: “Le Corbusier's Kansei of ‘Roof Garden’ -The Influence of the Journey on the Architectural Concept by the Modern Architect-” International Journal of Affective Engineering Vol.12, No.2, 2012, pp.95-102
- ・千代章一郎、塚野路哉:「ル・コルビュジエの「屋根」への感性 -近代建築家の旅が建築構想へ与えた影響-」日本感性工学会論文誌, 第 10 卷, 2 号, 3 月, 2011 年 pp.177-183
- ・千代章一郎、塚野路哉:「ル・コルビュジエの東方への旅における「屋根」への感性 -『手帖』と『旅』の記述の比較-」日本感性工学会論文誌, 第 10 卷, 2 号, 3 月, 2011 年 pp.169-176

[国際会議 査読]

- ・Michiya Tsukano, Shoichiro Sendai, : “The Roof Garden in Japanese Modern Architecture From the End of World War II until 1966” , Proceedings of the International Conference on Kansei Engineering and Emotion Research, KEER 2014, June 11-13, 2014, Linköping University, Sweden, 2C
- ・Shoichiro SENDAI, Michiya TSUKANO: “Importation of Le Corbusier's ‘Roof Garden’ to Japanese Modern Architecture” The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA), B-1-3, KDJ Convention Center, Gwang-Ju, Korea, October, 2012

参考文献一覧

- ・宮内嘉久編『前川國男作品集 建築の方法 全一卷・二分冊』, 美術出版社, 1990
- ・MID 編『前川國男建築事務所作品集第1輯商店建築』, 工学図書出版社, 1947.11
- ・MID 編『PLAN1』, 雄鷄社, 1948
- ・前川設計研究所編『PLAN2』, 雄鷄社, 1948
- ・前川國男建築設計事務所『前川國男建築設計事務所』, 1970, 1978
- ・前川國男『前川國男＝コスモスと方法』, 前川國男建築設計事務所, 1985
- ・前川國男『文明と建築』『建築年鑑』, 美術出版社, 1964.11
- ・前川國男『超高層ビルの意味』『朝日新聞』, 1967.12.20
- ・前川國男『合理主義の幻滅-近代建築への反省と批判』『C&D』, 1974.10
- ・前川國男、宮内嘉久編『一建築家の信條』, 晶文社, 1981
- ・宮内嘉久『建築家前川國男の仕事』『一建築家の信條』, 晶文社, 1981
- ・生誕100年前川國男建築展実行委員会『生誕100年前川國男建築展図録』, 2006
- ・松隈洋『前川國男 現代との対話』, 六耀社, 2006
- ・前川國男、宮内嘉久『一建築家の信條』, 晶文社, 1981
- ・宮内嘉久『前川國男 賊軍の将』, 晶文社, 2005
- ・松隈洋『建築の前夜 前川國男論』, みすず書房, 2016

- ・沢田隆夫『ふたつの疑問とひとつの教訓』『新建築』, 1966.7
- ・浜口隆一『ヒューマニズムの建築 日本近代建築の反省と展望』, 雄鷄社, 1947, 1995
- ・長谷川堯『神殿か獄舎か』, 相模書房, 1972
- ・布野修司『戦後建築論ノート』, 相模書房, 1981
- ・浜口隆一『日本国民建築様式の問題』, 而立書房, 1998
- ・浜口隆一、平良敬一、宮内嘉久『地域建築家の地平は“丹下理論”の乗りこえなしに拓けない』, INAX, 1994
- ・中真巳『近代建築発展三段階説について 前川國男序論』『建築』, 1961.8
- ・佐々木宏『近代建築の目撃者』新建築社, 1977(1976所収)
- ・松隈洋『前川國男の戦前の意味、近代建築という初心』『新建築・一九九五年十二月臨時増刊・現代建築の軌跡』, p.119
- ・佐々木宏『前川國男』『巨匠への憧憬』, 相模書房, 2000, pp.167-196
- ・内田祥士『国際文化会館(1955)』『再読/日本のモダンアーキテクチャー』, 彰国社, 1997, pp.86-94
- ・内田祥士『神奈川県立図書館(1955)』『再読/日本のモダンアーキテクチャー』, 彰国社, 1997, pp.86-94
- ・山本学治『合理主義の系譜-日本の近代建築と前川國男の位置』『国際建築』, 1967.6
- ・アルフレッド・ロート『前川國男への追悼』『追悼前川國男』, 前川建築設計事務所, 1987
- ・藤森輝信『日本の近代建築 上・下』岩波新書, 2009
- ・村松貞次郎、山口廣、山本学治『近代建築史概説』彰国社, 1978
- ・八束はじめ『思想としての日本近代建築』岩波書店, 2005
- ・松隈洋『近代建築を記憶する』, 建築資料研究社, 2005
- ・長谷川堯『建築の出自』, 鹿島出版会, 2008
- ・高階秀爾、三宅理一、鈴木博之、太田泰人『ル・コルビュジエと日本』, 鹿島出版会, 1999

- ・井上章一：「コルビュジエからラスキンか」, GA Japan, A.D.A.エディタ トーキョー, 2014.11, p.123
- ・加藤周一：「東京・変わりゆく都市」『日本 その心とかたち』, スタジオジブリ, 2005, p.284
- ・浜口隆一：「日本国民建築様式の問題」『新建築』新建築社, 1944
- ・布野修司：「Mr.建築家 前川國男というラディカルズム」『建築の前夜』而立書房, 1996, pp.15-34

- ・『明治園芸会雑誌』日本園芸会, 1896
- ・近藤三雄：「屋上緑化の本来あるべき姿 より質の充実を」, ベース設計資料, No.135 建築編, 建設工業調査会, pp.36-40, 2007
- ・近藤三雄：「わが国における屋上庭園の起源と黎明期における展開にて」, 造園技術報告集(5), 2009, pp.200-203
- ・山田宏之：「屋上庭園今昔」, インタラクシオン, 2004, pp.4-24
- ・日置勝人：「我が国の屋上庭園」, 造園雑誌 9(1), 1942, pp.7-13
- ・四ヶ所高志, 横山天心, 塩崎太伸, 奥山信一：「現代日本の建築家による屋上庭園形式をもつ住宅の設計意図」, 日本建築学会計画系論文集, 第80巻, 第718号, 2015.12, pp.2833-2840

- ・Stanislaus von Moos: *Le Corbusier-Elemente einer Synthese*, Switzerland, 1968 (Stanislaus von Moos, 住野天平訳：『ル・コルビュジエの生涯 建築とその神話』, 彰国社, 1981)
- ・William J. R. Curtis, 中村研一訳：『ル・コルビュジエ-理念と形態』, 鹿島出版会, 1992
- ・Jacques Lucan éd.,: *Le Corbusier une encyclopédie*, CCI, Paris, 1987, (Jacques Lucan ed., 加藤邦男監訳：『ル・コルビュジエ辞典』, 中央公論美術出版, 2007)
- ・Marc Treib ed.,: *Modern landscape Architecture, A Critical Review*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, London, 1993
- ・Dorothee Imbert: *The Modernist Garden in France*, Yale University Press, New Haven, London, 1993
- ・Isotta Cortesi: *Parcs publics, paysage 1985-2000*, Federico Motta Editore S.p.A., Milan, Actes Sud / Motta, Arles, 2000
- ・Stanislaus von Moos, et al.: *Le Corbusier et la nature*, Fondation Le Corbusier, Editions de la Villette, Paris, 2004
- ・Adolf Max Vogt: *Le Corbusier the Noble Savage*, The MIT Press, London, 1998
- ・Sarah Menin, Flora Samuel: *Nature and Space*, Aalto and Le Corbusier, Routledge, London, 2003
- ・Charles Jencks: *Le Corbusier and the Continual Revolution in Architecture*, The Monacelli Press, New York, 2000
- ・Tim Benton: *La villas Baizeau et le brise-sleil*, Le Corbusier et la Méditerranée, Parenthèses, Marseille, 1987, pp.124-129
- ・Le Corbusier: *Vers une architecture*, 1924 (Le Corbusier, 吉阪隆正訳：『建築をめざして』, 鹿島出版会, 1967)
- ・Le Corbusier: *Le Modulor*, 1948, (Le Corbusier, 吉阪隆正訳：『モデュロールI』, 鹿島出版会, 1976)
- ・Le Corbusier: *Précisions*, Les éditions G, 1930, (Le Corbusier, 井田安弘訳：『プレジジョン』, 鹿島出版会, 1984)
- ・François de Pierrefeu, Le Corbusier: *La maison des homes*, Librairie Plon, Paris, 1942, (François de Pierrefeu, Le Corbusier, 西澤信彌訳：『人間の家』, 鹿島出版会, 1977)
- ・Le Corbusier: *Le Corbusier&Pierre Jeanneret Œuvres complètes*, vols.8, Willy Boesiger, ed., Zurich, Les Editions d' Architecture Artem, 1964, (Le Corbusier, Willy Boesiger, ed., 吉阪隆正訳：『ル・コルビュジエ全作品集』, 全8巻, A.D.A. 1978)
- ・Foundation *Le Corbusier: Corbusier Archives vols.32*, Garland Publishing and Foundation, New York and Paris, 1981-1982
- ・Foundation Le Corbusier, Echelle-1: *Le Corbusier Plans*, 丸善出版, 2005
- ・Le Corbusier: *L'unité d'habitations de Marseille*, Le Point, 1950

補遺

ル・コルビュジェの建築作品における屋上庭園の起源

第1章 屋上庭園の起源

ル・コルビュジェが近代建築家としての活動以前に敢行した約6ヶ月間の「東方への旅(Voyage d'Orient, 1911)」は、後に自身の著書『建築をめざして (Vers une architecture)』[1]や『ル・モデュロール (Le Modulor)』の研究[2]の中でも度々取り上げられ、建築家としての建築設計活動に大きな影響を与えるような発想、創造の源泉となっている^{注1)}[3]。また、柱とスラブによる骨組み「ドミノ (Dom-ino, 1914)」に基づいて提唱された「近代建築の5つの要点(Les 5 points d'une architecture nouvelle, 1926)」とも密接に関連することから^{注2)}、屋上庭園もまた東方の旅に着想を得ていると推測できる(図1)。

ただし、ル・コルビュジェの屋上庭園はモダニズムの言語であり^{注3)}、東方への旅の歴史的環境に屋上庭園という形式が存在していたとは考え難く、屋上庭園に関する直接的な記述もない^{注4)}。

そこで本章では、屋上庭園の起源として、仮説的に建築の最上部に設けられた屋根及び、敷地内の半自然的環境である庭園に着目し、主題を明らかにする。

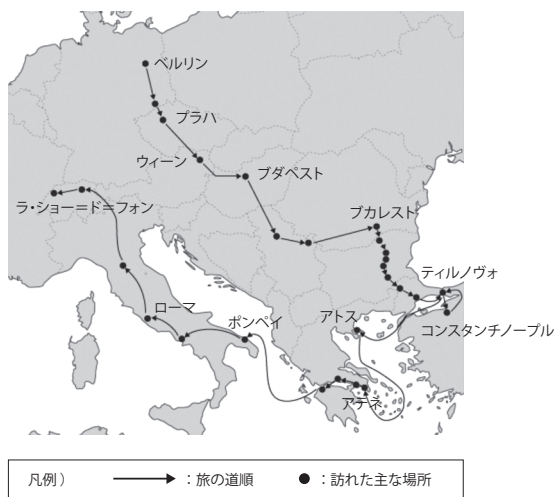


図1 「東方への旅」の旅程

第2章 研究の方法

「東方への旅」に関する分析の一次資料として、『ル・コルビュジェの手帖 東方への旅 (Voyage d'Orient carnets)』[4] (Carnets と表記)^{注5)}、および『東方への旅 (Le

voyage d'Orient)』[5] (Voyage と表記)^{注6)}の記述を用いる^{注7)}。Carnets はル・コルビュジェが旅に携帯した手帖であり、旅の現場で建築的な環境や自己自身と直接的に向き合って即時記録されている。一方、Le Voyage d'Orient と題される旅行記は、当初1914年に出版される予定であったが、第1次世界大戦により企画中止となり、さらに旅で携えた6冊のCarnetsは、第二次世界大戦の前後に行方不明となる。その後原稿自体も放置されていたが、ル・コルビュジェは死の数週間前の1965年に再びその原稿の出版を決意する。しかし手元にCarnetsはなく、50年以上前の草稿のみを推敲し、死後1966年に言わば確定稿として記述のみで出版されている^{注8)}。

これらの一次資料から、屋根と庭園を説明対象とする言説の内容をKJ法によって整理し^{注9)}、記述の対象となる主題を抽出する。加えて、抽出した記述について、客観的に捉えた事物的記述と、ル・コルビュジェ自身の心象を付加し屋根を主観的に捉えた現象的記述に大別することで、旅における直接的な記述であるCarnetsと後の事後的な記述であるVoyageの比較検討を行う。

第3章 主題の抽出

庭園と屋根に関する記述内容を、KJ法によってそれぞれに整理すると、次のように分類できる^{注10)}。

なお、本研究では、建築歴史意匠の研究者3名によってKJ法を行い、要素的な類似性による記述の分類を行っている。また、それぞれの判断が異なる場合には、判断根拠と判断の是非を議論し、判断の一致が得られた時点で再度始めからKJ法による分析を試み、全ての記述について判断が一致するまでこの行程を繰り返し行う。

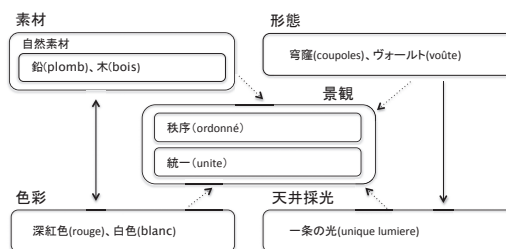


図2 Carnetsにおける屋根の主題

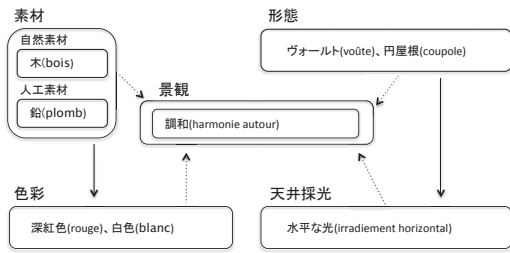


図3 Voyageにおける屋根の主題

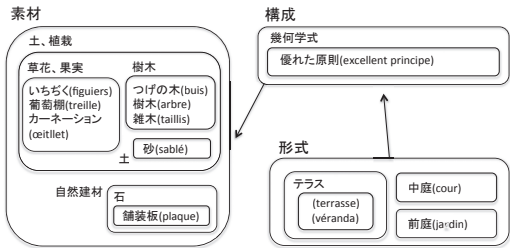


図4 Carnetsにおける庭園の主題

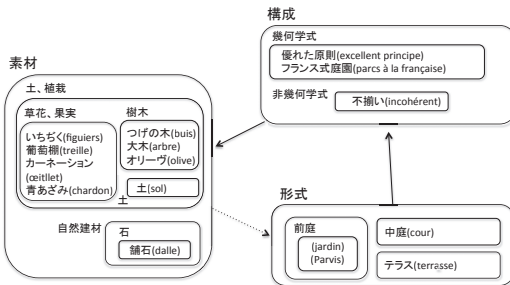


図5 Voyageにおける庭園の主題

結果、屋根に関する記述は、Carnets と Voyage とともに、屋根を構成する材料に着目した「素材」、建築の屋根全体若しくは一部の屋根形状に着目した「形態」、屋根の表層部の色彩を捉えた「色彩」、屋根に空けられた開口に着目した「天井採光」、屋根によって創出される景觀に着目した「景觀」の5つに大枠として分類できる^{注11)} (図 2,3)。

また同様に、庭園に関する記述は植栽や材料などに着目した「素材」、その素材要素が庭園においてどのように構成されているかに着目した「構成」、さらには、庭園の構成が建築的に組み込まれた際の位置関係である「形式」の3つに分類できる (図 4,5)^{注12)}。

第4章 屋根に関する記述の比較 (表 1)

第1節 Carnetsにおける屋根に関する記述

第1項 素材

素材に着目した記述は旅を通して民家に数多く認められ、旅の後期になるにしたがって次第に減少している。典型的な記述として、ル・コルビュジェは次のように記し、家屋の素描を添えている (図 6)。

「(小枝の木舞格子に泥漆喰を塗っただけの、柱と横木の小屋) 藁葺きの屋根」^{注13)}

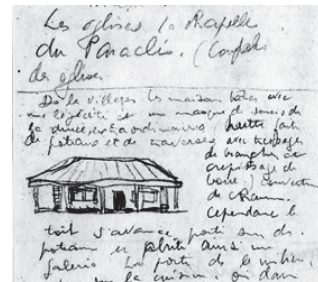


図6 ブカレストの家々の家屋^{注14)}

このようにル・コルビュジェは旅の中で多くの自然素材の屋根を捉え、土着的な素材を構成要素の一部として記録している。

さらに、ブダペストの城壁周囲のあばら屋について「藁の波は、繊細で見事な黒ねずみ色の帯となり、その屋根の非常に緻密な網目模様と黄色い壁とが織りなす、有機的で生き生きとした線は、時として、大様式と呼べるほど高貴なものに見える」^{注15)}と記しているように、多くの記述で素材と色彩を同時に扱い、空間体験の印象をより精緻に記録しようと試みている。

第2項 形態

教会やモスクのドーム屋根に着眼した記述が、旅を通して確認できる。ル・コルビュジェはウィーンの春祭に関する次の記述のように、ドームの持つ影響力と空間に及ぼす効果に着目している。

「柱身の黒い柱廊と、そこから流れ出るような、目を見張る筒形ヴォールト、それが、視界を奪うほどの影響力をもつ」^{注16)}

また、アドリアノーブルのエスキ・ジャーミ・モスクに関して「驚くべきことには、9つの穹窿が同じ直径なのに、1の穹窿がもっとも高くなっている。一見したところ、直径がすべて等しいとはわからない。教会堂の全体が唯一の外皮をまとっている//僕は、素足で寸法を測りとり」^{注17)}と自らの印象を記し (図 7)、ドーム屋根が実際の寸法以上に空間に拡がりをもたせる効果についても着目している。



図7 アドリアノーブルのエスキ・ジャーミ・モスク^{注18)}

表1 屋根に関する記述（抜粋）（太文字は現象的記述を示す）

Carnets	Voyage	時期	対象	仏語原文頁 (兼編)	仏語原文	訳頁	記述	原文註	素材	形態	色彩	天井採光	景観	
○			ウィーン 「花の日 Blumen Tag」あるいはウィーンの春祭	Carnets 2-6	L'unité/ de lieu heureusement rachète beauté [?] . la/ colonnade noire des troncs de-cette/ et cette phénoménale voûte [?] en/ berceau qui s'enfuit/ influe [?] vision âperde de vue.//	89	場所の統一感によって、幸いにも美[?]が取り戻されている。柱身の黒い柱廊と、そこから流れ出るような、目を見張る筒形ヴォールト[?]、それが、視界を奪うほどの影響力をもつ[?]			○				
○		1911. 6.2-6.16	ブダペスト 城壁の周囲のあばら屋	Carnets 2-13[11]	La ligne organique/ et vivante de ces s'ennoblissait/ souvent jusqu'à-ees/ murs jaunes et de ces/ toits à la résille très serrée/ faite du gris noir superbe/ des fins bandeaux s'enoblissant/ parfois jusqu'au grand/ style.	94	壁の波は、繊細で見事な黒ねずみ色の帯となり、その屋根の非常に緻密な網目模様と黄色い壁とが織りなす、有機的で生き生きとした線は、時として、大様式と呼べるほど高貴なものに見える。			○	○		○	
○		1911. 6.2-6.16	ルーマニア ダニューブ河航行 (ブカレスト到着前)	Carnets 2-21[19]	Des quelque/ oasis cependant, au giron de deux ou/ trois dunes opposées, se niche/ un village don't les toits/ brunatres et les façades repei blanches/ au printemps gitent/ ds les acacias	99-100	しかし、2、3の砂丘が向かい合ったその胸元のオアシスには、村が宿り、褐色がかかったその屋根と、春には白く塗られるファサードが、アカシアの木々の間に棲みついている				○		○	
	○		テルノボ	54	Les murs sont blancs et les charpentes noires, toitures comme l'écorce d'un arbre. Vu de loin c'est une aride stratification.	73-74	壁は白く木組は黒く塗られ、屋根は樹皮で葺かれているようだ。遠くから眺めると、それは乾いた層をなしているように見える。	timovo	ブルガリア北部、バルカンや山麓の小都市。		○			
○		1911. 6.29-7.5	アドリアノープル (エディルネ) エスキ・ジャーミ・モスク	Carnets 2-55[53] (Carnets 2-55[53] Carnets 2-56)	Ce qu'il y a d'étonnant/ c'est qu'avec 9 coupoles de même/ diamètre, le maximum est donné/ à celle 1. L'œil ne peut pas se/ faire à l'idée d'l égalité des/ diamètres. L' Eglise entière/ a 1 unique enveloppe et// les dimensions/ sont prises avec/ mes pieds nus./ Les arcs en tiers-point//	127	驚くべきことには、9つの穹窿が同じ直径なのに、1の穹窿がもっとも高くなっている。一見したところ、直径がすべて等しいとはわらない。教会堂の全体が唯一の外皮をまとっている//僕らは、素足で寸法を測り取る。尖頭アーチ。			○				
	○		コンスタンチノープル ベラ	69	Tandis que les maisons bois aux grands toits étalés échauffent leurs couleurs violacées dans la fraîcheur des verdure g énéreuses serties en des enclos dont le mystère me ravit qu'elles se groupent en harmonie autour de tous ces sommets qui sont des grandes, bien grandes mosquées blanches,	100	大きな屋根を連ねた木造家屋群が、神秘さをたたえた開いたみずみずしい緑の中に、紫を帯びたその色合を際立たせている。壮大な、じつに壮大な白いモスクをとり囲むようにそれら家々は調和をなして群がっている。			○	○		○	
	○		コンスタンチノープル スタンブル	78	Les hans font tout à l'entour des quadrilatè res sévères. Sur leurs toits en terrasse, s'aligne la multitude des petites coupoles de plomb. Ils s'axent, se mesurent et se proportionnent sur le sanctuaire dont ils d épendent.	111	〈ハン〉は厳格な四辺形の外郭を形成している。その平屋根の上には多数の小さな鉛の円屋根が聖殿の軸方向にしたがって一列に並び、釣合をたもちながら、聖殿と対比をなしている。			○			○	
○		1911. 7.5-8.17	コンスタンチノープル スタンブル	Carnets 2-77[79]-78	Les maisons turques à Stamboul/ Kassim Pacha [?] . l'art rude et charmant./ Rude quand le soleil/ est derrière et que toute/ la montagne n'est qu' une/ écaille sèche brun noir/ av 1 entuilement carr é/ et tout perforé, par les/ milliers de fenêtrés/ carrés ou le ciel blanc/ se mire. C'est 1 noire/ carapace toute tachée de points/ blancs et carres./ Charmant come un/ verger quand le soleil est devant/ les bois et les toits se violacent/ à cause du vert qui envahit/ tout et luit doucement.	137-138	スタンブルで見たトルコ風の家並み、カシム・パシャ[?]。荒っぽいが、魅力的な芸術。太陽が背後に沈み、山全体がそっくり四角い屋根瓦をまとい、ただ黒褐色の乾いたうろこ模様となる時、荒っぽくて粗野だ。幾千もの四角い窓がこの屋根瓦のような山腹を穿ち、白い空がこの窓に映し出されている。まるで四角い白の斑点模様をほどこした黒い甲羅のようだ。しかし、太陽が木々の子前で輝く時には、果樹園のように魅力的で、周囲一帯にやさしく光る緑に映えて、家々の屋根瓦は紫色となる。	ouは関係副詞 où と解釈する。			○	○		○
	○		コンスタンチノープル パザール	96	des minuscules fenêtrés percent ici et là le berceau bas des voûtes, et pourtant il rè gne une belle clarté.	140	低い筒形ヴォールトのここかしこに小さな窓が開けられているが、そのためにかえってほどよい光が射しこんでいる。			○			○	
	○		アトス カラカロウ	132-133	parce qu'en cette fête annuelle, le ré fectoire, immense berceau de pierre animé d'une antique idole (âme d'une impérative abside blanche), est ouvert toute la nuit. ----- L'Eglise au parvis dallé de pierre grise est uniformément rouge sang de boeuf: du bas jusqu'aux coupoles de plomb qui sont d'un admirable gris.	192-194	この恒例の祭典の日、古代の像(威圧的な白い後陣の本尊)によって活気づく巨大なヴォールト天井の食堂が夜通し開かれているからだ。<中略> 灰色の石を敷きつめた中庭にある聖堂は、基部から鉛筆きの円屋根にいたるまで一様に牛の血のような深紅色であった。			○	○			
○		1911. 8.22-9.6	アトス ヴァトペディ修道院 イヴィロンの食堂	Carnets 3-69 (Carnets 3-69 Carnets 3-69)	L'icone du réfectoire de V Iviron/ effet monumental à cause du/ gd coup que ça porte. Il faut/ se souvenir d'l telle puissance/ parce que les murs sont tous/ unis et que les fenêtrés cintrées/ sont filles du berceau qui voûte/ et du cul-de-four qui ferme./ C'est tout blanc.	172	イヴィロンの食堂の聖画像。この絵がもたらす大きな衝撃によるモニュメンタルな効果。このような強烈な力を憶えておく必要がある。というのも、壁がすべて一色で、アーチ型の窓は、穹窿をなす筒形ヴォールトや、盲型の半円ヴォールトと同族だからだ。すべてが白色だ。		修道院食堂の後陣にある聖母像は、『東方への旅』の「アトス」で、詳しく描写されることになる。前頁上段の平面図も、同じ主題に関連しているが、下段の図は、ヴァトペディ Vatopedi 修道院の食堂と対応する。		○			
	○			146	Des arcs doubleaux rythmant la voûte, é quilibrent la poussée des pierres.	210	穹窿にリズムをつけている二重アーチが石の圧力と均衡をたもっている。				○			
○		1911. 10.15-10.18	ローマ アグリッパのパンテオン	Carnets 4-151 (Carnets 4-151)	et ce qu'il y a de grandiose c'est/ l' unique lumiere qui vient du/ haut, sans vitrage, à ciel/ ouvert.//	220そして荘嚴なのは、窓ガラスもなく天空に穿たれた、あの高みから射し込む一条の光なのだ//						○	

第3項 色彩

ルーマニアの村に関する次の記述のように、ル・コルビュジエは旅の早期から屋根の色彩に注目している。

「2、3の砂丘が向かい合ったその胸元のオアシスには、村が宿り、褐色がかったその屋根と、春には白く塗られるファサードが、アカシアの木々の間に棲みついている」^{注19)}

また、イスタンブールのトルコ風の家並みに関して「太陽が木々の子前で輝く時には、果樹園のように魅力的で、周囲一帯にやさしく光る緑に映えて、家々の屋根瓦は紫色となる」^{注20)}とも記している。つまり、ル・コルビュジエは屋根そのものの色彩を描写する一方、太陽の時間推移に伴ってつねに変化を遂げる、現象的な色彩にも関心を寄せている。

第4項 天井採光

旅の初期には天井採光に関する記述はないものの、コンスタンチノーブル以降の寺院に関して、いくつかの記述が残されている。なお、「穹窿には穴があげられ、その部分は、鉄材に替えてある」^{注21)}と記述しているように、天井採光に関するほぼ全ての記述はドーム状の円屋根に関するものである。

また、ローマのパンテオンにて「・・・そして荘厳なのは、窓ガラスもなく天空に穿たれた、あの高みから射し込む一条の光なのだ」^{注22)}と記しているように、ドーム屋根から射し込む光の効果に着目し、現象的な記述を行っている^{注23)}。さらに、ティヴォリのカノプスについては、素描とともに次のように記述している(図8)。

「潜勢的には、これはこの形態。この明かり取りは美しい。<中略>この光の効果は、見る価値がある」^{注24)}

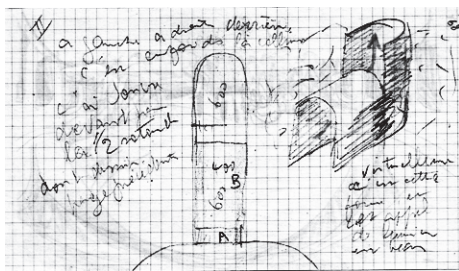


図8 ティボリのカノプス^{注25)}

つまり、ル・コルビュジエは、光の効果を記録すると共に、構成要素と天井採光の仕組みを描写することで、超越的な光を生み出す建築要素の記録を試みている。

第5項 景観

ル・コルビュジエは、旅の初期から民家や祭りなど、街全体の景観を捉えた記述を多く残している。しかしな

がら、ローマ以降になるとその数は減少する。

イスタンブールでは、イスタンブールで見たトルコ風の家並みについて、以下のように記述している。

「屹然と聳えるミナレット。その壮麗な統一感と、高貴な金色の穹窿」^{注26)}

このように景観に関する記述には、「秩序 (ordonné)」や「統一 (unite)」などの言葉が多く用いられ、集落や街並みの重なり合う屋根が周辺環境や自然との調和となり得ている情景を印象的に記述している(図9)。

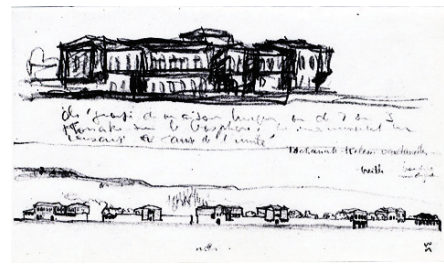


図9 ポスフォラス海峡に面したトルコ風の家屋群^{注27)}

第2節 Voyageにおける屋根に関する記述

第1項 素材

ル・コルビュジエは次に記しているように、屋根を構成する多くの自然素材に着眼を置き、事物的に多くの記述を残している。

「壁は白く木組は黒く塗られ、屋根は樹皮で葺かれているようだ。遠くから眺めると、それは乾いた層をなしているように見える」^{注28)}

一方、イスタンブール以降においては、「灰色の石を敷きつめた中庭にある聖堂は、基部から鉛葺きの円屋根にいたるまで一様に牛の血のような深紅色であった」^{注29)}と記しているように、鉛などの人工素材にも着目するようになる。

そして、ル・コルビュジエはブルガリア北部の小都市チルノボに関して、「穴だらけの瓦で葺かれた崩れかけの大きな屋根と屹立する尖塔をもったモスクの球体と」^{注30)}と記しているように、時間や状況によって変容する現象的な印象よりも、より素材そのものの直接的な質感を事物的に記述することで、素材を空間の建築構成要素の一部として捉えている。

第2項 形態

次に示す記述を典型として、ル・コルビュジエは旅の全行程でドームの形態に着目した事物的な記述を残している。

表 2 庭園に関する記述（抜粋）（ゴシック太文字記述は現象的記述を示す）

Carnets	Voyage	時期	対象	仏語原文頁 (番号)	仏語原文	訳頁 (番号)	記述	原文注	素材	構成	形式
○		1911. 5. 8	プラハ(Prague)	Carnets 1-37 (Carnets 1-37)	J'ai pris des/ photos d'une cour exquise/ qui n'est qu'une répétition du/ très excellent principe noté à/ Karlsruhe et à Lubeck./ 1ere cour avec 1 arbre et/ passages en/ diagonale./ en a sont des/ jardins et les/ batiments autour/ de b plus bas/ que ceux de C/ Le passage c-b/ en voûtes er platrée et badigeonnées/ unies en vert tender detrempe./ rappel du très fameux/ corridor noté l'an dernier/ à Mittenwald./ a/ b/ c/ rue	55	たいへん洗練された中庭の写真を撮った。この 中庭は、カールスルーエやリュールベックで覚え 書きをとった、非常に優れた原則を反復したもの にすぎないが、最初の中庭には1本の樹木 と、対角線方向の通路がある(36)。aには庭園 (jardins)があり、bの周囲の建物は、cのものより 低い。c-bの通路は、プラスチック仕上げの ヴォールトががかり、緑色統一したデンペラが 塗ってあって、昨年、ミッテンヴァルト(37)で控 えておいたあの有名な回廊を思い起こさせる。 a、b、c、街路		○	○	○
○		1911. 5. 11	ウィーン シェーンブルン(Le Schoenbrunn) ベルヴェーレ(Le Belvédé re)	25	Au coucher du soleil. - Dans le faubourg plein d'arbres, s'étend une cour très grande bordée de pavillons bas, troués P, arcades. Deux pylônes l'introduisent, et faisant front une barre jaune la ferme, tachée par la lign ée régulière du vert sombre des volets : un très grand palais est là, étalé suivant le goût majestueux de Louis XIV. On traverse au coeur même du palais, cette grande surface impassible et tout d'un coup, sans préparation, se déploie le spectacle d'un jardin à la française, mais un jardin stupéfiant. Simple, à en être pauvre! Mais non, colossal! Un parterre paraissant carré, immensé ment large et profond, tout plat et sur lequel on devine, dans le bref raccourcissement perspectif les compartiments géométriques et les broderies de buis. Aucun arbre ne trouble cette surface où tout s'étale. Cependant à gauche et à droite, subitement dressées, ce sont deux formidables murailles de verdure, taillé es à la hache, inflexiblement lisses, inflexiblement horizontales. Et d'une hauteur énorme, -déconcertante, quand, toute bigarrée de couleurs, on aperçoit à leur pied, la foule qui se promène. Une colline au fond, arête la vue, couronnée d'une très triste colonnade. Mais, si l'on se retourne, c'est de nouveau la grande barre jaune, la grande muraille avec son attique tranquille, noblement dressée et scand ées du vert sombre de la multitude des volets clos.	33-34	日暮時。一樹々の緑に包まれたウィーン郊外、 拱門（アーケード）の設けられている低い館に 囲まれて、広大な中庭がひろがる。二つの塔門 （パイロン）が中へと誘い、その正面に立ち上 る黄色の障壁—鑑戸の暗緑色の規則的な線 が目につく。ルイー四世の堂々とした趣味を誇 示した途方もなく大きな宮殿がそこにある。 宮殿の中心部、この泰然とした広大な平面を通 り抜けると突如、予想もしなかったフランス式 庭園の光景が眼前にひろがる。それにしても驚 くべき庭園。貧しいとさえ思えるほどの単純 さ！否、ちがう。途方もない大きさ！正方形に 見える花壇は驚くほど広く、奥行きがあり、 まったく平坦で、簡潔に締められたパースペク ティヴのように幾何学的に区分され、ひめつけ の縁取りがなされている。いかなる樹木もこの 広がりを見守ることはない。ただ左右には二列 の見事な緑の壁が、無造作に刈り込まれて唐突 に植えられており、滑らかな水平線となって頑 に続いている。また面くらうほどの高みから、 じつと色とりどりの行き交う人々の群れを足下 に眺めてやるのだ。眺望をさえぎる突き当たりの 丘はひどく悲しげな列柱を載っている。そして 振り返るや、巨大な黄色の障壁は再び眼前に ひろがり、泰然たる扶壁（アディク）を持ち、 数多くの閉ざされた鑑戸の暗緑色の韻律をたた えながら、気高く装われている。			○	○
○		1911. 6. 23	チノルボ	Carnets 2-34	La porte du jardin est/ en bois rose et vert/ une treille couvre l'enclos./ Des roses et des treilles/ puis des lys et des/ œillets et des grandes/ plaques qui dallent/ la cour.	108	庭の扉は、緑色とバラ色の木でできていて、囲 いの中は、ぶどう棚で覆われている。バラとぶ どう棚、百合とカーネーション、そして、中庭 に敷かれた大きな舗装板。		○		
○		1911. 6. 23	チノルボ	55	La porte du jardin est rose et verte; l'enclos n'est pas plus grand qu'une chambre et une treille le couvre tout. Des roses et des tulipes, et puis beaucoup de lys de perfide odeur et des œillets et des jacyntes. Des plaques de pierre blanche qui dallent le sol là où les fleurs n'ont point fait invasion. J'ai dit que les murs étaient blancs et parfois bleus comme le plus profond de la mer.	76-77	囲まれた庭は部屋よりは小さく、葡萄棚ですつ かり覆われ、バラ色や緑に塗られた門がついて いる。薔薇とチューリップ、それに不実な香り を放つたくさんの百合とせきちく、そしてヒヤ シンス。それでいて白い石畳の敷かれている一 角には少しの花も侵入していない。		○		
○				Carnets 2-44- 45	Un cimetierre s'étend/ au delà liant la ville à la/ plaine et lui faisant une porte/ de ré verie. Car il est splendide ce/ premier cimetierre turc que nous voyons/ immense; les pierres hérissent/ une brousse come des menhirs/ mais elles sont surtout minuscules./ C'est incohérent, sans ordre et/ sans équilibre/ désignation, sans sentence/ et sans symbole. Un éclat/ de roche allongé fiché ds la terre./ Des grdes plantes d'une espèce de/ Bonhome accusent la dominante/ faune: et des herbes moutons en/ troupe et des boeufs solitaires/ broutent ces herbes qui/ envahissantes tout [?]	117	子供たちは裸か半裸で、小川のぬかみを歩い ていく。そこからは墓地が広がり、この町を平 野に結びつけて、夢想への扉となっている。と いうのも、僕らが初めて見たこの広大なトルコ の墓地は、実に壮麗なものだから。墓石があた かもメンヒルのように林立しているが、それは 【実際】ごく小さなものだ。それは、様式も彫 り込みもなく、不揃いだ；戒名も墓誌銘もな く、象徴が一切見られない。ただ岩石の細長い 破片を、地面に投げ出して並べただけだ。あざ みの一種の大きな植物が、その黄色い主張色を 引き立てている；そして、羊たちは一団とな り、雄牛は1頭ずつ離れて、あたり一面に 【?】はびこった雑草を食んでいる。		○		

Carnets	Voyage	時期	対象	仏語原文頁 (素描)	仏語原文	訳頁 (素描)	記述	原文註	素材	構成	形式
	○			58-59	Voici le premier cimetière turc. Il s'étend au bout de la petite ville où, dans chaque jardin que nous visitâmes, on nous avait donné des confitures de roses, et puis, avec de bons sourires on nous avait reconduits en nous aspergeant de quelques gouttes d'eau de roses, -de l'eau de roses de la Vallée-des-Roses! Dans ces cours minuscules coulait l'eau d'une fontaine de marbre et tout était couvert de fleurs entre des bordures de buis taillé et des sentes de sable blanc, sous une grande treille généreuse. Les murs étaient d'un blanc éclatant; parfois aussi peints de chaux outremer. - Le cimetière donc, lie la ville à la plaine et lui fait une porte de rêverie. Les pierres hérissent une brousse de chardons comme des menhirs; mais il y en a beaucoup de minuscules. C'est incohérent, sans ordre et sans taille, sans désignation, sans sentence et sans symbole :un éclat de roche allongé fiché en terre. Des grandes plantes de bonhomme aident, sur ce vaste plateau, à l'impression de poussée verticale; leurs fleurs sont jaune-citron, unique couleur sur le gris riche des pierres rudes et les bleus desséchés des chardons.	81 (82)	墓地の小さな中庭には大理石の噴水から水が流れ、よく実った大きな葡萄樹の下に刈りこまれたひめつげの花壇の緑と、白い砂の小径との間は一面花で覆われていた。壁は白く輝いている。ときには群青色の石灰でぬられていることもあった。墓地はその町を平野と結びつけ、夢想への入口となっている。墓石はメンヒルのようにあざみの藪の上に林立している。表面にはたくさんの小さな文字が刻まれていた。そこには統一も秩序もなく、大きさもまちまちで、碑名も銘文も紋章もない。地面に突きささった岩の破片なのだ。栽培されている丈の高い植物が、この広大な大地の上で垂直に伸びる力を印象づけている。その花はレモン色で、ざらついた石の濃い灰色とあざみの乾いた青に対して独特な色合いをなしている。		○	○	○
○		1911. 8.17	ブルサ(Bursa(ブルッス Brousse))	Carnets 3-5,6 (Carnets 3-5,6)	Les maisons turques de/ Brousse redonnent les/ cours de Kasanlic et/ Baya. Le principe se/ précise. C'est 1 clos architectonic/ -que noyé ds/ les fleurs. Une/ treille couvre/ 1 partie. Geometrie/ des fenêtres à droite/ mur à gauche, et/ dessus fleurs folles/ et hautes. Au fond/ des niches/ ds le mur./ fleurs aussi// C'est donc 1 endroit/ précis et décisif ds le/ jardin. C'est plutot/ une chambre d'été/ (il faut alors faire 11 jardin à l'anglaise/ et fa préciser ici 1/ salle de fleurs et de/ verdure./ dahlia/ roses./ et blancs./ ils doivent/ être des sphères./ 70// liserons/ violets/ fleurs 6 cm// puis œillet du/ Poète/ géraniums divers./ bande de buis/ petits lauriers roses/ av. peu de feuilles et/ surtout fleurs./ pétunias en parterre (admirables/ 1 coin de ce jardin n'est qu'en fleurs/ c'est 1 parterre fou de broderies avec/ chemin sablé et buis 12 à 15 m de côté	162,163	ブルサで見たトルコ風の家々は、カザンリクやバヤの中庭を思い出させる。その原則は明らかだ。それは、建築術による、花に埋れた囲。ぶどう棚がその一部を覆っている。右手には窓、左手には壁という幾何学。そして上方に夥しいほどの背の高い花。奥には、壁にいくつものニッチがある。そこにも花が。これは、つまり、庭園の中の的確で決定的な場所だ。むしろ、ある種の夏部屋といえる。(それなら、イギリス風の庭園を作り)、ここで、花と緑の入室を明確にする必要がある。バラ色のダリアと白いダリア、これは球形でなければならぬ。70 葉の唇、その花弁は6 cm。それから詩人のカーネーション、各種のゼラニウム、帯状のつげ、小さなバラ色の月桂樹、これは葉がわずかで、特に花が「目立つ」。それから、花壇に植えたベチユニア(素晴らしい)。この庭の一角には、花があるのみ。それは、つげの木の茂った砂敷きのある、刺繍のような花壇で、その側面は12~15m。		○	○	○
○		1911. 8.17	ブルサ(Bursa(ブルッス Brousse))	Carnets 3-13 (Carnets 3-13)	Terrasse sup./ de la mosquée/ gd arbre/ cloture bois/ fleurs/ folles/ boutiques/ maisons/ 2 fontaines/ des treilles// la dedans/ muriers./ figuiers/ et treilles// à/ Brousse./ jardins./ et tracé de rues.	164	モスクの上部にあるテラス、大木、木製の柵、花がいっぱい、商店、民家、ふたつの噴水、ぶどう棚。そのなかには、桑、いちぢく、ぶどう棚。ブルサにて、庭園と街路面。		○		○
○		1911. 8.17	ブルサ(Bursa(ブルッス Brousse))	Carnets 3-9 (Carnets 3-9)	1 escalier av. 2 fontaines ds 1 jardin. sur la citadelle de Brussa.	163	ブルサの城壁の上の庭園には、ふたつの噴水のある階段がある。				○
	○		コンスタンチノーブル スタンプール	84	Stamboul est submerge de tombes. On les aime. Elles sont jusque dans les cours des demeures. Un dimanche turc (r), je vis par l'entrebâillement d'une porte, un bonhomme assis dans son jardin, le dos contre la colonne blanche d'une tombe; il rêvait sans songer à rien, mais moi, j'étais frappé de celà. J'avais vu déjà sur le pavé des courtes de maintes demeures à Rodosto et ailleurs, des lanternes veiller les morts familiers au seuil même des portes. Constantinople est un sol désert; on bâtit des demeures, on plante des arbres, et où il reste de la place, on enterre ses morts. Les tombes entrent dans les rues, s'installent sous les feuillages, se battailonnent dans des enceintes délimitées autour des mosquées, avec les grands turbés où sont les sul tans; et des chardons bleus s'épanouissent sur ce sol.	122-123	スタンプールは墓石に埋もれている。人々はそれを愛している。それは住居の中庭にまであるのだ。あるトルコの日曜日*原2、とある家の門の隙間から、ひとりの男が庭で墓の白い円柱に背をもたせて座っているのを見かけた。彼は何も考えずにまどろんでいるだけのようだった。だが私はそのことに衝撃をうけた。以前にもロドストや他の地で、数多くの住居の小庭の石畳の上に、愛すべき死者たちを見守る燈が門口にまで点っているのを見たことがあった。コンスタンチノーブルは荒涼たる地である。人々は住居を建て、樹木を植え、そして残った場所には死者を埋葬する。墓石は街路に横出し、葉の繁みの下に身を据え、スルターンの眠る大聖廟のあるモスクのまわりの限られた囲いの中でひしめきあっている。—そして青あざみがこの地に花開く。	トルコ人は金曜日祭を祭日とし、建物の上には国旗が翻える。ユダヤ教徒は土曜日、正教徒は日曜日祭を祭日とする。	○	○	○

Carnets	Voyage	時期	対象	仏語原文頁 (兼撮)	仏語原文	訳頁 (兼撮)	記述	原文註	素材	構成	形式		
	○		コンスタンチノープル スタンプール	84	La vie du Turc s'écoule de la mosqué au cimetière, par le café où l'on fume sans causer. C'est une aubaine pour les cafés si décents allant jusqu'au seuil des parvis, d'enfermer en leur cour même, sur un tertre entouré d'une grille, la sépulture de quelque saint. Toutes les nuits, depuis des siècles, brûle une lanterne éclairant le turban de marbre qu'on repeint parfois de rouge ou de vert, faisant scintiller l'or de l'épithaphe exquisement arabesquée.	122-123	トルコ人の生活はモスクから墓地へと流れる。人々が黙々と煙草をふかしているカフェを通過して。小綺麗なカフェはモスクの前庭の際にまで並び、何某かの聖人の墓を自分の中庭の金網で囲んだ塚の上に巧妙にとりこんでいる。幾世紀来、毎夜明かりは点され、時には赤や緑に塗り替えられる大理石のターバンを照らしだし、華麗なアラベスク様の碑銘を金色に輝かせてきたのだ。		○	○	○		
	○		コンスタンチノープル スタンプール	77-78	Il faut au-devant du sanctuaire une cour dallée de marbre, ceinturée d'un portique; sur les colonnes de « vert antique » et de porphyre, tombent les arcs brisés portant des petites coupoles. Sous ce portique ouvrent trois portes, une au nord, une autre au sud, et une autre à l'est. Au centre est le temple d'eau pour les ablutions, avec son charmant toit en kiosque et ses vingt ou quarante robinets ouverts dans des panneaux de marbre, au bas de la vasque énorme, cylindrique et plus haute qu'un homme. Du dehors les grands murs de la cour font un prisme sévère de pierres appareillées; les trois portails s'y ouvrent sous une chute de stalactites. Ce prisme serait à l'ensemble de la mosquée comme les pattes du grand sphinx qu'elle forme la nuit sur la crête de Stamboul. Et puis il faut un parvis, aire déserte et pierreuse où sont quelques cyprès. Des chemins dallés conduisent aux portes de la mosquée et vers le cimetière envahi d'herbes folles sous de séculaires platanes; ce cimetière fait pendant à la cour de l'autre côté du sanctuaire. Un mur de pierre taillée, percé de mille baies grillagées, laisse de l'autre côté les rues bordées de hans. Des portails monumentaux, grands comme des maisons, ouvrent juste où sont les chemins dallés du parvis. Les hans font tout à l'entour des quadrilatères sévères. Sur leurs toits en terrasse, s'aligne la multitude des petites coupoles de plomb. Ils s'axent, se mesurent et se proportionnent sur le sanctuaire dont ils dépendent. Car ils comprennent les écoles d'imans autour des cours ombragées d'arcades, riches de fleurs et de treilles, et les caravansés rails aux doubles portiques superposés, animés du murmure des fontaines.	77-78	110-111	"聖殿の前には大理石で舗装され、廻廊（ポルチコ）に囲まれた前庭がなくてはならない。<アンチックグリーン>の斑岩の円柱の上には小円屋根を支えている尖頭アーチがおりている。廻廊には三つの門が開いており、一つは北、他の一つは南を、もう一つは南を、もう一つは東を向いている。中央には膜のための可愛らしい屋根のついたキオスク形の泉亭があり、人の背より巨大な円筒形の水盤の下部の大理石には二〇ないし四〇個の蛇口がついている。前庭の大きな壁の外側は刻まれた石が厳格なプリズムを形成しており、三つの入口は鍾乳石状装飾の下に開いている。プリズムは脚部となり、モスクと一体となって、夜になるとスタンプールの鳥冠部に巨大なスフィンクスを浮かびあがらせる。それに糸杉のまばらに生えた、殺風景な石敷の前庭も必要だ。石畳はモスクの門へと導き、古いプラタナスの下に草の生い繁る墓地の方へと続いている。基地は聖殿のもう一方の側の前庭と対をなしている。いくつもの金網張りの窓が穿たれた切石の壁の反対側には<ハン>で区切られた通りがとり残されている。家ぐらゐもある巨大な記念碑のような入口は、前庭の石畳の道の正面に開いている。<ハン>は厳格な四辺形の外郭を形成している。その平屋根の上には多数の小さな鉛の円屋根が聖殿の軸方向にしたがって一列に並び、釣合をたもちながら、聖殿と対比をなしている。というのもそこには、花咲きほころ、葡萄の房のたわわに垂れるアーケードの影のおちる前庭を囲むようにある回教学校（メドレセ）や、泉のざわめきに息づく二重の廻廊をもつ隣宿（キャラバン・サライ）が含まれているからである。"			○	○	
	○	1911. 8.24	アトス カリエ(Karié)	129-130	d'une terrasse suspendue bien haut, à laquelle on accédait en traversant une vaste salle, on apercevait encadrée dans l'architecture nerveuse d'une treille de bois, toute couverte de vigne dont les grappes bleues et d'or pendaient lourdement, la mer... Dans des niches naturelles, de feuilles et de vrilles, des tables étaient dressées; d'autres appuyées au bord même de la barrière, si elles privaient leurs hôtes des bosquets bacchiques où Silène se serait complu, ouvraient du moins aux yeux de Bacchus et des jeunes de la suite, l'espace plus noble et tout rempli de ciel, de mer où passaient bien rarement des chaloupes de pêche, des grands mouvements de sol, vastes comme la tempête, où croissaient en prometteuse récolte la vigne, les mûres, les olives et les figues. La nuit était propice à toute contemplation fortement émue et alanguie par un tié marin, de miel de fruits; - propice aussi, sous les treilles retombantes et protectrices, aux promesses des lèvres, aux ivresses vineuses et amoureuses...	129-130	189-191	広間を通り抜けて高いところにかかっているテラスに出ると、金色に輝く海を重たく背に負いながら、青い葡萄にすっかり覆われた木製の葡萄棚の力強い建築に囲まれていることに気がついた・・・草むらの自然な窪みにいくつかのテーブルが置かれていた。柵に沿って立てかけられた他のテーブルは、シレーヌが楽しんだバッカスの繁みを客人からうぼうことになったとしても、少なくともバッカスと取巻きの若者たちの眼には、より高貴な空間として映ったであろう。ごくまれに漁をする舟が通り過ぎるだけの海と空、そして葡萄や桑、オリーブ、無花果が収穫を約束されて錯綜し、まるで嵐のように広く偉大な大地の起伏などで満たされていた。夜は、生温かさや潮風と果実の密にひたされた大気の水蒸気がひき起こすけだるい瞑想をやさしく包むかのようであった。また、房のたわわに実る葡萄棚の下は唇の約束、葡萄酒と恋の騒動にもじつにふさわしかった。		○	○	○	

第2項 構成

構成を説明対象とした記述は、民家を主に旅を通して確認できる。典型的な記述としては、プラハの庭園を訪れた際に記された次のものがあり、矩形の庭園や通路の構成配置を数学的に分析している（図11）。

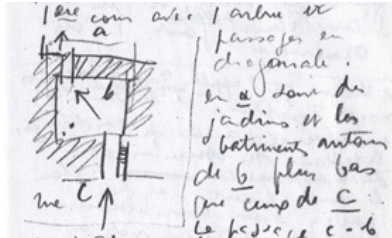


図11 プラハの民家

「非常に優れた原則を反復したものすぎないが、最初の中庭には1本の樹木と、対角線方向の通路がある。aには庭園があり、bの周囲の建物は、cのものより低い」^{注45)}

このように、ル・コルビュジエは幾何学的な構成配置に強く関心を寄せ、詳細に渡って事物的に記述している^{注46)}。

第3項 形式

形式を説明対象とした記述は旅を通して確認でき、民家や僧院など様々な建築を対象としている。典型的な記述として、ル・コルビュジエは次のように記し、民家の中庭 (cour)に強く着眼を置いた、旅を通して事物的な記録を残している（図12）。

「たいへん洗練された中庭の写真を撮った」^{注47)}

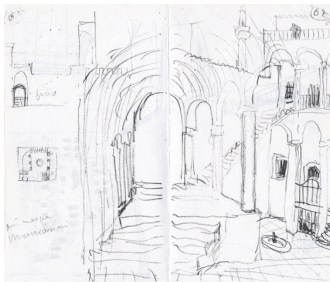


図12 コンスタンチノーブルで訪れた民家中庭

また、旅の中盤であるトルコ以降になると、次の記述のようにカフェや僧院のテラス (Terrasse)にも着目し、事物的に記述している（図13）。

「モスクの上部にあるテラス、大木、木製の柵、花がいっぱい、商店、民家、ふたつの噴水、ぶどう棚。そのなかには、桑、いちぢく、ぶどう棚。ブルサにて、庭園と街路面」^{注48)}

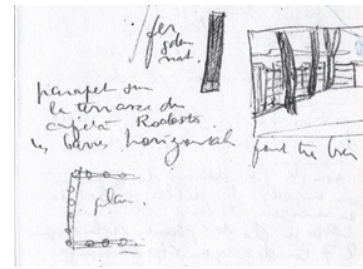


図13 ロドストで見たカフェのテラス

さらに、ブルサ(Bursa)以降では次の記述のように、モスクや神殿におけるシンメトリカルな前庭 (jardin, parvis)に着目した事物的な記述も確認できるようになる。

「ブルサの城砦の上の庭園には、ふたつの噴水のある階段がある」^{注49)}

以上のように、ル・コルビュジエは「東方への旅」で訪れた庭園のうち、中庭、テラス、前庭という3つの庭園形式に着眼を置き、事物的に記録している^{注50)}。

第2節 Voyageにおける庭園に関する記述

第1項 素材

素材を説明対象とした記述は、民家を主に旅を通して確認でき、トルコの地でより顕著に確認できる。

典型的な記述である次の記述のように、ル・コルビュジエは多種の植栽や自然素材に関して、事物的な記述をしている。

「墓地の小さな中庭には大理石の噴水から水が流れ、よく実った大きな葡萄棚の下の刈りこまれたひめつげの花壇の緑と、白い砂の小径との間は一面花で覆われていた。<中略>栽培されている丈の高い植物が、この広大な大地の上で垂直に伸びる力を印象づけている。その花はレモン色で、ざらついた石の濃い灰色とあざみの乾いた青に対して独特な色合いをなしている」^{注51)}

第2項 構成

構成に関する記述は、旅を通して宮殿や僧院、民家などの多様な建築を対象に確認できる。ウィーンのシェンブルン (Le Schoenbrunn) やベルヴェーレ (Le Belvédère) の庭園に関する次の記述のように、ル・コルビュジエは旅を通して宮殿や僧院のフランス式幾何学庭園に大きな関心を抱き、幾何学で構成された庭園の空間体験の印象を現象的記述によって記録している。

「貧しいとさえ思えるほどの単純さ！否、ちがう。途方もない大きさ！正方形に見える花壇は驚くほど広く、奥行きがあり、まったく平坦で、簡潔に縮められたパースペクティヴのように幾何学的に区分され、ひめつげの縁取りがなされている」^{注52)}

一方、カザンリクのバラ谷 (La Vallée des Roses) で散見した中庭に関しては、次のように記している。

「メンヒルのようにあざみの藪の上に林立している。表面にはたくさんの小さな文字が刻まれていた。そこには統一も秩序もなく、大きさもまちまちで、碑名も銘文も紋章もない。地面に突きささった岩の破片なのだ。栽培されている丈の高い植物が、この広大な大地の上で垂直に伸びる力を印象づけている」^{注53)}

また、スタンブールの民家の中庭に関して、「トルコ人の生活はモスクから墓地へと流れる。人々が黙々と煙草をふかしているカフェを通して。小綺麗なカフェはモスクの前庭の際にまで並び、何某かの聖人の墓を自分の中庭の金網で囲んだ塚の上に巧妙にとりこんでいる」^{注54)}と記しているように、旅を通して民家の庭園における風習や習慣、文明を分析し、自然景観を取り入れた非幾何学的庭園に関する現象的記述を残している。

一方で、タバンの民家に関して「簡素な住居。それらは塀でつながり、中から樹々の繁りがのぞいている、この起伏ある土地に生まれるべくして生まれたものだ」^{注55)}と述べているように、その土地固有の環境や景観と庭園との関係性にも着眼している。

以上のように、ル・コルビュジエは構成において幾何学的庭園と非幾何学的庭園の両方に着眼し、現象的な記述によって説明している。

第3項 形式

形式を説明対象とした記述は、旅を通して宮殿や民家、アトリエなど様々な建築を対象とした記述が確認できる。例えば、スタンブールのトップ・カブ宮殿を訪れた際に「前庭では素晴らしく美しいファヤーンズが、このもう一つの安息の地の入口を華麗に彩り、そこには数多くの霊廟と聖なる墓碑がある」^{注56)}と記しているように、ル・コルビュジエは旅を通して建築の前面に設けられた前庭(jardin, parvis)に着目し、事物的に記述している。

また、旅の序盤では、シェーンブルン宮殿 (Le Schoenbrunn)に関する次の記述のように、宮殿や民家、アトリエにおける中庭 (cour)に着目し、事物的に記述している。

「樹々の緑に包まれたウィーン郊外、拱門の設けられている低い館に囲まれて、広大な中庭がひろがる」^{注57)}

一方、旅の中盤であるトルコ以降になると、カリエ (Karié) の宿屋に関する次の記述のように、外部に突き出したテラス (Terrasse)にも着目し、テラスによって建築と景観に調和がもたらされる効果を現象的記述によって示している。

「広間を通り抜けて高いところにかかっているテラスに出ると、金色に輝く海を重々しく背に負いながら、青い葡萄にすっかり覆われた木製の葡萄棚の力強い建築に囲まれていることに気がついた・・・」^{注58)}の記述に典型が見られるように、

このように、ル・コルビュジエは主に中庭、テラス、前庭という3つ庭園形式を、建築類型を問わず着目し、現象的、事物的両方の記述によって説明している。

第6章 結 (表3,4)

表3 屋根に関する *Carnets* と *Voyage* の比較

	<i>Carnets</i>	<i>Voyage</i>
素材	自然素材 (現象的記述)	自然素材、人工素材 (事物的記述)
形態	ドーム (事物的記述、現象的記述)	ドーム、幾何学形態 (事物的記述)
色彩	素材色、現象的な色彩 (事物的記述、現象的記述)	素材色、単色塗装 (事物的記述)
天井採光	超越的な光 (事物的記述、現象的記述)	機能的な採光 (事物的記述)
景観	風土的調和 (現象的記述)	風土的調和、宗教的統一 (事物的記述)

「東方への旅」における屋根を捉える主題として、事物的な主題である「素材」、「形態」、「色彩」と、現象的な主題である「天井採光」や「景観」という、合わせて5種類抽出できるが、*Carnets* に示された5つの主題の記述の対象は、いずれも近代建築語彙ではなかった。

素材には近代建築における主要素材であるコンクリートや鉄などの人工素材は含まれていなく、形態に関しても穹窿屋根が主とされ、近代化で着目される陸屋根の記述は見られない。また色彩に関しても、近代における人工塗料によるものではなく、多くは素材そのものの色に着目している。さらに、天井採光の効果についても、近代建築における機能的な採光ではなく、形而上の意味をおび、景観もその土地固有の風土と屋根形態の関わりに関する記述であり、近代建築における普遍的思考とは異なる。そして、ル・コルビュジエはそれらの対象を *Carnets* に記述する際、その場の印象評価として現象的な記述を多く行っている。つまり、自然環境下の流転的な視覚効果や、土着的な質感によってもたらされる建築の非定型な印象を、ル・コルビュジエは、自身の心象を付加した現象的記述と素描によって記録しようと試みている。

一方、*Voyage* では同じ主題に言及しているものの、より細部を事物的に示すことで、客観的な旅の分析を試み

ている。そしてそのような主題に関する記述は、「人工素材の使用」や「幾何学形態」、「単色塗料による均質な着色」、「機能的な採光」など、近代建築語彙と結びつく解釈を含んでいる。

以上要するに、東方への旅における屋根の記述は、*Carnets* から *Voyage* の記述のプロセスにおいて、非近代建築語彙から近代建築語彙へと変容し、また、現象的記述から事物的記述に変容している^{注59)}。そして、このような変容の典型は天井採光に関する記述である。ル・コルビュジエは旅の現場で、言表し得ない光の効果を宗教建築のドーム内部に見出し、現象的な記述によって *Carnets* に記録している。それは「天空に穿たれた、あの高みから射し込む一条の光」^{注60)}という表現に典型的なように、宗教建築における超越的な空間の価値を捉えたものであり、「高み」は物理的な「高さ」ではなく、その宗教的な光の現象は、素描を伴っているものの十分に言語化できないものである。実際、素描がなく言語のみによって構成された著作 *Voyage* では、そのような現象的記述は少なく、主としてドームの天井採光がもたらす機能的な採光効果が記述される。つまり、*Voyage* では屋根についての言語化できないような光の現象は客観的に書き得ず、その文章化はもしくは断念していたのではないかと考えられる。

表 4 庭園に関する *Carnets* と *Voyage* の比較

	<i>Carnets</i>	<i>Voyage</i>
素材	自然素材、植栽 (事物的記述)	自然素材、植栽 (事物的記述)
構成	幾何学的庭園 (事物的記述)	幾何学的庭園、非幾何学的庭園 (現象的記述)
形式	中庭、テラス、前庭 (事物的記述)	中庭、テラス、前庭 (事物的記述、現象的記述)

そして、ル・コルビュジエが庭園を捉える主題として *Carnets* に示したものは、いずれも事物的な記述による簡素な記録であり、「素材」「構成」「形式」という3種類の主題が抽出できる。素材に関しては、多種の植栽や自然素材に着目した記録を残し、構成では主に矩形の庭園に着目して通路や植栽との関わり方に普遍的な構成原理を見いだそうと試みている。さらに、形式においては、中庭、テラス、前庭という一般的な庭園形式に着目し、周辺環境との関係性よりむしろ、庭園を構成する諸要素に焦点を置いた記述をしている。

一方、*Voyage* では事物的な記述に加え、現象的な記述も用いられ、「素材」「構成」「形式」という *Carnets* と同様の3種類の主題が抽出できる。素材では庭園の樹木や

花に関する記述に加え、石板をはじめとする自然素材にも着目し、周辺環境と素材の関係性について分析している。また構成に関しては、幾何学式庭園に関する記述に加え、その土地固有の景観を庭園に取り入れた非幾何学式庭園とも言える庭園に関して記述されている。また、形式では、中庭、テラス、前庭という一般的な庭園の形式に関する記述が認められ、ル・コルビュジエが見渡したその土地独自の景観や、建築と周辺環境との関係性を現象的な記述を用いて記述している。

以上より、庭園に関する *Carnets* と *Voyage* との記述内容の差異は構成における非幾何学的庭園として確認できる。また、すべての主題が事物的記述によって書かれている *Carnets* に対し、*Voyage* では構成と形式において現象的な記述が用いられている。

つまり、旅の現場で書かれた *Carnets* においては、庭園を素描や事物的記述によって記録している一方、素描がなく記述のみによって著された *Voyage* では、*Carnets* には見られない現象的記述も多く用いられ、その中で土地固有の景観に着眼を置いた記述を行っている。

この事物的記述から現象的記述へと変化する庭園の変容は、現象的な記述から事物的記述へと変化する屋根と大きく異なる。庭園は実際に触れることが可能であり、直接的な触知によってその物質性を確かめるという体験がまず事物的な記述によって *Carnets* に記録される。ただし、非幾何学的庭園のように、明快な構成をもたないものについて感じたことを言語で表現することは難しく、その体験は、景観と関連させた現象的記述として *Voyage* に再録されている。

なお、前述したような *Carnets* から *Voyage* への記述の変容は、むしろ出版形態としての素描の有無や、対象読者の有無という外在的な要因と無関係ではないであろう。しかし、それは根本的には旅の現場で即時記録的に書かれた *Carnets* と、旅の後に机上で推敲された *Voyage* との内在的思考形態の差と考えられる。もちろん、ル・コルビュジエは *Carnets* に記録する際、即時的に言語化できるような特徴のみに関心があつたわけではない。旅の現場で言表し得ない事象については、素描を書くことで記録を残し、旅の後で書籍としてまとめる際に、そうした素描に含意されたものを文章化していたと推測される^{注61)}。いずれにせよ、屋根と庭園に関する記述は、いずれも近代建築語彙と非近代建築語彙を両方捉え続け、景観への眼差しに顕著に現れる。

図版出典

- 表 1: 筆者作成
- 表 2: 筆者作成
- 表 3: 筆者作成
- 表 4: 筆者作成

- 図 1: 筆者作成
 図 2: 筆者作成
 図 3: 筆者作成
 図 4: 筆者作成
 図 5: 筆者作成
 図 6: Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d' Orient Carnets*, Electa architecture, Fondation L.C., vol.2, p.26, 1987
 図 7: Ibid., vol.2, p.53
 図 8: Ibid., vol.5, p.68
 図 9: Ibid., vol.3, p.35
 図 10: Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d' Orient carnets*, Electa architecture, Fondation Le Corbusier., 1987, vol.3, p.6
 図 11: Ibid., vol.1, p.37
 図 12: Ibid., vol.2, pp.68-69
 図 13: Ibid., vol.2, p.57

参考文献

- [1] Le Corbusier: *Vers une architecture*, 1924 (Le Corbusier, 吉阪隆正訳: 建築をめざして, 鹿島出版会, 1967)
 [2] Le Corbusier: *Le Modulor*, 1948, (Le Corbusier, 吉阪隆正訳: モデュロール I, 鹿島出版会, 1976)
 [3] Stanislaus von Moos: *Le Corbusier-Elemente einer Synthese*, Switzerland, 1968 (Stanislaus von Moos, 住野天平訳: ル・コルビュジェの生涯 建築とその神話, 彰国社, 1981)
 [4] Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d' Orient carnets*, *Electa architecture*, Fondation L.C., 1987, (Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret), 中村貴志・松政貞治訳: 『ル・コルビュジェの手帖 東方への旅』, 同朋舎出版, 1989)
 [5] Le Corbusier: *Le voyage d' Orient*, Les Editions Forces Vives, Paris, 1966, (Le Corbusier, 石井勉訳: 『東方への旅』, 鹿島出版会, 1979)

注釈

- 1) ル・コルビュジェは、1907年にフィレンツェ・ゴシックとイタリアの原始主義の研究を目的として、イタリアへ旅をしている。また、1910年と1911年には、ドイツ各地を巡礼する2度の旅を行ない、数ヶ月間の滞在をしている。本稿ではこれらの旅の後に行われた、最も重要とされる「東方への旅」のみに着目しているが、今後の研究の中ではイタリア、ドイツの建築巡礼旅行、さらには建築制作活動期のアフリカやインド、アメリカなどへの、ル・コルビュジェの建築旅行についても考察する必要がある。
- 2) 約6ヶ月間の東方への旅の素描は、後に *Le Corbusier & Pierre Jeanneret Œuvres complètes, vols.8* の第1巻冒頭に掲載され、ル・コルビュジェはこの旅が建築的構想の源泉となっていることを示唆している。
- 3) 近代建築における屋上庭園の形式は、必ずしもル・コルビュジェ自身が考案した手法という訳ではない。実際、ル・コルビュジェ

が東方への旅以前に勤めていたオーギュスト・ペレ(Auguste Perret, 1874-1954)の事務所(Franklin apartment building, 1903)には、すでに屋上階に庭園が配され、またフランソワ・アンヌビク(François Hennebique, 1842-1921)が1903年に建設した自邸(Maison Hennebique)にも、鉄筋コンクリート片持ち梁の上部に屋上庭園が施工されている。

- 4) 屋上庭園の出自に関して、既往研究では「エマの僧院から示唆を得て、建築をめざしてや新建築の五原則を通じて次第に明確となる」(Giuliano Gresleri: in *Voyage d' Orient carnets*, Electa architecture, Fondation L.C., 1987, (Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret, 中村貴志・松政貞治訳: 『ル・コルビュジェの手帖 東方への旅』, 同朋舎出版, 1989, p.67))、あるいは「地中海地方の最もすぐれた伝統に根ざすものであった」という指摘があるが(Peter Blake: *The Master Builders*, USA, 1976, p.73)、必ずしも実証的に検討されたものではない。
- 5) *Carnets* と *Voyage* を比較分析するため、*Voyage* で説明対象とされている1911年5月8日から10月10日の期間に関する *Carnets* の記述 (Le Corbusier: *Voyage d' Orient carnets*, Electa architecture, Fondation L.C., 1987, vol.1, p.37から *Ibid.*, vol.4, p.70)を研究対象として扱う。
- 6) ル・コルビュジェは、断片的に「東方への旅」の内容を書き綴ったものを旅先からラ・ショー＝ド＝フォンに送り、『ラ・ショー＝ド＝フォン通信』に掲載している。そして旅の後に、自らの旅の手帖と『ラ・ショー＝ド＝フォン通信』を参照しながら、一冊の旅行記としてまとめた。
- 7) ル・コルビュジェは旅にカメラを携帯し、数多くの写真資料を残しているが、本研究では *Carnets* と *Voyage* の分析を中心に行なっているため、本稿では研究資料として使用していない。
- 8) 1965年にどの程度原稿に修正を加えたかは不明である。
- 9) 意図や目的が確定していない言説から意味内容を汲み取ることを目的としているため、意味内容の具体性を保持しつつ最終的にひとつの枠組みへと収斂させるKJ法を用いた。
- 10) 説明対象に対する単文もしくは復文の総体を記述数1とする。
- 11) 雨風をしのぐ等の環境機能的な用途に関する記述は概ね確認できない。
- 12) 抽出した記述内容は多岐に渡っているため、1つの記述に対して複数の重複する主題が確認できる。そのため、次頁以降に示した記述数の和は総数と必ずしも一致しない。
- 13) Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d' Orient Carnets*, Fondation Le Corbusier., vol.2, p.26, 1987, (Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret), 中村貴志・松政貞治訳: ル・コルビュジェの手帖 東方への旅, 同朋舎出版, p.103, 1989)
- 14) 'Les églises, la chapelle/ du Paraclis. (Coupoles/ des églises//Ds les villages les maisons bâties avec/ une légèreté et un manque de soucis de/ la durée, extraordinaires (hutte faite/ de poteaux et de traverses avec

tressage/ de branches et/ crepissage de/ boue.) couverture/ de chaume/ Cependant le/ toit s'avance porté sur des/ poteaux et abrite ainsi une/ galerie' (教会堂、バラクリの礼拝堂「教会堂の穹窿。村々の家屋は手軽に造られていて、長持ちさせる配慮が見られず、まったくの臨時普請だ。「小枝の木舞格子に泥漆喰を塗っただけの、柱と横木の小屋」藁葺きの屋根。しかし屋根は迫り出して柱で支えられ、回廊の庇となっている」

15) op.cit., vol.2, p.13, (中村貴志・松政貞治訳: p.94)

16) Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): op.cit., vol.2, p.6, (中村貴志・松政貞治訳: p.89)

17) *Ibid.*, vol.2, p.55 (中村貴志・松政貞治訳: p.127)

18) 'Ce qu'il y a d'étonnant/ c'est qu'avec 9 coupoles de même/ diamètre, le maximum est donné/ à celle 1. L'œil ne peut pas se/ faire à l'idée d'l'égalité des/ diamètres. L'Eglise entière/ a 1 unique enveloppe qui// les dimensions/ sont prises avec/ mes pieds nus./ Les arcs en tiers-point'(驚くべきことには、9つの穹窿が同じ直径なのに、1の穹窿がもっとも高くなっている。一見したところ、直径がすべて等しいとはわからない。教会堂の全体が唯一の外皮をまとっている//僕は、素足で寸法を測りとる。尖頭アーチ)

19) op.cit., vol.2, p.21 (中村貴志・松政貞治訳: pp.99-100)

20) *Ibid.*, vol.2, pp.77-78 (中村貴志・松政貞治訳: pp.137-138)

21) *Ibid.*, vol.3, p.17 (中村貴志・松政貞治訳: p.165)

22) *Ibid.*, vol.4, p.151 (中村貴志・松政貞治訳: p.220)

23) Andre Wogenskyはこの地方の建築をル・コルビュジェが「生活を包む光り輝く覆い」と捉えていたと述べ、建築のかたちによって引き起こされた光と影の遊動によって生命と宇宙が繋がるとしている(参考文献[20])。

24) Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): op.cit., vol.5, p.63 (中村貴志・松政貞治訳: p.243)。これらのクロッキーは、カノプスの大エクセドラが集中する後陣を描いており、この部分の記述とスケッチは、ロンシャン礼拝堂 Chapelle Notre-Dame-du Haut, Ronchamp (1950-1955)における小礼拝場の構想の源泉ともいわれる。

25) ' II //à gauche à droite derrière./ c'est enfoui ds la colline/ c'est sombre/ devant pour/ la 1/2 rotonde/ dont dessin/ page précédente// 600/ 400/ B/ 600/ A// Virtuellement/ c'est cette/ forme, et/ cet appel/ de lumière/ est beau' (II//左も右も、背景は、丘の麓に消えている。1/2のロトンダとなっているため、前面は薄暗い。そのデッサンは前頁// 600, 400, B, 600, A// 潜勢的には、これはこの形態。この明かり取りは美しい)

26) op.cit., vol.2, pp.77-78,

27) 'ds 1 groupe de maisons turques ou ds 2 ou 3/ Konak sur le bosphore. Le monumental est/ conserve à cause de l'unité// Tschanak-Kalessi-Darda-nelles/ treille trou ds le/ mur du jardin./ mer'(ボスフォラス海峡に面したトルコ風の家屋群、あるいは二、三のコナク。統一感があるので、モニュメンタルな性格がよく保

たれている//チャナク=カレッシ〜ダーダネルス海峡。ぶどう棚。中庭を囲む壁の穴。//海)

28) Le Corbusier: *Le voyage d'Orient*, Les Editions Forces Vives, Paris, p.54 1966, (Le Corbusier, 石井勉訳: 東方への旅, 鹿島出版会, pp.73-74 1979)

29) *Ibid.*, pp.132-133 (石井勉訳: pp.192-194)

30) *Ibid.*, p.73 (石井勉訳: p.106)

31) *Ibid.*, pp.142-143 (石井勉訳: pp.206-207)

32) *Ibid.*, pp.76-77 (石井勉訳: pp.109-110)

33) *Ibid.*, p.78 (石井勉訳: p.111)

34) *Ibid.*, p.78 (石井勉訳: p.112)

35) *Ibid.*, p.40 (石井勉訳: pp.54-55)

36) *Ibid.*, p.133 (石井勉訳: p.194)

37) *Ibid.*, p.96 (石井勉訳: p.140)

38) *Ibid.*, pp.139-140 (石井勉訳: p.203)

39) *Ibid.*, p.69 (石井勉訳: p.100)

40) *Ibid.*, p.142 (石井勉訳: p.206)

41) 現在のヴェリコ・タルノヴォ(Veliko Turnovo)であり、ブルガリア北東部の町。ルセ(Ruse)とスタラ・ザゴラ(Stara Zagora)の間に位置する。

42) Le Corbusier (Ch.-E.Jeanneret): *Voyage d'Orient carnets*, op.cit., vol.2, p.34, (中村貴志・松政貞治訳: p.108)

43) 現在のカザンラク(Kazanlak)。ブルガリア・スタラ・ザゴラ州(Bulgaria, Stara Zagora)にあり、バルカン山脈麓のカザンラク平原に開けた都市である。

44) op.cit., vol.2, pp.44-45, (中村貴志・松政貞治訳: p.117)

45) *Ibid.*, vol.1, pp.37, (中村貴志・松政貞治訳: p.55)

46) 例外として、ル・コルビュジェはイギリス風の庭園 (jardin à l'anglaise) の構成に着眼を置いた記述も残している。カザンラクのバラ谷(La Vallée des Roses) については「ここからは墓地が広がり、この町を平野に結びつけて、夢想への扉となっている。というのも、僕らが初めて見たこの広大なトルコの墓地は、実に壮麗なものだから。墓石があたかもメンヒルのように林立しているが、それは実際ごく小さなものだ。それは、様式も彫り込みもなく、不揃いだ; 戒名も墓誌銘もなく、象徴が一切見られない」(*Ibid.*, vol.2, pp.44-45, (中村貴志・松政貞治訳: p.117))と述べ、空間体験の印象を精緻に記録している。

47) *Ibid.*, vol.1, p.37, (中村貴志・松政貞治訳: p.55)

48) *Ibid.*, vol.3, p.13, (中村貴志・松政貞治訳: p.164)

49) *Ibid.*, vol.3, p.9, (中村貴志・松政貞治訳: p.163)

50) 記述は確認できないものの、コンスタンチノーブル以降になると、神殿の柱列で形成される「廻廊 (portique)」に着目した素描も多く、「廻廊」を通して見渡せる景観を描いている。

51) Le Corbusier: *Le voyage d'Orient*, Les Editions Forces Vives, Paris,

- 1966, p.59 (Le Corbusier, 石井勉訳: 東方への旅, 鹿島出版会,
1979, p.81)
- 52) *Ibid.*, p.25, (石井勉訳: pp.33-34)
- 53) *Ibid.*, p.59 (石井勉訳: p.81)
- 54) *Ibid.*, p.84 (石井勉訳: pp.122-123)
- 55) *Ibid.*, p.36, (石井勉訳: pp.48-49)
- 56) *Ibid.*, p.86, (石井勉訳: p.126)
- 57) *Ibid.*, p.25 (石井勉訳: pp.33-34)
- 58) *Ibid.*, pp.129-130, (石井勉訳: pp.189-191)
- 59) しかしながら、これは旅の体験における生き生きとした現象の記憶の忘却を意味しない。実際、1911年の東方への旅におけるティボリのカノプスの光の素描(図3)が、1953年のロンシャンの礼拝堂(La Chapelle de Ronchamp)の制作において想起される。Jacques Lucan ed.: *Le Corbusier une encyclopédie*, CCI, Paris, 1987, p.351 (Jacques Lucan ed., 加藤邦男監訳: ル・コルビュジェ辞典, 中央公論美術出版, 2007, p.441)参照。ところが、ル・コルビュジェ自身は記憶の想起については明確に言及していない。記録・記憶・想起・参照の問題は、建築的感性に関わる今後の課題である。
- 60) *op.cit.*, vol.4, p.151 (中村貴志・松政貞治訳: p.220)
- 61) 一例として、スタンプールのトプ・カブ宮殿を訪れた際、ル・コルビュジェは *Carnets* に素描を残しているものの(Le Corbusier: *Voyage d'Orient carnets*, *op.cit.*, vol.3, p.7)、庭園に関する記述は確認できない。一方、*Voyage* ではトプ・カブ宮殿に関して「前庭では素晴らしく美しいファヤーンズが、このもう一つの安息の地の入口を華麗に彩り、そこには数多くの壺廟と聖なる墓碑がある」(Le Corbusier: *Le voyage d'Orient*, *op.cit.*, p.86, (石井勉訳: p.126))と前庭に関する記述を残している。